女子文壇

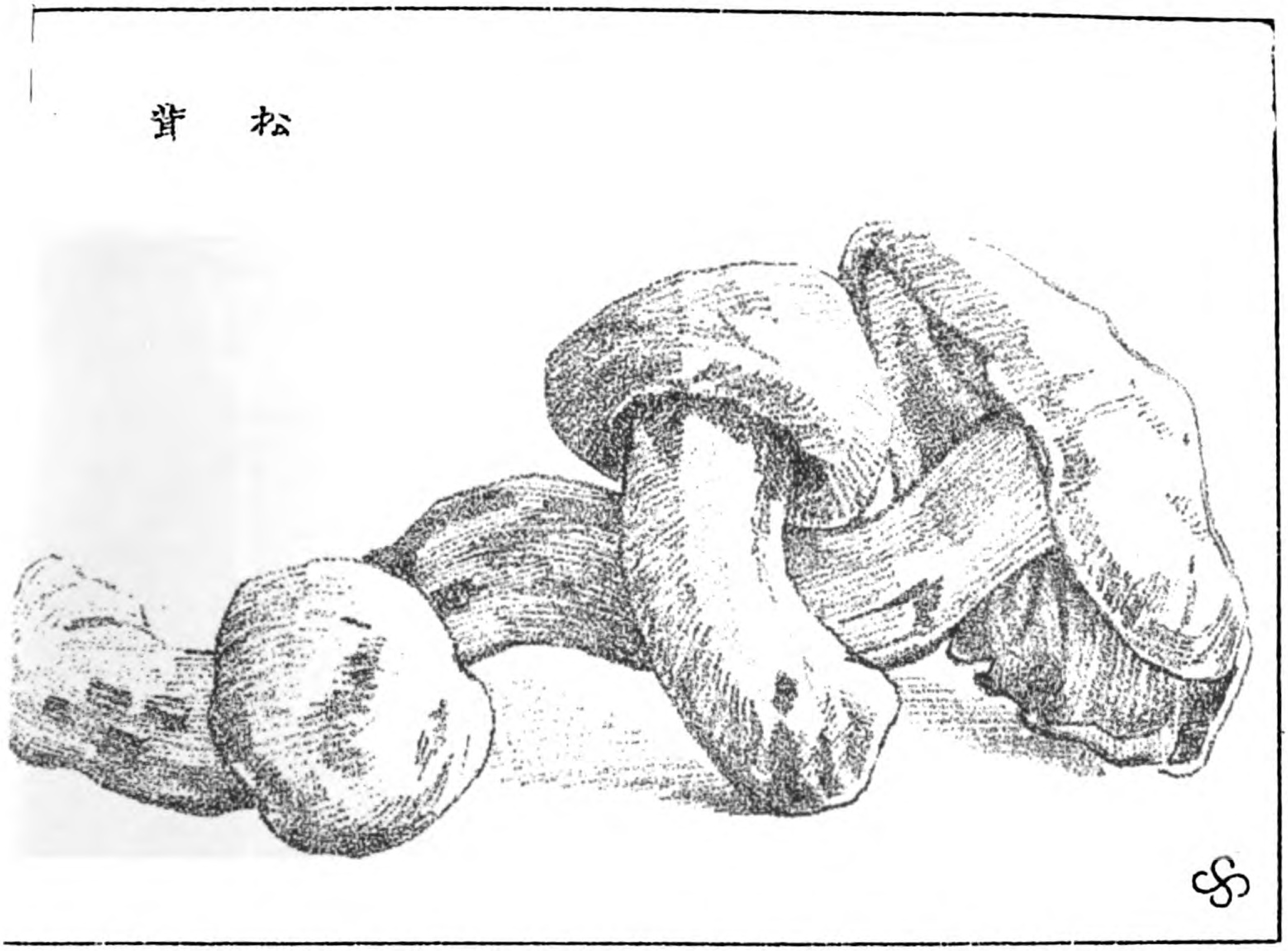
第三巻　第拾五號



定期増刊

山茶花

明治四十年十一月十五日増刊（毎月一回一日）
明治三十九年十二月廿九日第三種郵便物認可


松蕈


白菊

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

名文速成會

●秀才といひ、才媛といふもつまりは名文家たる青年男女に對する讃辭なり。

●名文を讀むときは其作家のおくゆかしさ偲ばるゝものなり、されば名文家たらんとする青年諸君は速に本會に入會せられよ。

●入會金は金壹圓とす但し本廣告切抜封入の方は特に十一月卅日迄は金八拾錢にて入會を許す

會員募集

申込所　東京市本郷區森川町一番地育成會文庫內　名文速成會

●會員には申込と同時に名文速成の方法を平易に説明せる四百餘頁大の説明書を送るべし。

●會員は入會後二ヶ月にして第一回の作品呈出する事を得。本會は無料にて添削批評す。第二回目より添削料を要す。添削料は一千二百字までは金參拾錢以上五百字を増す毎に金十錢づゝとす

●會員の作品より名文を撰出し更に大家の添削を乞ふてこれを本會發行の名文集に掲載すべし

時雨



三宅克巳先生筆

誌友おもかげ（廿一）



（千葉）汀波戸とみ子

（熊本）八並喜美子、緒方卷子

（宮城）千葉よし子、川村ゑなよ子

（岩代）根本喜代子

（美濃）安藤夏子、岩橋義江、高木露子

雨中の嵐山



（京都芹川せい子寄）

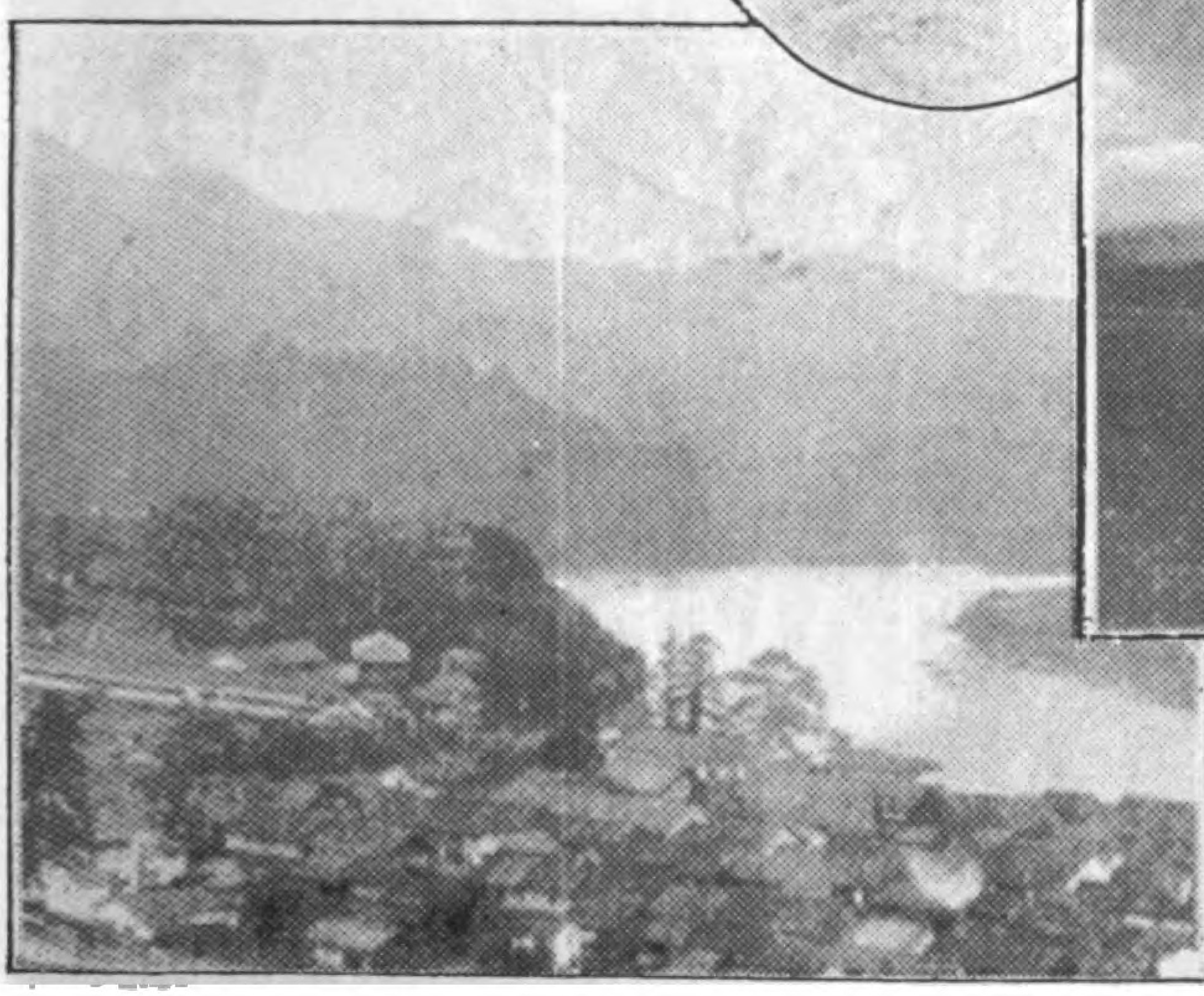


兵庫縣生瀬街道

（杉本幾子寄）

伊豫大洲の一部

（梁川美子寄）





嵐峽の曉色

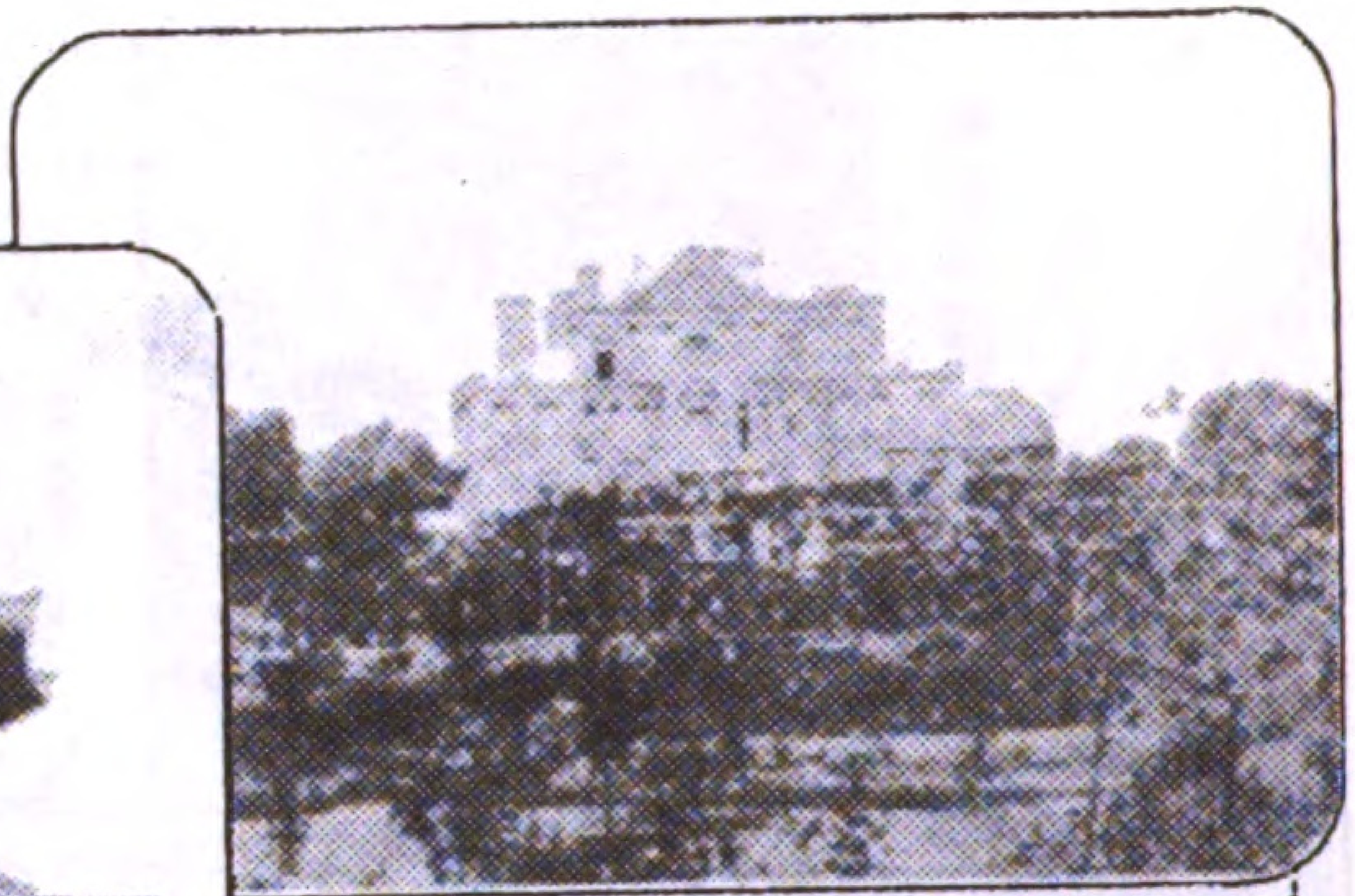
誌友おもかげ（廿二）



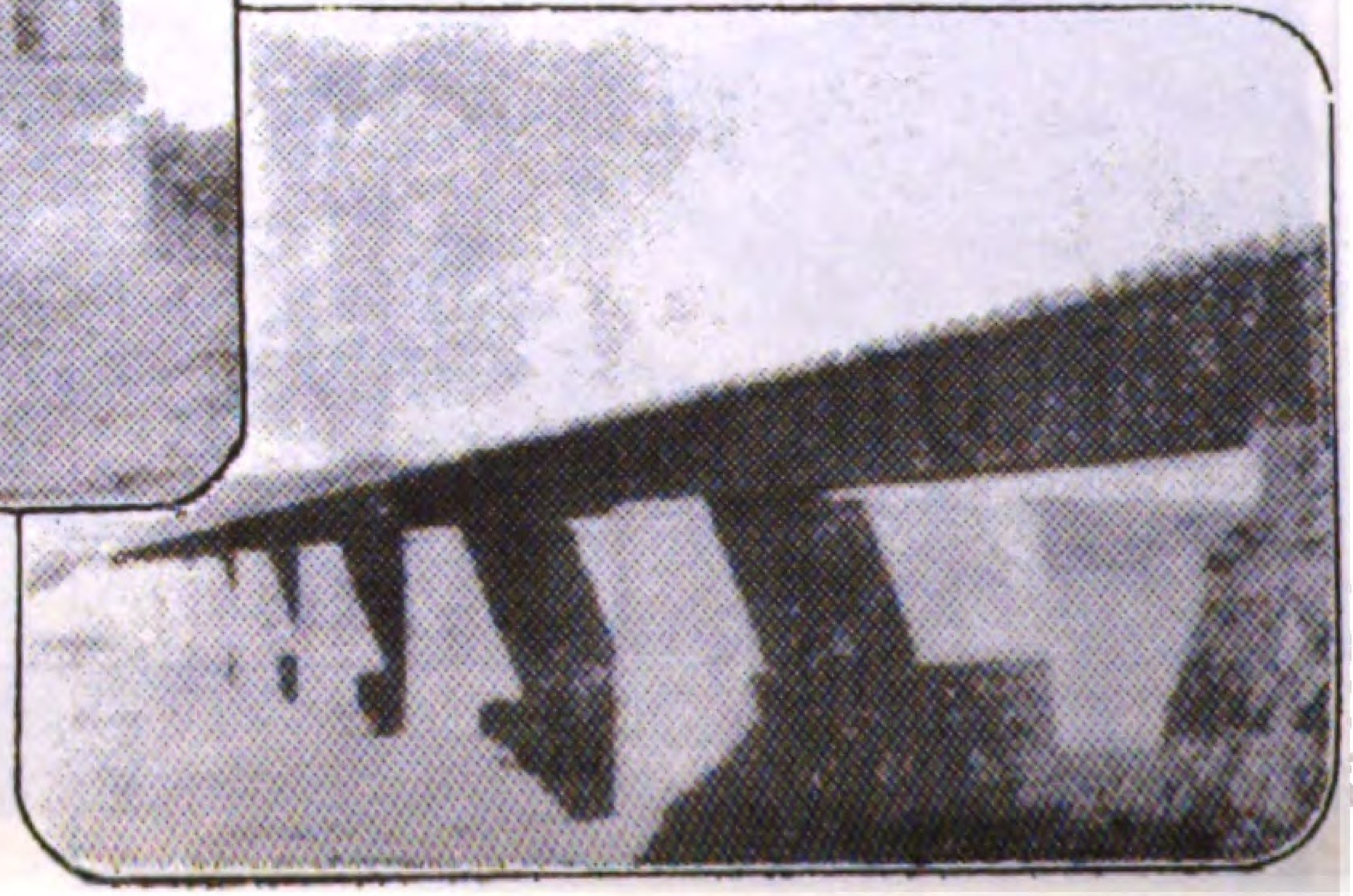
（秋田）青柳やへ子、山本あき子
青柳よし子、加賀てい子

（岩代）鈴木ちよ子、作田たか子、橋本せん子

（周防）富美子、靜子、喜久子



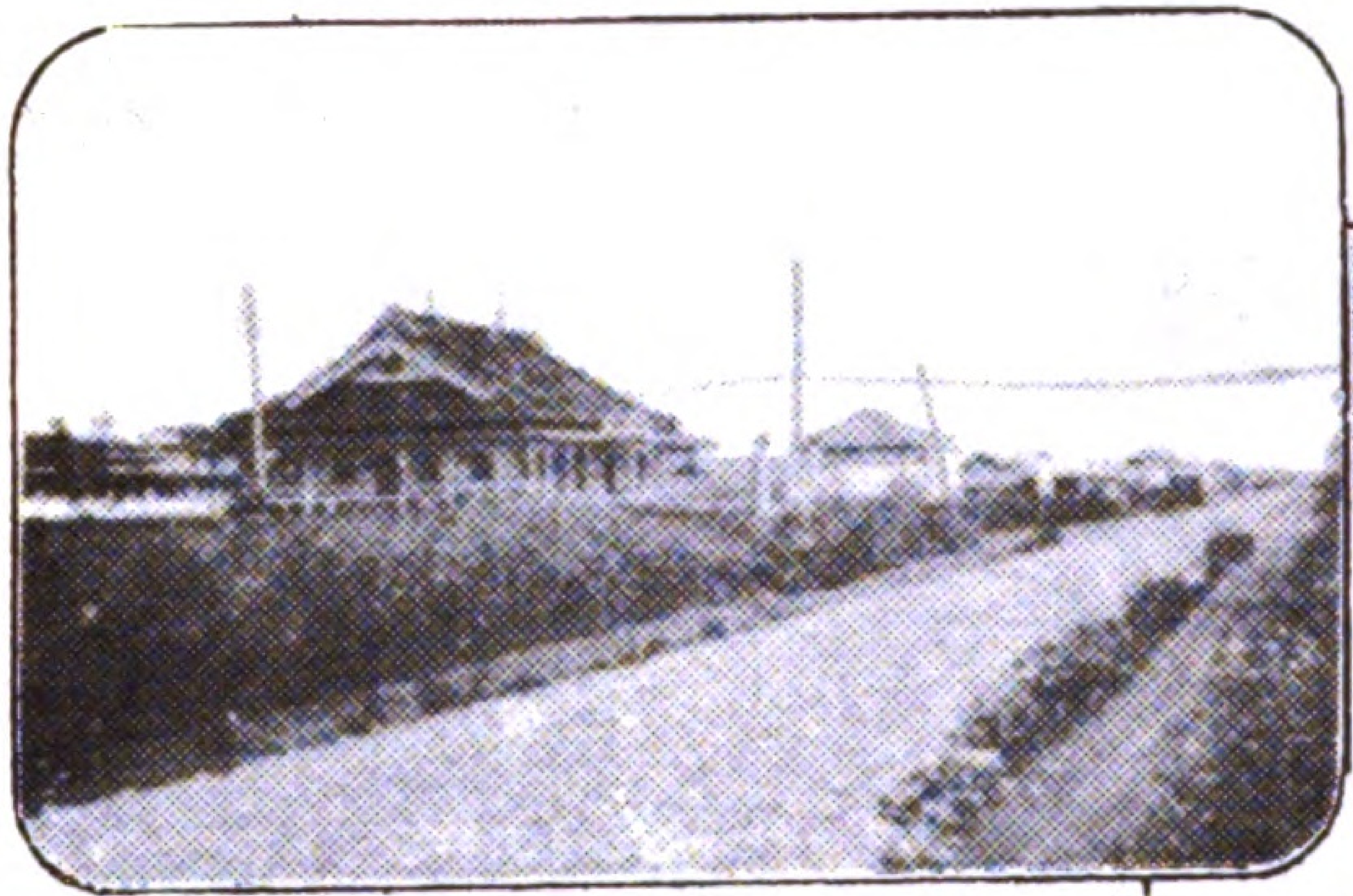
ダルニー滿洲軍水營（境野茂登子寄）



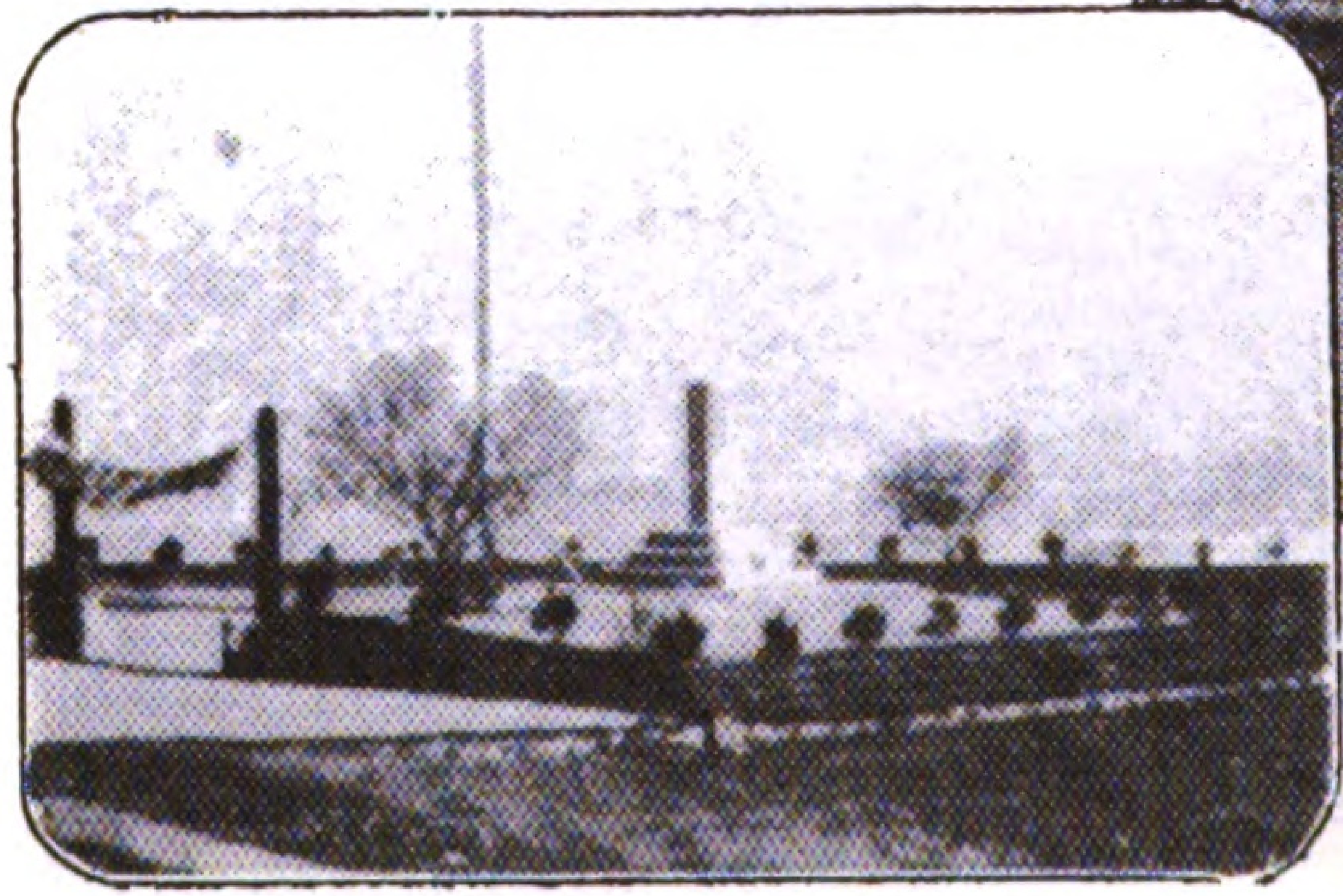
漢江鐵橋（矢名氏寄）



茜廟（草刈ゆり子寄）



安東縣新市街電話交換局（草刈ゆり子寄）



九連城第一軍合葬墓地（吉田近子寄）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

壇友優待◎毎號大懸賞◎筆戰雜誌

秀才文壇

毎月一日十五日發行

一冊金十錢

賣捌全國書店

第廿三號 十二月一日發行 （第七卷） 第廿四號 十二月十五日發行

毎號 賣切れの大盛況

水彩繪葉書（石版十色密刷）……三宅克己筆

スケッチ……山中古洞選

小說……吉本雅美筆

▲毎號選評擔任大家▼

○叙事文……文學士中內蝶二
○抒情文……同上
○短篇小說……德田秋聲
○俳句……高濱虛子
○新體詩……馬場孤蝶
○新派和歌……文學士尾上柴舟
○和歌……佐々木信綱
○漢詩……小笠原盧舟
○評論文○日用文○五行文學○人物評論○文士會（以上編輯局選）

正價

大判百二十頁

一冊郵稅共金十一錢◎六冊同六十三錢◎十二冊同壹圓廿錢◎廿六冊同二圓卌四錢◎定期增刊年二回

明治卅四年十月創刊

▶少年之友見本一冊（入用の時は）郵券三錢送らるべし◀

少年之友

毎月一日發行

一冊金五錢

東京神田文光堂

大評判少年雜誌

第二卷第十一號（十二月）

○紅葉狩り……（石版五色刷）……宮川春汀畫

○少年書手本（石版二色刷）……山中古洞筆 吉本雅美筆

△鴨△大原女△枯野△小春

◉菊のうた……少年子
◉お母様……小川未明
◉三つの靈藥……華園李蹊
◉菊の話……笹尾藤造
◉月の兎……木村小舟
◉白銀城……鹿目野徑
◉觀兵式……栗田軍太
◉ぼくの日記……記者
◉霧降の井（太田道灌の話）……秋畝生

少年文壇

○普通文○日記文○はがき文○四行詩○和歌○俳句○お笑草○新考物○友達會○筆蹟スケッチ……

無比廉價

一冊金五錢○郵稅五厘 六冊郵稅共前金廿七錢○十二冊前金五拾四錢（郵券代用一割增）

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目 文光堂 （振替口座壹九五五番）

賣捌 東京堂 北隆館 東海堂 良明堂 上田屋 至誠堂



女子文壇各欄の發展（投書家の注意）

我が「女子文壇」も來る明治四十一年より第四卷となり、益す體裁を完備し内容を淸新ならしめやうと編輯一同思考を凝らして、先づ各欄の項目を左の通り改正しました平素より本誌を愛讀し競ふて投稿を惜ざる諸孃は、更に改正の各欄に投稿を願ひます、諸孃が金玉の文字と、選者が懇切なる選評と、記者が時勢に後れざる編輯と相俟つて、ます〳〵「女子文壇」の名聲を隆々たらしむることゝ信じます幸に左の豫告を御覽下さい。

（新年號の分は十一月十八日夕迄本社へ到着の分にて〆切）

▲美　文　編輯局選

これは從來の叙事文、抒情文を合せ、更にひろき意味に於て一般の文章を云ふ

▲お伽噺　巖谷小波先生選

此度より初めてお伽噺を募ります、摸倣を避けて面白いお話を考へて下さい

▲短篇小說　小栗風葉先生選

これは從來の如く、才情花の如き諸孃の新作を迎へます

▲日記文　中村文學士選

文體は問はず、諸孃が平生書き給ふ日記其儘て澤山てす

▲新論文　編輯局選

論文と云ふとむづかしく聞えますが、美文以外、諸孃の理想や感懐を平易通俗な文字て現はして御覽なさい

▲實用文　谷　紅風先生選

手紙や葉書に認めて日常の用事を足す文章てす、飾り氣のない實際的の文字を歡迎します

▲新體詩　横瀬夜雨先生選

如何にして此希望ある文裝に上述出來るてしやうか、筑波根詩人は好んで諸孃を詩神の前に導くてしやう

▲和　歌　佐々木信綱先生選

紙上最も多くの諸孃に滿足を與へつゝある歌壇は、猶多くの頁を是に割かうと思ひます

▲新派和歌　與謝野晶子先生選

新興の藝術たる新派の和歌を募ることも必ず諸孃の希望だらうと思ひます

▲俳　句　内藤鳴雪先生選

俳壇の老將鳴雪氏は本誌の俳句を選評さるゝことになりました、振つて投句して下さい

▲新歌謠　編輯局選

誰が聞いても分る歌とも云ふべき新歌謠に猶新しい聲を聞きましやう

▲短　文　編輯局選

作るに易く、讀むに易く、而して最も趣味ある短文は愈よ多きを加へるてしやう

▲滑稽談　編輯局選

一口噺の外に實際の稽滑談も入れたいとおもひます

▲文壇餘興　編輯局考案

文藝遊戲と同じ性質のもので、毎號珍奇嶄新の方法を以て課題を出します

▲繪　畫　山中古洞先生選

これも從來の通り大いに彩筆を揮はれんことを願ひます

（備考）以上各欄に對する懸賞の區別と贈品は從來の通りてす

毎號 皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第三卷第十五號　山茶花（さんくわ）　冬期增刊

苺の液

めのとのうたへる

横瀬夜雨

苺の液を摩りつけて
開け勝なる懷に
似ると言はれて緋綸子の
髮はそれなり切らぬ故
煤火に霧ふ雪の如
今にして見る吾君の
山の産湯を參らしゝ
秋稀に吹く髭の風

お手を汚しゝ七歳兒の
乳を探るまで馴染みしか
帶を好みて纒ひつれ
地に着く迄に延にけん
危ぶまれたる命とて
六尺袖の長きかな
媼は白髮になりぬれど
翁よと召さばつくばはん

荒涼

文學士　沼波瓊音

田中は厭な奴だ。厭な奴と云へば頭をコスメて堅めて故意と帽子を冠らずに見せびらかして歩くやうな馬鹿か、又はお辯ちやらと低い御辭儀とて位地と金を贏ち得むとする狡兒を想像し易いが。田中は开樣粘り氣のある方では無い、その反對に非常に乾れ切つて居る、乾れたものはサッパリとして宜いものだが田中は餘りに乾れ過ぎて居るので厭なんだ。

田中を厭な奴だと云のは僕が元來毛嫌をする男だからでは無い、彼を知つてる總ての人が彼を嫌ふ、又彼も總ての人に對して冷やかだ。

暮秋の雨を孕んだ雲が朝から終日蔓延つて頸筋へ泌込むやうな風が時々音も無く吹く、その癖雨は一滴も落ちぬ、遠い／＼所で赤ン坊の泣頻るのが聞える、淋しいやうな恐ろしいやうな眠いやうな死んで行くやうな心持で机の傍で寐そべつて居ると、田中が大きな目に例の異樣の光を帶んで來訪した。

「田中君か、まア敷き給へ」と僕は强て快活な聲を出して蒲團を勸めた、が困つたと云樣子が顔に出たと見えて、

「君、迷惑なら歸るよ、僕は今日は勉强する氣が無いから來た、君が何か仕事に懸つてるのなら僕は歸る、默つて居ずに云給へ、歸らうか、」まるで喧嘩腰だ、

「なに迷惑なもんか、僕は誰か來て呉れないかと思つてた所だ」

「誰か來て呉れないかと、フンそんなら互に好都合だ」と田中は趺坐をかいた。

田中は農學士で今までいろ／＼な職に就いたが何處でも衝突して壽命が短かく、今は私立學校の懸持を遣つて三十面を下げてまだ下宿をして居る。併し彼は其專門の學科の研鑽には驚くべく熱心で斯學の一先達であるらしいが何にしても彼の調子の冷やかなのが邪魔そして世は當分彼に學壇に活躍する事を許さぬ。

一寸した下物で酒を酌交した、そして科語澤山の農學の話をいろ〳〵聞かされたが僕はよく解らぬので唯「ハヽア」と「然うかねえ」を交替に出して相手になつて居たが、遣切れなくなつて話頭を轉じさせた、題目は「友人」に移る。

「中學に居た頃倫理の先生が、親友と云ものは一生のうちに多くて二三人しか出來ぬものであると云たが、これア實際らしいねえ君」と僕は云ふ。

「親友と云ものはどんなものだらう」と彼は冷笑ふ。

「柳里恭は、伴ると欺くとを許さゞれば知己親友とは云べからず、と云つた、僕はこれを親友の最好定義と信ずる」

「果して然らば親友の存在を僕は認めぬ」と田中は息巻いた「一體君にはその親友なるものがあるのかね」

「有るさ、無論有る」とつい釣込まれて此方も喧嘩腰になる。

「君の方で親友の積りで居てもそれは柳何とか云つたね、其男の云つたやうな親友では斷じて無い、友交と云ものは利害關係で繋がれてるんだ、一度この關係が絕たれたら、親友も親戚も夫婦も兄弟も親子もあつたもんぢや無い」

「どうも驚いた、君は親子の間まで利害關係で繋がれてると斷定するのか、親は自分が三度の食事を一度にしても子にだけは空腹を訴へさせまいと努めてるでは無いか。」

「子を棄てる親のあるのを知らんかッ」と田中は調子外れの聲で言放つて大きな涙をポタ〳〵と落した。

曇つた儘に今日も暮れて、庭に咲殘りの野菊劃然と白く、氣立たましい豆腐屋の喇叭が遠ざかつてからは颯との音も無く、櫻の枯葉が一定の時を隔てゝは二葉三葉づゝ眞直に落ちる。

田中は暫らく俯目になつて居たが、冷めた酒をグッと飲乾して「フヽム」と含んだやうな笑を漏した。宇宙に愛の存在を認めぬ田中、彼を憎むの念は此刹那に僕を去つた、譯も無く僕は彼の味方にならうと奮ひ立つた。一道の情の射線は氷の如き彼の胸にも透つた。

「僕の身の上話を君聞いて呉れるか」と彼は何時に無く甘えるやうに云ふ、もう大分醉つてる。

「聞くとも、大に聞く」と僕は力瘤を入れる。

「今日まで誰にも話さなかつたが、今君に聞いて貰ひたくつて耐なくなつた、僕の親父は國ての素封家で僕は子供の時から隨分贅澤をしたもんだ、遊び友達は皆僕を羨んだ、其頃の僕は馬鹿々々しく鷹揚て奇麗な玩品や繪本なんかドシ〳〵友達に呉れて遣つた、僕が唯一つ珍藏して居たのは東京の伯父から貰つた小形のオルゴールだつた、朝起きる時に枕許て鳴らす寢る時にも鳴らす獨て遊んでる時にも鳴らす友達が自宅へ來ると鳴らす此一箇のオルゴールは當時の僕の至寶であつたんだ、ところが其れをね或る年上の友達が是非呉れと云ふんだ、僕はいかに鷹揚ても其れを手離すとは出來ない、辭つた、何度も〳〵辭つた、すると其奴が、棄兒の癖に生粹な野郎だ、と東京語なら云意味のとを大聲に云つて去つた。

「ふうむ」と僕は目の色を變へた。

「棄兒と云はれたのがどうも解らないから、僕は父に訊いた、父は笑つて唯譯も無い惡口さ詰らんとを氣にするな、と云た斗り、君、併し棄兒たるとは事實だつたんだ、父の死んでから委細の話を母から聞いた其時僕は十八だつたがね、君、僕は生れて一月位たつた頃町外れの地藏堂の賽錢箱の陰に棄てられて居たのを、死んだ父が子の無いのを殘念がつて居た折柄僕を見附けて拾ひ上げて呉れたのださうな、僕の體には誰の血が傳つて居るのか解らんのだ、しかし僕はそれを遺憾には思はん、到底物の根元は解らぬもので、解つたと思つて居るのも詰りは五十步百步なんだからなア、僕は生みの親に棄てられた、君等の云ふやうに愛の力が大いなるもので殊に親の子を思ふのは至誠に出づるものなら此樣な事は無い筈だ、利害關係だ、飽く迄利害關係だ、親は僕を養つて居ては食ふとが出來ぬ或は名譽を傷つけられる、だから棄てたのだ、當然のとては無いか、僕は更に親を怨まない、亡父は僕を拾つた、僕は其手に育てられ其財產て學問をした、併し僕はこ

れを純粋なる慈善事業とは思はぬ、父は子が無いから拾つたんだ、継嗣を作り老後を安全ならしめむとて拾つたんだ、拾ふ方が已れに利だから拾つたんだ、愛情なんと云ものに断じて宇宙に存在しない、僕は愛を否定する、世の眞相を明白に知り得たのを幸とする、君等が利害に超然たる愛を認めるのは大なる誤だ、僕はそんな誤に陷つて居ないのを誇るよ、ウム全く誇るに足る」と彼は息をもつかず説き終つてケロリと洋燈の火を見る。

「成程左うだ、それに違ない、君は世を知つた人だ」と僕は云つた、斯う云より外に仕方が無いのである。風を知らぬ人に風を指示すとは出來ぬ、愛を見ぬ人に愛を見せるとは出來ぬ、田中を慰めるには唯彼の言に賛成するより外に方法は無いのである。

　更けてから彼は歸ると云て酔うてふら〳〵しながら庭へ下りた、僕は洋燈を持つて門まで見送る、俄に風が強く吹下して洋燈が消えた。

「危いよ」と僕は聲をかけた。

「人の事を心配するなッ」と田中は暗に酒氣を吐いて去る、地上の落葉がから〳〵と音して彼を背後から追ひまくつた。

牛糞

文學士　中村枯林

道のべの、牛のいばり、
かぐなべに、おもほゆるかな、
みほとけの、赤城の山の、
なつかしき、夏の一月、
世の塵を、へだてし境、
風清く、水の色すみ、
常楽の、ものゝひときは、
木がくれの、鳥のさへづり、
そゝりたつ、山を仰ぎて、
すみとほる、水をふしみて、
人の世を、わすれゆく時、

ふす床の、草ふく風に、
うとましき、ものゝにほひを、
それなくば、さぞとおもひし、
その山の、そのあけくれを、
ゆくりなく、おもひてそすれ、
今はげに、牛の糞ぞ、
なかなかに、うれしかりける。

晴れわたれる秋の朝、途のほとりに、したゝか置きわたせる牛糞、急ぎ除け乍ら、ふとこの小詩は、又紙を汚がされぬ。宿世のあやしさを問はずもあれ、君よ、今うとましと淺間しと厭ふべくおもへる事の、過ぎし後にて、なかなか思出の種となることなからずやは。宿かさぬ人のつらさの情となりて、おぼろ月夜の花の下ぶしも、げにとうちうなづかれずや。さては美し懷しとおもへる事の　いつしか消え去りて、思ひの外はかなきさま、すさまじく立ちのぼる煙の、大空に消えゆくかの如きをおもへば、人の世の波風荒きも、なかなかに慕はしくもおもはれずや。山間日長うして曆日を知らずは、百年の齡も一日の程なるべし。さはれ、いづれは土に朽ちゆかん身の、徒らに平淡の生活に一生を送りて、自叙傳の一頁さへも、記述の材料なきは、心細きことなるかな。壺中に優遊して一歩を出でず、否頭もたげて世の機窺はんとせしこと、なきにあらざれども、吹きしく風のすさまじさと、わが身の力なきとにおぢて、思ひ止まりしことしばしばなりき。まづわが身を知れとは、昔の神誡、あはれ我はあまりにわが身を知りすぎたらずや、如何に。さりとて、風と波とに漂はされて、藻屑の境遇もうれしからず、戰はん實力にも勇氣にも缺けたる身は、さていかにせん。木犀しづかにかをるこの夕ぐれ、さまざまの思ひ胸にあふれて、もつれし糸、解かんすべさへ知られず。さはれ、こゝに病める友あり、悲しむ友あり、もだへる友あり。みづからとるところに迷へる身は、たゞなやめる人の爲めに、さゝやかなる力を致さん、永劫の命は我身の望みうるところならず、唯同じ世の二三の人の心に、われをきざみて、懷しき人とわが死なん折、

まことの涙を購ひ得ん、かくてわが願は足り、かくて
生くる甲斐ありといふべし。あはれ、昔てきら〳〵し
かりし人の世の、いとゞせはまりたるきのふけふかな。

不朽の望

池田朝村譯

折しも九月末の或晩の事てした、家族は皆暖爐を取圍て、谷川に流れて來た浮木、松の枯枝、崖から折れ落ちた大木の割木などを盛に焚いて居ましたので、焔は煙突の外迄も燃え上り、部屋の隅々迄を隈なく代赭色に染めなして居りました。小供等は父母の煙そうな澁い顔を爲作らも、如何にも樂し相に頰笑める有樣が可笑しいとて笑い倒けて居るし、今年十七に成る娘は、若き幸福の權化の如く、又最も暖かそうな處に坐を占めて縫物に餘念無き祖母は、老たる幸福の權化の如くてした。彼等は、實に、新英克蘭土中で最も寒い所で、斯く平和に幸福な天地を發見して居りましたのです。此家族の住所は、白嶺の山蔭で有りましたが、此所は一年中、冷たく且猛烈な風の吹き徹して、殊に冬にても成らうものなら、夫は〳〵、肉を裂て骨迄刮る樣な寒さが容捨もなく、其茅屋を襲ふのてありました、加之、此家族の住所は最も危險な場所で有たのです、其譯は、此家の背には彼の白嶺の絶壁が聳えて居て、其から折々巨大な岩石が墜落して來て、其恐ろしい響の爲に、彼等が安らけき夜半の夢路を破られた事も度々て有たからてす。

峯と峯との間から烈しい風が吹き下して來て、それが此家の戸口の所で暫時躊躇して泣くが如く咽ぶが如き響を發して戸を搖ぶる時に、娘は如何にも驚いたと言ふ樣を裝ひますので、其度毎後ては家中大笑を爲るのでした。此風は何時も同じ調子て吹て來るので、彼等には充分馴れ染めて居るので有りましたが、併し一時は非常に驚ろかされるのでした。けれども、恰ど其時旅客が來合して、不意に闥を推し開けて顏を差入れると、家内は再び喜悅を以て滿されるのてした。

彼等は斯も淋しい場所に住て居たのてしたが、それても、絶えず世界の人と交際して居りました、それは、此山岨の街道は右に馬除山脈を控へ、左に綠山脈及び聖老蓮栖の清流を擁して、頗る勝景に富て居る上、國内交通の要路に當つて居るので、常に各種の旅客が

跡を絶たなかつたからでした。乘合馬車は此家の戸口迄曳き上げられ、杖一本を唯一の件侶とせる漂浪の旅客は、沙江の谷に降り行く前、必らず先づ此家の椽先に腰打掛けて、一人旅の徒然を慰むべく、澁茶吸り乍ら家族と會話するのでした。又港蘭土の町へ行く商人は、態々一夜を此家に明して、此樂しき家族と團欒を共にし、若し又其が未婚者で有たなら、此、山の精が假に人の容を借りた樣な、清く美しい娘を相手に態と夜深しをして、別れるとき密と其雪の樣に皓い頰に、戀に燃ゆる脣を當て樣と企てたかも知れません。家は昔建てられた儘で、極めて粗末な燻り返つた物でしたし、又山の中の事故、御馳走とては有りませんでしたし、客も亦其に相當する丈の拂しか爲ませんでしたが、併し、家族の家庭的懇切は、到底金錢以上のものでありました。旅客の足音が戸口に聽えると、お婆さんから小供に至る迄悉く立ち上つて、宛も、自分等の家族を迎へてもするかの樣に之を迎へ入れるのでした、そして其人の運命は全く彼等の運命と結び付けられて了ふのでした。

偖、恰ど彼等が斯く盛に焚火して居た最中でありました、一人の年若い旅客が、不意に戸を開いては入つて來ました。顏には、一人旅の夜道の、殊に烈風吹き荒む山道を通して來たので、非常に疲勞の樣子が見えて、何處となく沈み切て居りましたが、一度家に入て家庭の歡迎に會た時に、彼の心は急に活々として來ました。お婆さんは前掛て椅子の塵を拂つて客の坐を設へる、小供は雙手を擴げて彼の方に走り寄る、其他皆心から喜ばしそうに彼を迎ふる有樣を見た時、彼は靴脱ぐ暇ももどかしく、急ぎ彼等の團欒中に飛び入りたき心地がしたのでした。殊に、ちらり娘と顏を見合せて、互に微笑だ瞬間、彼は何もかも忘れ果てゝ、全く此無邪氣な清い家庭の中に同化せられて了つて、

（客）や!!、此火は實に結構だなあ!!、殊に、斯な樂し相な家族が取圍て居るんだもの。

と叫びました。

僕は悉かり凍えて了つた。此崖際の道と言たら、宛で風櫃の樣で、馬士烈渡から玆迄、恐ろしい風の吹き徹しなんだもの。

（主人）では、御前樣は、馬門渡の方へ御出んなるんてがすね?。

主人は今しも客の肩から、鞍掛にした荷物を下すのを手傳ひ乍ら、斯く尋ねました。

(客)左樣です、馬林屯迄、いや事に依たら最と先迄行くかも知れないのです。僕は今夜、伊山克勞津迄行かうと思つて居たんだが、何と言ても此寒さぢや躊躇せざるを得ませんからなあ、いやなに行け樣が行けまいが、左樣な事は構いや爲ないんですよ、此家へ來て此火を見、皆の嬉し相な顔を見たら、何だか態々私の爲に焚付けて、私の來るのを待てゞも居られた樣な氣がしますから。ですから今夜は皆樣の仲間に入て、緩々休まして貰ひましよう。

彼は斯く答へ乍ら、打寛けて爐端へ椅子を進めました。折しも、山の頂から何物とも知れず、重い足音の樣な響が聽えて來て、漸々近付くに從つて凄じい音と成り、終には何物か巨大な物が、屋根を跳び超えて向ひの崖に衝突つた樣な響が爲ました。家族は其響が何の響で有るかと言ふ事を熟く知て居りましたので、思はず息を止めて互に顔を見合せました。客も、何だかは知りませんてしたが、唯恐ろしさに胸を抑へました。

(主人)御山樣は、私等が御山樣のと忘れや爲めえかと思つて石を投らさつたゞ。御山樣時々點頭かさつて私等を威さつしやるだ。ではあ長年斯う遣てお山樣とは隣合て居ますだから、可成仲善いてがすよ。それに、愈々本氣に怒られた時にや直近くに隱場所があるだから。

其騷も其儘に濟て、客は湯に入て旅路の塵を洗ひ落し、態の肉の「カツレツ」か何かで晩餐を終へました。彼は高慢らない快活な男で有りましたから、直に家族と親しんで了ひまして、宛て其家の人でゞもあるかの樣に笑つたり話したりして居りました、是は彼の性質が、一方に非常に强い自負心を有すると同時に、一方には又、謙遜柔和の美德に富て居たからでした、即ち、富貴權勢の前には毅然として頭を下げないと言ふ氣慨を持て居りましたが、併し、斯樣な粗末な戶口に頭を下げ、斯樣な貧しい人の爐邊に於て、其人の息子となり又は兄弟となるとには毫も躊躇爲なかつた爲でした。斯る性質でありました故に、從つて普通の人に容れられず、彼も亦決して人に容れられ樣などゝは爲ませんてしたから、此長の旅路を一人て遣て來たのでした、いや此旅路斗りでなく、彼の生涯其自身が既に寂寞なる行路て有たのです。此家族も亦斯く親切で同情に富て居りましたが、併し自分等の結合を固くし、大低は世界から分離して、自分等丈て他から侵害されない神聖な場所を保たうと考へて居りました。斯う言ふ風で

したから、兩者自然に意氣が投合したのでしよう、客も隠すとなく自分の思ひし儘を打開けるし、家族も亦安心して彼の相手に成て居りました。等しき運命を有するが爲に成立した親交は、門地のそれよりも一層強い結合では無いでしようか。

　高邁にして且抽象的なる大望が、實に此若者の胸中に深く秘せられたる性格でありました。彼は世に知られざる生涯を送るとは忍ぶとを得たかも知れませんでしたが、併し死後に於て、全く墓の下に忘れ去られて了ふとは堪えられないのでした。名譽てふものに對する戀々たる慾望は、希望てふものとなり、希望は永く培はれて、終には現實て有るかの如きものと成りました、即ち、彼の目下の行路は、知遇なく寂寞なるものでしたが、彼には、其前途に實に赫々たる光明が横はつて居るかの如くに感ぜられたのでした。けれども、彼の現在は斯く暗黒で有ても、後世の者が、其見る影も無き落寞なる彼の生涯に輝ける光輝を追跡して、天才は、其襁褓の時代より、墓石の下に入る迄、一人として自分を知て呉れる者を持たず、一生轗軻不遇に終るものであると言ふとを確信するに至るてしよう。

(客)依然、僕は何事も成さ無かつたのだ。僕が若し明日が日にても死だなら、僕を一番善く知て呉れた人は貴方丈です、兎に角貴方は、名も知れない一人の若者が、夕方沙江の谷から遣て來て、自分の精神を披攊して、そして明方に出發したが、其後は何うして居るのか音沙汰もないと言ふと丈は御存知だから。けれども、又何處へ行たかとも、其若者は何と云ふ名だつたかとも、尋ねる人はないてしよう。併し僕は僕の天命を仕遂げる迄は死ぬとは出來ない。死は何時でも來い―、僕は屹度其前に自分の石碑を建てゝ置くから……。

彼は熱して頰を紅に染め、眼を烱かして斯く說き去りました。

　彼の說く所には、常に、幽遠なる空想界中に迸出する所の自然の情緒の堪えざる流が有て、家族は其流に從つて、自ら、彼の理想の奈邊に在るかを覺るとが出來ました――勿論其は彼等の理想に比すれば、雲泥の相違が有たのてしたが。彼は、自分の感情の熱し過たとか、何時の間にか自分の本心を裏切したとに氣が付いて、思はず顏を赧らめました。そして娘の手を取て、自を嘲るが如くに笑ひ乍ら。

(客)貴孃可笑しいてしよう?。貴孃は、私の大望は宛

て華盛頓山の絶頂で自分を凍え死なす樣なもので、其附近の人々が、或は其死骸を尋ね出そうと企てるかも知れないが、其他には一向何等の効果をも與へないのと同樣て、實に馬鹿々々しいものと思ひなさるてしようねえ。けれども人間の肖像の臺石としては、華盛頓山などは實に立派なものぢや無いてすか。

娘は顔を赧らめ乍ら、

（娘）誰も知て呉れ無くつたつて、此火の側に坐つて、斯うして樂しく滿足して居る方が餘程善いと思ひますわ。

主人は客の話に何か頻りと考へ込て居ましたが、此時急に頭を擧げて、

（主人）成程御客樣の言はつしやるとも道理に思はれますだよ、若も私が御客樣と同じ樣な場合に成たら、乾度左樣な考を起すかも知れましねえだ。なあ嬶、妙てねえか、己是迄は種々なと考へて居たゞが――そんな事出來る筈ねえだがね、――今此御客樣の話を聽たら悉かり心が定まつて了つたゞ。

（妻）そりや御前さんの考へて居るとなら出來べえよ……一體男と言ふものは、鰥夫に成たら何んな事仕べえなんて考へて居るだか知ら。

（主人）死てもねえ、左樣ぢやねえだよ。お前が死ねば己だつて死なうと思つて居るだよ、否嘘てねえ本當だ、けれども己なあ「馬土烈渡」か「部須禮邊」か又は「理土留屯」邊に田地でも買ふか、て無きやお山の近くの町へても移つて、町住居でも爲度いと思つて居ただ、兎に角、始終石の降て來る樣な危險所に居たくねえだから。それから又、近所の者とも恥しくねえ交際して、地主樣とか旦那樣とか言はれて、縣會へ出ても一言や二言言へる樣な身分に成り度と思つて居たゞ、正直て詐の無え者は、法律家にだつて退は取らねえだから、そう成りや、お前も己も澤山年を取て、己死ぬ時にや皆に取圍かれて惜まれて、目出度い往生が出來るべえと思ふだ。それから死だ後ぢや、石塔は、房州石だろうが大理石だろうが、何ても構はねえだ、唯、名と年と、それから御經の一節と、正直者で佛を信じた者だと言ふとを知らせる丈の文句さへ彫り付けて貰へば夫て善いだ。

客は大に其意を得たと言ふ風て、

（客）其處てす、其處てす。房州石だろうが大理石だろうが、乃至は花崗石の塔だろうが、世界の人の心の中に彫り付けられる樣な燦爛たる事績てあらうが、

孰れにしても何か一つの紀念碑を殘し度いと言ふのは人情だ。

主婦は、涙を浮べて、

(主婦)今夜は變てならねえだよ。何てもはあ、人が種々〳〵など考へ廻すのは、何かの前表だと言ふよだが……‥あれ、聽かつしやれ、小供が何か言て居ますだよ。

人々は皆一樣に耳を傾けました。幼い小供等は次の間に寢かされてありましたが、其部屋の戸は開け放されて有たものですから、皆が爐邊で話して居るとを悉かり聽取るとが出來たのてす。其が爲、小供等は皆爐邊の話に感染したものと見えて、各自に、自分等が大きく成たら何う爲樣など〻小供らしい希望を述べ合て、互に言ひ爭つて居りましたが、其中一人が、其希望を母親に向つて發表したのてした。

(小兒)ねえおつ母、己今から直、父も婆も、それから御客さんも皆一緒に、筧川へ行て水を飲み度いんだ。

自分も温かな寢床を捨て、人々にも此暖かな爐邊を捨てさせ、此寒さに筧川の水を飲みに行き度いなど〻言ふ此突飛な望を聽ては、誰ても笑はずには居られませんてした。小供が恰其を言ひ終つた時、戸外に轣轆〳〵と乘合馬車の響が聽えて、それが此家の戸口で一寸止りました。其中には二三人の乘客が有た樣子てしたが、皆調子外れな聲を揃へて何か歌ひ乍ら元氣を附けて居りました、そして彼等が戸口に在て、先へ進まうか、此家に泊ろうかと躊躇つて居る間、其聲は切々の木魂と成て反響して居ました。

(娘)御父さん、皆が御父さんの名を呼て居ますよ。

けれども親父は、彼等が本當に自分を呼だか何うだかを疑ひ、又無暗に客を引き入れて錢を得たがつて居る樣に、卑しく見られるのを嫌つて居りましたので、敢て立たうとも爲ませんてした。其間に馬車は一鞭當て、彼等は樂しげに歌つたり笑つたり爲乍ら走り去り、其聲も漸々と遠かつて終には山の間に消え失せました。小兒は再び叫び出しました。

(小供)あれ母!、今の馬車は皆を筧川へ連れて行て與れたろうになあ。

人々は、再び、小兒の斯く執念深き、夜のさすらひに對する空想を笑ひました。けれども此時娘の心には微なる雲がかゝりました。彼女は嚴かに焔を凝視め、思はず嘆息の樣な深い息を吐きました。

(客)貴孃何を考へて居たんてす?。

娘は、自分の胸の秘密でも發かれた樣に、驚いて顏を赧らめ乍ら、

(娘) 否、何でも無いんです、唯ねえ一寸淋しい樣な氣がした丈りなんです。

(老) ハヽー左樣ですか、いや左樣言ちや可笑しいですが、僕は他人が思つて居ることを感知する力を持て居ます、殊に、若い娘が母親の側に居ながら淋しいと思つたり、暖かな火の側に居乍ら震えたりする時には、何を考へて居るかと言ふとは熟く解つて居ます。如何です、貴孃の考へて居ることを言ひ當て丶見ましようか。

山の少女は、耻かしさうに男の眼を避け、伏目に成て而も微笑み乍ら、

(娘) 夫を言て了つたら、最う娘の心ぢや無いでしよう?。

娘の此答は山の少女としては、中々凝たものでありました。

此問答の中には、何等深い意味も含まれて居ない樣でしたが、併し、大方彼等の心の中には、實に、やがては極樂の花園で花咲くかも知れない樣な—現世では開かずに終りましたから—純潔しい戀の芽生が萌え出て丶居たのでしよう、何故なれば、一般に女と言ふものは、彼の樣に物靜かにして且威嚴ある男をば敬慕するもので有て、亦、自負心に富み、深く物事を沈思する性質を有して、而も猶誠心ある男は、彼女の樣に無邪氣な婦人には迷はされ易いものですから。斯して、家族は靜かに語り、客は自分の胸中に漂へる樂しき悲哀、微けき愛、處女の憶したる戀等を思ひ廻らして居りました。其間、岨道を吹き來る風は、益々烈しく、宛ら、古亞米利加土族が此地方に住て居た時代に、此山に莊重神聖なる宮殿を構へて居た風の神等の合唱の響か、又は、怨靈の行列が叫び乍ら過ぎ行く樣な響がしました。家族は此淋しさ恐ろしさを追ひ退ける爲に、盛に薪を加へましたので、火は再び勢を得て、室内は平和と幸福との光景を恢復しました。敷居を隔て丶隣の部屋よりは、小供等が夜着の中から此方の部屋を覗いて居るし、此方の部屋には、主人の筋立た體、主婦の溫和なる容貌、額の高き若者、莟の少女、及び依然最も暖かさうな塲所で縫物に餘念のなき老婆とが、無言の儘で爐を取圍で居りました。其時老婆は顏を上げて、

(老) 年寄は年寄で亦、相當な考を持て居るだ。それだ

に御前達は種々な事言ふて、年寄の心迄迷はして了ふだ。けんども、棺桶に片足入れ掛けて居る者に、何他の望があろうかい、けんどなあ、おら其望言はねえ中は、毎日毎晩迷つて出るぞ。

主人と主婦とは鷩いて、

（主人）御婆さん、其望と言ふのは何ですかい？。

と尋ねました。其時老婆は、極めて氣味の惡い不思議な容子をして語り出しましたので、一同は思はず耳を欹てました。

（老）俺最う四五年前に、整然と經帷子も拵へて置たし、頭布や手甲脚袢等も用意して置たゞが、今卒然思ひ付いたのは、俺が若い時斯う言ふ事を聴かされたことがあるだ、それは、死人と一緒に棺桶の中に入れられた物が、何一つても不足だつたり、又は整然として居なかつたりすると、例へば頭巾が少しても歪んで居ても、死人は桶の中で其冷い手を延して其を直さうと藻掻くさうだ。

此剣出しな恐ろしい話の爲に、娘は甚く神經を刺撃されて震へ乍ら、

（娘）御婆さん！、最う左様な話お止しなさいなねえ！。

と叫びましたが、御婆さんは構はず且眞面目に成て、併し半自分の馬鹿を笑ひ乍ら、

（老）てなあ、俺お前にも嫁にも賴んで置くがなあ、俺が棺の中へ入れられる時にや、何卒妾の眼に眼鏡を掛けて貰ひ度いだ、何うしても自分で見なけりや、人にや解らないだから。

此時客は獨語くが如く、

（客）老も若きも皆墓や石碑の事を考へて居るのだなあ、左様とすれば、彼の水夫などが、太洋の眞中で暴風に遭遇つて、船は正に激浪の中に沒し去らんとし、其際もなく名もなき、大きな墓の下に葬られんとする時の心地は何なだろうか知ら？。

老婆の此恐ろしき話の爲に、人々の心は總て鷩怖の爲に蔽はれて、其が爲、戸外に吹き荒ぶ風の叫も、一層激しく深く且恐ろしく成た樣に思はれ、終には、虫が知せるとても言ふのでしよう、何か慘憺たる事件が起るのではないかと言ふ樣な氣が爲ました。そして、家も人も共に戰慄して、大地の底も搖ぐが如く、世界が今にも滅ぶのかと思はれる程でした。老人も若者も皆互に顔を見合はせ、暫時愕然として言葉も出てず、身動きする力さへ無かつたのでしたが、忽ち、言ふべからざる恐怖を表示する所の悽じい叫聲が、一同の唇を

破つて迸りました。
山崩れッ！山崩れッ!!。
此簡單なる語は、實に、描寫すべからざる慘絶憺絶なる災厄の、言語に絶えたる恐怖を報ずるものなのです。憐むべき犧牲は、皆直に家を飛び出しました、そして、平常彼等が安全な場所と考へて、斯る非常の場合に避難爲る爲設け置た匿場に向つて驀進しました。けれども、嗚呼！、斯く爲た爲、彼等は却て安全な場所を見捨てゝ破滅の通路に突進したのでした。即ち山の崩壞せし側面の土層は、彼等が飛び出すと同時に、大瀑布の如く彼等の頭上に落下して來ました。初め山崩は眞直に家の棟目掛けて辷つて來たのでしたが、あはや將に家の棟を壓し潰さうとした刹那、忽ち二に分裂れて、家は硝子戸一枚も害はれるとなく、安全に殘つたのでしたが、其代り、其附近は悉く崩壞した土石を以て埋められ、道路も杜絶し、總て其通路に横はつて居た物は、悉く滅絶せしめられて了ひました。此恐ろしき山崩の響が、山の中に消え失せて以來永久に、彼の死に對する苦痛は救濟せられ、犧牲等は永に覺めざる平和なる眠に就きました、そして彼等の骸さへも終に發見されませんてした。

翌朝、其家の煙突から細い煙が縷々として立ち上るのが見られました。家の中を見れば、暖爐の中には未だ火が燻ぶつて居ましたし、其周圍には坐布團が昨夜の儘位置も亂れず、宛も家内の者等は、今し方破壞の跡を見に行て、間もなく歸つて來て其災を免れた嬉しさに、朝の勤行を爲るのでゝもあるかの樣に見えました。彼等を知れるものは、是は婆さんの席で有た、彼は親父さんの席で有たなどゝ、一々其跡に同情の涙を灑ぎました。此話は曾ては廣く知れ渡つた話で、將來も永く此山間の物語と成るてしよう。詩人は彼等の運命を歌ひました。

或者は、彼の若者が不測此家に泊り合はして、不幸にも此災禍の分配に預つたとを、何か因縁の有るとの樣に說きましたが、亦他の者は、左樣な想像には何等根據も無いとだと打消しました、併し孰れにしても、此高邁なる若者に取ては、此災禍は、實に、彼の現世的不朽に對する希望の爲には、此上なき打擊で有りました。彼の名及び彼の人物は全く知られず、彼の生涯及び彼の計畫は不可解の神秘にして、彼の死生は共に疑惑の中に封じられて了ひました。其死の瞬間に於ける痛恨懊惱は一體誰ので有たてしよう。

清搔

白蛾

野火

一の日も　かくと覺ゆる
月かげの　薄らひ照る夜
白き蛾は　生れ出てたり

前栽の　土はしめりぬ、
扇骨木垣　露のしづくに
白き蛾は　舞ひ上りたり

太空は　霞にしらけて
天地に　呼吸息も通はず
白き蛾の　姿はきえぬ

沖を行く船

沖を行く船
船見えず
たゞ白帆のみ
わたり行く

君戀ふるわれ
われ知らず
たゞ君のみに
こゝろゆく

日毎見る君

ゆきかひの朝な夕なに
日毎見る君にしあれど
見るたびに新しき笑み

あな今朝も君は見えにき
大通りこなたをさして
遠目にも笑顔さやかに

わすれなぐさ

莫忘草を送りこし
君が心意を汲みかねて
よそに薫りをたゝふれば
人より得しといらへぬる

紫――花はにほへれど
細葉みどりの褪めぬ間と
紅表紙くりかへし
くりかへし見る詩集かな

一瞥

靜かなる秋の日なりき
ゆくりなく相見し刹那
微笑はふとかはされぬ

かつてしも見ざる君なり
行きずりにかくれし人の
などて又我にかへれる

男と女

▲男と女とは全く別の者である、頭のさきから足のさきまで違ふ、身體だけではなく精神の作用も大いに違ふ▲男は男らしく、女は女らしくして居れば宜のであるが、女らしくしやうとする男が多い、男らしくしやうとする女は然うあるまいけれど、男が女らしくしたからとて、男にも女にも好く思はれない▲男女が根本的に相違してゐる事は、我等が實見する處でも明かであるが、學理上の調べを少し擧げて見ると▲其身體の發達も概して女の方が劣る、劣るばかりでなく發達が早く止る、早く止るのは早く熟するからかもしれない▲骨格に於て男女の相違の最も著しいのは骨盤で之は一見して男と女の區別が分る▲筋肉の増加は男の方が多いけれど、脂肪の増加は女の方が多い、乳房も脂肪分の多くから成りたつて居ると云ふし肩や腰や脚や一體に男より圓く豐りとしてゐるのは脂肪が多いからである▲男の呼吸は腹からする、女の呼吸は胸からすると云ふさうだが之は帶とかコルセットとか云ふものに關係して居るのであらう▲男は顔に毛が多く、女は頭に毛が多い、男の頭髪は切らずに置ても女ほどの長さにはならぬ▲女子の觸覺は男より鋭敏らしい、女が柔かい衣を着たがるのは皮膚の刺戟を緩うしたいから自然さうなつたのであらうと云ふ説もある▲女の感動性は男より強い、能く泣き、能く笑ひ能く怒る、小説家が多く女をうつさうとするのも感動性が著しく表現るからであらう▲眠りから覺めた時の女の脈搏の數は男よりも多い▲瞳の變化も男より女の方が著しい、之れは詩人の領分だ▲女は氣が散り易く根をつめて働くことになると男にまける、男は話しながらでも働けるが女は話す時には仕事を止めて居る▲女は話さずに居れない、男は沈默して居られる、それは女の心の働きが動搖的に、速かに廻轉するからで、物の言い方も女の方が早い、即ち早口である、舌の運動が早いのである、一體女の筋肉は男より運き方が早く自然表情なども鋭敏になる▲若し話の早さを計算する器械があつたら女は男より一生の間に驚くべき多くの言葉を話して居やう、記者の家の女兒なども早口の饒舌であるが、記者は殊に無口であるから、恐らく記者が一生の間に言ふべき言葉より猶多くの言葉を女兒が言つたらうと思ふ▲以上斷片的の事ですら、男と女とは根本的の相違がある、相違があつてこそ又相助け相慕ふの情も起るのである。

山中古洞先生選

懸賞當選圖畫

（其十五）











(1) 柿實（二等）　牛込　佐野貞子

(2) 足ずもふ（三等）　淡路國津名郡郡家村樫野方　野澤はるゑ

(3) 寫生（四等）　芝區高輪車町三六　伊藤敏子

(4) 船（五等）　京都市西陣紋屋町　濱部愛子

(5) 勝手口（五等）　下谷　岡野さかへ

叙事文

文學士沼波瓊音先生選評

三等　○山莊の主人

四谷區愛住町四七　孤菫女史

人里離れし玆山奥に、如何なるあて人の世を忍びますかと、近き里の山がつ等が常に疑問としてゐる彼山莊は、あまり數寄をこらさで風趣多く自然のまゝに、山より落ち來る眞清水を庭の泉水にたゝへて春は之に落花をのせ、秋は眞如の月を浮べて、清き佳人の心をうつし運命を語るであらうかとも思はるゝ、さても誰が詫び住ひてあらう。

月清く虫の音しげき宵、寢られぬまゝのそゞろ歩きに、夜露ふみつゝ物思ひながら何時しかたどり來し奥の細道、ちよろ／＼と流るゝ筧の音にふと心づいて頭を上げると、是ぞ例の山莊、枳殼の垣ごしそつと內を覗くと、泉水の邊りに誰やらん人のけはひ、月に透してよく見ると、まだ廿には屆かぬらしい若き令孃の立姿、少しやせぎすのすらりと高き躰を櫻木にもたせ、眞白き半面を月に照して何やらん物思ひの躰。

『ヂーお孃樣』不意に聞えた聲に驚いてよく／＼見ると側に一人のお婆さんがしやがんでゐる。

『何時も／＼同じ事を申上る樣ですが、ほんとうに貴孃、どうぞして早く快くおなり遊ばさないぢやいけませんよ、第一お父樣やお母樣に御不孝ですよ、それにあなたのは全くお氣の持ち樣一つですもの、さう何時も／＼返らぬ事を思ひ續けてお躰を惡くなさるのは、潔樣だつて却て草葉の蔭から御心配遊ばしますよ。』

『でもねえせめてお側で親しく御看護でもする事が出來たのなら、また諦めもつくだらうけれど、あんな手足も屆かない、西洋で、一言のお見舞も申上ないてお亡くなりなすつたもの…………。』

すゝり泣く聲が聞える。

『そりやー婆やだつてお察し申ますよ、併しもう幾らお嘆き遊ばしてもおつつきませんから、只ない昔の御緣だとお諦め遊ばしてせい／＼お躰の御養生が第一で御座いますよ明日

は丁度御命日、あの白萩を持つてお墓參りを致しませう、サア夜露はお毒で御座いますよ。」手を採つて引立てやうとする樣子。

覺えず佇んでゐた我は、漸く無我の境からさめて、さてはさうであつたかと思ふと、云ひ知らぬ感に打たれて同情の涙止めもあへず、仰げば折からの月雲にかくれて、あたりは朧と。

風さつと吹いてしつとりとした兩の袂を拂つた。

(評) 趣向ふるけれど。

五等　○たま川

山形　紅葉子

我里は羽前國小國の谷なり。この邊り貝の化石の多きは、太古洋々たる入海なりし面影を止むるものとか、而して其内には幾個の丘あり、谷あり。丘は耕され、谷には田拓く、幾條の小川は、此等の谷を灌漑し、うねうねとして西に流れ、合して越後に入り、日本海に注ぐ。

吾は此等の中にて、殊に玉川を愛す。

川は南小國村にありて荒川の支流なり、飯豊山より發する小流なれども、水淸く底滑かにして、白き河原に碧藍を流し、所々に淵を湛へ、稀に瀧あり瀨あり、岩に激して、白雪飄るが如き奔湍もあり。

葉染みて、菊霜に驕る頃は、溪水潺々として、黄金の砂の上を流れ、滿山の錦、皆水に浮び、また嵐山を思はす。

木葉全く落ち盡して、寒林に霰たばしり、雪谷を埋めて一條の碧流、銀溪を縫ひ行くもよし、水愈々落ちて、橋高き所、夕陽斜に射來りて、紫煙谷に充つるもよく、盃大の月うらさむく雪に輝き、水に碎けたる更によし。

やがて春來れば、諸山、先づ下方より姿をつくろひ嫩芽、濃淡の裝をなす。綠なる所、紅なる所、紫なる所、黄なる所、相錯りて地上に紋を畫く。さ霧、谷川をたちこめて、山々は尙ほ、白き几帳の内に隱れたる時、朝日のうら〳〵と、さし昇り行きて、やがて諸山霧の衣を霞にぬぎ換ふるさま、いかばかり美はしき眺めぞや。

青葉なつかしき頃、立ちて川邊を逍遙せよ。苅り取られたる葦の短きほとりに、鮎の群を追ひさし出でたる岩が根の、苔むしたる所に、釣を垂れ、綠滴る松蔭に、よこたはれば、夢は溪澗の淸流に遊ぶなり。

若し夫れ、中秋の月に川を訪はんか、天風、松籟、水の音、谷の聲、自然の音樂となる、胸中豁然として詩情禁ずる能はず、身は飄然として、白雲の鄕に入り

し思あらん。これ即ち、吾の玉川を愛する所以なり。

（評）形にのみ苦しみたる文。

秀逸

○わが母　　東京　なでして

「花代様、あなた本當は長女だわね、さうでせう？」つて綾子樣に云はれたのは、忘れも致しません、今から八年前！丁度高等一年の修業式の後でした。『東京府士族正光三女今野花代』とかいて有るのを御覧になつて仰つたのです、噫嫌な方だ大勢の前で何も耻さらしに仰らなくても、と口惜しくて泣き出し度なりました、もう歸るや否や母上に申上ました、そしたらそれは〳〵淋しいお顔してぢつと私を御覧になるのです。噫惡かつた、私は何故こんな事を耳に入れたのでせう？實は友から何と云はれても仕方がないのです、幸か不幸か私は全く妾腹なのです。正妻たる人は、大變な不都合を働いた爲危く父上のお役に迄て響き掛たとか、然し都合上離縁といふ事にも行かなくて廿年以來、義絶となりそれで其後に參つたのが私の生母。されど正妻のある以上は籍が入れられません、ですから公には母と呼ぶ事さへ叶ひません。手前ぼめの樣ですが世間の妾とは、全く異つて居ります、顏はそんなでもありませんが心は確に十人並以上でせう『內面は兎もあれ正妻たる人も有る事だから』と申て氣の毒な位萬事を愼しんで居ります。遊山などは愚か指輪一つ有りません。初對面の方には必ず一と口上して御挨拶申上るものですから女中が『奥樣の樣に遊さなくても』と涙を滴します。子供不びんさに生家からは爪彈され、私の異母姉からは疑の目で睨まれても、家の爲、子供の爲と思つて、身を粉に致しました、今はその効あつて親類達からも母の正しい所を見とめて呉れました。噫神は未だ母をお捨てにはならなかつたのでした。斯る悲しい運命の人から生れそして十九の今迄育てられました、やつと昨年高等女學校を卒へましたが此秋には嫁ぐ可く定められました。



寒月　　大坂　今四こゆき

噫私は、嫁いでも『花代は初子の子だからあれだ』と云はれない樣に日頃の母の言を守らなければ成りますまい。

○養鷄日記　備後　中山八千代

七日、六時!!!餌を與ふる時は來りぬ、妾は絣の單衣の上に、白の筒袖の上衣を手早く着し、下り立てば何れも劣らじものと、首を延して「キユー〱」と云ふ、蓋し歡迎の聲なるべし、親鷄には酢粕と麥糠とを、等分に入れて大根の葉を刻みて與ふ、一號の雛（孵化せし順に依り、一號二號と區別す）と二號の雛には酢粕のみに、大根の葉を刻みて與へ、三號四號の雛には、飴粕と大根の葉を與へ、五號六號の雛には飴粕と大根の葉の、極く柔かき處に小麥少しを入れて與へ、七號の雛には小米を與へ終りて、木陰のベンチに腰を下して各自食り食ふ樣を見るに、三號内の雛の中浴衣着の藝者、（親鷄にも雛にもそれ〲、特徴を以て命名しあり浴衣着の藝者とは、羽毛の色、白、茶、黑、絣等にて派手々々しく、恰も浴衣の樣なる上に此雛は、暇ある毎に嘴を以て羽毛を整る樣は、藝者の御化粧に異らず故に此名あり）、は餌を食せんともせず、兩翼を垂れて勢なし、是は必ず虱に喰はれ居るならんと、捕へて撿するに果して、兩翼に小さき虱數多附き居れり、直ちに除虫菊の粉をふりかけ置く。

八日、旦那（旦那とは身體肥滿長大にして擧止無頓着恰度大家の旦那の如し、故に此名あり）、巣につきしにより卵十八個を入れてかへさす、鳥小屋を廻り見るに卵二十三個あり、午後卵買ひ來る、總計百五十七個を賣る、價格少し上りて、一個二錢三厘なり。

○日ざかり　近江　少女子

浴衣一枚でブラッと出掛けた。七月中旬の或日暑い太陽がカッ〱と用捨なく照りつけて、人はそろ〱午寢でもしやうといふ一時過ぎ。

私は今鎭守の社の鳥居の前に立つて居る。鳥居はお稻荷樣のやうに塗つてあつたと見えて——朽ちた、大風が吹けば直倒れさうなのが、褪せた朱の色が處々へばり附いて殘つて居る。それを潜つて、左手の大杉の根方に腰をかけた。不圖下を見ると苔の上に大豆の赤褐色なのが落ちて居る、拾ひ上げて見ると、片側は眞黑に焦げてゐる。『一躰誰が落したのだらう？』誰が落したてい丶ぢやないか。大方村の子供が菓子の代りに、お母さんをせぶつて燒いて貰つたのだらう。『そんなことはどうでもい丶。』と、暫時腦が自問自答する。立ち上つて、向ふの松の枝の瘤を狙つて投げつける。狙が狂つたか何の手應へもなかつた。片手でポンポンと腰のあたりを叩きながら、其處いらを徘徊する合歡、松、杉、樫などの大きな樹が生ひ茂つて幹から幹へうね〱と太い藤葛が搦みついて居る。ザクリザクリと砂を鳴らして歩く。本社の前に土俵がある。

雨て土が流れて、廻りの俵は破れて、見るかげもない。此上て村の若者が日頃鍛錬てかためた太腕を差し伸べて、澁紙のやうな皮膚を曝け出して、ハッケヨイノコッタと角力取る態は頗る奇觀だと思ひました。

本社は一間四方の建物に二間四方の柵が廻らしてある正面の柵の扉に小さい額――それに牛や馬のヘンテコな繪がかいて、奉納何年何月何日何某とかいてあるが古いのや新しいのや三つ四つ懸つてゐる。私は裏へ回つて木立の間の細道から、森の裏手へ脱け出た。草が足を搦む。水溜があつて小供が二三人魚を釣つてるのが眼につく。一様に汚穢い浴衣や單衣の短いのを着て居る。煤けた麥稈帽、學校帽二分刈の青頭を日に晒して居るものもある。

『釣れますか――』と近よつて聲をかけた。子供は默つてケロリとする。傍には手桶が一つ置いてある。覗いて見ると小さい魚がウジャ〱して居る。水溜に眼を注ぐ。草につかまつて青蛙がギヨロンと目玉を光らして居る。私は蹲踞まつて其邊の水草を撈つて、チヨイチヨイとつゝいてやる。パクリかぶりつかうとする、巧に手を引く、又つく陸へやうとする。同じことを繰り返す、ツヒ水の底にかくれて、暫らくすると再び横の方へヒヨツコリ、尖ンがつた頭を突出す。其の水草が一寸お辭儀してピンと反ね返る。靜に寄つて、又前の通にする、今度は水を潜つて手の屆かぬ向ふ岸へ浮び上つた。惡戯を諦めて、立ち上るとグラ〱とする頭が割れるやうに暑い。ハンカチーフで袴間から出して汗を拭つて、少し氣を沈める。見ると小供は何時しか、五六間後の田の畦を傳ふて、大川の方へ行く。

『廣―しゆう、待つとれんか?。待つとれにやアえ―に。さき行け―の。』

と校帽らしいのが叫んだ。釣竿が日光にピカリと光つた。廣衆と呼ばれた兒は、向ふの土手の上に立つて此方の友を眤と見てゐるのである。

○みとりの一夜　中津村　町田つる

やつとねむつた樣どれ此間に持つて來た看護法の本をよまうとぬきあしさしあしして床の間へ來て見れば妹はぽッちり目をあいて居る急いでそばへよると又目をふさぐ此度は本を取りに行く氣にもなれないので妹の寢顔をつく〲と見いッたどうしてから急に病氣が起つたのだろうあの愛らしい目はいたくくぼんで櫻色の頰は色あせて見るからにいた〱しい此やつれ方あゝ可愛そうな〱一昨日院長樣が家へお出になつて診察のすんだあとお佛壇の間てお父樣と話をしていらした時に妹のいふたあの言葉あの悲痛の言葉……もしや妹はあゝ思ふまい〱いんぎでもないても入院すれば翌日はすぐ施術するすれば經過さへよければ直きだと仰せられたが入院してから二夜目今日もそんな御沙汰がなかつたお父樣は晝前にお歸りになる明日の朝でなければお母樣はお出てにならないしつれて來た看護婦は

ねむつて居るやうあゝどうしてこう心細いだらう早く夜があければよいなあ——やッと十一時かちよッ……妹は夕方からうつら／＼許して居る家へ電報でもうつてたれかに來てもらうかしらいやよさう夜中になんぞどんなに御心配なさるか知れやしないおや雪でも降つて來たのだらうかおゝ氣味が惡い電氣はにくらしい程かがやいて居るあゝいやな晩だなあ——姉さん氷あいといへ樣少さいのを入れてやると甘さうにがりがりがりと今何時一時間許の内に三度もかけねして三時よといへばあゝッ夜が長い／＼……又目をつぶつて居る此度はむしように涙が出るあゝ病院へなんか來なければよかつた妹もさう云うたが……おゝお隣でも悲しさうにうめいていらッしやる妹もどんよりした目をあいてあッ苦しいッ看護婦と二人でお腹の藥をかへてそッとなでゝやるあゝ早く夜があければよい。

○夜の芝公園

麻布　と　も　ゑ

夜の芝公園は殊の外の美景である。

今宵は十三夜の月が冴えて、それを又辨天堂の邊から前の蒼然たる山の森を透して見る時なんか全く繪の樣だ。何處からか涼しげな銀笛の響を聽ながら池の橋を渡て藤棚の下のベンチに腰を下すと、只モー夢心地のすつかり醉された樣にウットリとなつて仕まつて、ついの今迄田舍から見たら箱の樣な部屋の蒸すやうな暑さに苦しんで居た事なんかまるでそんな事が有たのかとも思はない位に忘れて、全然此自然の中の人になつた、あたりは今人の氣もなく、濃い藤棚を洩れる月は靜かに乳でも流した樣な光を地に投げて、其靜寂はほしいまゝに耽つた默想を補け、無我の中に云知らぬ微笑みが上ると、す——つと池を撫てゝ來た軟かいそよ風が襟から袂から熱した胸を抱くやうに……木の葉がガサ／＼と葉摺の音を立てたゝガタ／＼と二三人の白浴衣が詩吟をしながら橋を渡つて、「君、ラムネでも飲まうよ」と茶屋に這入る後姿は無邪氣相な學生だ、入らつしやいまし何を差上ましよと、艶な女の聲がすると、又一しきり笑ふ樣な聲がして、氷を削る音が聞えた。ベンチを離れて廣い道の端を小聲で唱歌を歌ひながら、交番の前を左に折れて紅葉館の前通りへ來ると此處は又スグ／＼と兩方から競ひ立つた杉の欝蒼した中を、アーク燈の光が薄霧の樣に溶けてどこかでフクロウが鳴た、アゝいつ聞ても懷かしい聲だ國に居てまだ子供の時分よく裏の山であんな聲がしたつけ、すると恐はがつて母に抱き付て其懷に顏を埋めて、其儘眠つた事も有つた、何とも知ん昔なつかしの思に、丁度幼な子が母の手にすがつて歩くかの樣とぼ／＼と小きざみの自然と首は頸垂れて樂しい夢想に入ると、出しぬけに横合からガラ／＼ッと車を引出したビックリして氣が附て見ると早紅葉館の前迄來て、地にはおつかぶさる樣な葉櫻の陰影が月を透して面白い摸樣を描て

居る、今一度と振返つた眼には淺く眠つた樣に淡く輪廓を取つてコンモリ控へた森の上を笑つた樣な月が冴え冴えしく光を增した。

○月まつ宵

久留米　永野ふさ子

鎭守の森に夜の幕がふわりと下りて四方にひろがつて行く。野も山も村もつゝまれて私の部屋も暗くなつた私の向ふに白い顏してうつむいて居るのは元同窓の春子さん今日珍しくたづねて來たのを無理に引き止めた。むさくるしい田舍の何とてもてなす物がないが庭前の眺めと涼風を御馳走に月でも待つて昔をくり返すつもりであつた。

入淸し卯の花白し風靑し。とても云ひたい今夜軒ばに岐阜提灯をつけさした、椽に出て、柱によると春子さんも、出て來て涼味を取る中柄の麻布に白袷を重ねこんでなか〳〵品がいゝ。二年前の友其まゝ美しい横顏の頰の肉が目立つてこけて居る。

在學中あれ程親しくあんなに堅く約束して置て此頃の疎々しさと云ふつもりでなかつたが口をすべらしてうらみが交る云ひ終つて友の顏をのぞくともう泣て居るのであつた。はつと思つたが仕方がない。



客待　麹町　冷花女

永野さん私しはなぜこんなに不幸でせう一層山の中の人の居ない所へでも行きたいわと云ふ、私しは驚て返す言葉がない、私を親切にして下さるのはあなたばかりよいつまでも吉川春と云ふ不運な女のあつた事を記憶して下さいね、友は淚の中から學校を退た後の有樣を話し出すのであつた。

友の父母はこの世を去つたのではなくて或る失敗のために友を伯父なる人にあづけたまゝ姿をかくしたのは十年以前の事で伯父の家に居づらくて私しは巡禮にでもなつて父母にめぐり會たい、私の一生は巡禮て終つても不足はないと私は春子さんの脊をなでながら淚できいた、今盛りの花やかに過すべき時代をこんな憂き思に費す友の身淚なしにきく事が出來ようか。

まつて居た月が山の端をはなれた、雲を右左にはらつて悠然と登つて來る、草葉の露にも二人の淚にも、一づゝ月の影が宿つた、蒼いさびしい顏を少し仰いだ友は永野さん私の父母もどこかでこの月を見てるでせうね、と、かすかにほゝえんだ望みなき望みにたよる美しいこの友、私しは吉川と云ふ名と共に長く月まつた今宵を忘るゝ事はない。

○田舍みち

小石川　小笹千代

坊や良い子だねんねしな……さても眞晝の夏あつからんを、歌聲床かしき子守兒は十三か四の色褪せたる單衣を着繪日傘斜にして小田の徑道を行くのであつた、背の子は眞白き麻の單衣につゝまれて安らかに眠つてをる、蜻蛉一つ繪日傘の上にとまつた。

彼方より走りくる里の子色飽くまで黑く此の暑さに帽子もかぶらず、もち竿もちて蜻蛉追ひつゝ『芳ちやんおまちよ蜻蛉とつてあげるから』『えゝ取つて頂戴な子守兒はうれしさうに云つた、『芳ちやん鎮守樣へ行かう澤山ゐるよそしてあすこ涼しいよ』『えゝ、行きませう』と二人は鎮守の森について、『芳ちやん此の石に腰かけておいておれ取つてやるから』『えゝ』やがて男の兒は得々として來た『芳ちやん十一取つて來たよ半分づゝにしようよ』、『ありがたうね』颯と吹き來る涼風は森の木の葉をがさがさとならすのである。

今まで暑つかつたのがだんだん涼しくなつてきた、芳ちやんは立ち上つて最早沈まんとしてる夕陽に向つてたつた『美しいお日樣』束ねた其髮は金色に光つて千町田の稻も鎮守の森も野川の水もひとしく夕陽の光を浴びて皆燃える樣だ『もう歸りませうよ』、『あゝ』二人は手に手をとつて『うれしや今日は空はれて……』歌ひつゝかへるのである。

賤が家からは夕げの烟がすうと立上つて居る。

○圖書館

大坂府　刀禰春子

四五日前より降り出せし小雨の、今日にいたりても、尙止まず、欝陶敷こと限りなし。妾は今日しも、六日間勞働せし、報酬として日曜てふ、いと樂しき、一日を、あたへられぬ。されば、此長日を、暑苦しき三疊の二階にむなしくすごさんも、惜しき感せられ、常より好むことゝて圖書館行きを思ひたちぬ。手早く髮結ひ、衣服着かへて、中之島さして急ぐ。館の三階に上りしは、午前九時十分前。館内清潔、時に珍らしくも日照り、清風吹きとほりて、おもはず、精神快活を覺ゆ。女子閲覽室には、妾一人のみ、窓より見下せば、中之島公園の、木々、靑く美はしく彼處に此處に、學生、軍人、官吏らしき人、職人躰の人、愛らしき小兒を守る女など、皆思ひ〳〵に、今日の一日を樂まるゝならん。眼を前方に寫せば、近く淀屋橋、相見え、橋上を通ふ多くの人々、車の繁く走るなど、げに、活動寫眞を見るが如し。尙も下行く巡航船の姦ましく、橋下につきては離れ、つきては離るゝ樣、いとゞ面白し。あまりの、好景に外ばかり見居たりしに、いつのまに來られしや十四五歲の少女二人、妾のうしろにて、早何かの書を閲覽せらる。自分も早く借りて來んと目錄を開きぬ、かくて、妾は、新撰國文模範と、作文辭書とを、借り受け、熱心に熟讀す、かゝるうちに、時計は、いつしか十二時を報じぬ。妾は二人の少女とも

に、最下の、食堂室にいたりぬ。茲にては男女少年の別なく、皆思ひ〳〵の場所にて、持參の辨當、或は賣れるを買ひて食すなり。室の一隅には、菓子、菓物、手帖、鉛筆、紙、筆、等、其他種々、閲覽者の便を計りて賣り居れり。こゝにて、辨當をも、買ふ事出來得べし。食終りて元の閲覽室に來れば、年廿二三と思はるゝ、美しき人、洗ひ髪を正しく束髪に結ひ、すつぱりせる白縦縞にあづき色地に、白、薄紅、の花模樣ある、メレンス帶を、恰好よく結びて、眞白き右手に扇子つかひつゝ、微笑閲覽せらるゝ樣の、優にやさしう女の姿も暫時見惚れ居たりき。折しも、紫袴の女學生三人連にて、入り來られぬ。妾は、小説、獨歩集と、借りかへて讀みしに、書中女難の一節、實に、哀れなりし、女難の主人公たる〇〇〇〇、噫實際かゝる人々も社會には、多くあらんかと、妾はふかく想像せしなり。其他二三の面白きもの讀みつゝ、午後六時すぎまで館内に居たれど、女子閲覽者は、妾と、ともに只六人のみなりし。男子閲覽者の多數に比しては、女子の方、甚だ、小數なり。妾は、何となくさびしき、感せらる。今少し、女子達の、圖書館通ひせられん事を、妾は、望む、小説、雜誌・何にても可、只心して讀みなば、隨分益あることと、妾は、思ふ、實に、文明の世のありがたさは、僅か、二三錢を出して、如何なる高價の本をも、自由に借り得らるゝとは、かゝる世に、生れし妾等こそ、誠に、幸福のいたりなり。六時半、歸途につく、空は、全く晴れ渡り、夕日輝き、涼風何處よりか吹き來りて、無上の愉快をおぼゆ。

魚釣　茨城縣　柳澤眉子



○哀れ乙女、　相模　野島さと子

靜寂なる一寒村の片ほとりに、壁落ち、軒かたむきし小家あり。此の家の乙女が窒扶斯を病みて古びたる寢臺の上に身まかりしは、一と月ばかり前のことなり。乙女が病苦に呻吟しつゝあるとき、厚き情を寄せて介抱せしは、たらちねの親のみにてはあらざりき。一人の醫師のみにてはあらざりき。乾ける乙女の唇をうるほせしは、かつて乙女より看護を受けしわれの心盡しなり。乙女は生れ得て美人なりき。上流社會の人々にもよく乙女の名は知られて居たり。婦人は乙女を嫉み、男女は乙女を敬ひき。かつては乙女も終日ほゝゑみては樂しき月日を送りしことゝありしが、思はざりき。茲に涙よりもはかなきあるほゝゑみの現はれんとは。

乙女の性質は順良なりき。されどまた世にもまれなる男氣をもてりき。かくて乙女はかよはき人の子を助くるてふことを何よりの務めとし、何よりの樂としたり。燃えんばかりの情熱を以て、ひたすら同胞の爲めに一身を犧牲に供せんとしたるなり。乙女の心中には、如何にいみじき資のひそみて居けん。さあれ何人も知らざりき。今も知るものはあらざるべし。乙女は果して犧牲となれり。さあれそが天職は終れるなり。悲しむべきは乙女の亡きがらに一人の弔ふものなかりしてとなり。よし乙女は一言の弔詞を望まざるも、われは今にだに一點未開の蕾をそが墓の上に止めつゝあるなり。哀れ貴きみ靈よ、禮なしと思ふなかれ。

○朝飯前

常陸　橋本小啓

實積寺の鐘は午前五時を報じた、私は宵の用事を果さんといつもより早く起き、是れまで持ちたる事の絕てなき荷車の梶棒を取り耻し乍ら手拭を姉さんかぶりに、からころ〳〵と我が家を出た。少し行くと、今まで見えなかつたが霧は急に出來た樣に私が行く道に吹付てくる、霧は益々深くなつて、十步先は見へぬ位になつた、おやこれはと思ふ間に忽ち去つた去つたかと思ふ間に又來る、其の樣さながら岸によする潮の如くてある。霧は次第に深くなつて、今に大粒の雨となるかと案じつゝ行く程に、何つの間にか一陣の淸風と共に何も彼も飛び去つて淸々とした、頭は最早富城山と劍神社の中間なる長坂の中段てある、此處には足を止めた、何と宜い景色だな。此な處を寫生文とかに描寫したら嘸よい事だらう、遠くは神谷衛燕園の事務室に醸造倉の石盤屋根と其の上なる大なる時計は只眞白に見へ、烟突は小松の上から丈餘も延び上てうす黒き烟を、れむたそうにはいて居る樣何だか線香の烟に似て陰氣臭い、筑波山は其の右方に盜て眞宵に立つて居る樣、いかにもおごそかてある。私もいつの頃か、あの絕頂に登た事も有つた、上には、たしか氣候觀測所がある樣に覺えて居る、其の東か西かは忘れてしまつた。あゝ美はしき朝や、此處の平野は靑々として、黑ずんだものが點々見ゆるのは樹立てあらう。其の中をうねりにうねつてる消き流れは小野の河水である、其の下流に見ゆる、淡く白く見ゆるは私が行く目的地の精米水車場の土藏と物置てあらう、水車は何の思案もなく廻つて居る樣に見へる。はて徐々に行ふかと思と今思ひだした樣蛙はなきだした。右の道から何處の作男か歌を謠ひながら私が行く道を橫ぎりながら、わざと聞へよがしに終の一節聲高く（私も渦洲の露となる）と彼は山の蔭に入りぬ。

何程もなく水車場へ着いた場內から主人が出て、少々お待なさい今直ぐ出來ますと內に入つた、私は引き來た荷車に腰を下した、河向を見る家の內から洋服の男が石油の空罐を兩手に一つづゝさげて其傍に何度ともなく運んだ、其が終ると彼は我が水車場の方を眺て居る、其の家の前に何か廣告のあるを四十位の男が何氣もなく見て居ると彼の洋服の男ははつくしよと、くしやみをすれば彼の男は是に驚いて向の方へ消てしまつた。

私も用事もすみ少しの麥糠を載せて此度の歸り平地の處をたどつた。何しか追分まて來ると大なる馬頭觀世音の石碑が建てある其所には櫻や松の木が澤山植込てある其の端を廻つて我が家へ歸たのは午前七時。

○一分時

仙臺市　愛子

今日はいつもになく、心淋しいのてかういふ時こそほんとうに御友達が來て下すつたらどんなに嬉しいだらう、天氣と云へば雨が降るどころか然も好天氣て蟬は此處かしこて鳴いてる、どういふわけなのだらう、と、心に聞いて見たが、わけがわからず、只何といふ事なく淋しいのてある折から机の上の置時計は午前十時を報じた、間もなく小間使の春が靜かに障子をあけて、「あの御祖母樣が御呼びてすよ」といつて去つた、其時は何だらうと、一時は心配したもの丶何だかうれしくなつて、大急ぎ

に茶の間へ行くと、父様初め母様姉様も御揃ひ、其上縁側近く愛犬のポチまで御仲間入りしてをつた、「母様何御用」と云ふと、皆云ひ合はしたやうに、私の顔を御覧になつて、只にこにこ笑ふばかり、私は氣が氣てなくもぢもぢして居ると、父様は「御前は休みになるとすぐ毎日口くせのやうにゆつてた、事に付てだ」といはれたのであゝと、氣がついて只うれしくて「ほんとう」といつたら、姉様が「わかりもしないで一人でよろこんでるわ」といつて大笑ひ、母様は、初めて「ほんとうにれ皆んなて明後日原釜の海水浴に、行くやうに相談がきまつたの、それで御前をよんだの」とはつきり云はれて飛立つやうなうれしさ、姉様は「夜になつたらゆつくり用意の事など御相談するの」と‥‥あゝ此時の嬉しさ‥‥其前までは今までに無い程の心淋しさ一分時のうちにはこんなに前と變ることもあるものかしら。

さて今夜の御相談にはどんな御話があるだらう

○幽明

伊東賤子

お米〳〵とけたゝましき呼び聲、次てお米さんお米さんと連け様に呼ぶ聲す。あゝこは今朝とく危篤と傳へられたる隣の病人の臨終か、扨も痛ましの極みよと臺所にありつる妾は思はず境の壁際に身を倚せぬ。

哀しき呼び聲は頓に靜まりて今は只すゝり泣く音のみ耳立ちて、それと母君に告げ參らすれば急ぎ行き給ふ側の階段昇れば物置の窓より内の様も見得べきを、何と無う胸苦しうて只茫然と立ち盡すを譏つるは誰か。

昨日今日吹き初めしとばかりの秋風に弱りもせで鳴しきる蟬の聲いと心憎し。

次第に集まり來る人達の打しめりたる聲す、母君歸りませり、彼の女は遂に逝きぬと、あなあはれ。

あみもの

矢名氏



吉田家は去年[illegible]りに移り來しのみの親しく交はりもなされば委しうは知る由なけれど彼の女は幼くて母に放れ十五六の時家の爲めとて習ひ覺えし三筋の糸を便りに浮き川竹に身を沈めぬ。斯く香へる花の其顔と鶯の鳴くにも似たる清き聲音とはいと數多き浮れ男に又なき者と愛られしも、あゝそれも一時彼は幸ある身にはあらざりき。

過にしきさらぎの末つ方風の心地と暇取りて歸りしが程經て醫師は肺結核と診斷しぬされど自らそを打ち消して我病はさる重きものならずと靈恐るゝ様無かりしも、四月五月と經る程に病はいつしか重り行て、神に祈り佛に願ぎてひたすら看護に盡したる親達が眞心も其甲斐なく一日一日と手も足も糸の如くに痩せ細り今は早や頼みの綱も切れ果てぬ、心強く云ひ放ちたる彼の女もそれと悟りけん人々の慰むるも[illegible]かて繼母が厚き看とりの勞を幾度となく謝したりと。

かくて廿日前の朝いと危ふげに見えければ親族縁者呼び集めしに靜まりぬとて歸り去りにし後、彼の女は俄に目見えずなりぬ父君呼びてよと云ふ云ひも果てぬにあら彼がみ靈は、彼が若きみ靈は何地ゆきけん骨と皮ばかりなる哀の體を放れて‥‥折ふし妾の間にありつる父なる人の病床の側に座したる時は早や呼べど叫べど應へざりき‥‥翌日亡骸は野べに送られてあはれ一片の煙と消え去りぬ、人世五十年と聞くものを半ばにだに充たぬ盛りの身なるを。

それより三七日を經たる今日軒の燈籠ほの白う風に搖られて老僧が誦しいなる讀經の聲微かに響く此夕彼の女がみ靈は今何處さまよふ、淋しき晩鐘の音を聞きつゝ妾はつく〴〵人の身のはかなきを想ひぬ。

○書齋の一時間

佐賀夢子

どゝつどゝうつと白布の瀑は直下してゐる中は蒼く兩端は白くなめらかな岩をすべつて目の廻る程の早さで落ちる水玉が四方に散つて雨の様に

降る。

突き出た岩の上から瀧壺をのぞくと眞白にたぎり立つた水が瞬間藍の樣になつて湛へてゐる、其青い上を水玉がするする〳〵とすべつてはまた藍になる。

ぽつり〳〵と飛びはなれて來る水玉はいつも藍色の上をすべつて行く何と云ふ魚か時々はれ返つては銀色の腹をぱつと見せる、岩の根から青い長い草が生えて水の中にひげをのばして居る、なほ一心に見つめると大きな魚が悠然と浮び出る、しかも金魚の樣にまつ赤な魚藍色の中に紅が一點又一つ又一つ。

即ち瀧壺はこの赤魚でたぎりたつて岩までぐら〳〵と動かされる樣になつた、冷水をあびた樣な氣持で落ちない樣にかぢり付て居るとどこからか床しい衶の聲がする、しかし耳かたむける暇がない、岩の動搖は刻一刻はげしくなる衶の聲のあり〳〵と耳に入つたせつな足ふみすべらした瀧壺の中に眞つさかさま赤い魚が一時に飛び立つ、あつと叫んで目がさめた、私しはいつもの四疊半で机の上に面伏してゐたのであつた、額ににじんだ汗をふいて障子をあけると少し風がある、竹はざわ〳〵と幽しい音を出してゐる。

とぎれ〳〵に優しい歌がきこえる、夢で聞た衶の聲其まゝ、窓から半身をのり出して眺めると庭の木陰に宿の奥さんが孃さんの御守り、其長い優しい調子の子守歌はたえず奥さんの口からもれるのであつた。

私しはこの歌を衶の聲ときいたが白モスリンの服にくるまつて母樣の白い腕に眠つて居る孃さんも必つと衶の聲ときいて居たんだらう。

優しい聲にうつとりとなつて居ると吉田さん御湯がわきましたとびつくりする程の大聲で下女が知らせに來た、時計はゆる〳〵五時を報ずる。

○おもかげ

札幌　姫百合

夕過ぐる頃より降り出でし五月雨は未だ晴れやらで常には繁ゆき交ふ軒端にも豆大鼓の音しげしつれ〳〵のあまり久しく出さゞりし寫眞ブツクを取り出だしぬ、眞先なるは父上が壯年時代の影、次なるは今は此地にましまさぬ小伯君の姿等見ゆくうちにふと目に入りしは我が未だ幼かりし頃我が最も好める祖母君の手に抱かれて側に小猫を置きたる、思へば不思議なるかな我は幼きより猫を好まざるに何故にか好まざる猫を側におきにしかされば見よ我は愛らしき小猫には目もくれで祖母君の手にすがり居る樣を、いつ見ても愛らしきは去年寫せる幼き妹の立姿花かご持ちて笑める樣何となく姉上に似たり次なるは年頃も同じ位の二人の娘頭にかざせる花束も衣裝の模樣もおそろひににこやかに立てる其姿見るより我が眼には言ひしらぬ露の宿りぬ今は早や何をかかくさん其一人は我なり今一人なる其友は……あゝ其友は花月と共に思ひ出さるゝ我が最も慕はしき懐かしき友なり幼くも幼なき三つ四つの頃より此方十有餘年一日の如く互に助けつ助けられつゝ花の朝月の夕共に樂しく送りしなり或時は胡蝶たはむる春の野に白露を踏で紫菫を尋ね又は消つる希望を打ちかたり終日野べに遊び暮らしゝ事もありきさるにても常ならぬは世のならひかな友は去ぬる年八月の頃より心地勝れずとて豚々に轉地療養せられしが其効もなく遂に明けて目出度き新年の門松ひさぐ松の内白玉樓中の人となりたる悲しさよこれなるは友が生前十七才の新年を迎へし時さる家の新年會の歸りに思ひ立ちて寫せるなりかゝるなげきのある事も神ならぬ身の知るよしもなく松のみどりの其如く幾千代かけて變らじと言ひし言葉も今は早や過ぎにし夢あゝ夢、夢ならぬ此の悲みを如何にせんぬぐひもあへずふりこぼせば散りし涙は花のごとき友の姿はにこやかに立ちぬ。

○海邊の眺

函館　藤本鳥羽子

しと〳〵と降りつゞきたる五月雨の空も今朝は名殘なう晴れ渡りて、塵ばかりの雲だになければ、いざ海邊の景色眺めばやと、雨戸押あけ立いづれば夏の海しづかに。遠く幽に見ゆるは陸奥の山々。東の方はたゞ廣濶と果もなき太平洋にて、空と水とのけじめもつかず。波のまに〳〵、漁船の三つ四つ、はるかに見ゆるは恰も木の葉の漂ふ如し。磯の彼方を見やれば。黑き岩どものこゝかしこに散亂し、其の岩陰には里の男の子等小魚釣るとて、竿たれ居るもあれば、釣餌や海草などあさりゐるもあり。

あざやかなる日影は今東の空高く上りて。清き砂の上を照しぬ。磯ぎはに高く聳ゆる松の木立どもの枝さしかはして繁り合ひたるが。磯の香こ

もろ涼風、さと吹き來れば・みぎはによする小波としらべ合して、自然の音樂を奏しはじめぬ。あゝ此時の愉快さ得も云はれず。世の常の事ども打忘れて、沖をはるかに見渡せば。黑き烟りを吐きて走る汽船もいと樂し、折しも鷗の群れ來て海面に浮べるも、いと面白くて、あかぬ眺めに時を移しぬ。
あゝ此自然の風景程人の心を慰むるものはあらじ。妾はとこしへの友とも慰藉者ともたのみぬ。

○樂園

千葉縣　青葉子

わが家の裏の垣根のわきに幾千年の星霜を經たかと思はれるやうな一本の松の老樹がある夏になると緑滴る計りに茂つた其影を殆ど十疊敷位の所に黑く落して、涼しい風が絶えずさや／＼と葉にささやいて恰も女神が天樂を奏するやうそが下にはやはらかな芝草が敷詰めてあつてまづまア自然の樂園である。
妾は暑中休暇で歸る度にこゝに筵を延べ机を持出だして讀書に日盛りの苦熱を忘るゝを常とした、今年も歸てきて見ると床しいなつかしい松の老樹はいつものやうに緑の色美しく妾を迎へて其の健全を喜び祝ふ物の樣である今日も源氏を繙いて須磨や明石の卷を讀てゐると涼しい涼しい風がそよ／＼と優しい音を立てゝ青葉の香を懷に送つてくる其心持ちといつたら須磨明石の白砂青松の間に立つてゐるやうな思ひがする。
彼方の白百合の花には香ひの白い胡蝶がヒラヒラ舞つてきて其淸い／＼香に醉ふて……どんな夢を見て居るだろう、安らかに眠つて居るつい向ふの杉の樹に蟬がジー／＼鳴きだした、弟は長い竿に袋を付けたやつをのべて頻りにねらつてゐたが、ふいととんで終つたので竿をかついで

海岸　金澤登美子



さらに其先の木立へ突入していつた。往來にはれむたげに金魚屋のガラス玉の音、氷賣の呼び聲、それが、をりをりそよ吹く風に、聞えてくる。

○湖畔の夕暮

福岡縣　桂梅尾

宍道の湖邊日は早や西の山端に沈まんとす夏の夕風靜に湖面風渡りてさながら鏡の如し麗かなる夕日は黃と紅の影を水面にうつしつ靑き空より遙に舞下る鳥は沖の餌物を求むるや否や彼方此方にむれとび蒼々たる湖上白帆三つ四つ風にはらみて走れる等實に畫中の趣あり湖上遙に見渡せば天輪寺山の森欝然としてそが木立の間より洩れて見ゆる燈火は玉手あたりの里よりならむ夕告鳥の聲勇しくとび行くにやと右の方をながむれば龜田山の森蓊欝として緑滴らんとする中に巍峩として高く聳ゆるは千鳥城にして其威嚴昔におとらず思へば我國主なる松平氏の永く籠られし事どもそゞろに昔をしのばれてなん折柄聞ゆる汽笛に驚き見れば今しも汽船は嫁が島にかへり來れり船中の人々も此夕景を愛するにや甲板上にみちみちたる人々は西の方をながめぬ時しも美しく空にいろどれる夕陽は次第次第に傾きて嫁が島の常盤木に映ずる狀えもいはれずもし詩人歌客にながめしめなば何と歌はん、又畫にたくみなる人に見せなばさぞ美しき畫をうつさん妾は日頃此處に住めどもかゝる景色を見んは中々離し此絕景を親しき友だちと共に眺めなばなどいと心許なく思ふ程につれなき夕陽は早や西に入らんとする風情なるにいとおしく拙き筆をもかへりみずいさゝか是れに記してましと筆とれば涼しげなる夏の夜の月今しも雲間をはなれて淸光机上を照して光りを我れにあたへがほなるもうれしくて。

○或る朝

南葛飾　ほたる草

床の間の夏菊が、いつしかぐつたりと、しほれて了たので何かかはりをと花鋏片手に、裏の畑へ行つた。白霧はぼんやりと白う邊りを罩め、涼しい風はさわ／＼と、青波よする田の面より生れ出てゝ、我が後れ毛なぶる心地よさ、遙か彼方の森陰に見ゆる、朱塗の御堂は、ぼーつとして恰もよべの夢の樣である。折柄がら／＼と車の音、はつと右の方を見遣れば小川の向堤を、六十過ぎたかと思はるゝ老爺、荷車の上に孫載せてほた／＼と上より滴る汗の雫拭ひつゝ、「のーお花坊、今日こさ吃度えゝ天氣だ、見なよ此露を。」「ほんとにねーと孫らしい十七八の娘、盲縞の仕事衣着た故か田舍には珍しい色白、暗い內から起きて車の後押をして來たのであらう、素足に、赤緒の草履を引づり乍ら……下向いて何やら獨りほゝ笑んで居たが、つと走り出てゝ路傍の雜草の中から、首を出して居る嫁菜の花を取つて白い手拭の間から見ゆる、島田髷にかざした。おゝ私も花をと立よれば不意に足許の路の葉の中から蟋蟀が一つ、すーいと裏畑りの方へ飛んで行く。

やがて、空なき渡る百鳥の聲に、日の御神の御夢さめてか、つと投げ掛けらるゝ幾千萬の金線銀線!!!

夕顏の花、所得顏にからみ付いた、大きな柘榴の木の下の花畑には赤白紫黃等、種々の草花、友禪染の如美しう咲き亂れ、惠みの光うけて、白金の玉つられたる如、きら／＼と輝く樣、實に何んとも云はん方なき風情である。今日こそはよ、折角樂しみにして居た白百合は未だ蕾が堅い何か他にと見廻せば、畑の片隅にあろうなだれた、金糸梅の間から、ぎぼしの花が薄紫の色床しうすーつと拔き出てゝ居る。

折柄お早うといふ聲、さては靜子樣かと、通の方へ出てゝ見る。やさしい後姿は靜子さんに違ひない、今日はお當直だと見えて、せつ／＼と急いで入らつしやる。あゝ何と品よくおなり遊した事よ、私も去年迄は御一緒に、通學して居つたものをと、思はずもため息を洩した。煙草屋の角に見えたのは、郵便屋さん、おゝ嬉しい、此方へとつ／＼と走つて來る、何だか本の樣なものを持つて、あゝ屹度女子文壇に違ひ無い。早く歸つて弟達に惡戲されないうちに、おゝ手に持つた花が亂るゝ、はらはらと露がこぼるゝ。

○休暇日記の一節　田中好江

八月二日。今年も半ばは過ぎにけり、と歌ひつゝ隣の美代ちやんが鎌利を持つて通つた。

七日。夜間の暑かつた事、皆々牀几に腰を下した、夕顏からは水がポタリポタリ滴つてゐる、それは私の手柄父樣は詩を吟じられる、兄樣は尺八を玩ばれる、母樣と私とはお話し、あちらこちらと步みつゝ扇いでくれるのが敏ちやん、樂しみは夕顏棚の下涼みとは古今の名吟。

十日。烏賊の墨を吐いたやうに雲がむら／＼と乾の空から起て來てごろ／＼と遠雷の音がする、間もなくバラ／＼／＼と扉をたゝいた、もう空は一面の黑雲、するとザーと堰をきつて降り出した、近所に遊んでゐた子供がわい／＼喚いて軒端にかけ込んだ、それも一時の事、又もや元の通りに日がカン／＼とてり出した。

十二日。兄樣と私と敏ちやんとは氷の御馳走になつた敏ちやんは私に向ひ小聲で最う一杯たべたいねと云ふ兄樣の耳に入つたと見えてそんなに食ふてはいけないとお叱りなさる、すると敏ちやんそつと私の顏を見て笑ひつゝ首を縮めた、私も兄樣も思はず笑ひ聲を漏らした。

○はあさん　豊後　仙女

私のお隣にはあさんと云ふ娘があります、このうち大層煩ひました、枕が重くなつたと聞きまして取るものもとりあへずお見舞に參りました其時は恰も前後不覺で唯々頭痛を人に訴へる計りでした、それが不思議な程早く快方に向ひまして三日を出です元の體に復しました。

其で此はあさんは天神樣の申子ださうで日常天神樣を厚く信仰して居ります、て神經も過敏で輕いヒステリー性の女と見れば其れてよいです。

二三日前何處てか辻八卦にても逢うたと見えて運勢を卜して貰ふと丁度病氣の事が出たのださうです、と云ふのははあさんの聟さんが里に居る頃から思ひをかけた女が有つて、其女の思ひではあさんは不慮の病に罹つたとの事です。

吉凶の判斷、まあ何と云つたら宜いてせう、それが爲めはあさんは一年越し添うて居た聟さんを、一塲の夢と追ひ出して仕舞たのです。其後まだ私ははあさんに逢ひません、誠に偶然の不幸ではありませぬか。



新體詩
河井醉茗先生選評

二等

○影
上總國市原郡鶴舞町　ひさ子

小障子に影こそうつれ、
紅芙蓉、――いと赤々と
夕映えの燃ゆるが中に、
うなだれの息づむふりや。

かすかなる物の力は、
輝やかの中にたゆたひ、
重さ世をおすとはすらし、
花の影ひと時ゆれぬ。

目をすえて徐に見れば、
花のへり花のほそ莖、
よろこびかはたや涙か、
かすかなる脈ぞ波うつ。

やがて日の薄れもゆけば、
魂さかる終焉のけはひ、
ひた迫る眞闇の底に、
消えてゆけ。（時の衰へ）

かすかなる力は絶えず、
闇黒の中にはためけ――
み光にまた見む影の、
覺束な、花のいのちの。

よろこびや、誇、憧れ、
（あゝ時は直に過ぎりぬ）
影こそは運命の表示――
暗深にかくて消えけれ。

此の如き詩才ある人の今迄隠れて居たのが寧ろ不思議に思はれる位です、前號の「はつ秋」と云ひ此篇と云ひ、容易に得難き感情と智識とを持つて居ます、乞ふ暫く其發展のさまを見ん（醉茗）

三等

○紅ひなげし
下谷區上野櫻木町二六　赤堀久子

「四尺にあまる下げ髮の
つやある黑髮にさしませと
五つ上なる若人は
紅ひなげしの花さゝげ
はりある聲に仰せつゝ。
あまりにしげくまともより
見入りたまふのはゆくして
もし母様のましまさば
御袖のかげにかくれんを――

幼き兒の人みしり
するにも似たるものおじに
仰ぎ見もせで、うつぶけば
人は「おかし」とほゝゑみて
わが横顔をのぞきてみ。

「このくれなゐの散らぬまに
いざとく君よかざしませ」
幽かにあつきおんいきの
わが頰のあたりかゝるかと
その瞬間よ、身の內の
血潮ぞをどる面ほてる
なにとはなしの夢心地……

つと熱したる唇つけて
もえたつ紅の花すへば
花はさ搖れてなにごとか

いとさゝやかにさゝやけど　うつゝともなき我しばし
只ひなげしの香によひて　あら、うつゝなの我を呼ぶ
誰ぞ覺えある聲にして、「紅ひなげしの花ちる…」と。
夢はその時さめはてぬ。

此の細かな、そして夢とも現ともつかぬ瞬間の美しい心の働きの寫し方は、女子特有の技倆のやうに感じます（評者）

五等

○日は朽ちぬ

越後見附郵便局前山田機方　ひめ百合

日は朽ちぬ、あゝ、勞働者、かの煤ばめる雲食る
鳥の影の群か、地に　そよめき、人は夕なり。
「夕」の人の煤ぼけて　行けり、脊に負ふ埋木や、
落せば古き巣を離れて、古代の鳥脱ぐる音。
かはける胸の―そは雲の　夕に燃ゆる光さへ――、
壞えて音なき、この思ひ、この世か、さては、前の世か。
朽ちてまろべる巨岩に、蒼ざめ伏せし額の上を、
日は、あゝ黑く匂ひつゝ、軋りて落つる闇の影。
時には、消えぬ古夢の　積か、――鶴嘴、さてからき
深炭の音こそ走り――、「勞力」の歌か、脊刺せ。
きしりぬ、落ちぬ、闇はまた　坑口なる岩に餘韻曳く、
俚謠にゑあせし日の落穗、それさへ、はやく味ひぬ。
かくて暮れゆくすみ山の　時、今七時、次代どき、
黑き入日を咀ひつゝ、坑内へ、「夕」はどよめきぬ。
どよめき入りて出でゝ――「勞力」の影のあらそひに、
あかりぬ、とみに炭塊の　世やは、燃えたつ冷たさか、
枯落の榮か、朽ち岩の　かけは今焰となりて
壓しぬ、「勞力」のかちどきに、闇こそ撓め、音もなく。
最後の運び、炭車　いくつ、馬嘶き聞くどる、
音に痛みは覺えねど　嘶けば火影の尾の搖るゝもひ。

炭礦の詩は今迄見た事はありますけれど、此れ位まで注意した作は見ませんでした、闇の中にたゝかふ勞力の影は能く映りました、少しばかり獨斷の語法もあるやうですけれど、苦心の餘と見て差支はないやうです（評者）

劣　選

○あら磯

名古屋　小木曾女

殷々とうなり重く――　濤や呼ぶ鐘の響は
逆捲ける暴風雨破りて　吹ゆる如海の奧底に

○君が門邊
埼玉縣　淺見なみ子

君が門邊をゆきすぎて
うつゝ心にゆき過ぎて、
冷たき風に後毛を
吹かれてかへる正心ーー
（これより路はせばまりて
だらだら坂や、雙側に
茂る木暮に蔭濕の
少女は暫し足とめて、
生垣つゞく君が門、
氣はたゞよひぬ、あゝ寂し）
ふと返見ぬ、眼にうくは
あゝ美しき君が家。
（つよき情の日はてりて、
紅き花さく世を見れど、
引かれひかるゝ後髮、
潤ひたらひ、胸の野に
門渡る舟の岸に來ず）
少女は暗き（人生の）
さがしき路を登る時
又幻を呼びかへしー
君が門邊を行きすぎぬ。

今少して舊套を脱するのですが、後髮を引かれるとか、後毛を吹かれるとか云ふ小形容があるので、又かと新しい感じを失はせます（醉茗）

名月　京都　千歲まさ子



○海にて
土佐　石川一董女

暗憺と眞黑き大雲は
低く走せて、ひた狂う
渦卷、たけり立つ浪頭
さと水烟漲らし轟動みぬ
罔象の惡形を黑髮亂す醜女の樣に
呪咀の咒文荒らかに打ち踊して
久遠劫地さき破滅の國に
なげ入れて「悲慘」の色の奥に仄めく
呻吟の聲色を執に冷笑めり。
黑き色刻に迫りて
世を闇へ闇へと呪ふ。
横なぐり吹き捲く風に
おどろ髮おどろ亂して
崩れざる泡と消えゆく
巖かむ怒濤の雄叫び
鐘の音は消えぬーふたゝび
倒れさま、しとしとー
女なり、姿も凄ごし
雲荒ぶ虚空をにらみ
其行衛惡魔の秘府か
海に立つ大浪柱。

中心の無い作、何を歌て居るのか分らない、全く分ないてないが、言表し方が整はない（醉茗）

(喜々と生贄求めて
生あるもの威怖しては
「暗黒」と「滅亡」の畏を與ふ)。
暗憺と黒雲は飛行す。
直前にてぎし腕の力
精と、もにぬけ去にて
眼路遠くとざせる
あやかしの氣に包まれ終へば
いつかまたふと醒めぬ
昏々と永き甘眠のはてならし
潮の强香に腦の奥がはかきみだれ
蘇生りにし魂は
闇の扉かいのけて光り見し。
されど亦疑惑の念むらむらと
せめよせし。希望の砦
迷ならじそは霧笛のひゞき
再びぞ微光みとめぬ
猶罔象狂ひ暴風雨やまず。

前の「山にて」と同やうな觀察點に立ちて、同じやうに人生をみやうとするうたい方て、技巧の相違らあまり上下はないやうてす(酔茗)

○夕の星

備前　しづえ女史

遠くなびきし夕雲の、　さゝべり淡き蔭にして、
翅を鳴らす白鳩の、　鳴く音よ空にかすれしに。
光さみしき弓張の、　月は外山にかゝれども、
いぶきけがれて人の世の、　響は霧のへだてたり。
星のまたゝきしげくして、　木末にくらき風のあや、
眞砂の影はさえりながら、　落る雫はつらかりき。
あした野におく露霜の、　あとなくならん戀ならば、
林の蔭にさまよひて、　夕の星は數へじを。
袖の紫たそがれて、　市の子路を尋ぬるに、
思ひあまりてつくばいし、　小指のきづもつゝましく。

調子は夜雨に肖て居ます（酔茗）

○歡樂

東備　小詩國

靈のすゝろぎ夢の衾に、　和みの熟睡さめし刹那は、
白き影して慕はしげの、　乘馬うたして神ぞかへる。
されば共鳴る從者の箜篌、　希望の樂師朝風神は、
歡樂の音の調いみじう、　いと朗らかに天に昇りぬ。
實に歡樂は天つ樂なり、　あゝ大自然天の花壇の、
若き紅罌粟風にふるれば、　あらはらくと花ゑみるふ。
白日の影大地に搖れて、　かぎろひ落つる凋落の花、

乙女ながらに死せにし「おもひ」――あゝ何となく涙ながるゝ。

夢の歡樂の天に昇りて、白日の影徒らに凋落してゆくさま、理想と現實との歡樂と悲哀を包んで、一詩のにほひ高し（酔茗）

○二つの髑髏　　たけを

颶風、龍卷雲喚びて、走り逆捲く黑渦や、底は魔神のかくれ家の。沈默ぞ深き永久の闇、泥岩影に黑船の、藻に裝ひたる骸よ、金銀珠玉人の世の、財寶空しう秘められて、鐵打ちし扉を護ると、廿重に捲きし海蛇の、鱗ぞ靑う微光、――思ひ燃えける初戀の、成りてうれしき旅の子が、永劫覺めぬ愛の夢、堅く抱ける白骨の、呼くらしき二つの髑髏。

思ひ切つて悽愴の材料、想像し得てよろしい（酔茗）

○悒鬱　　三重　中林梅野

求むれど歩めど道を見出しかね
礫土に野薔薇はびこる川原路を
我踏まむ地なく傷に足悩みて
こはそゞろ人生の行路聯想ばしむ。

悒鬱を抱ける今ぞ悅れば
知らず藪を分けまどひ
紛れいづるや眞砂路に

歩み苦しさ、熱烈の、眞晝の光――、
眼くらみ不安に立ちて　思ひ屈し氣疎くなりぬ。
汗ばみし衣の香もなく、　疲れたる身に冷う
醒め來れば夕影すらし。

求むれど歩めど道を見出しかね、　白楊叢立つ川邊より
夕の霧にすかしたる　里は遙かの遠にして。
今の我なる悒鬱を、　何にもらさむ、よどみなき
淸冽の水流れたり。

初め少しは新意の深い作らしいと讀んで行くと、さうでもないので力が落ちました（酔茗）

○刻める名　　東京　小路卷子

われは野の人、蓼科の　小さき街に生れしと、
寂しき湖は山深き　信濃の谷に靜かなれ。
あゝ姨捨の雨月夜、　知るともなしに母呼べば、
白き乳房におぼめきの、　われは女よ、おまきてふ。
ひとりの君は智惠の灯を、　高うさゝげて丹の頬に、
助けされぬまきの名は、　何れこがるゝ身なればや。
さくらかつ散る春のくれ、　十八、人の妻となり、
なつかし人の胸の奥に、　まきと刻まる證しさ。

われは野の人、ひと知れぬ、　美しの秋の香をきけばに
闇に落ちゆくまきの名を、　闇の淵に投ぐるかな。

○秋夕　　神戸市　平林たつ子

葛色衣の袖ながら銀扇かざろう、　秋草の錦もゝしき際もなく、
句ります龍田姫――　化粧の水の鏡に
花は皆がらゆあみしぬ。
夕日は今姫に別れんとや、――　森の扉にたゞずゞ
暗き錦帳はんと、　銅色に面火照る、寛草か、雲の
徐々とひしめき逼る夕まぐれ。
さとひるがへす、姫君の、　振の袂な銀扇のすべり落ちにし
翳して、うなだれがちに首振る――野辺の千草
一時に、はら〱と涙落しぬ入日の下に。

○草生ひぬ　　麹町　椿友子

となり家は空家となりて　幾月か靜かになりぬ
三疊の窓より見れば、　草生て入口を見ず
青き色は障子にさして　さびしみの光おやどる
例へば戀にあこがるゝ　紐、君を挽ひては
詩歌の宮となさん日か、　朝の日はうらゝかに
草の香りをまきあげぬ

○つぼめる花　　京都市　島田千代

愛の暴匿くして　未だ十六は春淺し
やがて解くらむ京紅に　戀の「いろは」を書き初むる。
胸に包みし情の火は。　染めぬ、赤丹の頬に染えて
美し姿とざれ言に。　笑みもはづかし、紅の袖

蝶は集ひて接吻ぬ　「戀の涙」の露とこそ、
花にしめりぬ、春の扉　さながら乙女薔薇色の、
頬とこそ思へ、朝ざくら　春にほころぶ花と花。

○醒めては　　豊前　八千代

戀の酒、希望の香、　醉ひしれて血の高鳴り
詩歌のいのちそれもかゝ、　秋にさめては敗殘の。
醒めては苦き涙のみ　やつれし頬をひた流れ
常闇の胸のおくがに　電と「智」は閃く。
哀愁は恐怖と變化、　情熱は利欲にさめて
我が詩の命それもあゝ　智の覚が呪ひに秋を滅びぬ

○森の社　　三河　永田舞鶴子

老杉は間ごとに生ひ立ちて　天に聳えて地を蔽ふ。
夜は寂寞としてもの凄く、　狼の叫びもまゝに聞く。
靈なは閉し神の森、　太陽も見えざれば星も見ず。
『嗚呼莊厳なる哉』神の森
鳥居は立てり誇らしふ、　形ばかりの神樂殿。
何を願ひの掛額か、　二つ三つ。
繪馬と共に納められ　獣る戀を嘲たしむ。
『嗚呼美しき舞姫の』神樂殿
いとも拙き御神を　尊くまつるこの森の、
黄金づくめの玉殿の、　清き流れのさゝ川に、
姿を映すその光景は、　煉烟として虹の如。
『あゝ神聖の』この玉殿

○夜の雨　　山梨　藤枝子

陰森と闇に響く、　セコンドの刻む音に

旅籠屋のうすぐらき
人は皆熟睡にいりて
外庭のこゝかしこに
しと〳〵と雨降り出て
（零落の老御達
若かりし其上の
美くしさおもひ見て
今黄昏のお　ろへに
罪業の報いのおそろしゆう
修心ゆび組みしぼり
しく〳〵と啜りなく）
翠としも旅にして
秋たつ夜半の雨をきゝぬ。

○流星

京都　田島曲琴

夜な夜なの軌道の
行きずりに恥らひふくむ
かゞやける消さき明眸
みかはしぬその瞬間や
知らざりしもゆる思の
きざしきぬ胸はなみうち

かくてはと秘めむとすれど
何となくまぶしき思
よびなれてひそめき笑ふ
かの君は知ろしめすかや
目にたちてやせにやせ行く
いやが上身をこがし行く
君の明眸きらりかゞやき

灯火はおのゝきつ
磯ごし肝翠ぞもろゝ
きりん〳〵すむせびなきへ
静寂は身に迫る

田植



駿河　天野ふじ子

色に出て君見るごとに
下界の兒は目たゝく星と
かくまでも焦るゝものを
あせれどもせんすべもなし
さはあれどもゆる思は
そを見しかこの夜はしなく
わがむれに深きいたでを

あなうれし「戀の征矢」とや
「流星」とかたりさゞめく
こゝな知らぬ、下界の兒ら

○自然の響

赤坂　春蘭女

あゝ吾が胸の小さくも、
初めて君を戀しより
あやし波だちなどりしよ

一年前の春の暮れ
おだやかなりし熱血は
或夜は夢に君を見て
戀しき御名よびしとか、
姉上様の御からかい
姿の胸はをどりしよ、
あゝ静めんとあせれども
あせれば狂ふ我胸の、
響ぞ自然の心の響よ

○獨吟

備後　二子山

池の汀の女郎花　なまめきてけり
昨日今日やさしき花の黄に咲きて。
庭の垣根の菊の花　咲そめにけり
昨日けふなつかしき香をかならせて。
されど其花眺めつゝ　共に語らむ
わがせこの　世にまさゞるをいかにせむ。
せめては花を折り取りて、君安らかに眠ります、御墓の前に手向けばや、

○欸乃

小石川　山崎富士江

朝霧踏みて唯一人、
日は未だ出でず東雲は、
波静かなる水面は、
利根の汀に佇めば、
たゞしら〳〵と白むなり
夏の女神の衣の如き、

ま白き霧に包まれつゝ、
白き帆舟はゆう／＼と、
舟はます／＼下り行く、
水に殘れる欸乃の、
吹く朝風に送られぬ。

下流をさして下りくる、
急がず下る利根の面、
いつしか舟は見えずなりて、
或は高く又ひくゝ、

○秋の海

高知縣　横田繁子

大嵐ふく波の上、
君が戀しき胸の野に、

北──寒潮にさからひて
曉、ほの白む霧くゞり
沈みし船は浮びこず
玉藻のそこに朽ちにけむ

さ霧──青波──秋の海──
櫓たふしておのゝきぬ

十月──海は高なりて
潮のくし香をたゞよはせ──。

入潮路ゆくや秋の船
北斗の方にいそぎけり、

霧にかくれし秋潮の
海なる靈のくし響き──。

十月──風捲ある〻夜を
若き血潮もかれはてゝ。

○日毎のつとめ

丹波　雛波あいの

しづかなる雲の流れの
霧降りし長き朝なれば
鷄の朝ときつくる
垣一重丁餘の井戸に
つほの水いつかぬるみて
流せしか──夕榮の中
蕃氣球の鉢活並ぶ
白き手には頂けの如露
海綿の水含む様
露ほたり星片まろび

峯かけて遠山籠めて
病む腰を忘れて立ちぬ
廚庭を朝顔匂ふ
かるく〻汲みて來りし。
どろ〳〵に消え湧く金を
日は入りぬ筆置きし時
苔の隙間影引くは我れ
坡にのみ長き雨降る
燒土は音もなく吸ふよ
青葉若き夕風すゞし

○山百合

新潟縣　山田たか

夕暮近く日暮しの
梯形なせる月影に
そゞろ歩みのとぼ〳〵と
ふみ分けたどる道すがら
清き心の百合の花

聲かまびすし大空の
幸なき我れをうつしつゝ
露の宿なす草むらを
青葉の下にゆかし香の
げにぞ女神の姿よな

○亂れ髪

大阪市　沖野英子

三尺髪ははらりはら
瑠璃の瞳の架はしく
小さき胸に秘めにたる、
彼の君故に紅さして
出雲の神よかひはなく
夕べ朱塗の欄干に
血潮ともゆる紅の
あゝたへがたの物思ひ
又も涙にむせぶかな。

亂るゝまゝに亂れ髪
清く涼しく玉のごと
あゝ此の思ひ誰か知る
白粉厚く粧へど
なぞ姿が戀のかなはざる
窶れがちなる身をよせて
楓の露をながめては
しんきくさやと袖かんで

○小さきあくび

田中文子

今年二つの兄の子が、
母の笑に興じつゝ、
そと手枕の添伏しや
何夢見てかかすかなる
あゝ愛らしと接吻けば、
あはれ眠をさまさじと、
彼方に一つ寢返りて、
さめて小さきあくびする、
おかし小さきあくびかな。

まろれの夢の側に
此子に母の嬉姉まれて
可愛の寢顔見つむれば
ほゝ笑面に浮ばする
身ゆるぎ一つ横にする
脊を打たゝく甲斐もなく
遂に眠をさましけり
手をさし延し大人らしく

○白　蝶

物さびれゆく夕ぐれの
沈默は吾に迫り來ぬ
何に驚きし白蝶の
あゝなつかしき其姿
思優しき女の君が
黃泉の愁に堪へかれて
しばしを常に歸らんと
ましろき蝶に身をかりて
浮べる魂かなよ〳〵と
まふにやさしき其姿
思は同じ吾なれば
身に染みわたる寂寞や
弔ふ心にふと見やれば
再び蝶はめぐり來て
吾佇める足許の
小さき桔梗に羽を垂れぬ……、

○秋

本所　松本　萩雨

凶鳥啼きぬ無憂樹の枝に
風なきに打ち震ひ
ざわ〳〵と散る幸の實
あら奇しや災なかれ。
眞夏の炎うすらぎて
野に立てば萬象は
枯れし野のさゝ川に

福島市　荒井安子

墓場をめぐる暗きかげ
今はた渡る秋風に
羽重たげに舞ひ出ぬ

寂しらの風吹き渡り
あゝ秋の聲寂寥の響。
美姫が化粧の露凝りて

夏の早稲田　姻子



生ひし百合淋しげに

○朝の川

手枕のうたゝれに
おぼろの水かげの橋

褪せにし色を守らばや。
秋の夜風の寂しさを

○弟をやりて

時間ぞと汝を揺りし時

冥府の命使を待ちて居ぬ。

西の宮　つ　ゆ　子

夢心地、きり深き
神秘の霧のもや〳〵に
踏きぬ、遠に人の影
こは世を隔つ天人の
妙の調べの音にのりて
あらはれますと現つなき
まことや生ける天女なりき
長橋またく霧はれて
水音淸しころも川

○秋の夜

伊豫　栗　の　花

一日のつかれ休めんと
胸抱きて伏す小枕の
石にも似たる冷たさや。
靜たんと空に拳して
畫間あがきし跡形の
深くも胸に痛む哉。
弱きは女の性なれば
運命の前に額伏して
寂び悲しむに何の恥。
からび果てたる唇に
僞りの笑み强ゐんより
敗殘の身の薄さむき
甘き淚に慰めばや。

羽前　し　ら　浪

またも別離を思ひけり

「憤然と閉さし瞬眼ふ
暫時の間ぞと見つめてき。
さらば」と行くを手を握りて
殘月細うも懸りけり
門邊に立てば波の上に
夜明の風は冷たくて。
「病むな」「文給へ」唯二言
草鞋の足音さや〱と
歩く後より言ひ添へつ
顧みもせぬ優し子よ。
闇に入る後影見送りて
門の柱に倚りて泣く
歸還らん時を失ひぬ
涙を我は惜まじな。

四谷　八重子

○春の歌

神の使の白衣の
清き心の彼の君に
森の奥にぞ秘されし
笑はし女神森の宮
黃金冠捧げなん
萬代盡きぬ戀の酒
緑の裳裾飄々と
溢れ溢るゝ歡樂の
調べに和し聲につれ
天使數多打ならび
神諧どよめく樂の音
君に幸あれ榮あれと

奈良縣　森本あさ子

○朝と夕

あゝ美しき天地の
朝の光に希望あり
造化をいかに讃へまし
夕の星に啓示あり。
うす紫に綾雲の
露の衣を身にまとひ
くしき萬籟聲となり
光仰ぎて何人も
機引くひまを眺むれば
笑める朝の男神あり
愛をおこし愛を布く
有情の想なからんや
紅笑しき陽炎の
靄の袖をふりあげて
光のをちを見渡せば
若いらつめの女神あり。
やさしき光霞帶びて
こゝなる戀に恨あり
運命をとくか人の篇
こゝなる歌に涙あり。
あゝ微妙なる朝と夕
汝が永劫の韻律に
我世のゆめをさめ出て
かなしきものを入らしめよ。

横濱　清水千秋子

○放ち鳥

五七日の喪も過ぎて、
離方なるとぶらひの時、
線香のけぶり御靈を送る
美くしき花籠とり
二羽の白鳥放ちやりぬ。
見ればいぶかし軒の白鳥
同じ樣せる二羽の白鳥
過ぎし日の鳥なるか
そも亡き人の御魂か

水戸市　島田勝子

○夕陽

遠き彼方に彩雲の、
夏の夕に落る太陽の、
流れてゆるう消ゆるとき
啓示を我れに語る哉
妙なる紅の輝きの
流るゝ雲の峰の上の
燃るが如きその光
羊の毛とも譬ふべき
飾冠にしばし息らふな
そは其時に消えん時
貴しと我れはおもふ哉
やさしく其底に潜りて
子守の歌のうた聲に
彩らんとての業なれば
遊べる稚兒の小さき夢
貴しと我れは想ふ哉
夢みる顔の微笑や
あゝ夕陽の破れたる
祝福に開ける唇は
光の餘象と顏笑なり

三等 ○やみの夜

土佐國吾川弘岡上　深瀬ます子

いつもは佛樣にお燈明をあげ、病氣して居る弟の枕元へ膳箱持ち出し、一所に箸をとりなどして、夕の寂さを、とやかくと紛らすもの丶、今宵ばかりは心に怖しい〳〵塊が出來て居るので、物さへあらば當つて砕けてしまひたい樣な思ひのするのを、じつと怺へて、無理に夕飯を終ふと其まゝ、どう出て來たのか我さへ知らず、淸澄寺の前を通り過ぎ樣とした機、不意に聲を掛けられたのはお寺のお妻君であつた。

「お丶お登利さん、どこへ行くの、橘屋のお初さんのお嫁入だよ、早く行かなきや見られ無いよ。」

といつて急いで走つて行く。

抑此處は房州の淸澄山の上である。昔日蓮上人が行ひ澄した跡といひ、殊には交通の不便な所丈、浮世の塵の懸るのもすくなく、遠く太平洋を見下す美しい山と水に目なれて生ひ立た、こ丶一部落二三十戶に住む人々には、文化の餘光も及ばぬかはり、罪といふ罪もなく、鳥獸を獵る事、木を切る事、炭を燒く事の外には何の職業も持た無い。女は爪木を拾ひ、挽板を脊負ふて、一里半ある天津の町へ日每に賣りに行く。近時農科大學の演習林が開けて、一群の學生や、洋服姿の官人樣が見廻りに來られる樣に成てからは、其所、此所に廣い路も開かれ、二三の宿屋も出來、我名許は書く事の出來る男も出來たが、其前は、千年以前の姿を其儘で、野蠻といはうか、純朴といはうか、自然のまゝに成り來つたのである、かういふ風であるから、ひとりでに、血族結婚といふ惡い風も行はれたのは免かれぬ、それが原因かどうかは知らぬが、僅な部落に癩病がまことに多い。

昔から此所に住て居た、杣の茂八といふのは、早くに妻を失ふたが、二人の子供があるの

て、一家三人格別の不自由もなく暮して居たが、何の罪か、不幸は何時ともなく茂八の身にまつはつて、おぞましくも、いまはしい病の徴候が見へそめた、醫者といつても無い土地故、これをも自然の儘にうちまかせて、死を待つ許であそ。我身はともかく、老先長い二人の子がいとほしいといひ／＼する內、病は次第に重つて遂に朝の露の消ゆる樣に、限ある壽命は盡きてしまつた。不幸はそれのみならず息子の茂太郎といふのが、まだ十三か四の惡戯盛を、またしてもいまはしい父のあとを追て、同じ最後を繰り返さなければならぬ樣の事となつた。世にも哀は姉娘のお登利、あたら娘盛を、父の介抱をして弟の介抱をして、其次は——と思ふと、何時も人知れぬ思に胸は掻き挘られて、夢さへ結ばぬ夜もうち續く、これてはならぬと自、自を叱つて、もとより我身を無いもの、どうならうともかうならうともいゝはと思ひ捨てゝより殊勝にも一日欠かさずお寺參りをして病む人の上を祈つて居るので、心ある人は皆哀な者といひはやして居る。その樣ないぢらしい娘が、どうした事か、今日に限つてお寺へも參らず、父の佛前にお燈明もあげず、終日一口ものもいはずに居るさへあやしいのぞ、夕ぐれふいと家を飛び出したのも不思議。

お登利はお寺のお妻君と別れてより、眞直に晝てさへ薄つ暗い杉の木立を何淋しい事も思はずに通りぬけた、それからはだら／＼と降る坂、兩側には二三軒の荒屋が在る、そこを過ぎて、段々になつた畑に出た、月の無い夜を僅な星の光で降りたつて、其處な土手に身を投げつける樣にうち倒れ、目を閉いて其まゝ身動もせぬ事稍暫時。

「橘屋のお初さんは幸な人だよ　どうして世の中は片一方許日が照て、片一方は闇なのかしら、いつそ暗いのなら世の中殘らず眞暗に成てしまへばいゝのに、思つても口惜しい、私はすつかりあの人に出しぬかれちやつた。父が病氣しない以前は一日欠かさず引板を脊負ふて町へ出たのもあればつかり、自分が町へ這入るたんび、さも待つて居るといふ樣に必あの火鉢の側に座つて居た人、あの時のお正月お寺へ來られて、一所に追羽根突たあの人、俄雨のふり出した時、走り出て來て傘を貸して下すつたあの人、あの人、あの人も餘りだよ、好い樣な顏をして人の心をおもちやにして置て、一年と二年と行かれ無い中に早心が變つて、あのお初づれを貰ふとはあんまり、あんまり私に見せ付け

た仕様だ。口惜しい口惜しい、どうして呉れ様、腹が立つ〳〵、怨めしいと」聞く人もなく見る人もなければ身悶して怨み狂ふ。折から遠く彼方の坂を降りて行く燈火の一列がある、大きい聲を上げて、見に來る人を呼ぶけはひ。

「何て事だ、あのざまは、嫌だ〳〵見度も無い、何故に自分はあんな馬鹿な物の見える所へ來てるのだ、馬鹿らしい〳〵」と土手を立ちはなれて元來た道を引返しお寺の門へ迄は來たが我家へは歸り度無い、我家とは反對の方へ曲つて、兩側に小家の並んで居る坂を降り様とした所が、向の家で何か哀な必死の聲を擧げて臨終の人を呼び起こす様子、少し立ち止つて聞て居ると其聲が山から山へ響いて物凄じく哀てある。お登利は其家へさつさと這入ていつた、庭にも入口にも大分人が立つて、ひそめいて居る。

「誰か病いの?」

「お妻君が急に病いんだよ。」

白挽　若狹　長谷川英尾



お登利は遠慮なくずつと這入て、病人の枕元へいつた、燻つた釣洋燈の下に、三十位の女を仰向にうち倒れて、歯を食ひ縛つて、目を空につけて、はや冷たくなつて居る、時々水を顔に吹きかけては夫と母とが必死の聲で呼んで居る、子供二人は取り縋つてひい〳〵と泣いて居る、見る〳〵病人は顔色が變つて行く、お登利は「ああとても駄目だ」と思つたが人々はいよいよ絶對絶命の聲を擧げて呼び惑ふ。

この様を見て居るお登利の顔には一滴の血の氣もなく、胸の焔もかきけされて、手足は氷の様に冷え切て居るが、人の涙を嘲ふ様に「誰だつて死じまうんだ。」と心でいつて、何か我身に新い友を得た様な、さうでなければ我が憎い物に勝ち得た様な、一種の悦を感じて柱にもたれて立たまゝ、冷かな〳〵微笑さへ唇のほとりに浮んだ。

例に依りて纖細な描寫は斷然頭角を現はしてゐる、癩病部落は少し事隙りたけれど、主人公の女が人世の暗黒面に襲はれて、人の死を見ても冷笑に附して、一種憎い物に勝つた悦びを感じたと云ふ趣向は、なか〳〵凡容の得難い着想である。(選者評)

四等

○兄と妹

京都西陣紋屋町　濱部郭公女

「マー誰かと思つたら兄さんでしたの、端書でも戴けばセメテ、ステイションまでお迎へに參りますのに」とは、今年の櫻咲く頃常家へ嫁入つた咲子が、玄關へ兄の俊雄を迎へた言葉で有る。

「驚いたらう、ナーニ咲さんの御手際を拜見するには、不意に限ると思つての御來臨サ、玄關から上つていゝかい、其れ共御勝手口から……」

「ホヽヽヽ相變らずお口が惡いのね、何卒お玄關から」俊雄は靴を脱ぎ乍ら、

「時に旦那樣は在宅かネ」「イヤな兄さま」と顔を赧くして「今一寸釣に往つてますの、モー歸る頃ですよ」咲子は八疊の風通しよい奥座敷に導いて、着物を脱がしたり水を持つて來たり、かひぐ\しく働くので其を見た俊雄は今迄の咲子と比較べて、變化の烈しいのに内心驚かざるを得ないので有る。俊雄は笑ひ乍ら

「相變らずテニスやポールをやるのかネ」

「ホヽヽヽマー兄さんは呑氣ネ、什麼して所帶を持つと其麼處じや有りませんよ、是でも人の知らない苦勞は有りますわ……」咲子は思ひ出した樣に、

「生家は皆樣お變りは無くつて？」

「あゝ皆壯健だ、只、お母樣が斯麼お轉婆が什麼して所帶を持てるだらうと、始終心配しておいでだよ、然し咲さんが其麼風だと僕も安心サ……女と云ふ者は其麼に變る者かナ――」と獨言を謂つて、熟々と咲子の顔を眺たが、以前の活氣有る風采は失せて、何處とは無しに治まつて、少し頰の邊が落ちた樣に思はれる。咲子は冷した麥茶を進め乍ら「兄さん這麼田舍ですから御馳走は有りませんよ」

「ナーニ御馳走なんか澤山だよ……僕は懷しい咲さんが思はれて休暇早々かうして逢ひに來たのだ」言葉は向出しだが、咲子は此の言葉を聞いた時程嬉しかつた事は今迄に無かつた、咲子の小さき胸には、里の父や母や兄弟の事などが浮んで來て、懷しさ戀しさがムラムラと湧いて來て、思はずホロリとするので有る。

「でもマー能く被入たのネ……」と熟々胸裡の中で感謝をしたのである。俊雄は思ひ出した樣に、

「オツ忘れて居た咲さんにお土産が有るんだ、何だかあてゝ御覧」とカバンから風呂敷包を出して「上のは僕て下のはお母樣のだ、お母さんの手紙も入つてる積

だ」「マー左樣ですの」咲子は嬉し泪か？彼女の凉しい眼には露が宿つて居る。

「アッまだ咲さんの好きな蓬萊豆が有つたつケ、此奴隨分僕を困らせた奴サ、ハヽヽヽ」

「信實に其麼に澤山…………濟みませんのね」

「ナーニ咲さんの好きな物だと思や其麼でも無かつたソーだ是て能く咲さんと喧嘩したつけナ、彼の赤いリボンをくつ附けたお下髮の咲さんがチヤンと大きな丸髷に結つて澄した奧樣に成つてるとは夢の樣だナ」と俊雄は今更の樣に謂つた。

「兄さん妾も信實に自分乍ら這麼片田舍にネ…………」咲子は何かに非常く感じた樣に兄の膝にソッと手を置き「兄さん…………昔が戀しいわネ…………」

「お前一人ては無い…………」

「ホヽヽ兄さん御免なさいよ、つまらない事謂つてお腹がすいたてせう、妾一寸失禮してよ、其處に雜誌が有りますから其れても御覽なさいな、今に何も歸るてしやうから」「何つて何の事たい」「ホヽヽ御存知の癖に知りませんわ」咲子が立去つた後は、只蟬の啼く聲が聞える外に、時々咲子が女中を指揮する聲と、茶碗の音が聞える許て有る。

氣さくな兄妹の、底に悲みを持つてゐるらしく書かうと云ふのであらう、兎に角輕快に出來上つた、悲みの方も此れ位なら凡ての女にあるらしい、嫁入つて昔戀しいと言はぬ女はなからう、人生通有の悲哀嫋なくもほのめかされたのである。（選者評）

五等 ○琴の音

神田區表神保町十番地　三浦秋野

上

先刻一時を打つたに、未だ目は冴へ〳〵として居て如何しても寢られぬ、乳母の家へ來てから、七日に成るが斯んな事は一度もない、終ひには肝癪が起つて來て搔卷を跳ねのけて起き、忍びやかに戶口を開けて庭へ出た、と見る月は皎々として、若葉の上に宿つた露を樣々に彩色つて居る。

「まあ良い月」と見惚れて居ると、幽かに聞ゆる琴音。

「此の夜更に、田舍ではかまはないかしら」と獨語を言ひながら、音の方へ足を運んで行くと、妾の一番好きな那須野、知らず〳〵自分も琴に連れて小聲に歌ひながら枝折戶の外へ出樣とするとたん。

「孃樣」と乳母の頓狂の聲がして、ばた〳〵と馳け寄つて妾の袂を、ぐつと攫んで。

「何處へ行らつしやるのです此の夜更に」其の聲は慄

へて、見れば素足で居る。

「乳母、如何したの」何にとは知らず可怖さに身を慄はして問ふた。

「乳母は、如何もしませんが孃樣何處へ行らつしやるのです、此の夜更に——」

嗚呼、其れ故に乳母が斯くまで、慌てゝ居るのかと思ふと、氣の毒と、嬉しさに、其の手を握つて、

「乳母耐忍して頂戴、心配をさせて、妾何處へも行きはしないわ、如何したのか少とも寢られないので、一寸庭へ出たら琴の音がするのでつい外へ出樣かと思つたのよ」

「あら、左樣で御ざいますか、私は又た如何かなすつたのかと、存じましたので」と安心の呼吸を吐く。

月は冴えに冴えて、琴の音は一しほゆかしく聞へる。

「上手ね——」

「孃樣、彼れ氣狂で御ざいますよ」

「えつ？氣狂ひ彼の彈いてる方が、譃そ、あんなに正と彈いて居らつしやるわ」

「然うてす、琴だけは滿足に彈くのです、實際に御可愛想な御子で御ざいますの、まあ冷えると良けませんから家へ居らつしやいませ、明朝彼の方の御病氣の原因を御話し申しますから」と早先へ行くので、戀しい琴の音を聞きすてゝ家へ入つた。

下

「あれ、彼の御方で御ざいますよ」と乳母が指ざす方を見れば、物思はしげに行く後姿、黑い髮の毛を無造作な束髮に結び、長い袖を風に靡かせた風又なく艶に見へる。

嗚呼何んたる薄命な方だらうと、其の姿の杉林の影に見へなくなるまで見送つた。

今朝の乳母の話に依ると、彼の人は、千枝子と云つて村でも聞へた豪家の一人娘で、女藝一般に渡つて殊に琴を良くすると、其の未來の夫と定まつた、山口由太郎と云ふのが、大學卒業すると同時に、或る華族へ婿入して仕まつた、其れを聞いた千枝子は、夜となく晝となく泣き悲しんで、遂に男子さへ見れば殘酷い人と總つて泣く樣になつた、でも琴だけは滿足に彈く月の夜には夜の明ける迄彈じると、其れも由太郎が月の夜に妙なる琴音を聞く心地良さと、云つた一言を思ひ出しての事である。

如何にも憎いは其の男子で在る、身高等の學を修めながら爵位や金に憧憬れて、神の如な處女を奈落の底へ

蹴落したのである、若し妾も其んな運命になりは仕せいかと思ひは、自分の上に來て穴にても入つた如な心持がして來た、ふと見ると、乳母も何を案じてか伏目になつて妾の大切な指環を瞶めて居る。

お鐵樣の性格は能く表はれてゐる、初め琴の音に連れて、うつかり庭を出やうとする處、乳母に感謝する處、狂女に同情する處、自分の身の上に思及ぼして、乳母が指環を瞶めて居るのを氣にする處皆此お鐵樣を表はして居る、深くもないが心地の好い作である。（選者評）

秀逸

○奉公

和歌山縣　前田かほり子

今迄村一ばんの美しい家であつたのが、がら〳〵と取壊されて、池の緋鯉が可愛相に、水が濁つて死んで了つた。父は毎朝の牛乳も毎晩のお酒も止めて了つて、お美代は琴の稽古を止させられた。いつもは良い御父樣であつたのが此頃は怖い顔して計り、何故だらうと密に小さい胸を痛めても夢の樣なる零落の、未だ貧てふものを解き得ぬ少女。待ちに待ちし桃の節句の、雛樣は如何したの？、あの着物は如何して！。と泣いて母を苦しめたのも無理はない、お美代は未だ十二である。

五十路を過ぎた父は更に世の荒浪に投じ去つた。母は病床に伏して居る「ね、何卒聞分けて堪忍して行つてお呉れ、せめてお母樣でも此樣でなければ……」と涙ながらに頼む母、蝶よ花よ、風にもあてじと育てた此子を、あらう事か、他人の竈に仕へさすとは！げに胸もさけ血を吐く計りのおもひよ。

『あゝ行くわ、妾は御母樣行きますわ、心配しないで、お母樣、早くよくなつてよ』

いとしき子や、母はひしと抱いて『堪忍して下さい、ほんとに母甲斐もない！美、美代さんお前はほんとに不、不運だよ』はふり落つる熱い涙を、其襟に雨と濺ぐのである。

泣き崩折るゝ母を病床に殘して小さい包を小脇に、叔父に連れられて出る家の門、冷たい風に顧みて、夕の空にお庭の松を仰いては袂を顔に、破れた塀にひたと身をすりつけて忍び音に泣くのである。



編物　備後　今西初子

行くのは學校友達のお浪さんの家、妾はお浪さんとこに奉行するのを思へば只、情なく口惜しいけれど、彼の小母樣は良い方、妾を可愛がつて、人形買ふて下さつたり、髮を結つて下さつたりした、よい小母樣だから宜いと其れを切めてもの心あてに、嗚！小さい胸の中よ。

門を這入ると、例の樣に驅けきて『まあ、美代さんが來て嬉しい、さあ美代さん一所に遊ばうよ』と何も知らないで手を取るお浪さん、胸が一ぱいになつて口がきけない『お美代は今日はお仕事に來たのですから』と叔父か云つたので、お浪さんが不思議さうな顏して『嘘だわ、嘘よ、さあ遊びましやうてば!!』。

お美代は、わつと泣きたかつたのである。

『小母樣、どうぞ宜しくお賴み申します』と敷居ごしに手をつかへた時、吾知らぬ、熱い涙が、つひはらはらと疊にちつた。

嗚、お浪さんの羨ましいことよ、お父樣やお母樣のお傍で面白さうに笑ひながら――、あゝ、お浪さんに成りたいと、勝手の隅の暗い灯影に、涙を啜る粗末な御飯のさらへも喉へは通るまいに、妾は胸か痛いとて三度に一度は箸も取らず。

嗚、妾もお母樣が御丈夫ならば、お父さんが御いでならば、家は昔の通りであるならば――と暖かき愛に包まるゝお浪を、いかに羨しく思ふた乎。

『何時迄、お前は此樣に小兒でせう、お美代さんを御覽な！』と仰有つても、小母樣々々と袖に甘へるお浪さんは矢張り大事になさる。嗚、羨ましい、お浪さんの御母樣はよい御母樣だけれど、妾しにはもうしぶい顏ばかりして、もつとよい御小母樣だと思つて居たのに――。

呼び交して袖並べて仲よく遊んだものを、お浪さんももう友達でない、此間遊びに來たお花さんの意地の惡さ。『あら美代さんは、お浪さん所に奉公してるの』と痛く嘲られし口惜しさ、其夜は夜もすがら泣き明せしが、思へばさうよ、妾は奉公人、お浪さんも矢張主人なれば、叱られても仕方がない筈、お花さんにあんな事云はれても――嗚、悔しかつても仕方が無いの乎、昨日が夢か、今日は現乎、可愛やお美代、朝な夕なの物かげに人知れず絞る袂。

奉公する娘心のつらさを想ひ遣りて、斯うもあらうかと書いたらしく、つとめて說明しやうとして、却つて眞を失ひかけた嫌ひもあるが、まだ多くの小說などに讀み耽らない讀者には此方が能く分つてかあいさうなと云ふ感じを起させるであらう(選者評)

○獨立

上

大分縣　やま川

千金丹賣りが眠げな聲に、本家ェーはと唄うて表道路を通つた後は人の子一人通らず、日光獨り天地に充ち黄粉の樣な埃がポッと立つて製糸窓に溫い一種心地の惡い風を送つた。

眼付の凄い巡視の通る間は默つて咳一つする者もなかつたが、通り過ると、八十餘人の工女が言合せたかの如く、目と目で頷き合ふ鼻先で笑ふ、紺絣が隣の浴衣の袖を一寸引いて、「何だ髯があると思ふて威張腐つて、髯位が怖いかい、髯が怖い樣じや鰌や鯰は食べらりやしないわ、」一同大笑に唄聲交はつて耳も聾せんばかりの枠の響！。時は正に午後二時肩の横でガラ〳〵と廻る枠は白銀の如く蒸氣の上る鍋の中に跳る繭を繊い櫻色した手が操る面白さ、自分は始めて入社してから今日で一週間、初の中は呆として繰る手も不器用であつたが馴るれば安く糸繰唄も面白くなつたのであるが、それでも精々五升、一升四錢にせよ二十錢、是で一家弟・と二人、是より生活してゆかぬのである。隣の人が稀々話をしかけてもさなりさならずとのみ他所々々しき返答のみして一生懸命に勵む、汗は額より流れて目に口に流れこむ、一寸舐めてみると鹽辛い初めて世の味は辛いものと知つた。「一寸森本さん事務所から」と小使の呼びに來たので糸口を起て〻居た自分は手籠に掬ふて臺の上に置き後について行つたが、八十餘人の眼は不審でも語るが如く皆自分に注がれたので、何だか薄氣味惡く胸の波さへ高く湧く。

「時に森本樣御呼び申したは外では有りませんが」と有馬社長は美髯を捻つて「貴方の腕は僅の間に上りましたが然し今少し注意して被下らぬと粗製が出來ては困りますから少しの事の樣ではありますが何分高價の品ですから」と節だらけの糸をテイブルに乘せて見せた、よく見ると如何にも自分のに相違ないので只々恐入つて「ハア誠に濟みません」耳迄火のやうになつて頭ばかり下げるのである。思へば自分は少し慣れるに從うて少しても澤山に上げやうと思ふばかりに、何時となく横着氣が出て不知々々の間に粗製したとに始めて氣がついたのである。「もうよろしい只是から少し注意して被下ればよいですから」と寛仁大度の詞に「有難う厶ります」と何度も頭を下げた。

下

麥藁帽子を阿彌陀にそらした二人の子供、もち竿を持つた二ッ程年の上なのは有馬社長の末子養彦で、手に法師蟬を握つた小さい方は森本光子の弟で義郎である。もち竿を持た養彦は製絲場の窓邊の桐に鳴いてる蟬にぬき足さし足て近より、一寸さすと不意を打たれた蟬は驚いて逃げんとしてもち竿にからまりキチ〳〵と鳴く、速くも手繰りおろして喜色滿面、「旨いチヱ」「眞に旨いチヱ又捕つた」と口を合せ「僕にも半分吳れ給へ」「やるとも皆やる」「眞に」「こちらに來給へ僕が兄樣に虫かご貰つて入れてやる」と二人は駈け出した光子は此有樣を窓より眺めて居たが僅かに微笑んだのみ、さつき社長から注意されてから以來、何だか憂く、未だ他人から注意と言ふを受けたとのなかつた身は、非常な罪でも犯した如く思はれて心地惡くて堪らない。

日はいつとなく黃昏れて皆仕事を終へて思ひ〳〵に歸途につくので、自分もそこ〳〵にやめて門を出やうとするときふと出會したのは前程養彦が兄樣と言ふた一彥てある。昨日も弟に菓子を吳れたのは此人てあるかと禮を言はうと思ふたが後から數多の工女が來るので素知らぬふりにすりちがうたのてある。生れて十九年若い男に話をしたとのない自分は何となく羞しい故。ホッと息をついたは我家の門口、昨日に變る見る影もない哀れな姿、是が我家の門口かと思へば他所の人目も恥かしく若や一彥に見られてはといそいて入ると「姉樣」と弟は袖に縋つて懷しそう。今年十三になる弟が自分の言とをよく聞いて綺麗に掃除をしてある「お前よくお掃除おしだチヱ」と口では輕く言ふたもの、心の中は千萬無量、昨日迄は一人息子として我儘一杯に育つて來たに兩親が此世を去つた後は此姉を親とも賴んで朝夕の掃除をし少しても自分の皈りが遲れると淋しがつていつも門口に立つのてある。「眞に姉樣淋しいなア」晝は數多の友達と戲れるので忘る弟が夜になるといつも言ふのてある。吁母逝きて五年、父逝きて二月、昔の姿は曉の夢で賴母しき親族とてもなき身は弟と倶に此破家の侘住居、年頃ではあり嫁入りして弟は小僧奉公にやつてはと親切に勸めてくれた人のないてはないが、何とて可愛い弟を小僧奉公にやれるものか倶に家を興すと堅く決心して、弟の成人する迄はと自分は製絲工女となつて爰に細き烟を上てゆくのてある。「あのチヱ姉樣、今日養彦樣の兄樣が虫かご吳れたよほんとに好い兄樣だ」それは有難

かつたチエ「あゝそしてチエ姉樣、姉樣テバー、姉樣はいくつになるかつて問ふたよ」自分はハッと頬を赤めたがさり氣なく「義郎さんもうお寢よチエ、又朝早く起きねばならぬから」と抱いて寢た。童のと弟の話色々と胸に湧くのであるが、只一意自分は弟の成長する迄はと尚も心を締めたのである。枕元の佛前の灯は何か無言の啓示でもするが如く輝いて居たのも、軈て消ゆると風の音まで冴えて淋しさ一入増してくる。吁淋しい。

女工生活のありさまも或る點までは面白く描かれ、理性があつて、而かも感情の鈍からぬ女性も相應に出來てある、餘づかひに少しむだがあるやうに思ふ、今少し引締めて見ると一層好い作になつたであらう（選者評）

○彼女の夫

三重縣　なでしこ

上

私は今日此名古屋の實家に少し用事が御座いまして參りましたのですが、思ひの外早く濟みましたから、同窓の友で中の好かつた今はもう御嫁入遊ばしていらつしやる、文子さんの御家を訪れました。母から聞きました通りの本町の角に、格子造りの家に濱木良彦と新らしい標札が掛けてあるので、間ちがひなしと格子戸を明けて「御免なさい」と云ふと、奥の方から小走りに人の來る氣配がして、途端に「オヤ芳子さん!!」赤い襷をはずしながら「マア、お珍らしい事ね、サアむさい所ですがどうか御上り下さいな」それではと云つて奥の御座敷へ招じられ、先づ一別以來の御挨拶を始めに、御實家の安否の御挨拶など濟すと、御茶に御菓子、[illegible]さては果物など出して丁寧にもてなして下さる。それから昔のまゝの快活な調子で、舊友の事や家政の事など色々話して下さるので、時間の過ぎるのも知らずに遊ばして頂いてると、次の室に人の足音がするので、「アレッ旦那樣じや御座いませんか」尋ねると「ハアそうなんですよ、今社から歸つたのでせう、丁度ですからじや御紹介しませうね、一寸御免なさい」立つて次の室へいらつしたら、間もなくお二人て、ニコ〳〵笑ひながら入つていらつしやいました。私はから御見上げ申すと何

口繪　栃木縣　俗山畫子



だか覺えのある御顔です、けれども少とも思ひ出せない、すると突然「僕は濱木ですがあなたが大槻さんで……」「これはどうも申後れまして貴君が……」「どうか宜しく……」「どうか御心易く……」顏を上げると文子さんは相變らずニコ／＼しながら「此通りの粗略なんですよホヽヽヽヽ」「こりや恐入るどうも御客樣の前てまて、さう耻をさらけ出して貰つちや困るナ、アハツハヽヽヽ」そして私の方を向いて「ほんとによくいらして下すつた」云つてあたり見廻しながら「どうだ文さん僕が暫くこちらの御代りを務めるから御手料理でもして出さないかね」「ねエ大槻さんこれじやどうも珍客に對する……アハヽヽヽ」私は此間も絶えず記憶をよび起さうと務めて居るが、どうしても思ひ出せない。實にお二人共快活な私等には一日も眞似の出來ない、いゝ方である、今少しゆつくりとの御奬めてしたけれども歸宅が後れるので、殘念ながら又の日を約して、其日は文子さんに停車塲まて送つて頂いて歸つたのてあつた。

下

それから汽車の中て一心に考へましたら、漸く思ひ出す事が出來ました。見覺えがあつた筈です、丁度今から十二年前私の家が神戸に居ました頃、二三軒隣あつて住つて居たので御座います、其時私は七つてしたが濱木樣は十二三てしたらう、幼な心にさう思つて居ました、遊び友達でもなし、幼少の時分から内氣の私はいつも家にばかり引こんて居ましたので、むかう樣じや少とも御覺えがないのてせう、それに私も今は叔母の家へ養女になつて、大槻と姓が變つて居るのですからなほの事です。私はかう思ひ出して見ると矢も楯もたまらず、家へ着くや否や、御禮狀の下へ此事を書いて上げましたら、其御返事に「アヽさうでしたか良人じや少とも覺えて居ないのださうですよ、それでも不思議じやありませんか、私共とあなたとは、如何しても離るべからざる緣の糸で結び着けられて居るんでせう、どうか今後は一層親しく御交際下さい」との事てした。そして終りに、濱木さんの御家が神戸にいらした頃、御父樣が判事をして御いでゝしたが、止して郷里の豊橋で或る銀行の頭取をしていらした事、今は年を老られたからそれも止して、良彥樣の御兄樣が、當名古屋の銀行の重役を勤めていらつしやるので、二三年此方當地に御いでになると云ふ事などが認めてありました。

ありさうな事で、是に深い因縁をつけなかつたのが、却つて自然でよい、下手に因縁をつけて、小説らしくしやうとしたら、此小説は失敗であつた。(選者評)

○笑ひ聲

千葉縣　東條桂子

青葉若葉枝さし交して、日蔭も洩れぬ木の下風の涼しさ、本持つた手の次第次第に緩んで、讀み行く文字のいつか朧ろげに成り行く、藤椅子の上に暫し恍然と夢の世に憧憬るゝ時、椅子はゆらゆらと動くと、突然ほ、ほ、ほ、ほと若々しい笑ひ聲、はつとして目を開くと片頰に笑を浮べた兄樣のお顏、美しい笑ひ聲は其の後に立つた美江樣から「あらつ」と覺えず莞爾して「餘り涼しいもんですから」「折角宜い心持の處をすみませんでしたわねえ」と美江樣は飽く迄も美しい笑を見せて「兄樣がお起しなさるんですもの」とそつと兄樣のお顏を、秋草の模樣大きやかに染め出した浴衣地の肩付すらりとして、緋綸子の丸帶が四方の色にぱつと映えた。美江樣、美しい美江樣はやがて我家の人となられるのだ、兄樣のお嫁樣に、あゝ私は此の美しい方をやがては姉樣とお呼び申す事が出來るのである、嬉しいと思つて見ると、兄樣も樂しそうなお顏、美江樣も樂しそうなお顏、瞶つめる私も嬉しさの思ひ堪へ切れず何時か笑が頰に上る、「何を笑つていらつしやるの」と美江樣ご自分も笑を浮べながら「ほ、ほ、ほ」「あら何が其樣にお可しいんですのほ、ほ、ほ」「貴女だつてお笑になるぢやありませんかほ、ほ」「あらだつてほ、ほ、ほ」「おやおや何がおかしいんだかさつぱり不解ないはつは、は、は」果は兄樣迄が大笑ひ、あゝ是から私の家は毎日毎日此の笑ひ聲が絶えぬ事だろうと思ふと、更に嬉しさの想ひがひしと胸に迫つた。折から被ひ覆さつた樫の木の梢で尾長鳥が騷々しく鳴き立てた「おゝうるさい聲」と美江樣、仰向いてじつと梢の鳥の姿を見る、「聲の割には可愛い鳥さ」と兄樣も上の方を、さつと吹いて來た涼風に、膝の上の本の幾ページが、ばさばさとあふられる「何の御本ですの」と、つと取り上げなさる其手の藥指にきらりと光つた指環、一昨日兄樣が歸省なすつた折、二人につて篏めて下さつたのが其れ、兄樣は世の何者よりも美江樣を愛しなさる、東京の學校にいらつしやる時、月に三四度は必然美江樣の許へ手紙を寄越しなさるが、其の都度僕が目出度く卒業する迄、淋しくもあろうが待つて居て呉れつて、それはそれはこまやかなお文、かくてお二人の御仲は益美しい愛の泉が漲ぎつて行くのだ、あゝ兄樣の御卒

葉も早や來年の花咲く春と近寄つた、美しい美江樣、嬉はしい美江樣、やがて我家の人と成られるのだ、彼の艶々とした島田髷を緋の手柄初々しい丸髷に結び替へて、彼の若楓の茂り重なつた丸窓の下に、御仕事なさるお姿を早く早く見たいものだ。兄樣は夏草茂き木の下道を、何やら詩らしいものを口ずさみながら、彼方此方とぶらりぶらり、見掛けた本を膝の上に指環の光る眞白な兩手で押さへたまゝ、何ともなしに讀み耽つて居るのが美江樣、而して私は樂しそうな此のお二人の樣子を嬉しく眺めながら今繰り返した事を亦心の中で。

事がらも平和、文字も穩藉、餘り刺戟されない小說である、めでたし〳〵風のものとして、歡迎す。（選者評）

○夏菊の花

岩代　つぼ菫

實家の兩親も貰へと云ふ、養家の養母も貰へと云ふ、然し私は氣が進まぬ、何となく可厭、斷らうかしら、

「ねい兄樣、什麼したものでせう」手に觸つたから、ぐいと力をいれると根越拔けた夏菊の花。

「着いて、くつろぎもせぬうちから、兄樣、庭園へ御入御相談があるから、なんて大した相談かと思つたら其件かい、琴さん、那麼事いま更相談などせずと、ちやんと規定つてるぢやないか、親の云ふ通り直に貰ふ許りさ、これが琴さんの守る婦德と云ふものだ」兄は自分の見地から無骨に云つたのみだ。

「だつて〳〵」「何がだつてなの、それは琴さんの我儘と云ふものだ……何かい、お聟樣が可厭なの」

弱り掛つた太陽に灰色雲が懸り、噴水の飛沫が顏にかかる「ハーモニカが吹きたくて可厭なのだらう」琴子はホヽと笑つた。

「暑中休暇で歸省つた夜、御飯を頂く時、阿母樣が嬉しそうな顏で「琴子にも愈々お聟樣が定まつたから、喜んでお呉れ」といつたから「そうですか、そりやあよう御座いました」と云つたが、阿母樣は琴さんが承諾したものと、思つて在らつしやる。それを不承知だなど知つたなら白い御髮を猶々白くなさるだらう、兼姉樣では心配し、琴さんでまた心配する、あゝ御母樣も苦勞が絕えんなア」愚痴のような、獨り言のような琴子に聞かせるような口振である。

黃色い菊の舌狀花は、御影石の飛び石から、片足拔いだベンチの前の兄樣の下駄の上、さては少し距れた、泉水の中迄も浮いて、獅子頭は、ぱくりと口へ入れて

又吐た。琴子の光る手には、夏菊の坊主が殘つて居る。「ほんに實母樣、御心配が絶えないのね」と、うるみ聲。

みん〳〵蟬の聲は、かな〳〵蟬の聲と變つた。若い優しい、楓が綺麗に亡養父の碑を取り廻いて居る所から、三間位で松に百合が混つて咲いて居る。合歡木の後ろの淺い雜木林の梢を通つて、夕日は先の楓を紅葉に見せる、そして亦泉水一杯に開げて、其餘を遙か母屋の白壁へも引いた。

「うるさい蚊だな」と兄は片あぐらの足を下駄へおろして、琴子が島田の影法師の五倍もある影法師を地に映して立ちあがつた。琴子の影の少いのは、しやがんで居たからてある。何か考へて居る。

「さあ歸らう、琴さん大好きな御土産持つて來たつけ」

「お友達が笑ひはしまいか」「馬鹿な、お土産貰つたつてお友達が笑ふかい」「エ、お土産が什麼したの」と始めて我に戻つたようだ「琴さん什麼かしやしないか逆上たんてないか」「エ、兄さまこそ、私什麼もしやしないわ……ホヽホ可笑しい私別な事、考へて居たんだわ、ホヽホ可笑しい」

琴さんと兄樣とを呼ぶ聲がして五十位の品のよい、琴子の養母、兄樣の叔母が現はれた。

「琴やが常になく高笑するので、例のヒステリーでも起しやすまいかと心配して來たよ。お前あんまり、心配おしてない、厭なら可厭でよいのだからね、病氣にでもなると、お母さんが困つて仕舞ふから」我實子が有つても、二歳の時から手鹽にかけた琴子が可愛いてあらう。

「なにね、今可笑い事があつたのて……お叔母樣お聞かせしませうか」「可笑しい事、聞かせて頂戴」

下女が湯の沸いたのを報じた。

「お叔母樣、琴さんがお聟さんの名、なんと云ふのです」「オヤ、お前未だ知らないの、好く生れた人だねい自分の義弟になる人の名こ知らないなんて」琴さんは

萬歲　常陸　豐島航子



眞赤な顔をして居る、聴診器で脈を數へたなら二百も打つだらう。

「敎へませうね、覺えてお出て、西江芳郎と云ふ工學士」「エ、西江？去年大學を出た」「お前知つてるの甚麼仁？」此答を俟つのは叔母のみであるまい。

「そんなによくは知つてないが、大學創始以來屈指の天才て、敎授連に舌を捲かした。上野の麒麟の兄弟だらうと云ふ評判だ、容色かね、好々男子の親玉だ」「お親玉かね」と叔母は笑つた、友禪の袂をくはえてまばゆい顔して見上げた琴子の目の中には意中の意中が見え透いた。風鈴の音がした。

「什麼した、貰うんだらう」「ハイ」と返事して「エ」と叔母樣に問ひ返されて赧い顔を一層赧くした。「お前家へ歸つたら、義姉さんと兄さんに宜しく」と叔母はうれしさう。

調子が輕く出來て居るだけて、取り立てゝ言ふ程の事もない、あり來りの娘心、先づ無難に描かれた。（選者評）

○義姉

秋田市　小笹千代

一

小廣なる庭に些やかなる垣根の朝顔咲き出てし花六ツ七ツ「美麗だこと」椽側に立ちし婦人は、そとおりて庭下駄を穿き、中形の浴衣に紅淡色メレンスの帶ゆるく巻きつけ、ぼんやり垣根に片袖をのせて眺むる樣、如何にも艶に見える「來てから八日目だのにお義姉樣と云ふ方はまだお歸りなさらないが、あゝどんな方かしら」獨り斯うつぶやいて深い思ひに沈むのであつたが、其肩にそと手をおく人があるので、びつくりふり返へると夫の一雄であつた「びつくりしましたわ」「アハ、さつきから、此處に居たが露と呼ぶのも興がないから驚かしてやつたのさ」露と呼ばれしは工學士香川一雄の新妻である、一雄は戀人を得たのである、去年の夏休みにしばし伯父の家に休すみし時、はからずも隣家の露子、か弱き身もて糸紡ぐ會社の務め、其日暮しの父子に同情のあまり、或る日一雄自ら露子を妻にと、露子の父に望んだ、身分の差もあれば行末が氣づかはれると云ふて、中々承知しなかつたが、再三の所望に露子はうれしい思一ぱいに一雄の妻と約されたが、來年の卒業まで内縁の妻となり、此銚子なる露が父にあづけ置くと約し、愈々本月銚子なる家よりつれて此東京に來たのである、露子の來て八日目であるが之ぞと云ふむつかしき姑もなし、水いらず夫妻だけと思ふたが、昨夜夫の話しに獨身者の姉があると云ふの

て、大に驚いた、且氣づかふた、姉と云ふのは結婚式にも列席しないのみか、未だ一度も家に歸つて來ない
「ねえあなたお姉様はどうなすつたんてしよう」「姉さん？あ今日多分歸るだらう、中々理究て困るよ」「私の様なふつゝか者てもお氣に召すかしら、心配てすわ、高等師範とか御卒業てしたね」「いや英學校さ」「そんなおえらい方？私の様な女工あがりを妹として下さるでしようか」早なみだぐんて蓮の葉をすべる露の玉の様にするりと袖に散つた「又取越苦勞をしてるね」折しも女中の國が「ご飯が出來ました」

二

「工女でも良ぢやありませんか、藝者や女郎ぢやなし人は其品性に依るてすよ、僕は飾りたてた庭の牡丹より露をふくんだやさしい野にさいてる小さい名もない花がすきてす」一雄は忌々しげに、吸さしのシガーを灰入に埋めた、ぢつとして聞てる姉はどこか冷笑を含んだ目付、さも高慢さうな顔の、どこやら氣障な年の頃二十四五の、實は三十歳とやら獨身者のせいか餘程若く見える。
「だから女工の露子様は例外です、だから私どもの批評申す所てありません」「アハヽ姉さん露子様とはなんてす、僕の妻は即ちあなたの妹てしよう、其妹に缺點があつたら僕が注意しますから仰つて戴きたいてす」
「一雄それては飽くまてお前の妻私の妹にしようと云ふの？」「無論てす」「人を馬鹿にして私は斷然工女あがりの妹は持ちません、露の姉にはなりません、第一亡き父様や母様にすまないからね」「ては……ては露を離縁せよと」「まあそうてすねしばらく」「姉さん！」と鋭く呼んだ、一雄の目は恐しい程光つた、又言をつゞけて「僕は子供ぢやありませんよ、そんなに關渉しなくたつて……」「いゝえそれはいけないよ」ときつと頭をふつた障子の陰に忍び泣きの聲がもれたが、やがて裳ずれの足音やさしく湯上りの露子は「只今」「お湯に？」「ハイ」とかすかに答へた、後の障子に三人の影が思ひ思ひにうつゝてゐる。

三

「悲しき思ひを胸に秘してぬば玉の暗にまぎれ、おそば離れしよりおんあたり戀しくしたわしく涙に日を送り居り候」とまでかすかなる聲て讀んだ一雄はあとは默讀し終つて愁然とうなだれた。

* * * * * *

露子は又も銚子なる父のもとにあつて、其村の紡績會

社に通ふのである。

見つけ處は面白い、伸ばせば好い作になつたらう、一雄の弱さ、姉の強さ、はがゆく面憎く、讀者を煩悶させる、終りの手紙もあつてよし、只全體の文章に締りの無いのが疵。（選者評）

○母思ひ

信濃　世良田　ゆう子

今日もまた疲勞た足を勵まして、二里の山へ薪取りに行きし少女・・・・。

日は暮れかゝつて小田の蛙の鳴き聲が一層高く聞ゆる三ケ月は鎮守の森にかゝつて、あちらこちらの農家から燈火洩れ、風呂の水よぶ聲もする、涼風は田圃道を急ぐ少女の汗にじんだ薪負ふ脊中をふく。

「お母樣只今」どつかとばかり薪をおろした、家の中は薄暗くて燈火がつかない「おゝお芳か大變今日はおそかつたね、どうかしやしないかと母樣案じて居たよ」と出向へる母はいたく窶れて昔の俤は今いづこ：

・・・・・・・・

「えゝ今日は薪が無くて此方彼方さがしましたものですから」「おゝそうかい、さぞ疲勞たてあろふ、早くお休よ」「お前にこんな荒業させようとは」聲はまう曇て居る「またお母樣そんな事云ひこなしてすわ、まあご覽なさいこの花美いてしやう」と今取つて來た山百合の白きを一寸かいて母の手に渡した、母は淚を見せまいと顏をそらした「それあのお父樣のお佛壇へあげませうと歸りに取つて來ましたの」「おゝほんとに美いだ事ねお父樣もさぞお嬉びになるだろうよ」「お父樣は山百合が大變お好てしたわね」「あの私一寸足を洗つて來ます」といそ〳〵として前の小川へ急ぐ後姿、年はようやく十四の花の蕾、リボンよ帶よとねだる年頃を洗い晒した單衣に色さめた更紗の帶「さお食りよお腹が空いただろうに」「いゝえ私一寸も空きやしませんわ」「さあ母樣も召し上れな」「私そんなに食べたくないからお前早くお食りな」「だつてお食りなさいなお母樣」「それじやあ私もいつしよに」けれどもお母樣は一膳ぎりしかお食りなさらない、もしやお惡いところでもないのかしらと、少女は母をきづかふのである「お母樣お肩もみませう」「お前疲勞てゐるだろうから早くお休みよ」「いゝえ私一寸も」とはや後にまはるのである「お芳や年もゆかないお前にこんなに苦勞させるのも、兄樣があんな放蕩するばかりにさ、今頃は何處に何してゐるのか、この私共の境遇を何と思つてゐるのであろう、私もうあんな者子とは思はないよ」「いえ母樣今に兄樣改心して歸つていらしやいますよ、きつと

神様だつて佛様だつて兄様のお心の改心るように助けて下さいますわ」母様は泣いていらつしやるご様子、「さあ母様お休遊ばせな」「有難ふ、さつぱりしたよ、お前もお休み」「はい私お後から」「さあ母様これへ」と取り出す煎餅蒲團、まあこれに母様をと思へば實に悲しい、それにつるべき蚊帳はない、今日取つて來た薪を、かけた火鉢にたいて蚊遣をするのである、そつと涙を拭いた足さすりまいらすうちに母様はいつかお熟睡なすつた様子、まあよかつたと安心した、さて此度は自分の足がいたむけれども、毎夜詣でる鎮守の社へお參りしなければ氣がすまない、これも皆兄様の御改心を祈るのである、切れかゝつた草履、疲勞きつた足に穿ひて、月落ちた暗き畔道を辿るのである。光よはき螢びかりと前を過ぎた、もしや母様がお目覚てはとふり返りつゝ行く、少女の家からは細き蚊遣の烟、傾いた軒端に白くたつて……。

涼風　大阪府　小野かつ



母おもひ、一名孝行娘となると兎角、型に入り過ぎて、芝居でもするやうな、わざとらしい孝行ぶりに、若い讀者は却つて變に思ふやうな場合も多い、本篇は幸ひに型に入らなかつた、寫生風に實際が善くあらはれて居るので、世にありさうな母おもひの少女が活きて居る、鎮守のおまゐりだけは、少し作りごとすぎた。（選者評）

○久しぶり

神田　しら露女

私久しぶりて伯母の家に行きました、無事な伯母の顔を見て只わけもなく泣きました。時候のあいさつや御無さたの御わびやら一通りすんでお茶や御菓子をいたゞきながら、私が此家から學校へ通つてた時分のおかしかつた事や、よく伯母さんにしかられた事など話して泣いたり笑つたり、ふと思ひだして「伯母さんおとなりの君ちやん如何して」つて伺ふと伯母さんはまゆをひそめて「あの子も實にかわいさうだよ」と前おきしての御話によれば、私が卒業した翌年母様が死んて、三ケ月ばかりののち、今のが後

妻に來たのだと…「そりやほんとにかわつだよ、道てあつてもわからないだらうよ」とおつしやつたので、私は何だか逢つて見たくてたまらず、家の前にでも居はしないかと思つて、そのまゝ庭下駄をつゝかけてうら木戸から出て見ると、君ちやんの家の前には、見なれぬ女が不思議さうに私を見て居るので、きまり惡くおとなふ勇氣も失せて家に入つた。伯母さんは臺處で用事をするらしい、その中繁ちやんがかへつて來た、今年七つの丸顏をかたげて「姉さんいらつしやい」と紅くなつておしぎをした、七つにしては大きい位、かみはおさげにして時色リボンをつけ、白地に秋草もやうの着物に、肉色めれんすのおびをしめた工合が實に可愛らしい。

よく私はおぶつてやつたがもう大きいからおぶへないなど、勝手な事を考へて居ると、「つまらん物だけど」と伯母さんの御こゑ「どうぞ御かまひなさらないで」と云ひながら見れば、伯母さんの御手製らしい五もくずし、うれしくていつまでも伯母さんの家に居たいと思ふと、又涙がこみ上げて…とつぜん赤兒の泣くこゑにつゞいて、いゝ子だねんねしなあア…ぼうやの御守はどうこ行つたア…と、どこか聞きおぼへのある子守歌のこゑ、おゝ君ちやんだ、伯母さん君ちやんてしやうと云へば、さつしのいゝ伯母さんは「よんでおいて」としげちやんに呼びにやりました。日よりらしい小さい足音に待ちこがれて笑がほをむけると、まあ如何してこんなにやせたらう、櫻色したあのほゝも靑白くて病人のやう、無邪氣にかゞやいたあの目も、不安げにさかしうごくのである。

「母さん亡くなつたの、つらいだらうねえ」と今そのやせた姿を見てあつい涙がぼろ〱こぼれるのでした。

君ちやんは「姉さんつ」つて云つたぎり、そこにつゝぶして、わつとばかりにわかに大つぶの雨、折からとなりの格子戸の方で「お君ッお君ッ」けんどんな高ごゑ、はつとおどろいて涙にぬれた顏をふき〱私に一寸ゑしやくして足早に木戸の方へ…私は思はず立ち上つて、そのさびしいうしろ姿を悲しい目で見送つて、さうして雁行く夕のそらをながめて、亦も涙にむせびました。あゝあんな小さくつても悲しい思に泣いて居る子もあるのだもの、あゝ、私も…我まんしませう。

我まんしませう。

此作も未だ初心らしく、漸く文章になつた位の處で筋の趣向のと吟味する程でもないが、感心に要領が得て居るのと、正直に思ふ事が書へてあるので宜い。（選者評）

和歌

佐々木信綱先生選評

三等

能登　菊地操

岩隠れ藻の花浪にゆらぐ見えて夕の磯の薫りえならぬ

四等

熊本縣　富野きた子

秋の風信濃の山の櫨かへて白膠木もみぢはみづうみにちる

五等

尾張　長司哲子

櫻貝小さき夢もてもるやと絹につゝみて匣に封じぬ

秀逸

◎上總　秀月女史

菊咲ぬ古き繪に見る天平の奈良の少女が白き頰に似て

◎信濃　節子

佳き人の歌にひかれてたどり行夢のゆくゑの家美しき

◎上總　大内秀子

初秋の玉のやうなる海にして花藻ひき見る朝の人かな

◎能登　南鳥翠浪女

月すめば野べの千草の色々も一かつらの花となりにき

◎美濃　傍島小枝子

苗代の種の名かきし板札にあきつとまりぬ雨晴し朝

◎土佐　深瀨ます子

物やればよく人なれし鳩あまた花吹雪する中をおり來

◎豐多摩　小池葉留子

わが君は優し瞳よ秀眉よ玉にたとへば白照る玉よ

◎上總　失名女

ほのかなる小草の花の吐く息に歌の大路は香に漲らむ

◎牛込　秦治子

霜月や芥煙に黄なる日の片かげりして野鳥なきぬ

◎讃岐　十河花琴子

亡母が生絹の乳房くちびるに觸と見覺ぬあけがたの雨

◎和泉　天堀はな

吹風を葉かげの花の厭ごと小さき戀得てはばかる世なり

◎埼玉縣　淺見なみ子

萬人に勝れ給ふ君をえて我はねたみを負ふ身となりぬ

◎下總　岩井ひろ子

今さくら咲ぬと見て薄曇り春にかすめる世の景色かな

◎尾張　溝口良子

ふる雨は風にまかれて湖をこゑ山に上りて吾面を打ぬ

○　ゆふがほ

何となく秋は淋きものなりな黄金づくりの柱によるも

○　上總　よし子

うらぶれの身を喞ちなく夕暮や何のさとしぞ吾櫛落ぬ

○　京都　伊藤とめ

萩桔梗夕野にとればなき母の面影ほのにみゆと思ひぬ

○　日本橋　杉山孝子

門にはれる名札を見ば故郷のいもとゝ同じ桔梗さく家

○　岡山縣　菅森定子

聊かの雨して宵のしめり地によき灯影する春の街かな

○　大阪市　生田花朝女

生ひ茂る木立の奥に神の火の白く光りて尙も涼しき

○　伊賀　野菊子

胸の野にわすれな草を培ひて佳き花咲かせ君に奉げむ

○　豐前　神崎松代子

高鳴りにわが名を遠く君よぶと惑ひて聞きぬ春の朝潮

○　佐世保　岡すが子

梅雨の窓妹は手飼のまゆくりて黄絹白絹處ろせきまで

○　伊賀　山村さゆり

若き日の夢より醒てふと見ば我が落髮のいと白きかな

○　三重縣　常磐木花子

よき君はうす露わけて來ますらん銀泥ながす朝月の路

○　尾張　奥田くゑ子

桑摘の紅のたすきに時鳥あかづき啼きぬ信濃路ゆけば

○　金山徽音女史

路端の草葉しほれて熱暑き夏の大野は蝶も舞ひ來ず

○　豐後　水仙子

我が宿は谷川つたひ青葉陰軒端に葱庭に石解

○　靜岡縣　岡村悟子

夕もやの沖の小島をつゝむ時はるかに見えし珊瑚とる船

○　羽前　杉葉女史

花に似し蝶に迷ふて飛ぶ鳥の行衛床しき故郷の方

○　栃木縣　定形文江子

友が墓に小花手向けて木下出づれば日は午下り銀の雨降る

○　和歌山　八千子

雄孔雀の羽ばたきやみてまひる時靜にちりぬ紅芙蓉の花

○　磐城　紅園女

麗日和船工が鑿の音高く湖あたゝかく白鳥舞ひぬ

○　下總　銀塔女史

初秋や大宵沼の神の魚はぬる音して山時雨する

○　大阪　室谷ひさ

夕まぐれさだかにそれと分れども似よりし聲のなつかしきかな

○　芝　眞崎花枝

初秋や安見見上り奥嵯峨は古木も今日の淋しらを云ふ

○　安藝　東川子

夜もすがら行燈のもとに若き子が歌詠みてあらん白萩の家

○　廣島　紫英子

あめつちの瑠璃集めて久方の雲非の空にかゝる大瀧

○駿河　河口清子
旅に出て丶妾の病める枕邊に亡き母來たる夢を見し我

○美作　佐谷ぬき
亡母君の枕邊近くきり〱すなぐさめ顔れてなく今宵かな

○越後　白菊子
かへりくる白帆しづかに船うたもかなしときゝぬ波路のくれ

○水戸　榊はる子
三日月の光ひとつをひかりにて裏原さびし秋の夕風

○北總　匝瑳　東陽女　横
よき色の落ちたる紅葉かきよせて少女子三人まゝごとをする

○下野　栗原くに子　繊
母の背にむかし眺めし夕月を子に唄はする身となりにけり

○下野　梅澤哲子　出
秋ゆかば山田の露と消えぬべき身は鳥追ひの案山子男あはれ　靈

○京都　島田千代子　兒
開け行く奥山里の栗木原きり拂はれて蕎麥の花咲く

○安房　芳子女史　玉
わが願ひ尊き寳殿に枕して源氏繙きつゝ伽羅焚き籠めむ　成

○南多摩　金子富美子　子
そとふれし姫が御袖の薫りかや露のみだるゝ朝がほの花

○水戸　島田小露子
海神の夢のなごりかあけぼのゝ海路のはてに白雲なびく

○横濱　靈岡秀影
汐干狩美き花貝も籠に入れてかへり來る子に磯ざくらちる

○小石川　町田みち子
五月野や赤き襷の少女等が歌に桑つむ朝月夜かな



○西多摩　森田喜代子
神ゐます空をめぐりてふる雨のみ代守るらん大那智の瀧

○美濃　平岡澄子
夏みならず春もくれけり君が墓その墓もりにならむとぞ思ふ

○南部院　相樂きみ子
行く春や波よす岩にたゞずみて死なんとぞ思ふ我が思ひかな

○秋田　鳥の海女
雨の日を繪日傘さして走る少女うせし妹にさても似たりな

○遠江　又平條子
世を清くすみわたるらむ波の上月に歌ひて歸るあま人

○福井縣　泣鳥子
いたつきのみぐし梳りまゐらする秋の小椽のひるあたゝかき

○常陸　細田かすみ
夜半の雨あとなくはれて朝顔の花大輪なり夏の曙

○大阪　辻齡子
幸ありてふ濃紅の花に露あて泣かん運命に生れしわれか

○上毛　關口梅子
折らむ折らじたゆたふ百合の美しく條よしばしの夢まゝにあれ

○奈良縣　中富よしみ
ともすれば薬餡しの月のかげほのか君がみ文の讀みもかれつる

○山口縣　村田まつ子
水澄るゝ黒髮たちて尼僧の世にあるさまに萱咲きけり

○茨城　城口波洋子
朝霞關八州を立罩めて空に浮き立つ筑波かぐやま

○神田　鵜谷花野
我が夢を弔ふ聲と野に立ちて十とせ見ぬ里遠ちに鐘聞く

○藤濱之風　小濱子

龍馬ひく夏の帝の銀の輪の車ひゞきて遠いかづちす

○　磐城　村岡八百千

富士白く筑波は高き朝の湖鹿島浦の舟唄のよきかな、

○　千葉縣　渡邊汀子

關守の灯更け行く峠路をもの〻ふ一人杜鵑きく

○　佐賀　田中雲子

うるはしき彩雲ひきて天女等が笛を奏ずる夕茜の空

○　下野　箕輪花子

夏の日の水にうつれる白雲か百合咲く庭の宿とながめぬ

○　千葉縣　野々宮芳子

中川の堤を行けば二里あまりあしのはそよぎ葭きりのなく

○　紀伊　愛須蝶子

日はおちて夕紫紺き筑波根にゆるうたなびく紫の雲

○　紀伊　榎本龍子

村人が狂女を探す鉦冴えて淋しう殘る夕月の影

○　關町　三輪葉津惠

夕顔や十日の月のすゞしさにはしゐしてきく妹のうた

○　淸國　柳川紅蘭女

ほのかなる胡笳の音のせて月のせて遼陽の水に舟ながす宵

○　靜岡　井上登喜子

葡萄畑十里しぐるゝ甲斐の朝富士を五色の雲生みにけり

○　津　川村なほ子

灯ともりぬ爐に柴たくあたゝかき古話あるらしき野はづれの家

○　岐阜縣　小山烈香

涼風は我魂うばひ父母の國に伴ひ行けり眞夏の木蔭

○　中野町　小川麟子

瓔珞に夕日まばゆき金堂や欄かけて虹の浮橋

○　羽前　紺子

山の根の我家はさびし軒端より見渡す千里草原にして

○　山城　白梅子

くれそめて佇むかげも消えにけりあすもまた來む湖の松蔭

○　三重縣　長井蓮月子

白き雞四五羽燃え立つ雞冠ふりて餌あさる背に花ちり亂る

○　常陸　酒栗貞子

黃金色あまき枇杷の實熟みぬれば君に振好き枝まゐらする

○　美濃　傍島芳翠

雲は皆戀にまどへるうき人の姿に似たり大海のはて

○　備前　熊澤靜枝

ふとしたる思ひの糸のほぐれてはまくにくるしき夜を虫のなく

○　上野　松本きくの子

黑雲のたへまに一つ星見えて淡たばしる秋の夕暮れ

○　豐後　姫島さち子

夕立や舞子が濱の海女が家に君と相見し日をこそ思へ

○　水戸　入亘子

牛ひく子花うる乙女たそがれを今日もあひける雨の夕暮

○　岐阜　岩佐濟

雨けぶる夕暮窓にたゞずみてみ父に似たる人を見しかど

○　日向　濱砂まさよ

いく度か見返る故郷の山々に鳥も通ひてそゞろ戀しき

○　堺　すゑ子

少女子の淸き田植の歌消へて蛙なく野に五月雨ぞふる

○　青森縣　山田てる子

夢やみぬ白萩匂ふ柴の戸に黑髮たるゝ現なの人

○　下總　三橋派子

母は子の運命あしきに又泣きぬみとせ病の床にゐる子の

○　京都　島田千代

かきつばた白き國には王ゐます少女の國は紫にして

○　播磨　山本愛子

奈良の里やむらさき引けるあけぼのに一むれ二むれ男鹿のとほる

○　栃木縣　美馨子

芭蕉葉に月はすべりて夏の夜の戀の玻璃戸に露のながるゝ

○　牛込　小路ふみ子

國の日影をさむるによき調よ羽黒の山のくすし灯の色　　[illegible]　醉崎砂代子

○

君と別れかへる夕を月出でぬ夕顔白き島のほそ道　　下野　鈴木雪子

○

山國は野を流れゆく夏雲の雑木林に雨そゝぎけり　　下總　三橋千代子

○

秋雨や野邊にさまよう痩馬のぬれしたてがみ哀れにふりぬ　　上總　盗川さと子

○

待ち玉へ我は旅路を逍れ來て來し東にも其歌きゝし　　筑前　田中とよ

○

朧夜や菜櫻影にゆくりなう緋房のむちを仰ぎけるかな　　尾張、小川久子

○

秋かぜや黄金ずくりの太刀はきて白馬に乘れる神を見る哉　　安藝　さち子

○

恨み瘦の枕におちし花ぐしを何ときゝしや春の夜の夢　　香川縣　大川まつゑ子

○

雛のごと姉妹はたちて相對ひ見ては笑ひぬ春の夜の家　　高知縣　岡村春榮

○

和らかう春の日さしぬ小羊の綴う歩めるみどり大野に　　山梨縣　一倉はまじ

○

山行けば海の色かないく艘の船のさましで雲こそ走れ　　芝　鈴木いさよ

○

佛のなみだする時笑める時百日紅ちる風ありなしに　　津市　坂倉しげ子

○

花ぞ咲く夜なりと思ひ閉せし戸をくりて灯しぬ春の山宿　　香川縣　まゝごと

○

椽先に並べし子等の皿の上に盛りたる萩の花美しき　　下總　三橋千代子

○

夏の女神昼さにたえずときにけむみ空にかけし七色の帯　　下總　藤崎みつ子

○

待つとなく小川の橋に佇みぬ君くるとのみ思ほゆる月

◎　[illegible]石竹子

芥子の花紅き白き家に讃美歌あれ古寺の御　　群馬縣　坂上香花

○

水打てば十步に足らぬ我が庭の小草は生きぬ夏のたそがれ　　高岡市　梶川雲子

○

小さき池へ一ひら落ちし薔薇の花さまようごとき我が思ひ哉　　丹波　難波あいの

○

みどり葉はぼかし模様に浮き出でゝ華やかにさす灯の追きかな　　紀伊　良操賢女

○

君が乘る船は葦間にかくろひて蓉のみづうみ白き鳥とぶ　　下總　神田みち子

○

懐しき人の心地に病室を今朝訪れぬ初秋の風　　上野　須賀芳子

○

殘月やさゞれ波する白蓮の葉うらしらみて明けにけるかな　　上毛　關口梅子

○

ほゝゑみて都になれし物語ふたとせあはぬ友にかたりぬ　　南多摩　横倉玉江

○

我が母の墓ある寺の塔高う撮繪に似たり梅雨晴の夕べ　　德島縣　若槻淑子

○

欄干にもたれて田の面見渡せる少女うつくし五月雨の空　　明石　しづ子

○

三日月のいりておぐらき森かげに山ほとゝぎすなきにけるかな　　秋田市　小笹千代子

○

おぼろ夜にみうた使ひと出て見ればまた戸をたゝくくひななりけり　　府下　花輪女史

○

少女子の琴をしらぶる高殿に入日のあかふ躑躅花散る　　越中　上杉うしほ

○

梅雨ばれやたそがれがたの青柳に蛍とまりぬ玉とこぼれて　　京都　田邊俊子

○

何時ならば君や返へらん都路を人とかたりし白萩の窓　　兵庫縣　富士田章子

七色のなばしまかゝろ虹の橋架の彩衣神渡ります
香川　元子

○

磯づたひ袖吹く風の涼しさに暑さ忘れて扇子落しぬ
豊後　春子

○

忘れては夢かと思ふ夏の世にひとりさびしく他郷を思ふ
徳島縣　上野瀧しげ子

○

ふりしきる夕立やみて懐しき故郷の山に虹橋かゝる
茨城縣　小泉榮子

○

白萩に狂女ほゝ笑む秋の夜や雲見る袖に虫の音ほそき
相模　伴鳳女史

○

明日より里はの月見ん暇にも君やすかれと祈りこそすれ
京都　武田はな子

○

霧深き谷間の奥の岩影に獨り淋しく白百合の咲く
安房　金水ふみ子

○

峽谿に狐一聲なきたてゝ老杉を照す月小暗なり
越後　松山けん子

○

垣越に植捨て置し朝顔の花咲きてより吾は愛てけり
下野　須藤翠蔭

○

玉と散る瀧のしぶきに濡ひて涼しき風にゆらぐ百合花
青森　村林やす

○

暮れそめて吾が家のあたりかすみこむ如何に此の身を母や待らむ
千葉縣　はな子

○

こよろぎの磯づたひすとみし夢は覺ての後も涼しかりけり
越後　小幡須美子

○

ほとゝぎす待かひもなく寐室の戸の窓しらみ行曙のそら
安房　鈴木かつ子

○

神さびし森のあちこち鳴く鳥の心の中は如何あるらん
羽後　なつ子

○

情ある君の便りに思はずも瀧なす涙に我はむせびぬ
宮城縣　丸山香花

○

さや／＼と吹き來る風の木の間よりほのかに見ゆる螢三ッ四ッ
岩代　雪子

○

古里をなみだと共に立ち出でぬ親しき友を後にのこして
上毛　微音子

○

晝の間の勞いやすと日ぐらしは青葉さゆらぐ山に鳴くかな
岩代　根本松江

○

夢に見し友の姿のおぼろかに灯す火影に映ると見たり
芝　大芝松子

○

とゞめまじ遠き異國に行きまさば戀しき君の幸多しとか
伊豫　ちかえ子

○

雨はれて緑したゝる樹の間よりもれて涼しき夕月の影
宮城縣　深山さゆり

○

さし出づる桂の花は同じなれ受く人心ぞ定かならねば
大阪　沖野英子

○

姉上と夕飯終へて野路行けば鈴虫鳴きぬ夏の月照る
青森縣　佐々木みつば

○

匂ふ香は闇にもそれと知られけり色にほこらぬ白百合のはな
長崎縣　村木ます子

○

來秋のさかり久しき白菊は君が八千代のためしなりける
廣島縣　鈴森きみ子

○

夏衣ぬぎかへぬまの秋風を椽の端ゐにまつ夕べかな
備中　ふみ子

○

花ゆりの香をなずかしみ訪ひよりし人美しき夕月夜哉
美濃　臼井富子

○

聖堂に禱りのみ歌はたと止みて月影淡く鳴く時鳥
羽後　綠子

○

情ある君は何處におはすらむたよりもたえて三年秋きぬ
岩代　根本富代子

○

ありあけの月を背にして草刈りに我を目醒す杜鵑哉
備中　ふみ子

○

春の月をぼろにかすむ宵にして野の風ふきて灯火きえぬ
香川縣　合田まかれ

○

かゝる日に父はゆきぬとこふる身を晴れんともせぬ五月雨の空

○　青森縣　名久井ふみ子

亡き母に我が名呼ばるゝ心地して目ざめて見れば明けがらすの聲

○　神戸市　高橋櫻町

破れたる芭蕉に風の音づる時秋の愁ひの身にせまり來ぬ

○　伊豫　すみれ子

しろ〳〵と行かふ船の影見えて夕虹たかし沖の島やま

○　丹波　Y子

亡き稚子の魂かとも見て慕ひゆけば供へし花にほたる遊べる

○　石狩岬　嬬美子

みぞれふる港入江の船の灯に千鳥なきよる夕まぐれかな

○　美作　兵延子

五月雨にふるき日記をあけ行けばそとあらはれぬ押葉菫の

○　八王子　西川知香子

篝虫も今宵は鳴けよ逝きし兒の魂祭りする灯をば慕ひて

○　越後　坂井つな子

捕られゆく洞の兎のちさき頰に山撫子の露こぼれけり

○　羽前　巻坂信子

我が庭の池にやどりし月影に飼ひし金魚の數も見えけり

○　大隅　富來みふ子

雨はれて雲ながらにたち昇る月こそいとゞ涼しかりけり

○　豊後　幸子

亡き母を慕ふて泣く兒をいたはりぬ鬼薊さく磯山みちに

○　南多摩　寺澤みづ枝

村芝居　豐橋　成瀬つたへ



朝な夕な愛づる詩集に色香よき入重撫子の花しをりしぬ

○　神戸市　櫻井白嶺

小原路やうす霧つゝむ朝明に花持つ少女繪の人と見ゆ

○　攝津　三宅靜子

淡きみどり淡きみどりの滴たり乎苔むす岩に湧くよ眞清水

○　東京　淡紫

軒下にすゝぎし衣うちかけてしばし眺むる夕立の空

○　和歌山　坂口久子

浮草の花たゞ白きかくれ沼翡翠もなかず甚靜かなり

○　麻布　松崎みどり

木隱れに瀧のひゞきも聞えつゝ青葉すゞしくそよ風のふく

○　香川縣　松永竹子

ゆらめきて灯更けたる草の屋の雨の宵きに螢さまよう

○　長門　三宅菜月

晝の山裾にてりて繰り葉の中に鐘つく暮の一村

○　大坂　岡本貞子

梅雨の雲間をもるゝ月影も朧になりぬ神島の里

○　近江　梅村幸枝

時鳥鳴くやあやめの名殘にて旅立つ空に五月雨の降る

○　德島縣　吉田紫花

曉のまたゝき淡き明星は永久に名殘の神のさゝやき

○　大阪　和田靜枝

うすれにしなきわが友の寫し繪をながむる宵に初雁のなく

○　滋賀　きみ子

さびしらに笑みつゝ君は逝きましぬ庭の紫陽花いろよわる日に

○　南多摩　金子れん子

母君の召されぬ藥すつるかな雨にしほるゝ晝顏垣に

○　播磨　榮愛子

白百合によべのもだえの詩はやりて草野の朝の風こゝちよき

○　山口縣　良木末子

花園に幸なき稚子の樂むはみ代の惠のあればなりけり

○　鳥取市　岡垣幾重

母上の病みて伏します枕邊に一人さびしくほとゝぎすきく

○　麻布　小杉かほる

君とわれ別れの袖を惜みつゝ夏野の朝ほとゝぎすきく

○　筑前　釜部登美子

我が家のやれし垣根にまとひつゝしばし我世と朝顔の咲く

○　薩國　伊藤文子

なつかしき花の都をふりすてゝ旅路の宿や君の夢見る

○　尾張　市川房子

なき友のかたみに育つこのいちご見るたび毎になつかしきかな

○　下野　增田たゞし子

待わびしきみの音づれ何日かあると空飛ぶ雁の小夜の枕に

○　長野縣　ひさ子

夕日淡く青葉川邊に照りやりてそを行く人の姿美し

○　埼玉縣　近藤登久子

牛追ひてかへる童が草笛のみ空にひゞく野路の夕ぐれ

○　本郷　朝井松子

友のせし船はいづらか白波の波間かすかに燈火ゆらぐ

○　神田　熊谷又子

罪をおひ罪に追はれてま夏の日を暑しとのみに人仰ぎ得ぬ

○　大坂　幽鳳娥

故鄉や君と遊びし岡の上に花ぞむかしの春なつかしむ

○　岐阜縣　白梅子

美き人の午睡のゆめをのぞくらしすだれくゞりて訪づるゝ風

○　鳥取市　由谷品子

金髮にゆるう朝風波うたせ白き湖行く小舟のをとめ

○　大阪府　守部君子

朝ぼらけ蓮の浮葉におく露の風のまに〳〵右にひだりに

○　高岡市　久野多歌美

ふたゝびは逢はじといひてことさらに誓ひし人を夢に見しかな

○　高知縣　猪野ちか子

あざやかに朝日さしこむ我窓に夏つげにけり蟬のなき聲

○　北の國　ゆき子

月にほひ玉をつられし花の園天籟消う神や降ります

○　下谷　橋本波子

小夜更けて吹く谷風や誘ふらん遠ざかり行く小男鹿の聲

○　東京　志波梅子

電燈消えて鳴神はげし病院にすがる御手なし恐ろしの夜や

○　龜井戸　鵜澤良子

ほとゝぎす血を吐くけはひ終焉の人あるらしき棟のはとりに

○　神奈川　飯田白露

あしの葉のしげみぞ影とかくしつゝ餌やあさるらし白さぎのむれ

○　金澤　木原蓮舟

草高く葉越に月の影ゆれてすゞしき秋をまつ虫の鳴く

○　京都　波多野桂子

東雲の小まどそと開け眺むれば花賣少女つれ立ちて行く

○　岡山縣　森子

さよふかみ母がうちます佛壇の鐘の響に亡き姉を思ふ

○　周防　春枝

美くしきかの夕ばえの雲に乘りて神のみ旅にひと夜いねばや

○　周防　松葉子

風凄く叫ぶ宵なり黑雲の走る雲間に三日月の影

○　豐後　花の舍清子

野の家に君戀しやと鳴くひばり小夜のひとれも露けかりけん

○　山梨　藤枝子

美うもおもひしまてよ富士の峯崇嚴き想ひ今身にしみぬ

○　美濃　節島芳翠

うす月に露うつくしきあじさゐをながむる窓にほとゝぎす啼く

○　大阪　森　蓮　子
花あやめ水をへだてゝ雲に白に美し香けむる宵
○　京都　石原　武子
海の子が貝とり遊ぶ磯の邊にしばし見とれる松原のかげ
○　下総　三橋千代子
わかれにし人は見るまに影失せぬ朝のようなる露よき夕
○　小石川　海老澤　とく子
さびしらや若き日影を慕ひつゝ死にひかれ行く思ひする夜ぞ
○　徳島縣　吉田　紫花
赤き雲吾れを招くよと夢みしあした厚紅の朝日にあかき
○　大和　柴山　若葉
三年の病はいまだ癒えずして桐の落葉に雨を聞く哉
○　麹町　淺井千鳥子
みやしろの小暗き壁にぬかよせて君待ち居ればこふろぎの鳴く
○　桑名　し　げ　子
よき便り得てし夕は虫の音も秋を樂しとうたふときゝぬ
○　四谷　孤蓬女史
思ひあまり月さす窓の戸によれば誰に聞けとや啼く時鳥
○　下谷　小林　芳花
こよひまた酒にゑひきし背の人をとこにきかせてうつ砧かな
○　小石川　近藤　愛香
笛の音や夕日の川に一むれの雲ならびぬれむるおやうに
○　福井縣　野田しげ子
夢のこと繪日傘辿る花の野の眞晝靜かに陽炎燃ゆる
○　深川　香高　楢枝
氷賣る店のともし火ほの見えて夕風涼し松の下かげ
○　奈良縣　中富よしみ
すさまじき瀧の響に鉦の音も砕かれがちや森かげの寺
○　福井縣　野田ちの子
栗横の吉野は淋し雨の日のま晝暗くなり山ほとゝぎす
○　備中　田野上靜子
秋の夕なき友思ひて眺めやるみ空に星の匂ひぞゆうつゝ
○　千葉縣　邦　子
堪え難き思ひ小さきむれに籠めて花ちる夕ゆかんとし思ふ
○　横濱　町　生子
眞珠珊瑚黄金も實玉も望まじな君がゑまひの一時あらば
○　無　名　子
樒にも紅葉の錦染めにけり昨日の時雨色はふけれと
○　島根　す　み　江
月すみてこぞにもにたるこのよごろ手がひの鳩のたゞくゝとなく
○　美濃　宇野　文子
雨すぎし夕の風に白露もみだれてなびく池のはちす葉
○　岩城　か　す　み　子
人や來ると門の枝折戸おしあけてしきるくひなの音をきく夜かな
○　丹波　和田しげ子
朝露に燃ゆる光をあふぎてはそゞろに燃ゆる我がおもひかな
○　神田　大江　春柳
磯松の枝をはなれて海原に涼しうさしぬ夏の夜の月
○　小樽　澤谷都音子
夕立や小窓によりてふと見れば雨やどりする美しの人
○　薩摩　百　合　子
今もなほ千鳥鳴くてふ松影や昔戀へとや獨泣けとや
○　日向　中島　夢寶
夕立のはれてさびしき夕暮や山ほの〲と杜鵑なく
○　近江　す　ゑ　子
波の音心を亂す夕の暮れ寺の谷に見ゆ火ぞあはれなり
○　美濃　桂　陸　女
淀みなく降る五月雨の日上りて夕虹高し鄙員の山に
○　常陸　川並　花子
白萩の散る夕窓に姉君の何うなだれて愁を秘むる
○　佐世保　伏田町　釉子
夕立のひとむら過ぎて日暮しの鳴く音涼しき山里の路

○　岩代　[illegible]子
さら〳〵と庭の若竹音たてゝ淋しくみゆる夏の夕ぐれ
○　上總　能城美代子
夕煙低くめぐりて遙かなる十戸の小村畫繪に似たり
○　岐阜縣　市川華[illegible]
荒波のまに〳〵うかぶ捨小舟心のかじはゆるさざりけり
○　上毛　舞[illegible]
汚れざる姿をよそに世をさけて人目をしのぶ谷の白百合
○　秋田　島の海女
後の世のことまでわれはねがふまじたゞ現世を君と住まなむ
○　芝　しま子
たらち男のいづせき高く聞ゆるに夜はふけにけり夏の月かげ
○　羽前　こん子
櫻花散りしく每に數ふちご顏うるはしゝ其の花よりも
○　奈良縣　よしみ
木立越しもれ來る聲に憂きおもひ暫し忘るゝ秋雨の夜や
○　土淵町　前原幸子
虹いでぬ葉末の露は七彩にいろどられたり夕立のあと
○　茨城縣　石川ひさ子
ふく風の秋たちそめし萩野原やさしき花はひとり散りける
○　大阪市　辻[illegible]子
ほゝゑめばわれ哀神のさまなれやきみにもにたるはるのゆふづき
○　筑前　田中登代子
[illegible]夜や青簾上げて美き尼が御讀經の聲に白萩のちる
○　岡山　坂東須美子
[illegible]に泣く少女の面は最と痩せて愁に沈む五月雨の窓
○　[illegible]岡　池邊芳子
ゆけど〳〵百の葉ぐさの露しげくふみわけかぬる心地こそすれ
○　大隅　美[illegible]子
[illegible]より來ませし客へ饗應は秋の七草月と蟲の音
○　向島　ほたる草
君何處ひとり雜草とる夕暮を苔に眠るゝ緒だまきの花
○　德島縣　[illegible]能
凉風に稻穗ゆるぎぬさら〳〵と肥馬嘶いて夜は明けんとす
○　久留米　加納翠葉
[illegible]けな白雲ならぬうす藪の竹に枕す月のよき夏
○　仙臺　花子
鳴くたびに柳の風もうすれ行く暑さのますや大松の蟬
○　仙臺　蝶子
くりかへしくりかへし見れど見あかぬと皆にきこえし白糸の瀧
○　富山縣　白菊
愛でし妹は逝きぬみそらに天の川橋たへたりし七夕の夜
○　大阪市　澤村園花
此の花も此の夜の月も涙のみ過ぎし昔の事を思へば
○　奈良縣　圓垣鈴子
星いてゝ都の空に早や十年そゞろにこひし雁のおとづれ
○　仙臺　千葉わくり
雨晴れて露けき松の木末よりこぼれて落つる蟬の一聲
○　下野　栗原くに子
初秋の暮れ行く野邊に一人立ちて希望かゞやく星をあふぎぬ
○　上毛　關口緑笛子
いたづらに枯蘆そよぐ湖の水にかれなむ我涙はや
○　札幌　服部秋子
大君の惠みもあつき民草の茂り榮へて千代萬代も
○　中峠　三田子女史
鐘の音の霞に消ゆる春の夕愁ひにくもる詩のせて行け
○　遠江　此常美代
花畑に咲きもそろひし花しようぶ岡を吹ける東風かな
○　常陸　細田かすみ
都なる友の送りし風鈴の音に夢さめぬ夏の曙
○　麹町　船津[illegible]子
女の子生れしといふ友の文つきにける日を薔薇赤ふ咲く

○　千葉　林こん

床にふす人のみとりは日々の業便ばるゝかな故郷の母君

○　美濃　西村秋子

逢人の戀しき夢やさゆるらん夜更て響く寺鐘の音

○　鹿児島　きくの

待ちわべど歸り給はぬ姉君に我が胸告げよ情ある月

○　佐賀　神崎つれ

欄によれば風につめたき夕風や湖には秋の波立ちて居ぬ

○　豊後　さち子

なら團扇かざして朱のおばしまに月待つ人の眉麗はしき

○　南豊　藤の家瑠璃子



子守　三月町　松尾ちよ子

たそがれて異子うた遠くきこゆなり物靜なる白萩の道

○　香川縣　笠原俊枝

君ゐまさであゝ君まさで唯ひとりながむる空にほとゝぎすなく

○　南葛飾　松　操子

父君のいたつき思ふ祈禱に胸にひゞくや夕暮の鐘

○　大分縣　福田つれ子

ゆら／＼とそよふく風につれられて動く柳の心細さよ

○　横濱　小澤白菊

友はみな赤き手がらに髷姿人目はづかし友禪の袖

○　横濱　清水千秋

小夜ふけて宵の明星ながむればなく音寂しきこほろぎのなく

○　駿河　松永ふみ子

秋の日のいつしか野路に暮れ初めて草の戸洩るゝ燈火淋し

○　豊後　夏子

故里に暮す夏の夕べのつれづれに蜘蛛たゝかはす竹藪のかげ

○　群馬　公園女史

ゆきましゝ母の御夢見えていとゞ淋しき秋の夜半かな

○　姫路　柳田白百合

むしの音に夜の秋ふけて十六夜の月かたぶきぬあまつ雁がね

○　紀伊　宗たつみ子

夕立はくまなくはれて玉笹の露に宿れる夏の夜の月

○　大分縣　やま川

雲ながき夕べの人は窓によりてもの待ち顔や白萩の花

○　南豊　近藤瑠璃子

長き夜の夢のかけはし中たへて芭蕉に寒き雨の音きく

○　若狭　津田沙汀

初夏や伊吹大野の朝あらし波うつさまに若草吹きぬ

○　美濃　坪内華外

貸家札はがれかゝれる門の月に夕風さむう木の葉みだして

○　福岡縣　大庭たか子

夏の夕姫がすさびの玉琴にやゝ調あはす川のせゝらぎ

○　田村波津子

おく露の草葉に誰をまつ虫のなく音淋しく秋は來にけり

○　千駄谷　松野みどり

月さえて千草にすだく蟲の音の我おとらじとふり出てなく

○　番町　美江子

さえ渡る月の木かげに咲く萩の露ふき落す秋の風かな

○　水戸　良子

夜は更けぬ水の十里は雨にして水おとすごくかゞり火ゆるゝ

○　紀伊　楠惣子

少女子がいさかふ見えて秋の野邊かたみに相撲ふ女郎花かな

○　大阪市　大西幸枝

武藏野の花に宿りて今宵また星とかたりて月に碎けむ
○　桑名　しげ子
月清きこよひを磯に君と二人心行くまで語りて見たき
○　越後　野薑子
ともに見し逝きにし母の偲ばれて今宵も過ぐ夜半の月見て
○　栃木縣　磯　みい子
辰月夜蟲の音絶えて更けぬるをあんまの笛はなほ聞ゆなり
○　千葉縣　小林　壽江子
秋の暮小萩も見ゆる馬の脊に蟲の音のせて歸る賤の女
○　京都府　野　菊
暮れなつる鐘のひゞきの荒寺に佇む僧やなに思ふらん
○　有馬　鈴　蘭
夕づゝの光りさやけき夏の野にかすかに響く馬士のひなうた
○　橫濱　安部　逆子
露ふくむ草葉のかげに愛らしくけだかく咲ける山百合の花
○　下總　秋山　よし子
光榮あらば落葉の窓にたゞずみて歌にくらすと思ひても見し
○　大阪　鷲谷　百合子
月清き夕べ妹とさまよひぬ糸萩みだる故郷の路
○　廣島縣　佐伯　芳子
明月や薄がくれの破れ家の裏戸にほそし蟋蟀のこゑ
○　阿波　大久保　愛子
垂乳根のおはする里の戀しくて仰ぐみ空に初雁の聲
○　堺市　中川　幸子
夕立のなごりの露に影ぬれて木の間もりくる月のすゞしさ
○　高峯　露子
卯の花の垣根に匂ふ朝まだきぬき更へにけり麻のさ衣
○　美濃　櫻　子
ほとゝぎすきのふもけふも聞きにけり卯の花さける小山田の里
○　駿河　益谷　朝子
虫の音はわが窓ちかくなぐさめをうたへと夢のわれに戀しき

○　備中　白萩女
心あらば御垣守る花係へてよ人目しのびしうらぶれの身を
○　安房　敬子女史
とう／＼とたけく落ち込む瀧の上にいともやさしき小鳥さへづる
○　麻布　星　聲
池水の柳の翠おつるにぞ雨かと夜たゞ蛙鳴くなり
○　伊勢　浪　子
妹逝きて又と語らふ友もなし離孤島の山ほとゝぎす
○　神奈川縣　篠崎　いそ子
美しく咲き初めにける白菊の露に宿せる秋の月哉
○　岡山縣　八重　櫻女
今日もまた殘の暑さのしのばるゝ朝霧深く鳴くせみの聲
○　京都　白　菊子
年老ひし尼ひとり住む古寺のおち葉さびしき秋の夕暮
○　熊本縣　入並　喜美
春もすぎ夏も暮しつ飛鳥川何時秋風は吹き初めにけん
○　美濃　大西　英子
病む君を霞ヶ岡の院に訪ひて歸る細道風の寒けき
○　大阪　寺部　君子
往きかへる都大路の人かげもまばらになりて秋の雨ふる
○　芝　大網　みさ
名月は君待ち侘びて逢ひし如水や花なる野に上りけり
○　麹町　榕　友子
かゝる日は無花果うめる伯母が家に病みます姉のことに戀しき
○　鹿兒島　犬飼　たき子
天女舞ひぬ紅の衣袂の扇燃ゆる紅葉の幽れの宮に
○　日本橋　星　輪子
七彩の虹のそり橋あまそゝるいまし星姫微笑み渡る
○　磐城　遠藤　光子
み佛の遊んの夢か白蓮の香にたつ朝のうすぐもりかな
○　磐城　星　香女

秋の夜の夜半の月影傾きて木槿が要や衣うつこゑ
○　弘前　棟方みよ子
わけ入れば白萩薫り露ぞ照る虫の音やみし北嵯峨の里
○　山梨　藤　枝　子
青田みな河原となりて流れよる人のむくろに秋の風吹く
○　神田　鶴岡とく子
柴折戸は芒がくれに埋れて野邊の破れ家に秋風ぞ吹く
○　常磐　雨貝ひさし
あきつむれ道べの茶屋の寂として虫の音遠し秋の夕暮
○　茨城縣　酒葉常子
山陰や人なき宵の薄月に池のみぎはの小萩花散る
○　肥前　濱　千　鳥
秋の野にみだれ咲きけり千草花目のみとまりてながめはてなき
○　山口　伊　藤　靜
秋の夜の松が枝月のかゝるれば平和の御代も見えて涼しき
○　伊豫　睦　子
風なきに芭蕉の葉みさとゆれて流星あはく南へとびぬ
○　越後　む　つ　子
舊園麗に小蝶はしばしさまよひぬ玉川岸邊日暮の花
○　常陸　植田とし子
詠め入る月をはなれて今暫し都に遊ぶ君思ふ哉
○　讃岐　芳　子
あどけなきお下髮桃割さまざまの昔戀しき此うつしゑよ
○　伯耆　山崎直子
秋日和霞のおちにたなびきて千町の小田に雀にぎはふ
○　肥前　濱　千　鳥
天の原みわたすかぎりくまもなきひろにもまごう秋の夜の月
○　京都　千　代
十五夜の月にすゝきと萩捧げ欄による袖を秋風の吹く
○　下谷　歌　子
澄み渡る忍ぶが岡の夕月夜木立をつたふ消き鐘の音

○　鹿島　樺野紫紺
みすがたは遠くうすれぬ心弱うまたもやどしぬあつき涙を
○　駿河　長井とら
朝露と共に開きし朝顔の花の盛りもしばし成るらん
○　常陸　秋山澄子
金帆のかへるや潮路たそがれてひとりたゞよふ夕月の船
○　福井縣　片山千里
窓を打つ一村雨と聞つるは落つる木の葉の音にぞありける
○　京都　樋口濱女
見渡せば稲田は遠く愛宕まで野菊つみつみ辿る楽しさ
○　大坂　中野藤緒子
雛納れて秋蠶飼ふ西窓や夕日うすれて稲の香せまる
○　神田　吉田たつ子
落葉かく里の少女がかざしたる野菊の花に蝶戯るゝ
○　廣島　栄　英　子
露白き千草の小庭蟲なきて一夜の中に秋は來にけり
○　埼玉縣　淺見なみ子
狼柿の群なり赤く日のさして荊棘さびしき奥山の秋
○　四谷　村岡菊子
牛引てかへる童よまてしばし月や出てなむ笛や吹かなむ
○　岩代　峯　月
嘆はしき君はかへらず夜なよなに雁なき渡る品川の沖
○　群馬　森下うばら
密猟や夜の潮吹く猟者が背に銛はひかりぬ月上る時
○　四谷　小泉よし子
その昔配所の月に嘆きし流人の音を傳ふるか須磨のうら波
○　常陸　小泉留惠子
松かさのこぼれて寒き夕山に聲ものすごく梟の啼く
○　常陸　春　子
愁人の悶え悶えて寄る窓にみだれみだれて落葉吹き來る
○　若狭　野田ちの子

おん寺の金佛くろき壇おもひ白菊見れば母戀しけれ
○　大坂　ふぢを子

大和路にいりて雨おほき秋の旅三輪の宿りに侘びし日記よ
○　土浦町　春歌子

別れ路のなごりつきせぬ涙づたひそゞろあるきの夕月夜かな
○　下總　榊田美智子

色々の木の實はみのれ此秋は採りて與へん子もあらぬ哉
○　紀伊　室井白蘋子

追分の船歌ゆるふ聞ゆなり夕靄せる島の彼方に
○　香川　元女

蟋蟀伏屋の背戸に聲やせて秋風寒く萩の花吹く
○　仙臺市　はる子

なく虫は音こそすゞしくきこゆれどさびしき秋の夜をぞ知らする
○　能登　翠涙女史

うちなびく柳の糸のかげ見えて水のみどりもいとゞふかめり
○　大和　花臺瀧

夕日影野末に消えて痩せ馬の藁はむ庭に木枯しの吹く
○　山城　廣江正枝

うなゐ等が一むれこゝに集ひ來て咲く草花の品さだめつゝ
○　佐賀縣　つゆ子

月の夜に虫の住かやたづねなん露おく草のいや茂き邊り
○　上毛　好月

世の人の心ににたるうす氷はり初むる朝我子たびに出ぬ
○　石狩　河合菊子

紅葉ちる深山の夜半の風寒み妻よぶ鹿の聲ぞ身にしむ
○　駿河　岩崎銀子

夕暮に秋霧深き宵にしてみ空に高う雨鳥の啼く
○　信濃　太田喜志子

草積める軒ばも花に飾られて一樓の烟ほゝ笑むがごと
○　日本橋　杉山春榮

うつくしき文筥手にしてはぎの戸をそとたゝきゐる十六夜の月
○　岐阜縣　白梅子

御佛にともしさゝぐと額たれてきざはし上る僧若き哉
○　綾波女史

合歡花咲きて谷風かをる木下道まゆ毛眞白ろの道者に逢ひぬ
○　麹町　淺井千鳥子

すゞ虫や風流心の野守姫が皷うつ音とほゝゑみて聴く
○　武藏　のぎく子

何となく胸の思ひにたえかれて見上ぐる月に時鳥なく
○　上總　北田のぶ子

夏草は野邊の小道をかくしけり行きかふ人や道迷ふらん
○　越後　河島しか子

わが母と法號さむき人を呼ぶ名こそ忘れれ悲しき家よ
○　千葉縣　鈴木梅子

薩摩琵琶平家を語る五十盤丸行燈のかげほのくらき
○　静岡縣　伊藤定子

忘れがたな忘れがたなや故郷の母にあひたるうたゝれの夢
○　静岡縣　俵文子

紅葉浮く關の清水に寫し見て宿世淋しき吾が影侘びぬ
○　岩谷堂町　金規子

昨日といひ今日と暮せし夏の日も稲の葉末に秋風ぞ立つ
○　岩代　田崎清子

朝顔のつぼみの數を數へつゝ朝にみるも樂しかりける
○　名古屋　竹子

吹く風に稲は黄金に染められて時雨降るなり小山田の里
○　静岡縣　藤本靜江

ながき夜を床にかざりし亡き人の小琴の糸のおのづから鳴る
○　茨城縣　小松崎つぎ子

山吹の花ばかりこそめでらるれ人に情は露もなくして
○　上總　渡邊汀子

憂き秋の草も木もはた野も山も悲しさは見せて深き夕霧
○　大阪　高津いし

うら淋し小雨そぼ降る秋の暮あすなき人のみとりする身は
○丹波　礒波あいの

簪に似しとや祖母のみ手の上に枝たわゝなり百日紅ちる
○奈良　喜多尾愛子

亡き父がゐませしならばもろともに眺めんものを十五夜の月
○高知縣　横田野菊

蘆の葉の風になる夜は水鳥の羽音が悲し母まさぬ身は
○上毛　飯塚ちすゐ

百の葉もなくうなだれてゆく人のゆくえみおくる秋の夕暮
○石川縣　木原蓮舟

秋更けて雨しとゞ降る三越路や白根の嶽は雲に隠るゝ
○山口縣　松野白葵

いつしかに身にしむ嵐に驚きて北窓とざす賤の家々
○香川縣　西山かず子

かれなりて夕暮さびし故郷の空のあなたに白雲のたつ
○下總　岩井白子

白の子馬ふたつ額よもの食める馬槽にしも桃の花ちる
○宇都宮　木島蕗子

山姫の汲みては流す白糸の瀧にて染めし醍醐模様
○神奈川縣　熊澤みき

蘆刈る鎌倉山の風さえて千鳥啼くなり稲村ヶ磯
○茨城縣　今泉鶴子

七草の露くも嬉し朝なれば散る白露の日に輝きて
○德島縣　笠成松子

佐保姫の霞の衣織らばやと績ぎ初めけん青柳の糸



創作　豐氏女

かへり行く雁の姿を見送りていそぐ夕べに日はなゝめなり
○大阪府　中道萩子

夕凪ぎに波しづまりて濱松の梢に登る月のさやけき
○備前　廣江英甫女

秋風のふくさえいとゞかなしきにあはれきぬたの衣うつ聲
○靜岡縣　靜山麓

島一つ又島一つ見えそめぬさ霧晴れゆく北の海面
○石狩　篠原靜枝

蛇多きみ山の奥の百合に眠る胡蝶音なくつとはなれけり
○佐賀縣　西千代子

香病の疲れ醫すべく窓押せば鯉躍る池に花吹雪する
○宮城縣　佐々木美津子

小雀の己が宿りを忘れはてあらしの中をかけまどふかな
○名古屋　敏子

夕ぐれの落つる日影を眺むれば我が目路遠く鳥は飛びゆく
○三崎町　西山なか子

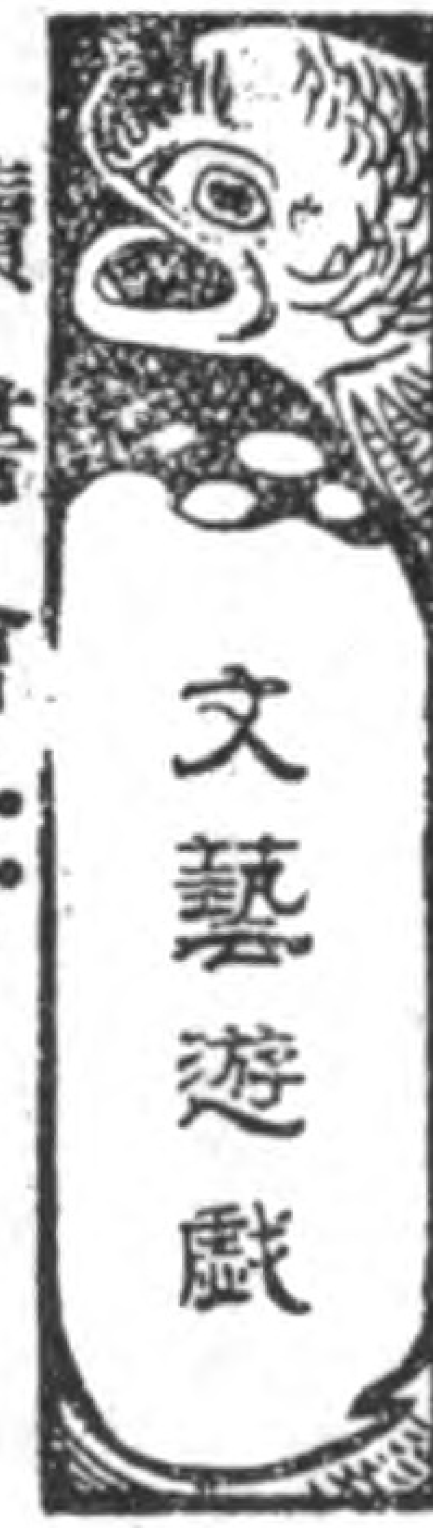
行く秋の月うら淋し旅の夜をちぎれ〳〵に白き雲とぶ
○羽後　三浦紅蓋子

朝がほの夕のまゝの凋み花ひと朝毎に秋の行哉
○千葉縣　木原十三子

棄てられし子は飢になく追分のいしの佛か秋の風ふく
○日本橋　生方綾子

月の稼亂れ藻染の浴衣開て虫聞きおはす夏の夜の君
○越後　村松つい子

奥山に妻戀ふ鹿の鳴く聲をあはれに聞きぬ紅葉ばの宿
○長崎　山口蝶子



讀書會（課題）

○魂の飛躍　廣島市　百代子

凡そ人としての樂しみは色々ありますが別けて讀書する程樂しいものはないと思ひます遠足や遊戲などするのも隨分愉快てはあるが友がなくつては面白味が薄いてす然し文讀むわざばかりは友はいりません獨り文机に寄りながら魂とび肉動くの佳境に入るを得るてせう例へば歷史を繙いては昔文武の盛んなりし事や風流華奢に耽りたる時代の事どもを知り又地理書を讀むては行きて見まほしき歐洲諸國をも僅か二三時間にして遊覽する事も出來るてはありませんか故に私は讀書するのを唯一の快樂として居ります。

○上下東西　周防　谷瑞子

幾萬の、お友だちを有して居る女子文壇よ、上は長くも東宮妃殿下の御机許に、又たお孃樣の御愛讀になります、買ふことの出來ない境遇のものは人のを借りて草鞋製り〳〵見、夕方迄田や畑を耕して後に父や母に讀み聞かせるも、此本てあります。東京の人も北海道、臺灣、果ては外國迄に諸々の御方が御らんになるも皆此本てあります、私わ近所の書店から買い求めて來て先づ、繙く前にいつも此の感想が致します。

○猫　牛込　石田萍

ハイカラの國語の先生に猫と云ふあだ名をつけて居りました。或日徒然草「下戸ならぬこそ男の子はよけれ」と聲高くおよみなさいました。皆はどつと笑ひましたが先生のお氣にはつきません。一同には下戸が猫と聞えたのです。其所此所てひそ〳〵と猫ならぬこそ男の子はよけれ。

○歐山米水　因幡　正子

我が船を離るゝ二三十間の海水、俄に騷ぎ立ちて、あれと、云ふ間に、波より潮水を吹き揚ぐる事夥だしく、其の飛沫の大空に達きたらんと思ふ處に、黑雲低く、蒼海に降り、飛龍天に騰りやしぬらん。嗚呼爽快!!!と大聲一番「何を吃驚させるだー」の言に吃驚して、四覩すれば、連山疊嶂たる山中の家！「歐山米水」を前に、未だ海知らぬ姿も此書の惠に。

○家庭　あやめ子

お恥しう御座りますが、私は小學校時代には至てお轉婆てしたから内々は獨身生活をして、天晴れ女流の文學家となつて、世にいてようと思ふて居ましたが、いつかふと、家庭談をよみかけましてから、何となく美しいホームが、造つて見たくなつて、理想も一變して仕舞たのてす、て私はどんな雜誌を見ましても、一番先きに讀むのは家庭欄てす。

○讀書會の狀況　沼津　八代美代子

例により第六回讀書會は八月七日を以て開かれぬプログラム左の如し。

一、開會の辭　秋山會長
二、讀書の趣味（朗讀）　青木みどり
三、讀書に就ての實驗談　すみ枝
四、讀書は如何になすべきか（談話）　松翠女
五、取り讀み（卅分間）　會員一同
六、ハーモニカ（スヰート、サンマー）　バイオレット女
七、英語朗讀（サンマー、ベケーション）　影山子
八、五分間作文　會員一同
　餘興、茶菓、活人畫、（二宮尊德）雜誌盲評、活げき（卑怯の投書家）彈琴（千鳥）詩吟（朧月）福引、閉會の辭。

大概右の順序にて飛入の興二三ありたり。

○大自然　下谷　赤堀久

「太陽」を讀んだ方はいつかの花袋の「アリコーシヤ」を御存じであろう私はあの中の樺太の景色を誠に面白く思つた。暗碧な海面にゴロ〳〵岩石が轉がつてゐたりぶなや白樺の密林が際限も無く縱いたり總てむき出しな荒凉な大自然の樣があり〳〵浮んで來る……と、例の物好な私は直に、「あゝいつそ親も家も富も榮えも捨てゝしまつてほんの身一つ、笈を背に其樺太を漂流して見たい自然の生命に充分ふれて見たい」とこんな突飛な、詩人めいた事を考へる。

○盜人の番　鹿兒島　芳子

姉樣は或晚、お友達と徹夜して勉强してゐらした、夜も更けて、二時頃、頻に人がお庭をあるくのですつて、恐さに、本はそちのけて、話計りしてゐらした、夜明に、内へは入らずお椽て「盜人が入つた」の聲に、皆起きました、其日の試驗は皆だめてしたつて、徹夜の勉强は、盜人

の書には、妙ですが、他に得る所が少い事を、悟りました。

○女子と讀書　越後　白菫子

長岡市を距にして西へ二里行くと青波の中の島が私しの里です、眞の田舎ですけれど男の方には圖書館が學友會に附屬して居ます、女子の方には圖書館迄か本ても少し熱心に見るとは早や何んだの斯うだのと評さるゝから圖書館などは思ひも依りませんけれど、此秋女學校を卒業なさつた清子樣が此里へ御嫁に來ると聞きましたから此度は方法を講じ度く思ひます。

○雨の夜　日向　乙女

何時いかな本を見ても樂しいですが、殊に夜更けてあたりがしーんとしてゐるとき、若葉に注ぐしめやかな雨の音をきゝながら、史傳など繙く、まあこれ位樂しいものはありますまい、もう自分はすつかり當時の人になつてしまつて、其時の人達はめのまへにありありとあらはれるやうな想ひは、外に求め得られない娛樂です

○古い聖書　埼玉縣　さわらび

私の家ではまだ開けませんで、凡て西洋くさい事は大きらひ。今年の春休みでした、私がサンビ歌の本を求めて歸りましたら、そんなヤソの本なぞをとそれはそれは大ふきげん、其後十日餘りたちまして、無聊のあまり、何か面白い書物でもないかしらと本箱をさがしましたら、內から明治十年求之と書いてある一册の舊約全書出て來ました、蓋サンビ歌一册なら嫌ふ家にしては餘程珍らしい本だと私は思ひました。

○和漢洋　久留米市　房子

(西洋の文)二萬噸餘の汽船に乘つて大平洋を横つてゐる樣な壯大な慾や細かい草花の一面に咲き匂ふ花園に居る樣な想も起る。

(支那の文)斷崖絶壁を仰で居る樣な急流が巨岩に突激して玉と碎け霰と散ずる變化や膽を寒うして快哉をさけばしむる。

(我國の文)松は綠に砂白くとよく云ふ樣に自然に優美である變化もなく壯大な趣もないが。

○一人の競爭　兵庫縣　花藤子

妾はいつも山の木かげで讀書の競爭をするのが大好よ。一人の競爭つておかしい樣だが非常におもしろくつてよ妾れ大音を上て「第一課何々」と讀み出と向よりも同じ大音でホヽヽ何でも勝つてやろうと……。向ふもなかなか上手よ。だが妾がやめると向ふもぱつたりとホヽヽ何とも言へぬ愉快ですわ…皆さんどうですおやり遊しては……。

○適不適　福島縣　士筆

讀物に好嫌はありません。始終心を離れぬ讀物は自分の意ふ儘出づるもので、好嫌とは畢竟讀書に好かれ或は嫌はれするのです。是れは偏頗な勉强で良く味を得ぬの甚しきことです。況んや名ある人の著書がいかで我意に適せざらん。

○岡山圖書館　岡山　坂東須美子

岡山地方では、圖書館が澤山設置の模樣です、第一に縣立の分はあの岡山で有名な亞公園の七階樓を毀はして、その跡へ新築しました、丁度縣廳の前で警察署の横ですの、西洋式の三階で內に入れば、和洋の書籍が澤山陳列してあります。

灯火の影(課題)

○小野小町　香川縣　茂子

諸孃さん恐らく私の名を知らぬ者はありますまい、私は六歌仙の一人で詠歌も非常に多く皆さんのおなじみの「花の色はうつりにけりな……」も其の一つです、和歌は女子たる者の是非心得て居なければならない道です、女子文壇などに時々は投稿なさるのですそれで如何なる場合にても他人のを剽竊などしてはなりません。

○深雪　日本橋　三森ゆき

名高い宇治の川原の螢がりより、詩的の戀を作つた一人です、其は實に自分ながらも今思へば驚く許り、お情け深き父母樣にも無斷家出し、盲目になりましても阿蘇さんをさがさうとは……そして終に戀を遂げました、あゝ皆さん、一心通れば岩をもとやら、全くですよ。

○政子　名古屋　志良世倭文子

皆樣は女子の事をいふと、すぐ紫式部とか淸少納言とか仰有つて、巴樣や私等の事は少しも口にして下さいませんのでありましたが、戸川殘花樣が、いつかの雜誌で、夫頼朝は死し、賴家は不肖、北條氏は專横であるに、簾を垂れて六十餘州を抑えた政子の技倆はなかなか敬服すべき至りであると、大層ほめて下さいましたのには感謝せずには居られなかつたのであります。

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

四等

○後ろ姿

下總印旛郡富里村　綾野はな子

光枝子さまは大層おやつれなさいましたこと。あのお後ろ姿の御弱々しさ、お召物こそ、あゝして立派なのばかり召していらつしやいますが、あゝ今も色々とお話しをきけば、此頃は旦那様も大層に御放埒をなさるさうだし、又お母さまとも折合がどうもうまくゆかず、子もなし樂しみもないとて、明日は行かうかもう今日は離緣して戴かうかと日々そんな事ばかり思ひつゞけて泣通しだつて、あのまあ、おきりやうで、お可哀想に！と妾は今紫陽花の垣に靠れて、今お俥で御歸りになる光枝子さまを見送つて立つて居るのである。

鐘はものゝ哀れをかの山の麓の寺から撞き出した、綺麗な夕榮雲は、眞紅の繪筆を颯と一刷毛、流れて、それも次第に薄らぎ、紺青と紫紺の色に空は漸く黄昏かれゆくのである。妾の目はあかず小さく見えぬやうになる迄見送つて居た、恰度、妾の目と光枝子様の豆のやうなみ姿をつないだ細い糸であるかのやう。

途端に白い鳥が一羽、妾の目を横切つて、再びつないだ時には、もうかの權現の杜へお這入りなさつて見えなかつた。

ふと我に返つた自分は、あゝ、妾は仕合であつたと心の底から思つた、着てゐる物こそ、こんな、洗ひ晒しの素袷なれ——旦那様は今、庭に下りて跣足の儘、盆栽に水を懸けていらつしやる、辰坊は椽側であちこちに這ひ回つてゐたが、今妾の顔を見て、につこりと笑つたのである。

（評）樂しみは夕顔棚の…………。

秀逸

○車上の思ひ　四谷　雪子

嫁ぎて數年になりぬ。昔は學びやへ通ひなれし此道に、結初めの丸髷姿を、はづかしみし日はいつなりけん、鎮守の神の祭りにまうでよと生家にまねかれて、赤飯のよばれも、神ぞ客人心地せられての歸るさなり。さらでも細き小路に、祭日の賑はしさを、取圍みたる人の群に、俥の行手を妨ぐる一團あり、見るともなく目をやれば、髪も汚なし、衣服も破れたり、顔の色垢に染みて眼のみ白う光りたる、年の頃は四十許りの女あり。罵り合ふ群衆を見廻して、やをら肌をぬぎて笑顔つくれば、取卷く人は更に、踊を見せよといひ、地に臥して泣けよと命じ、土塊を喰へとわめくに、女は言はれしまゝの様して後に、をかしき手振りして何やら唱ふ其聲の、心の奥に覺えあると思はれたり。

（可愛い男さん何故今日は來ない、水の出た中……）

節も成さざる其聲色は、それよ、我學校通ひせりし頃この町この道に、雨のそぼふる朝も、風あらぶる夕も、同じ聲に同じ歌繰り返し繰り返し唱ひ狂ひて食を拾ひありきし女の、近きに子、生むべき躰して居し其人ならずや。さなり、其人なりけりと心にうなづかるれば、いひしらずなつかしく、昔の友に合ひし心地もせられて、物言ひたしと思ふ間に、俥は人を掻き退けて走りゆくにぞ、名殘惜しゝと振りむけば、今の今迄氣もつかざりし人集りの裡には、二人の子供、——女は二人の子を連れて——あり。同じく汚なき衣を纏ひて、同じく人に罵られて、同じく猶聞えざるもの〻如く相伴て幾年同じ街さすらひわぶるに少しの苦さを知らぬに似たり。幸なるかな母子のものよ、あゝかくて我俥は、子なき不幸を唯一人泣くべくも餘義なく成りにし我家路に我身一人を連れて走るに……。

（評）子もてりといへば狂女の身なだに羨む石女の心の中あはれなり。

說教



豐橋市　藤城のぶへ

○教へ兒　小石川　未成女史

世に憂きこととは死であらう、哀しいことも死であらう。さなきだに濕り勝ちなる晩春の頃であるのに、私は教へ兒、岡澤兵次の死に逢うた。日頃健全な彼の兒は、

ふと誤つて溺れ死したのである。僅に九歳それは彼の兒の運命であつた。私は私の務として、彼の兒の死を我が受持つ兒等に語つた、そして彼の兒のために同情の涙を手向けさすが、彼の兒を弔ふ、せめてもの心やりだと思つたからである。流石に無頓着な兒等も我が友の死を聞いて、情に得堪へなんだのか、何れも皆、眼に悲しい光を輝した。

私は課を終へて、級長の兒を伴ひ、彼の兒の死を弔ふべくその家を訪うた。籬の隙漏る香の薫りは、はや涙の種である。昨日歸るとき、莞爾として笑んだ、あの面は、今已に此世に無い、と思ふと、私は熱い涙に咽ばざるを得なかつた。

私は案内されて座敷には通つたものゝ、忌詞さへ言ひ澁つて出ない中に、彼の兒の母は「兵の先生……？」とワッと正躰なく泣き伏された。私の胸は沸き立つ血に塞つたが將た剜らるゝかの如き心地がして、血か、涙か、只下る數行に手巾を沾した。何たる悲慘の極であらう。

私は連れた兒と共に燒香した。あゝ昨は手に手を取つて遊んだ兒が、今日は香を手向けて貰ふ薄き運命まことに涙潸々である。

死の前日彼の兒は昨年の落第を償ふことを揚言して『今年は乾度及第するよ、今年の先生なら大丈夫』と威張つて居つたさうである。私も認めて居つた。彼の兒は優等ではないけれど、亦落第などすべき兒ではない、確かに及第することは出來たのである。

「あゝ我教へ兒よ、先生は、何年迄もお前を教へたかつた、お前は今年は確かに及第であつたのだ。」と心の中で私はこの言葉を手向けました。

（評）哀なる末節。

○黄昏　芝　秋枝子

夕となつた。

涼しい風がさら〳〵と一切り梢を振つた。不意に後の丘で金鈴を振る樣な蜩が鳴き出したが、それも直に止んで今は鎭守樣の森で鳴いてゐる。

針箱を片脇に押しやつて夕餐の仕度にとりかゝる、今晩は兄樣の御好きな胡瓜もみをして上げやうと思つて瓜畑に下りた。天狗の掌を開いたやうな葉をつけた蔓は身長より高い粗朶に縱横にからまつて、黄色の花は仄白い夕の色に夢の樣に咲いて地には花が澤山こぼれてゐる、瓜はだらしなく蔓に支へられて危くぶら下つてゐる。

可懷しい友雄さんと無邪氣な戀を囁いたのはこゝ、友雄さんはよくこゝに隱れてゐては自分を嚇かしたもの――友雄さんは一昨年北海道へ移つてしまつた――自

分の部に出たのは十六の年だつたが、その翌年の夏かへつた時はもう二人の間には隔たりが出來て了つた。誰れも十七八になるとさうだが、何處かて睨むでゐるやうな氣がして此の可懐しい幼友達に會ふことさへ憚つて了つた。今は北海道の荒風に曝されてゐるさうだが、もう一度あんな時代にかへつて見たいもの、吁もうあんな時代は二度と來ない、蚊に喰はれるのも知らないて惘然と庖丁と笊とを持つたまゝ立ち盡して了つた。

母屋の方で姉さん〳〵といふ弟の聲に我にかへつた自分は今更のやうに驚いた、日は地平線下に沈んで紫の暮雲が靜かに動いてゐる、野は黄昏れて四邊は容捨なく暗くなりだした、自分は返事をして突然手近の胡瓜を扯ぎ初めた。

（評）物足らぬ心地す。

○朝の美　武田　秋子

樂しき夢路、朝風と共に破れぬ。雨戸をもる夜明の氣は、妾の部屋をも訪れけり。つきぬ名殘りを後に、起き出づれば、東山は深き霞に閉されて、薄墨清く色どられし處床しくも亦嚴かなり。昨日わけ見し、麓の森はまださめやらず安き眠りの中にありて、見渡す限り青青たる、稻田を渡る涼しき風は、床しき香りを送り來れり。彼方の草屋に、竈の煙りは白く、ゆるやかに立ち昇れり、空には殘る月影いろあせて、遠る川邊に船歌面白く、起れり。さす水竿には水の溜清らかに、櫓の音いと高し。庭におり立ちて、足音かるく歩みをうつせば、草葉に宿る白露美しく小さき蝶は草ふむ音に眠りさまして、ひら〳〵と、あまりの美しさに妾はしばし蝶の行へを見送りぬ。

井戸邊に至り。瓶もつ手も輕く、手桶に水を移せば、鏡の如く清く澄みて、妾の顏をあり〳〵と寫しぬ。眞心の祈りに、顏洗ひて髮かけば葉面の露は、ほろろと落ちて妾の髮を、はたと打ちて清き露の白玉を殘しけり。日は漸く東天をはなれ、美しき光を地に投げて晴やかに、輝し給へば罪多き妾さへもおぼえず神の子となりし心地して、天の御神は幸福を授け給ひしさても朝の恵みの偉大なりしよ其の日をいと幸福に妾はをくれり。

（評）清い哉、美しい哉。

○私の思ひ　丹後　賤の子

私の家は荒物の傍ら米を商つて居ます。

私は毎日學校から歸ると一臼づゝ米をつくのです。此頃は降りつゞきてすから臼は重たい氣持ちはわるいお茶や琴におしたしみなさる皆様のとても及びもつか

ない苦しさでございます。けれども貧しい中から學校に出して下さる父母の御情を思へば、何これしきの事と一生懸命につき終つて、よく精出してくれたとのほめ言葉と熟して橙色になつた批杷の一房を戴くのが何よりのたのしみでございます。

母様の短かいお言葉の中には無限の御慈愛がこもつて居ます。下さる批杷の一房は一錢にも價しないが。甘い甘い實を御情の露とも思つて、一つ一つ味はつて食べます。その味はどんなに甘美でございませう。私の衣服は見るかげもなく粗末ですが、ほころびもせず垢つきもして居ませぬ、母様の御心づくしで衣はいつも溫かでございます、學校へ行けば貧乏の子よと仲間はづれにされますが、少しも口惜しいとは思ひません、お母様がよくお言ひになります襤褸は美玉を包んで居るとか、私は美玉とまでは行かずとも、心のみは美しう持つて居ます、よしや今何程馬鹿にされたつてその人々は私の心を勵ます恩人です、何を泣き何をうらみる事がありませう、私には母といふ慰藉がありますもの。母様はいつも笑を堪へた顔で言はれます、皆様に可愛がられて女らしい娘におなりなさいつて。

（評）ゆかしき心。

○この悶え

埼玉縣　中村紫香子

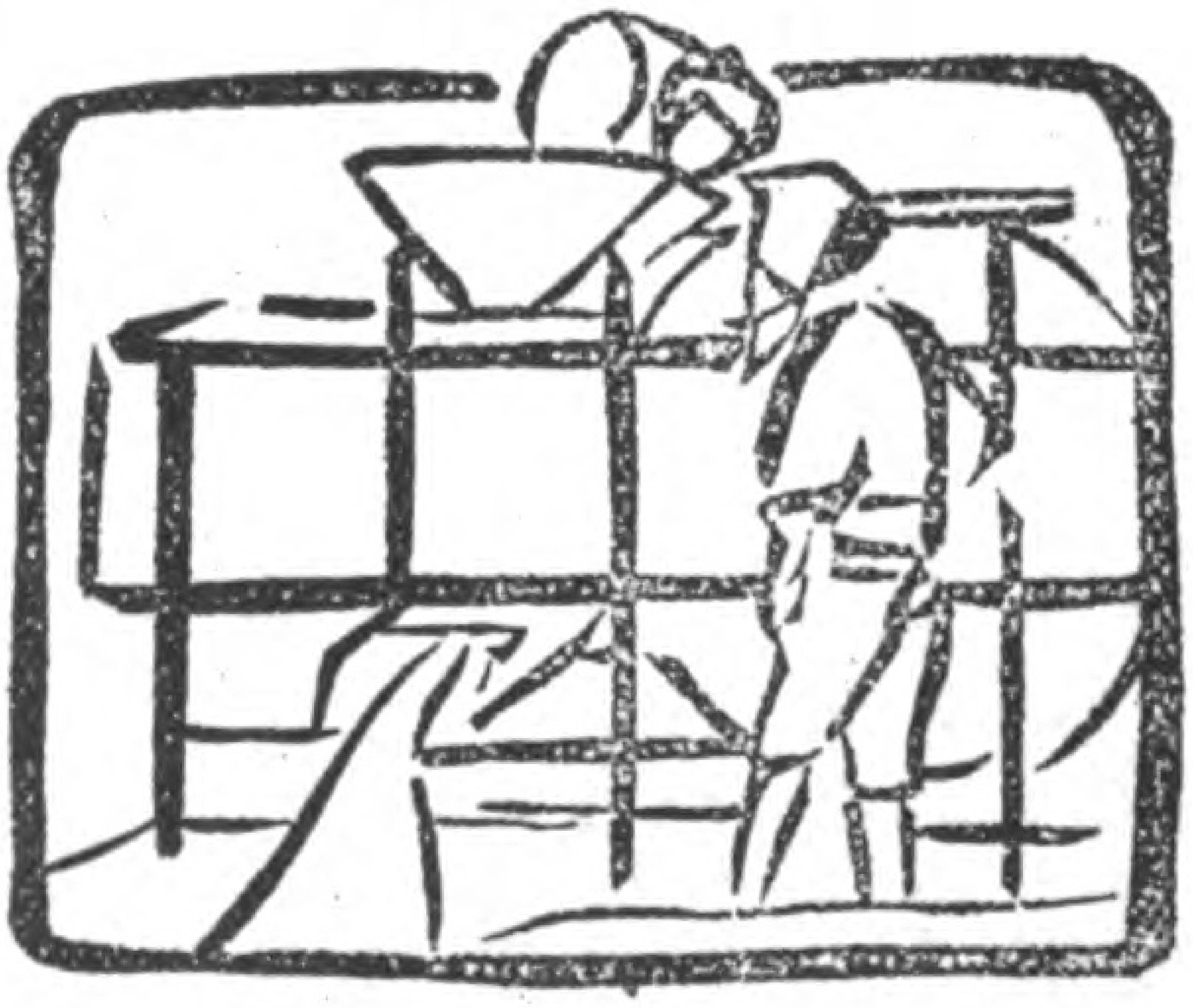
懐しの優子様!! 免しませ。妾は實に〳〵恐ろしき者にて候よ、人非人にて候よ。君ゆるしませ。御許君の許嫁なる武夫様、昨年の春彼琵琶會にて床しの方と思初め候てより、日毎夜毎忘られず堪へ難く候ひき。さるに彼君は御許君の未來を契る人と知つてはいと〻嫉ましく口惜しく妾の胸は裂る許りに候ひき。噫君よ免しませ。妾が病に罹りし時は、優しの君はいと〻憂ひ給ひ、朝に夕に訪れて慰め下されしを、噫迷へる妾は君のみ顔みるさへ胸惡く夜着引被りて答さへせず、君の案じ給ひて如何にしつると問ひ給ふを煩しと罵りたるも幾度なりしか。世の常の友ならば痛く怒らんを、君は却りて懇ろに妾に謝せられしよ、君が厚き情込て活け下されし花もあはれ無慘に打捨てけるよ、噫罪深き妾、君が病床に惱み給ふと聞し時は、妾は面には泣いて心の底にては密かに喜び、猶も病の募れかしと祈りしよ。噫優しの君のみ情に報ゆるに此の呪咀!! あゝ妾はいふよしもなき極々惡人、大惡魔にて候よ。されど君!! 此大惡人にも猶爪の垢程の良心は候ひき。今日武夫様の寫眞抱きて庭に下りし時にて候。羽色美事の雌雄の蝶、睦じく縺れ〳〵て有りしに、突如一つの蝶他より舞ひきて夫婦蝶と共に縺れては狂ひ、三つ圓くなりて高く低く飛去り候ひしが、如何にしけん、後より來りし蝶は雄蝶と共に空高く舞去り、雌蝶はあなやといふまに妾の抱きし寫眞の上に落ち候ひし

よ。みればバタ〳〵と身をもがき悶動かしていとも恨めしげの樣。噫妾は此恐ろしき蝶の有樣に、全く迷の夢覺されて候。さるにても妾は如何なれば優しき君を呪咀ひしかと、恐ろしさヒシ〳〵と胸に迫りて骨も肉も寸斷さるゝ許りに候よ。君!!只一言発すとのみ言葉を……されば死すとも心殘りは御座なく候よ。
優子の君!!。

○雪ちゃん　呉市　世良　ふみ子

今頃雪ちゃんはどうして居るだらう?
私は物思ひに沈み乍ら門邊を徜徉うて、から叫んだ。五彩美しき夕榮の雲はうすれ行きて、何時も乍ら淋しき、惠念寺の暮鐘は、此平和なる村を、冥府へ迄も導くやうに響いて、青田を越え、川面を渡り、夕靄の中に消えて行く。
あゝ、想へば、世の姑の例には漏れさせ給はぬ、お姑樣の辛きお仕打に堪へかね、あの優しき夫、可愛き雪ちゃんとも別れて、私は親里へ引きとられた。指折り數ふれば早や一と年の昔、去年の今頃、今宵のやうな夜てあつた。其時「何事も宿世の因緣と諦めて、決して短氣は起すな……」との最後の夫のお言葉。私は身に泌み込むやうに感じて泣いた。日夜あのお言葉を繰り返すとゝもに、忘れられぬが可愛き雪ちゃんが事!!!向ふの山の麓の村に、灯がつく頃には、必ずこゝに立つて、物思ひに耽るのである。愚かとは知りつゝも、お姑樣を怨み、或は我身を怨み、果ては泣きしも幾度であつたであらう。
生れて、一と月も經ぬ者を、生木を裂く思ひに別れしが、今頃どんなになつて居るだらう、さぞ可愛盛りてあらうに、あの花の蕾の如き唇から、一度なりと「お母ちゃん」と呼んで貰ひたい、我子と言ひたい。あゝ私は子迄ある者を何故離縁されたであらう。
あゝ麓の灯がゆらぐ、たしかあの邊が、雪ちゃんの家なのだ、今頃笑つて居るだらうか、泣いて居るだらうか、眠つて居るだらうか、逢ひたい〳〵、せめて一夜なりと添乳がしたい。
私は今更かへらぬ愚痴とは知りつゝもあれやこれやと、聯想の鎖を繫ぎて、果敢ない自分の境遇にないた。
灯が一つ、大牛が眠つたやうな權現山の蔭へ隠れて、螢が青い光を放つて、闇の綾瀬を縫うて行く。

收穫



常陸　鶴女

○慈母の別れ　長野　仙子

電報との聲に胸躍らせつゝ封押し切れば「ハハキトクスグカヘレ」との一音信に接し忽ち狂氣の如く膝立て直しすはや一大事片時の猶豫もなりがたし此儘直にと

立ち上りしが又暫しと我にかへり取散らしある書籍どもの整理そこ／＼に濟まし下宿屋にはそれと斷り置き人車を驅て古里にと向はしむ大急ぎの命に何知らぬ車夫も汗を瀧と流して是に應じきされど心急く我は猶車のめぐりいといともどかしく車上にて我と我膝を打ち砕けよとばかりにたたきて氣を焦ちつゝ途中の樣などは只一面に火の子の如く見ゆるのみにて漸く我家の門に至りぬ車の音はげしきにそれと知たる迎人に伴はれて息せききまきてまろぶが如く常に母上の御臥床と覺えし一室に至れば居並ぶ人々いと多く集ひて愁傷の目を以て我を迎へぬるぞが人々には禮もそこ／＼押分け入りて母上御容躰如何に都にありしも御危篤との電報に接しいち早く驅け付けたりと御傍に摩り寄りて問へども答へ給はぬに如何にかと驚くも理瀧なす汗を流しゝ我車門前に着く約五分前と覺ぼしき頃母君は我歸省の遲きをいと心殘りに思召されしとかにて既に歸らぬ人とはならせ給ひしよしなりときゝあゝ後れしか歸省今一走り早やかりせば、厚きいまはの御敎戒も賜はられしものをあゝ逝かれしか母君恩愛厚き母上よ我に今一度びの言の葉を惠み給はらずやと氷の如き其骸に抱きつき熱き涙を瀧なせり吁無常なるは人生よつい二三日前迄はみけしきいとゞ麗はしく歸鄉を幸ひと一室に我を呼び入れ給ひ學業成りし後の事ども何くれとなく嚴に諭し給ひし敎訓も思へば最後の御言葉なりしかせめて御在世の其中に一夜の看護叶ひなばかくまで憾多からましをと袖は涙に朽ちなんばかり。

○姉と妹　越後　小出彌生

今宵も、慈愛ふかき神樣のお護りのもとに可愛い妹の光ちやんと平和なる安息に就くのである、と想ひますと、もう／＼嬉しくて、私の心は何とも言へぬ匂やかな懐かしい感想に充たされるのであります。

就寢のまへには、二人はいつも讃美歌をうたひ、心靜かに、お祈をさゝげて、神樣のお惠みを感謝するのです、今宵も妹の光ちやんは、讃美歌の大きな譜本を兩手にかゝへ、四百二十五番を歌ひはじめました。

みくにのよつぎの、　おもかげみする、
おさなごきたれと、　エスめしたまふ、
あはれきみの、　御子となりまし、
そのおさなごとは、　わがことなれば、

その可愛い聲、あどけない姿の、さながら愛の化身かとも想はるゝ容子、見るから堪へがたき懐かしさが込あげて、私はいくたびも／＼林檎のやうな頬に、キッスを致しました。

この波風あらき世に、恩愛の父母を失ひて、たゞ獨りの繊弱き姉を生命とたのむ可憐なる妹の心情までことに斷腸の極であります。

時には夕べの空はれて、星光あざやかに窓をてらす時、私の懐にやすらかに眠る妹の愛らしき寢顔を見て、想はず「神よ我が最愛なる妹を憐みたまへ」と涙ながらに祈つたことも、たび／＼てした。

私は、妹とともに草花を摘むでまゝごとをし、お伽噺をかたり、また、懸しき父母にかはりて、聖き神様の教訓を敎へ、讚美歌ををしへ、髪を結び、ほころびを縫うてやるのを樂みとしてゐるのです。

庭には、百合花、ばら、苺、菊などを培ひ、家 として一疋の山羊、鳩、鷄を飼つてゐます、新らしい乳、卵、果實は、淋しき二人の食卓を飾ざるには充分であります、

あゝ、私らは世に最も憐れなる孤子の境遇にゐますけれども、宏いなる神様の祝福によりて、無限の感謝と希望とをもて、この險はしき人世の旅路を、樂しく辿つてゐます。

○ねられぬ夜

南總　御園生桂子

斯うやつて兄様と枕を並べて寢られるのも、今夜限りであるかと思ふと悲しいやら情ないやら、唯もう氣がめ入る様て、どうしても眠られない。明日はこの懷しい故郷に別れを告げて、またあのいやな東京へ行かればならぬのである、あゝ。

こんな事と知つたら、去年の末に病氣なぞと云ひ立つて歸つて來るてはなかつたのに、よしや叔母様の夢な持つた百姓が堪へられないにしても、若様の意地の惡い仕打がつらくてならぬにしても、世間の因果とあきらめて、叔父様のあの情け深いみ心をせめてもの心遣りに、如何様な事ても辛棒して居たものを、あゝ今更歎いても仕方がないけれど、若し歸らなかつたらあの試驗も無事に濟んで、嬉しい御兩親様の笑顔を見られたものを、あゝどうしても東京はいやだ、武さんなどは毎日々々樂しく學校へ通つて、勉強も充分出來るしそして叔母様は武さんの欲しいと思つたものは何でも買つてやるし、其上に冬は暖かい様に、夏は涼しい様に、雨の日には送つて貰ひ、雪の日には運びに來て下され、今では級の首席を占めて、先生からは可愛がられ、生徒には敬はれてるものを、其を思ふとどうして私の叔母様はあんなだらう、あゝいやだ〳〵、明日はまたその苦しい、つらい、いやな東京へ行かればならぬのである。

叔父様は流石父上の兄弟だけあつて、情深い御方ではあるが、然に役所へ御出勤なされて、後は叔母様にしろ誰にしろ皆他人ばかり、厄介者、食客と口にこそ出して云はね、朝から晩までつらい目に逢はされるのてある、あゝ私の叔母様はどうしてあんな人だらう、それにしてもお父様やお母様が、砂を嚙む様な米や、木をかじる様な大根を食ふや食はずに、朝から晩まで精を出して働いても、定めの租税すら納め得ないと云ふに、どうして充分な學資を出して下さいと云はれ様か、どうして自分は他人がつれないの、勉強時間がないのと不平を訴へられやうか。

あゝ住み馴れた我家の起臥も、今宵限りぞと思へば、云ひ知らぬ悲しさが小さな胸に一杯、あゝ東京はいやだ。

あゝお父様やお母様は、叔父様が貸の利に困つて居られる事や、米の代を責められて居る事や、叔母様が傲慢で邪慳な事や、從姉達て嫉妬深いことを知らないのである、そして自分は只有福な家庭に、寛大な恩惠に浴しながら、ひたすらに學業をいそしみ得られる仕合者と思つて居られるのである。けれど、けれど、其のお考へには自分はどうしても辯解する事が出來ないのである、辯解するに忍びないのである。

そして明日の朝、張り裂けむ許りの胸を押し鎮め、縒れ糸の襟に染れた心をも押し殺して、自分の上京を悦んで見送つて下さる御兩親様と、わざと笑顔をつくつて別れればならぬのである。

今點つたのは確かに三時、兄様はどんな樂しい夢路を辿つて居られるだらうか、が、自分は胸が苦しくてどうしても眠られない。

ふと此方に寢返へれば、折柄月や雲に入りし、あたり俄にうす暗くなつて、虫の聲のみ唧々と天地に響くのである。



俳句

巖谷小波先生選評

三等

湖に臨む天文臺や天の川　常陸國眞壁郡下妻町字西町　中内泉子

（評）雄大。

四等

祇園會や錦にかゝる砂埃り　京都府南桑田郡龜岡町本町　伊東紫雲英

（評）練れたる句なり。

五等

柿赤し夕日の奥の一軒家　下野荒川の里　佐藤愛子

（評）凡景を捕へて巧に美化す妙は句作にあり。

秀逸

一ツ家の軒の糸瓜に夕日哉　大和　久保榮子

梅の實の毛虫に遠く殘りけり　水戸　小蘋女

蜻蛉や椽に伏せたる檜笠　越後　藤原素子

棕解く術もあらくれ男かな　駿河　佐野峰子

蜘蛛の巣の夕立晴れて雫かな　下總　錦衣女史

短夜や盜人にげて鷄の聲　丹波　伊東菊枝

書に倦みて門を出れば青田哉　高知市　高橋龜蒼

遠花火都の空を思ひけり　越後　かれ子

一行は下り坂なり雲の峰　駿河　深江とよ子

欸乃の聲に夏山動きけり　水戸　君子

下駄はいて夏の小川を渡りけり　和泉　天卿花

納家のかげ母家の陰や殘る暑　駿河　燒雀

瀧殿に扇忘れて歸り見　京都　北田紫翠

鉾出して橋を越えけり夕涼み　下總　花子

絹夜具に蚤一疋の騒ぎかな　伊賀　山村りやう

雨の日や萩散る庭の夕淋し　金澤　水原蓮舟

蟬なくやつりすてゝあるハンモツク　下總　市原はる子

月皎々卯の花白き小庭かな　美濃　薔薇子

薫風や詩箋吹き散る几　下總　不美江女

木津川に望む笠置の茂りかな　岐阜縣　高原ひさ子

蟬のなく峠の茶屋に夕日哉　大和　久保榮子

行秋や笠をぬいだる惟然坊　新潟縣　早津善子

涼しさに月の阜頭をありきけり　安房　岩崎つゆ子

常磐木をだいて美し蔦紅葉　下總　櫻井定月子

行水の二人に小さき盥かな　北總　藤崎月子

書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

四等　○乳母が里より

上總　ひさ子

武藏野の秋も半ばにて候はむ、高澄む空の日毎夜毎いか計りか深き興に入らせ給らむ。此里に來てより早一月、通ふ人さへいと稀なる靜けさも初めの程こそ嬉しとは思ひ候ひしか、山の秋風日毎に寒く露宵ごとにしげき此頃はなかなかに淋しさの身にしみて、都の空のみ懷しく、萩の上風虫の聲さへ物思ひの種とはなり申し候。わきて雲深き夜など軒に近き杉の梢に梟の聲を聞きたるなど魂も消ぬべき思にて雨につけ風につけ、悲しく怖ろしきのみにて候。

昨日もお隣の美江ちやんと栗拾ひの歸るさ、遙の谷に獸の叫びを聞きて顏色かへて歸りしを乳母に笑はれ申し候、てる月影や菊の色香や都にても見られむものをと、今は疾く疾く歸らまほしう存じ候。

言落し候へど、美江ちやんと申すは隣家の少女にて年は八つの林檎の頰美しき邸には稀なる愛らしき兒にて候。いつしか慣れてお隣の姉ちやんと慕ひ來るが嬉しく、お伽噺や花つみのお連れに此の山里の二なき友にて候、やがて別れて往なむ身はこの少女ばかりがいとほしくていとほしくて……

さりながら秋も更けなば、木枯の吹出でなば、森のどよみの夜の音のさこそと思ひやらるるに、夕うすれゆく雲の行方を西に眺めては君ます空の懷しく、垂乳根の母戀しさにえ堪へず、早く早く歸京の途に上るべく候、あゝ女は誠に賑はしきこそ性に適へる住家なるにや、目に紅葉耳に小鹿の啼聲を居ながら聞かむ由はなくとも。折々は訪ひつ訪はれつ思ふどち、はた人前に心遣はるゝ立ち居の煩しさも寧ろ女の幸なるべくやと覺えられ申し候。あゝ君戀し、都の空ぞなつかしき。秋風に憂さは忘れて歌はむにヴァイオリンの絃合せて待たせ給へや。名殘はつきじ書かまく事の澤に侍れどいづれ御目もじの節にと惜しき筆とめ申し候。

(今宵奥なる暗の森に椎の實おつる音頻りに聞え居り候。)あなかしこ。

(評) 忙に在て閑を思ひ閑に居て忙を思ふ人の心は我儘なるもの哉。

五等

○海水浴より伯母の許へ

紀伊海草郡紀伊村　貞操賤女

舞子の濱の松の木の間から一筆申上ます。草もよれると申すこの頃の暑さでございますが、伯母様にはお障りもなう入らつしやいますか、私は毎日弟や妹やこゝて知り合ひになつた坊ちやんや孃ちやんと浪にからかつたり、風に吹かれたり、貝を拾ふやら、松露をあさるやらで、まるで家庭や學校のことも打忘れ、あれ程伯母様とお約束を申上た、お手紙のことも、ついぞ失念いたしました、今日母からお前はあれ程伯母様とお約束申して、幾度お手紙を差上げましたかと聞かれまして耻ぢ入りました次第です、これも舞子の景色のよいためとお許しを願ひます、こゝは日本一の名所でございますから、その景色は詩人も畫人も筆を擲つといひますが、月夜は又、格別で今更申上げる言葉もございません故御推量の程願ひます。雪の様な砂の上にうねりたる松の影、烟のやうな水の面に漁火の二つ三つ、それに夢の様な淡路島が見えます。何だかぼんやりする位てす、伯母様にもお家のお都合におかまひなく、是非お遊びに入らつしやいませ、私などは朝も早くから夜は遅くまで濱邊で遊びますので印度人のやうになりました。常から黒い顔が此頃は一層色こく、眼ばかりピカ〳〵光つて居りますので折々鏡に向つて獨り笑つてをります。亦日頃寝られない性分の私も毎日の海水浴と散歩との疲れで宵から朝の五時までグッスリ寝いれます、三度の御飯も此の上なうおいしく食べられます。伯母様、何卒御越しの程待つて居ります。

(評) 宜し、今少し文に落着きが欲し。

秀逸

○母を失へる友に

失名

御母君様にはにはかなる御逝去只夢のごとき心地いたされ候私御地に居り候節は參上いたし候毎によくこそ來つれといつも御笑がほに御むかへ下されし御姿今も目の前に見ゆるやうに御座候またと拜しまゐらする事も叶はずと思ひ候へばそゞろに涙のみこぼれ申し候まして御前様には御一人子にてよそ目にも御うらやましきばかり御いつくしみをうけさせ給ひし御身なれば御なげきの程もひとしほの御事と陰ながら御察し申し上げ居り候昨日國元よりの便りに御前様には御送葬後御心地常ならぬとの御事にて打ちふしゐさせ給ふとか伺

ひ参らするだに御いとほしく存じ上げ候實に御力おと
し給ふは御理に候へども花に嵐月にむら雲は世のなら
ひにて今更いかに嘆かせ給ふとも甲斐なき御事に候ま
ま今はたゞ御心どりなほし給ふ方よろしかるべくさり
とは情なき言葉ともおぼしめされ候はんがかゝる事よりかりそめの御病も重り給ふやうの事あらせられ候ては如何なし給ふ御こゝろにや只さへ御なげきの御父君樣が御こゝろの程ぉ汲み給ひてゆめゆめ御身おろそかになし給はず一日も早く御健になりたまひて御孝行前にもまして御つくしのほど神かけていのり上げ候かくてこそ草葉の蔭におはす御母君樣も悦ばせ給ふらめ私御地に居り候事ならば去年のごとく日々に御うかゞひ申し上げ及ばずながら御こゝろなぐさめまゐらせんすべもあるべきにと今更御別れ申し居り候事の口惜しくこのまゝとびゆき度心地もいたされ候へどもそれも叶はぬものからいと／＼本意なく只心ばかりを文して申し上げ候、かしこ。

（評）親切なり。

姉妹　名古屋　清子



○繪葉書にて妹へ

德島縣　若槻淑子

昨夕無事に當地へ着きましたから御安心下さい昨日の朝は途中で夕立にあひ大變難儀いたしました是は栗林公園の南湖です公園内の景色のいゝ事は一部寫した此繪葉書見てもわかるでせうね湖に大きな橋が掛つてゐるでせう、今朝此橋の上で計らず伯母さん所の露子さんにお目に掛りました露子さんも讃岐見物にいらつしやつたとの事でした言ひたい事ばかりですが時間が迫つてきましたから歸る迄貯へておきませう歸つたら面白いお話澤山しますから五六日待つてください小さく書きましたから讀みにくいでせう。

（評）繪葉書の繪活きたり。

○故國の友に

横濱　秋香子

御介兄樣の御棹にて御許樣と青蘆分けて水枝排して荻のしげみに小鮎躍るを眺め候おとゝしの今日、座に慕はしう相成り申し候。今は只心もとなき星のまたゝき風のたよりに、僅にそれと、かゝりし昔を戀ひて寂しみを忘るゝばかりの身には、酷暑常なる香港の夏も今更に恨めしうつらく候、御察し下されたく候。三年の御無音はさぞかし御怨の事とは存じ候へども、私の心のみは神の御前に捧げ居り候まゝ、今の住所も境遇も御知らせ申さぬとて御叱り下さるまじく候。唯只三年前の鮎が躍るとて手を拍ち給ひし無邪氣なる御許樣にていつまでもあらせらるゝやう、遥に祈り居り候。

(評)面白し。

○溫泉場より

香川縣　土田島子

出立の際はわざわざ御見送下され有難く御禮申上候海上恙なく到着いたし候間御心安く思召下され度候さて當地に來りて殊に目をひきしは風光明媚なることに御座候此地は別府を去る一里山腹にありて人家わづかに十數軒ことごとく入浴宿に御座候湯はいとすみわたりて心も消々いたす程に御座候これより山を登ること十町餘にして地獄と名づくるところあり小さき掘ための如き處に湯湧騰いたし居り山頂に絶えず煙の焔々と立ちのぼれるなど物すごき程に御座候此地朝夕の景は又格別にて朝とく起きて湯あみし風そよぐ早稲山に露の玉散る景色をながめ夕には燈火居ならぶ別府濱脇の市街を眼下に見下し近くつくし海には數しれぬ漁火のかなたこなたを行きかふ樣の面白く打語らふうちやがて明月高くさしのぼり清光樹々の梢を照すなど何れも詩料畫材ならざるはなく候避暑地とはいへ朝より宵、野菜菓物を面白げなる聲にて賣り歩き新聞小說貸本と何一つ不自由は御座なく候當時は夏休に際すれば來れる人も種々樣々にてひげむちやの紳士あり活潑なる學生あり蝦茶式部もあれば田舍者の夫婦づれありかゝれば話もなかなか面白く英語とやらをかきまぜてむつかしき學說述ぶるあれば學生の學校自慢するありかなたには會社の內幕語るかと思へばこちらには僧侶の說教を有難がりて餘念なく拜聽せる老人あり打きくだになかなかにたのしく病もいゆる心地いたし候なほ聞え上げたきこと山々これあり候へども今日はこれにて筆とめ候御母さんへよろしく、左樣なら。

(評)急所を捉ふるを稽古せらるべし。

○遊學の弟へ

張津　芳　子

其後は御障りもありませんかこなた父母には御身には御變は有りませんが明けても暮れてもあなたの事ばかりを云ふて案じて御いてゝすよそれも其筈あなたを手ばなすのが始めてゞすし他の子供等は皆々膝下に居りますのですからねそれに付ても四五日前に雨が降つたのですると父は矢張都も雨が降つて居るで有らうかと仰しやいました外の人は大變笑うて居ましたが私は可笑しい所では有りません親の情のあまり有がたさに胸が一ぱいになつて思はず涙を落しました取わけあなたは此家の一人の男兒で澤山あつても他は皆女ですからあなたの身の浮沈は家の盛衰にかゝはるのですから何でも立派な人間に成つて大恩ある父母に報はねばなりませんそれに世の中へ出たなれば口惜しい事も有るでせうし又腹の立つ事もあるでせうがそこが辛抱其時は故里に案じわづらふ父母姉ありと思ひ出來惡い辛抱も忍て勉強して一時一分間も早く安心さして被下いなれ共あまり勉強が過ぎて病氣に成つては大變ですから御身を大切にして下さいほんとに親は子にかけてはその深い情は誠に口で言へません古めかしいてすが昔よりよく言ふ燒野のきゞす夜の鶴と言ふ事がありますが今更私はそれを知りました何れ又其内に尋ねます隨分御身を大事になさい。

（評）筆まだまはらず。

○都の友へ

磐城　村岡満津子

御許の君よ。水無き川の水車、まはらぬ筆もて又しても田舍の自慢を、五月蠅と御叱受くるは兼ての覺悟にて、一つ二つ申し上げ候。

磯邊の宿のいと靜けき事よ。駒下駄の運びも輕う、糸の若草踏みしだきて逍遙へば。空や天上の星一夜ひそかに此處に落ちて、しばし清香を叢中に包むものかと、思はるゝ白玉は、さし出る朝日に金玉銀玉と輝きしが、ほろ〳〵とまろび落ちては我裳を染むるなど、なかなかの風情にて、聽て、雞の鳴く音も三聲二聲聞えては、田舍の朝も一入に候。

樓上に朝の綠茶すゝりつゝ、遠く遙に瞳を放ち候へば千代の綠をふくみて枝振をかしき磯馴松に、見え隱れする眞帆片帆。それに朝日の照添ひては一幅の油繪を展げたらん心地せられて、又一入の眺に候。折々波の音もさはやかに手にとる樣に聞えられ聞きなれし水鳥の音さへ、何となくめづらしく感ぜられ候。

喧しく鳴き出せし蟬の音に夢破られて、窓の戸推せば何時か日は午時に候。靑疊なす大海原より送り來る風は絶えず軒の風鈴を音づれて、聞くからに涼しく。蟬の聲はたとやみては、風に戰ぐ松の聲、あたり靜けく心淋しとばかりに、甚猶暑さを覺えず候。

團扇片手に小川の畔に佇みては點々藪に宿る螢の光、笹竹打振り驅け廻る童の叫び。こと〳〵興を覺え候、

折から玉を轉ばし匂ひ出し十六夜の月は、稻田の風さやかに小川のせゝらぎも浮出て、西に連る山々の薄墨もてぼかし出されたらん樣なる、身も心も浮立ちて、塵の世を離れぬる心地致され候。げに田舍に候、かゝる筆擱かんとする時又も水鳥の一聲。して。

（評）夏をよそなる趾のすまひ羨ましく存じ候。

○幼妹に

盛岡市　秋萩女

淸ちやん！何から御話致しませう、いろ〳〵な事が有りますよ、だけれど私、忙がしいからゆつくりお話しするひまが無いの、私はね、毎日お菜ごしらへ、お掃除、お金の勘定、お手紙をかく事やら、お客樣のおもてなしやら、何もかも獨りでしなければならないのでせう、だから忙がしい事と云つたら大變なものよ、まあまあ淸ちやんのお邪魔がないので安心ですけれどね（ごめんなさいよホヽ）毎日さびしくて仕方がありませんの、しかし先日中ほどではなくなりました、お父樣は毎日々々淸ちやんの歸るのばかり待つてゐらつしやいますよ、私はね忙がしいものでお父樣ほどさびしがつてはゐないのよ、まあ此方の事ばかり話して、お祖父樣の御病氣は如何ですかだん〳〵とお快い樣に伺つてますからちつとは安心してますけどね、どうぞお大事に、淸ちやん、その可愛らしい無邪氣な心で慰めておあげなさいましよ、私の分と二人分をね、そして早く歸つて丈夫な笑ひ顏をお父樣にみせてあげて頂戴。原田のお姉樣のとこから毎日誰か來て下さいます、淸ちやんがるすになつてから原田の姉樣が二度、文ちやんは毎日來て獨て戰爭ごつこして夕方に歸つてゆきますの、それから田鶴子さんが三度、梅やがお使ひに二度きました、そしてオレンヂ、梨、御菓子、おすし、お團子なんかいたゞきましたよ、また明日は西洋料理をどつさりこしらへて來て下さるのですつて、何でせうね、フライかしらオムレツかしら、きつといろ〳〵でせうね。

淸ちやん、私に「猫そうどう」の御本送つて下さつて有りがたう、おもしろいことね、正吉は正直なのね、大變ためになるお話でおもしろうございました、御禮に何送りませう、今考へてゐるところなのですよ何でも淸ちやんの一番喜ぶものをと思つてね。

明日は送りますからたのしみにして待つてゐて下さいよ、それではこれで、またこんどにしますよ。おからだ御大事になさいましよ、惠ちやんや武子さんとけんくわをしない樣にね、左樣なら。

（評）幼き妹には似つかはしき文なり。

○ふる里の兄上へ

岩代　根本松江

夕べ信樣よりの御手紙にて一方ならず驚き入り候。お妙樣には近々華燭の典を上げらるゝとか、开は事實に候哉、餘りの事に今なほ夢心地にて筆走らせ居り候。良人の君は人も知る、陸軍大尉の坂下樣とやら、富に

迷へる彼の君、慾に眼くらみたる野崎の君。最早我友にては候はず、況して〳〵姉上などゝは思ひも寄らぬ事。兄上には如何に思召す、お妙様は兄上を捨てられしには之なくて、正義の神様のお二人の仲を裂かれしものと深く信じ居り候。吾兄上はかゝる事にて人生を儚み生涯を誤る如き人々の、お仲間入りには無之事を。年若てこそあれ私は身を粉に碎きても慰藉奉る可ければ、日頃志し給へる實業に益々御身を委ねさせ玉へ、軈て幸多き運命は何處よりか兄上を手招き致さんこと必然に御座候。

あゝされど、開き初めたる園生の花に恨めしきは今朝の春雨に候はずや。しどろなる筆の跡幾重にも御推察を。

（評）語短くして意長し。

○旅行先より（故園の友へ）

茨城縣　細田かすみ

第一信

今しも妾の乘りし汽車は、紫の筑波山と、水明らかなる霞ヶ浦の中間を貫く鐵路を東へ〳〵と進み居り候。窓によりて湖の面を見れば、眞帆片帆の滿ち居る中を滊船の通行するは勇しく、漁り舟の蘆荻の中に見え隱れする樣は詩的に候よ、筑波颪のさつと來て車中の暑さをはらひ候。

第二信

恙なく水戸の里に着き、常磐神社に參拜仕り候、それより日本三公園の一なる常磐公園に歩を移し好文亭の三層樓上に登りて千波湖を見わたし候時は、淸風徐に來りて心神爽快を覺え暑熱を忘れ候。

第三信

旅宿の軒の風鈴に目をさまし、支度もそこそこに急ぎ那阿川を下る滊船に乘り移り候、こは滊車の旅より一層趣味有之候、またたくまに那阿港に着し海門橋を渡りて大洗に向ひ候松原續きの道の浜にして歩行困難それに加へて炎威赫々として燬くが如く恰も釜中に坐して蒸さるゝ思ひ致しほと〳〵閉口仕り候。

第四信

夕方大洗の宿に着き候、浴後團扇片手にうすくらき石階を登りて磯前神社に參拜し、暫時社内を逍遙致し居り候ひしが、パツと明るくなりしに驚き見上ぐれば、そは雲に包まれ居りし月がそを脫したるにて候よ。海を望めば一面金銀の波が燦然として輝くにて候、中にも怒濤の巖にあたり碎けて黃金の花を散す樣山家より行きし妾には得も言はれぬ程麗しく眩せんばかりにて候。



見世　八王子　乙嬌もん子

○故郷の妹より

神田もと子

暑いわれお姉樣、まるで燒きつけられるやうですことそれにしても、なぜ早く歸ては下さらないの、高子樣や眷枝樣鶴代樣など、とうに御歸省遊

ばしてよ、そして、皆さんお妹樣や弟御樣と、さも、お樂しみ相に、手を携へて散步などしてゐらつしやるの、之を見ると羨ましくて堪りませんわ、ようお姉樣早く歸て頂戴な、いつでも母樣と汽笛がなると、四の樣御へてゝ、濱の方を眺めては、あがつて來る人を見て、なりますの、もう幾日まちぼけさせられたか知れませんの、隨分いやに成つて了つてよ、ねえ姉樣一刻一分もお早く。
いゝわ〳〵、ぐず〳〵してゐらつしやれば、お祭りも何もすぎて了ひますわ、さうしても、妾知りませんよ、それてもいゝんですか、えゝお姉さま。

○友の學校を退くときゝて

丹波　愁月女史

三伏の暑さいともしのぎがたく思ひなしにやさしもに時めく常磐木さへしほれがちに見ゆる折柄いかに過させ給ふや。
さて先達てさる方より承り候へば御許樣には此度校を退かせ給ふ御心組とか日頃より一しほに御向學の志厚き君のかく御决心遊さるゝにはよく〳〵の深き事情のおはしましての事とは山々存じ候へども切なる友情の棄じがたく亂雜なる業とは知りつゝも思ひの程を一寸申上候。
寒に堪ゆるの梅を君子の花とは誰が云ひそめけむげに春光の暖きに誘はれて蕾をやぶるはいと安からんが霜雪に堪へ烈風に恐れず嚴寒肌を裂く頃薫芬たる香を放つ梅が勞やそもいかに？
人とても此れに同じく身ゆたかに何不自由なく勉學するは平々凡々たれど百難屈せず萬苦にたゆまず奮闘していそしみし暁こそげに榮光燦爛たるものとこそ覺え候へ。
「艱難汝を玉にす」とは豈四人のみの謂ならむやは。
あはれ我友よ幸にして思慮を了し再び恭露み積ませ給はゞ妾が喜び此上やあるべき、あなかしこ。

○「十三夜の月に對して」と妹より　おこせける返し

わ　か　ば

ゞ方より雨になりて更闌、いそがはしく呼びすぎ候後はたゞしと〳〵と小やみなう、そゞろ都戀しき夜に御座候。なつかしき御文獨り任ゝゑましうまたしてもくり返し居り候、思ひ出多き十三夜の月！柳の下の御許樣の面影たゞまのあたりなる心地にて、さては文樣よし樣との御月見のまどゐ如何ばかり樂しかりつらむなど遙かにおもひやり居り候、甘き栗の初賞り味よき梨の金閣などに面白きまどゐ開かせ給はん共まへ、ようぞ我身を思ひ出でゝたまはりし、はゝそばのめぐみの露の庭をはなれて四海の邊にさすらひ――と申さむもをかしく候へど――實に世のわだなかに押し流されて浪間漂ふ心地の我身、いかで戀しく候はぬべき、その夜、池に靜けき十三夜の月を。きり〳〵すよ、こほろぎの聲、今更に思ひ出てゝは猶無かりし頃たゞなつかしく候、何ら稚氣のつみもとがもなき世暮しこそ過ぎさりては戀しくなつかしく、夢にも似て淡き追想もなほ今更に心遣りに候、さるにてもいつまでも〳〵清く生ひたゝせ給へや。
窓そとおせば空たゞ暗く芭蕉葉間にさはめき候のみ、さすが身にしむ秋風に坊の冬衣の仕立殘り今宵は終へ候はむとさらば是にて惜しき名殘に紙たち申候。御兩親樣の御世話いやが上にも氣を付け給ひてよ、花ちやんにも勉强怠たらぬ樣ことづて給へかし、こなた皆々無事坊は日増に成長いたし候、かしこ。

○小猫をもらひさし宅へ

岩代　雪　子

先日御宅を出てし時は餘りに鳴きさわぎ候へば途中如何ならんと案じつゝ歸宅仕候へ共其後はさして親を戀ひ慕ひ候事もなく家人にもなれつき三毛や〳〵と呼べばいづこにありてもギヤアーゴと目を少さくしのそり〳〵と出てきて膝に上り身にまつはり手を懐に深けば背を高くしてとびかゝる有樣のおかしさ家内も少なく子供もなき相手ほしやの身にしあれば暇ある每に猫を唯一の樂みとしてくらし居り申候それに三毛やはますます元氣にて此きびしき大暑にもまけ申さず日々の務は蟬取りとんぼとりのやうに心得木に上りて捕りては持ち來姿のよくぞ捕りしとほむればうれし顔に又も外へと出て去る愛らしさ决して〳〵御心配は御無用と存じ候先は一寸御安心遊ばさる樣御知らせ迄、早々。

○親しき友の許に

筑前　雀部登美子

是非一日はとの御仰せに今朝か明朝かとたゞ心待にまち居候てよとの御

音づれもなきは如何し給ひけん園の朝顔既に見事に候勝れて大なる美しき花咲きたる朝あゝあゝ今日訪ひ來まさばと味氣なく思ひしも幾度に候はん父が自慢の大輪他の一鉢は昨日早綻び初め候へどこは今朝初めて咲き候眺もいと惜くて未だ咲き終へざる程を御目醒の御慰にもとかくはとくより御門叩かせ申し候道の程如何に候やらん濃き紫は君も好みます所御心に叶はゞ御寫生の御料にもとて。一年に稀なる御休の事とて御出難うおはさんは去る事ながら切なる妾が心汲み取りて一日御出下され候はずや何事も便なき宅の事とて珍らしき御もてなしもおはされど世を離れたる山里の曉深う風冷たき園の内に露を含みて綻び出づる景色亦一興と存候願はくば前日より寫生帖御持參父が心盡しの程御覽被下度花も此上なき幸榮に候はん、かしこ。

宮がへり　石川縣　館芳香

○妹に

埼玉縣　中村勝子

美代ちやんお手紙見ました。あの兄樣繪はがき澤山持つてゝあなたに吳ないのですつて？不可ない兄樣ね。それぢやあこうなさい、この牡丹に薔薇と菫の花ね、大層よく出來たからあなたに上ます。是をあなたの机の上に挿て置きなさい、尤もさうすると武坊が欲しがるでせうから薔薇でも牡丹でも遣なさい。菫は不可ませんよ武坊が兄樣に欺されて取られると謀がだめになるから……。そして成丈兄樣にみせびらかしておやりなさい。すれば兄樣は菫が大々好だから必と貰ひたがりますよ。そしたらあなたは、繪はがきを吳なけりや厭とおいひなさい必ず吳れますから。それでだめだつたら又考へて上げます。では送りましたよ。父樣母樣によろしく。さよなら。

○海水浴に誘ふ

堺津　三宅靜子

暑さ烈しく御座候處御許樣には如何御暮し遊ばされ候か私事は炎暑に日夜苦しみ居り候ひしに昨日大坂毎日新聞に例年の通濱寺海水浴場設置と廣告これあり風景の佳なることは申す迄もなく旅館茶店等も極めて清潔にして勉强仕り居り候由明後日より向ふ三週間滯在の見込みにて保養に參り申すべく候御許樣には思召し如何に候か御都合の限り御出の程御すすめ申候かしこ。

○入院せし從妹のもとに

中津村　町田つる

秋深うくれゆきし木の葉の木枯にひら〳〵舞ひおつるさへいとゞあはれを添へ申し候折からあなた樣にはおわづらひにて御入院遊ばされ候由驚き入り候只さへ物淋しき今日此頃み心の程偲ばれて時ならぬ時雨にそでぬらし申し候きぬ子樣よ世には父なく母なくはた兄弟なくひとり路頭に迷ふみなし子あり又病持ちながらくすしの手にふるゝさへかなはずあたら望ある身を持ちながらうらみをのみてはかなくなりし物さへありときくさるを君には父母こそおはされ世の常ならぬやさしき御兄姉君達お持ち遊ばされてくすしの君は云ふも更なりあれよこれよと厚きおみとり受けらるゝとかきくさへ有難きみ心ふし拜みし程に候ゆめ悲しき妥仰せ事なさるまじと存じ候さればきぬ子樣よお姉上のみ心くみてだも神はあなたのお病を癒さておかるべきかならず守らせ給へばお



心廣くお持ち遊ばされくすしの君の仰せ事よく守り給ひて一日も早く笑顏お見せくださるやうくれ〳〵もおねがひ申上候かしこ。

○歸省して都の友の許へ

京都　玉淳女史

紅塵萬丈の都の地を去つて今は青葉若葉のいぶせき庵に野を守る身とは相成り申し候、東山の美、加茂河の清はなくも後の山、前の川、皆我庭園の如く、甘き魚はなくも母が手料理の瓜茄子なかなかにゆかしう候今日蟬の聲もやうやう弱りかけたる頃八幡宮の松にハンモック打ちかけ落

棧敷などひもとき居り候ひしがあまりの涼風にいつかうつらうつら面白き園に遊び候て、ふと目を開けば蚊遣火の煙所々にのぼり、西の空に雲の一片、前のいさゝ川を紅に彩りなり候ひき、無才の身の御堅聞かむよしも候はねど、美の神、詩の神はこゝの川、かしこの山にもひそむにて候ふ、あゝ美しの里、平和の里、詩の里……。されど御許樣よ人生五十年の短きにかゝる山里に一日も暮すことのいかばかりか悔しう候ふて青春の血潮燃えては東山の青葉燒かむのねがひ、をりをり小さき胸をとどろかすにて候かし。

○親しき友に　茨城縣　永井まこと

嗚呼なつかしき花子の君よ貴還と花咲く四月かの八千代橋の上にて別れしは昨日の事と思ひしに指折りまげて數ふれば花咲く春も夢の間に星も變れば月移りて今ははやあぢさゐ匂ふて四閲月の昔とはなりぬ、嗚呼過ぐる月日は矢よりもはやく變る時節は水の流れに似たるとかや宜なる哉時に貴還よ今日このごろの暑を如何に暮し玉ふらんか定めて日頃の寒暑も忘れて學びの校舍にお勉めの事と推察仕り候妾事ひ恙く學の庭に遊び居り候故御安心の程を願上候時に君よかの雨の日風の日共に二人て通ひし其時共に誓ひし孝女白菊の御歌等想ひ出せば只々君のみ戀しう暮し居り候然るに今は離れ〱の西と北互に近狀を知る事かなはざれば願はくば君よ〱一筆を勞して芳しき玉章を惠まれよ、かしこ。

○月夜に歌會を催さんとて友に　長岡秀子

雲の絶より降り出し雨のうれしくも夕ぐれ時より晴れ渡り申候てひるの暑さもとみに忘れ申候をなほ涼しさをそへんとの心にか十三夜の月は山の端より照り初め申候芝生に結びし露にやどる月かげのたゞ〱黄金の玉打碎きたらんやうに美しく候折から木の葉がくれに友におくれし螢の一ツ二ツとびかひ申候ながめまたなくおもしろう候に獨りしてながめん事のいと本意なく存ぜられ候まゝよし子の君かたらひて歌會催して日頃の御手なみ拜見いたし度と存じ候御ひまにておはしまさばこの使のもの御供申上ぐべく候へは食後の御散步かた〱早々御入り下され度一刻千秋の思ひにて御待ち申上候とりいそぎあら〱かしこ。

○國元の兩親へ　豐前　花のや

日中は大分暑くなりました、此頃阿父樣や阿母樣にも御變はなく、殊に今年の麥のとり入れもよかつたとのこと、私も眞にうれしく思ひます、御送り被下いました新麥粉は同室の諸彼にも分けてあげました所、皆有難く御禮を申してくれと喜びました、或人の歌に麥の粉を口一ぱいに頬張れば思ふやうには言はれざりけりとありますから此位にしておきます、御察し被下い。

○兄上へ　駿河　天野ふじ子

兄上樣、兄上樣は此頃什麼遊ばしたのですか、毎日のお勉強とのみ承つて居りましたのに風の便りはよからぬ噂のかず〱、私は夢かと愕きました、誰もお存知ないと思召しませうが惡事千里を走る世否事柄のない事迄も言ひふらさうとする恐しい世なんですもの、私は兄上樣に限つては決して決して那麼ことはないと堅う信じて居ります、が隙間の樣ですが火のない所に烟立たずとか申します、どうか兄上樣元の兄上と成つて下さい、學校でも品行も成績も優等であつた昔の兄上樣と成つて下さい、『あなたの兄上樣は大變お出來になるさうですね』といはれますのが何より嬉しう自然と肩が廣い思が致しましたがあゝ其も一時の夢、兄上樣こんな事は千も萬もお承知でせうがお父上やお母上はもう日毎の老體、同胞はたゞの二人限り、春雄は可愛想に人の子となつて……今は何處の巷に漂浪して居りますかそれさへ知れぬと申します、其を憶へば安閑としては居られません、お互に杖とも柱とも成つて行末は春雄をも見てやらねばなりません、凭麼事をお存知ない兄上樣てはありませんでしたが……兄上樣とても青春の齡、其は誰とても同じ事私充分お察し申します、雖然今は大切な修業時、眞當に大事な時です、それは兄よ妹よと血を別けたはらからですわ、お成業の曉はかよわき女子の身乍ら出來得る限りはお力を添えまつりませう、がくどい樣ですが今は……ねえ兄上樣、朝夕に御成功を祈つて居る一人の妹をお忘れになりましたの。もう此で書けません、文章はどうにもいたせ、よもや兄上樣、血を別けた一人の妹が涙で書いたこの文をお捨てになりはしますまいね、もう一度申します、昔しの兄上樣と成つて下さいませ。

新歌謠

編輯局選評

三等

汽車で過ぎ行く箱根のふもと下りて取りたや女郎花　府下西多摩郡福生村　森田なか子

四等

時雨北から梅雨南から冬と夏との見舞水　奈良縣吉野郡賀名生村　中富よしみ

五等

高田白ゆきや語して來たが妻有峠は息がきれる　越後妻有郡十日町字十日町　武都子

秀逸

○萬刧變らぬ日月さえも折にや蝕時がある　京都市　島田千代

○私の村にはかみなり田とて植ゑるたびごと雷がなる　南總　錦作子

○平鹿地方は麝香が賣れるそれで砂蟲が防がれる　秋田縣　金澤參知子

自註　ケダニは最も危險なる害蟲にして年々此蟲に刺されて地下三尺に哭する者甚だ多し。

○秋の姫ます妙義の山はわしのさとからよくみへる　上毛　關口梅子

○紀州名物有田の密柑一つあげたや枝のまゝ　紀伊　紫雲女史

○誰の細工か器用な手際紙で折りたる鶴一羽　神田　鶴岡とく子

○對のお召て二人のお連れどれが姉やら妹やら　佐賀　西君子

○抱れた花ちやん一番好きよ人形みたよな髷見せ　盛岡　たか子

○風も重げな稲田を見れば過ぎた出水も夢のあと　千葉　田村歐子

○なつて見たいよ姿も一度百合のしとれを敷くように　伊豫　服部とめ子

○破れ袖垣縫ふ糸薄の奥に砧のさし向ひ　靜岡縣　大賀笑子

○秋がくろ〳〵お馬が肥へる二十萬石米を取る　上毛　關口綠當子

○夢は桔梗の面輪に覺めて何を秋雨さめざめと　京都　孤秋

○富山神通の小鮎のおすし喰べて御らんよ試みに　富山市　なつ子

○冬が來るとて落葉の下で葉守の神が涙ぐむ　福島縣　むら子

○月は東に日は西山に私も歸へらうか牛連れて　宮城縣　千葉いわみ

○最早しのゝめ別れに一度聲がきゝたいほとゝぎす　櫻花子

○生れ京都で學校は東京今は越後で桑を摘む　越後　きよの子

○蘆の湖水の鏡で今朝は富士も狹霧の薄化粧
日本橋　小林里子

○橋の欄干へ腰打ち掛けて月の明りてふみを讀む
下野　猪瀬梅野子

○梅雨もあがつたお苗もうゑた今日は胡瓜の初ちぎり
丹後　賤の子

○起きよ妹庭とぶ螢籠に集めて草をやろ
仙臺　文子

○村の少女が田植の時に今年しや歌ふた新歌謠
阿波　西野恒子

○汽車も電車も知らない里にやいつも平和な風が吹く
信濃　山湄　みどり子

○月も今宵の別れを聞て泣てくれたか草の露
長崎　愛矢玉蘭

○麥も刈り込も田に水も引こほんに多忙い田植どき
沼津　渡辺とよを

○遠賀土手から中島見れば黄金畑に蝶が舞う
筑前　青葉女史

○水や空なるオコツク海に見ゆるは鯨か海賊か
伊勢　坂西野

○わしが歳だけ咲いたと妹垣の朝顔数へてる
小濱　山中露子

○眠い晝寢に草刈少女涼しい聲して戀の歌
京都　今西富美子

○花を咲かせた俤みえて姿やさしや櫻ん坊
中谷　近藤くら子

○百合になりたい深山の百合にちりの世間をよそに咲く
羽前　紅子

○吉田山から京の町見れば西洋造りの家ばかり
京都市　中川濟子

和歌山市　神保須磨子

○都て生れて山家てそだち今は氣楽な漁夫の妻
下野　三浦香月

○麥も刈り上げ田植もをへた私や之れからお針する
福山　工藤以津

○今宵七夕女神の星と天の川原に涼みたい
岐阜縣　丹羽文子

○飛騨の名物鹽漬け大根賤の少女の手て出來る
府下　粕谷縫子

○羽村上水玉川水はながれ〳〵てお茶の水
沼津　渡辺とよを

○ほんに見せたい都會の友に香貫山から出る月を
越後　うつせみ

○越後草生水源油の元祖鑿井機械塲五十餘り
静岡市　山口芳子

○富士もおらくよ電話やホテル私しや電車が出來てから
若狹　津田汐汀

○若狹名所の大門小門岩にさら〳〵女男波
小笠　福井靜枝

○わたしや遠州掛川生れいつもちやんきと葛布織よ
佐賀市　田中要子

○籠のカナリヤふり袖きせて舞はせたいぞや月の宴
仙臺市　河原榮子

○仙臺名所松島行は二度や三度てまだすまぬ
磐城　村岡敬子

○二十五反の眞帆を揚げて戀の船行く春の海
肥前　白[illegible]

○蟬は生れて七日が命聲の限りに泣てゆく
相樂郡　松田綾子

○妾は大原女榮實娘京は二條て日をくらす
土佐　大和田郁子

○琊琍松魚と名高い土佐も今は捕鯨の銃の聲

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

○救濟の聲

秀逸

相模　星月

わが愛する幼子よ。汝が母こゝにあり、我をみとめよ、我は汝が生みの母なり。汝わが懐を離れてよりこゝに二十年、汝は痛くも苦しみしよな。汝は戰ひ敗れたり、而もよく戰へり、汝は長く苦しめり。されど春は再び歸りぬ。汝今救はるべし。幼子よ、心を勞すること勿れ、恐るゝこと勿れ、疑ふこと勿れ、一度われにめぐり合ひたる以上は汝が憂は常へに止めり。我は汝が患をひき受け、汝が身を抱き上げたり。凡ての責任を棄てゝ我に與へよ、凡ての心配を擧げて我に托せよ。萬事を我に委して安んぜよ。我を信ぜよ、惡くは計らはじ。幼子よ、汝は己が心を淸くし、人の道を守らんが爲めに長く心を苦しめ之が爲めに絶望して煩悶せり。されど今は心を安んぜよ。汝が犯したる罪はわれ之を許さん。汝が不完全は我また之を許さん、汝はその行を正くし、心を淸くして來るに及ばず、そのまゝに來たれ、我汝を抱かん。汝はわが子なり。我にとりては汝は淸きこと花の如し。來たれ、我汝に接吻せん。汝は最早法律の奴隷にあらず、何等の束縛を有せざる我が愛子なり。汝は世の中の器械にはあらず。否世の中は汝が爲めにあり、汝はわが獨り子なり。幼子よ世の中は汝が爲めにあり、汝はわが獨り子なり。幼子よ、恐るゝ勿れ、汝は世の荒き風波のためにひがめり、されど、こゝは汝が母の家なり、只安じてわが愛を受けよ。

この世は苦しきか、堪へ忍べよ、そは束の間なり。われ今數年の後に汝を抱きとりて我が溫き伏床の中に常へに安眠せしむべし。死を恐るゝ勿れ、死は歸なり、わが懐にかへるなり、その時は汝は凡ての憂を忘れて心地よくねむるを得るなり。されど尙汝が日は殘れり、出でゝ働けよ。我常に汝が上を護らん。苦しき時は直に我を呼べ。われ茲にあり、直に應へん。若し世に飽かば、いつにても我が許に歸れ、我直に汝を抱きて憩はしめん。幼子よ、汝は何を欲するか。請へ、我汝に與へん。健全なる活動を欲するか、さらば求めよ、

示これを與へん。同胞相愛するを欲するか、愛せよ、我汝がために、親族、朋友を與へん、眞理を研究し、天地人生の趣味を知らんと欲するか、見よ、我之が爲めに材料を給せん。世界はこれ汝が爲めに我が與ふる所なり。

わが愛する者よ。心を痛むること勿れ。善き子よ、汝はわが心にかなへり。若し世擧りて汝を棄つるもわれ一人は汝が傍に立たん。若し、あらゆる艱難の汝が身に迫ることあるも、我は常に汝と共にあり。汝若し凡てを失ふもなほ我を剩せり、我は汝にとりて、限りなき慰め、限りなき望み、限りなき光なり、汝が今まで心を苦しめたることは、いと小さき事なり。罪惡汝を苦しむるに足らず、禍福も汝を患へしむるに足らず、死生も汝を恐れしむるに足らず。若し凡てのものを有するも我を失はゞ汝は禍なり、若し我を有せば、凡ての物を失ふも汝に於て何かあらん。況んやわれを有するものは凡てを有するをや。

幼子よ、信ぜよ、さらば救はれん、たよれよ、さらば安からん。汝はわが愛子、われは汝が母なればなり。

（評）此の敬虔の聲を耳にして戰慄せざる者幾人かある。

○愛國の本義

越後　白蓮子

至誠國に盡すの精神は國民の常に缺くべからざる所にして、此心の消長は以て國運の盛衰をトすべし、苟も邦家の利害を顧るに及ばずして常に自己の利慾のみに營々たることあらんには、何を以てか多福の境土を全うして天與の幸榮を樂むことを得んや、我日本國民は開闢以來萬世一系の　皇室を奉戴し、山河の秀美なる、氣候の快適なる、穀粟の豐饒なる、自然の靈土に棲息し、世界無比なる道義の中に養成せられ、國家を愛重するの思念甚深厚にして、幾千年來嘗て外敵の侵掠を受けたる事なく、尺土も夷族の蹂躙する所となりたることなし、實に宇内に誇稱すべき愛國者の標準なり、然れ共世人が漫然見て以て愛國心と稱する者に就きて仔細に之を觀察するときは、其中幾多相混同せる者あるを見る。

我心皓々雪よりも白し、富貴も之を誘ふべからず、貧賤も之を汚すべからず、我丹心は只國に盡すに在り、然れども我れに才幹なく器略なし、以て功を奏するに足らずと云ふものあらば、之を果して愛國者と稱するを得べきか、其心の高潔、其思念の至誠、固より可なり、然れども一事爲すなく、醉生夢死、此多事擾々の時に生れて其身を巖穴に槁死するの穩士となし、怯懦退逸自ら任ずる所以を知らず、空しく他人の爲す所を傍觀して畢生を消し、毫も國家に裨益する所なく、其心志は漠然として把るべき所なし、而して自ら稱して慷慨なる愛國者となす、未だ之を首肯する能はざるなり、此般の愛國者現今其人に乏しとせず。

丈夫の期する所一死以て君國に報ずるに在り、苟も我神聖なる邦土、友愛なる同胞に對して利ならざるもの

あらば、我は、一劍之に當りて邦家の犠牲とならんと云ふ者あらば、之を直に愛國者と稱するを得べきか、當今の時勢に通ずる所なく、事躰の如何を察するに及ばず、恐々の念を制して他日の成功を得ること能はず、一朝の情感によりて直に其擧措を決し、可惜身命を拋擲せるの結果は、其曾て期せし所に出づること少くして、却て千歳の遺憾を國家に生ずること多しとす、此般の士其念其勇見るべきものなきにあらずと雖も、其思慮の淺薄なる、自重沈毅、其途に由りて之を行ふ所以を知らず、已に國家に益する所なく、亦自ら期する所に達するを得ず、徒に其無謀を表白して嗤を後世に貽す、世人此徒を目して亦愛國者といふ。

以上の二者其心思の至誠は乃ち在り、然れ共自ら盡すの勇なく、之を爲し期望を達するの智なくんば、國家に對して益する所なし、已に其爲す所、邦家の隆盛富昌を増進するに足らずんば、愛國の要何れの所にか在る、其思念の正明何れの所にか見るゝを得ん、苟も一國臣民として其本分を全せんことを期せば、一意純誠大義を重じ身命を以て國家の犠牲とすべきの事固より言を俟たず、而して其事に當り物に接する、輕躁急激に出でず必ず事躰を明察し、自重深慮、常に思を國家の利害に置きて其擧措を決し、一朝の瑣事に拘束して全躰を過るが如き事あるべからず、而して器局才幹は素より萬人の常に等しからざる所にして、苟も其正意に基き邦家の萬一に報ぜんと欲せば、四海の中何れの所にか其事なからん、其位置の朝野に論なく、其業務の如何に關せず、其功を收め其業を遂げ、以て邦家の福祉を養護する者皆愛國者にあらざるはなし、生を煙波に托して終生を漁舟に送るも、日夕忙匆牙籌を執て市に立つも斧鉞を執て園圃に勞するも、此念此行皆以て愛國者たるに背かざるべし、彼の毫髪の間身を挺して國家の安危に投じ、或は世局の大難に處

梅雨中の飴屋　豐橋　白井つな子



して邦家の運命を左右するが如き盛名高聲隨て至る、然れ共此般の事實に萬人中の一人、千歲一遇の事にして、未だ之を以て報國の標準とすべからざるなり。抑も今日吾人の勗むべきもの一にして足らず、邦家富盛の根源たるの農商工業を擴張し振興し宇內に立ちて能く神州の光威を輝かしむるの本を培ひ源を養ひ、順を追ひ序に隨うて其期する所に進まざるべからず、彼れが强盛を羨み、彼れが驕傲を憤り、枝末の瑣事を模倣して直に彼に對比せんことを圖り、或は倉卒の間に平常の憤懣を洩さんとするが如きは、之を愛國者の擧動とは爲すべからず、上　君上の洪恩に報ひ奉り、下同胞の福祉を增進し、邦家を富岳の安きに置かんと欲するもの、千挫不撓挫れて後止むの心を以て其力を極め以て我臣民たるの本分を盡さば復遺憾なかるべし、國民此心ありて國家以て安かるべく、國威以て重かるべきなり。

（評）愛國の意義、略々論じ竭したり。

○音樂の價値

奨澁　育英女史

音樂には聲樂器樂及兩者の結合の三種あり其種類に至りては時と所とによりて千差萬別ありと雖其成立する根本に至りては即ち一なりこれを韻律と稱す韵律は一定の規律に隨ひて整齊なる繼起を成ずる事物存在の樣式の變化なり宇宙何物かこの遍通的定律の外に逸するものぞ大は天體の運行より小は分子の運動に至る迄時間活動をなすに於て必ず準矩すべき軌道たり而してこれを醇化して其精華を現じたる者は即ち音樂なり。

音樂の用は實に審美的感動を養成するにあり主として性情を優美高潔ならしめ又これに和する詩歌は天地の自然を詠じ人倫道德を唱ひ國民の歷史を賦し國粹元氣を表するを以て善を進め眞を啓き以て意を養ひ智を進むべしこの故に眞に其妙味を覺らず天地を好愛し人世を享樂し以て其身を治むべし況んや此等天然の美音妙聲を調和し其幽を採り玄を穿ち糸竹管絃金石を以て律呂に合し寓意含情の詩歌を以てこれに唱和するに於てをや詩意歌情聲永く律呂八音克く諧ひ鬼神も爲めに泣かしむべく天地もために感ぜしむべしそれ唱和合奏しては團結の志を强くし士氣を皷舞し愛國心を振起せしめ以て天下を治むべし音樂の人心に於けるそれ斯くの如し其影響や果して如何眞乎善乎美乎これプラトーをして音樂は根底より改造する力ありと定められたるものなりと公言せしめし所以なり。

音樂はかくも人心を感動せしむるのみならず又教育上密接なる關係を有す今や宇宙萬國少しく教育に注目する國は音樂の必要を感じこれを奬勵せり我國に於ても之れを以て國民教育の教材として又音樂學校を興して頻りに研究改良せり然れども音樂其のものゝ發達尙幼稚なると又從來一つの娛樂的遊戲として玩弄せられ調下り詞卑しく遂に社會の耳朶をして其眞美を知らしめざるを以て未だ十分に普及せず隨て十分の好結果を見

る能はずと雖學校敎師として世にたたんとする者はひとしく音樂の必要なるは言をまたず。

されば將來敎育者として世にたたんとする者はひとしほ此道を修めて敎務に從はざるべからざるなり。

○我が希望

兵庫縣　荒木英子

人として誰か希望のないものがございませう。彼の武人が身をきる冬の寒さもあら貪もさける樣な夏の暑さも事ともせず其の業を務め勵むのは國を守り仇を防がん爲てあります又農夫の春夏かけてのいそしみはやがて來ん秋にはみのりよき收穫を得んとての事て御座います文學ぶ子供達が雪に螢にいそしみ勵みますのもやがて、譽ある月の桂を手折らんとてのことてございませう。

我等が戀しき故郷を後に慈愛深きたらちね愛らしき妹親はしき友垣を打ち捨てゝかく遠く異境の空に遊學するのも遙かに遠き希望の光りの許に達せんとての事てございます私の希望は他でもありません敎育者それなのでありますす然し人生と云ふものは計られないものですから一秒先の事もどうなるか分らないのでありますけれども人と生れて此の世に處して行く以上は計られない先のことも定めてそれに達する事を計るのが我々人生の義務なのでありますて我が志に適へる此のまなびやにある中は刻苦專心此道にいそしみ勵む積りて御座いますて首尾よく本校卒業の上はいよ〱此の道奧深うふみわけて何ても一つ柗舞臺に乘りだす積りで御座います元よりさかしからぬ私のことと御座いますから或人は大きな事を思たつてと嘲けるかも知れませんあざけるてせう？さつとあざけりますても私は一寸もかまひませんよいと自ら覺つた所の方針て以つて何處までも進んで行くつもりて御座います。然し旅路は中々に遠く希望の燈明は遠き〱波路の末なのてありますから其の間險しき山地さかしき谷間道は九折になつても其れ等の事に打ち勝つ事の出來る樣な精神修養並びに身躰を鍛錬する決心て御座います。

○人と境遇

大阪市　辻廣子

一世を風靡し、千載の後人をして欽仰欽慕に堪へざらしむる偉人傑士は、果して如何なる境遇の裡に養成せられしか、如何なる境遇を以て感化せられしか、余は是等幾多の人士の經歷を讀み、其言論を聞きて、世界に於ける有爲の人物は、概して困窮の境遇に人となり不如意の天地に育成せられし事を知れり。

夫れ人は感情の動物なり、高尚なる理想を有する生物なり、既に人は感情の動物にして、理想に秀てたるものなれば、其接する所の境遇によりて、其見聞する所の事物によりて、精神の動搖多少の感化は免れ難きは亦數の免れざる所なるべし。是れ炎熱にして天然の食物に富む熱帶地方は俊傑に乏しく、勞働を務むに非れば生存し難き溫帶地方に有爲の人士の多き所以にして、又富貴の家に賢者小なく、貧困の家に多く傑士を生ずる所以なるべし、夫れ人情富めば奢り、貴ければ傲り、貧にして窮すれば心志自から堅固に、剛毅に、忍耐奮勵の氣慾は期せずして起る亦理の當然なり、蓋し驕傲奢侈は滿足の前兆にして、小成に安じ、勤儉の美風を壞り、終に醉生夢死せしむるに至るなり。是に由りて之を觀るに、滿足は實に吾人の敵なり、實に惡魔なり、而して此強敵を養ふ者は即ち彼の富貴なり、嗚呼貧窮決して歎くに足らず、不如意決して怨むに足らず、何者の痴漢ぞ、敢て貧賤を歎じ不如意を怨む古來英雄は貧賤不如意の境遇より蹶起したるもの多きを見ずや。

短文

編輯局選評

三等

○炭礦

佐賀縣杵島郡北方村　橋口御幸子

妾の村は石炭に富んでゐる處で一萬餘人の渡世す御錢は皆深い／＼地の中より堀り出た物です二六時中運轉の稀絶え間なく夜に入りては數千の電氣燈が闇を照しまして貝實に都に居る心持が致しましたが今日では炭坑も停止て家は解け一萬餘の坑夫は思ひ思ひに去りました。

遂に底無き礦坑を發見せざるべし

四等

○雜司ケ谷

牛込區市谷山伏町二〇　泰　治子

雜司ケ谷は秋がよい、森に夾まれたみ社の後は黄金の稻田、七草の武藏野を越えて遙かに秩父の翠黛も見える。狸囃子こそ聞えないが團扇太皷のまに／＼に小鳥の鋭い聲が黄ばんだ雜木林から聞える、名物は燒鳥と田樂、すゝきの木兎の玩具もあります。

女子大學への通ひ路

五等

○朝

廣島市中島新町四十八番地　田村　ふみ

朝ほのぐらい内から起て顔を洗つて居ますと昨日のお客樣が起てこられたので、おじぎを致しますと根がゆるかつたので束髮ががつくり前へさがりました、するとお客樣は何か落ちたのかと思はれて、やッと云はれました。

ハアさうですか、何も落ちませんでしたか

秀逸

○時計

羽前　鈴木杉葉女

妾は時計のネヂを締める役に定まつたやうなものでお掃除のときとお針持つ時は必然締めて置くのです、だか踏臺を据えねばなりません若し一寸踏臺の見附からぬ時などは、せめて伸びても手の屆くやうに早くなりたいと思ひます。

時計の廻る間に伸びます

○球磨の霧

肥後　津越靜榮

朝早く起て雨戸を繰明ると夕べ方迄家の前

に明瞭と見て居た城山や水清らかな球磨の流も一面薄鼠の靄に包まれて恰大空の雲の中に翔上た樣な心地がしますやがて下りの舟が一二艘櫓の音静に現れるかと見る間に影坊師の如く舟歌のみ高く殘して消えて仕舞ます。

闇の底に九州あり

○妹の靈　愛知　永田舞鶴子

今宵は、逝きし妹の靈祭を營むべく、手を清めて、輪燈を灯し、香を捧げぬ。靈前の灯は、淋しさを含みて、香爐より出づる白き煙は漲りぬ。手向し白萩には、窶し蚊の、身動きもせてとまり居りぬ。

あはれ

○花の色　本郷　朝井千とせ

始めて我が庭へ植ました時は、淡桃色と濃桃色と眞紅との三種で有つた花魁草が年々咲き漸たまる度に淡桃色は濃桃色と成り、濃桃色は紅と成り、遂に五年目の今日では全く眞紅計と化して仕舞ひました。

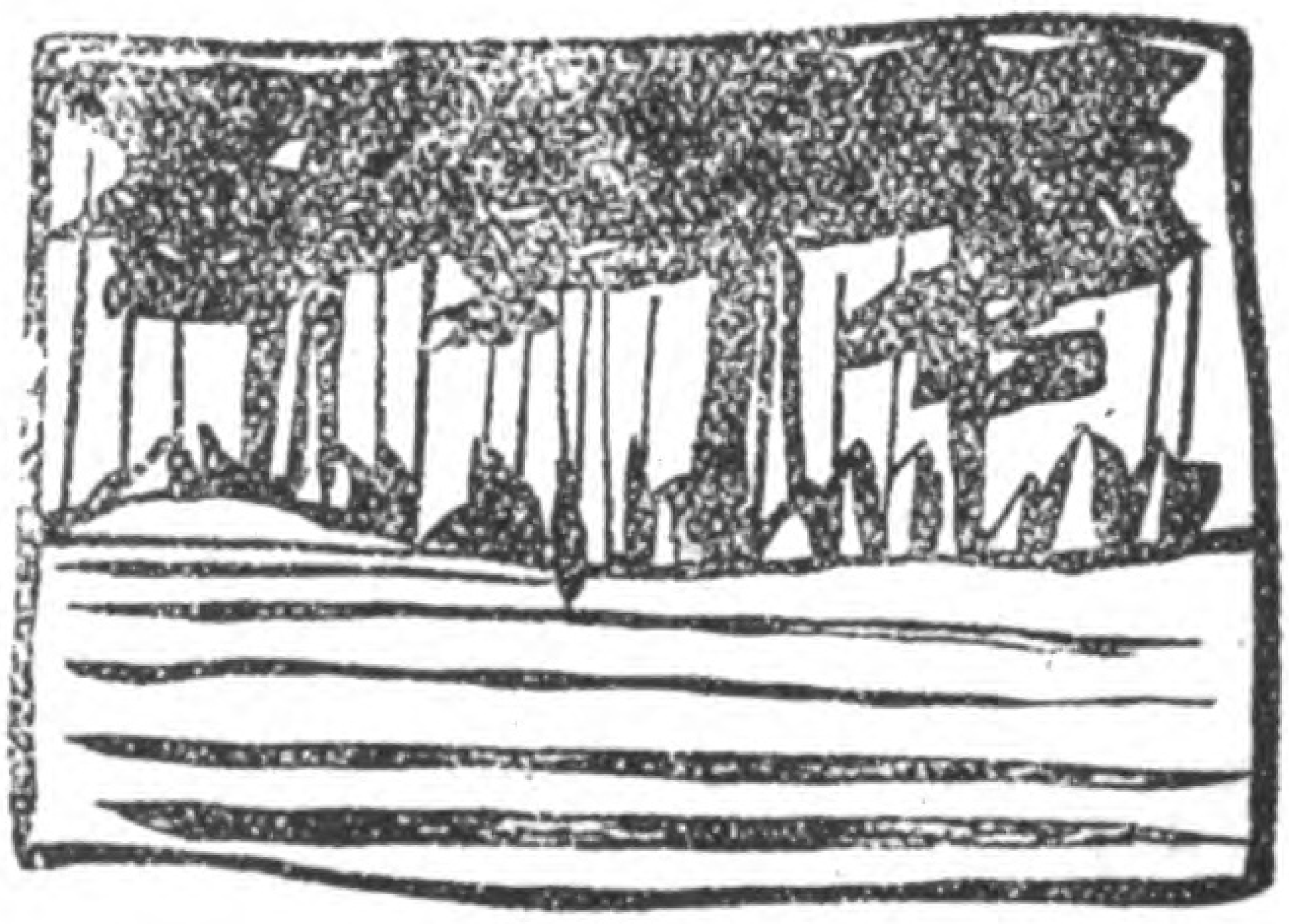
花の惑化

○粟守　伊豫　苔の花

舊暦四月の末に祖父樣を助けて二畝の畑へ蒔いた粟此頃頭重げに實りました好い餌に有り付いたと云はぬ計りの雀が來て食べて終ふので私今日から粟守よホーイホーイと鳴子を引いてはらはらと飛び立つ村雀を見やつてこれは祖父樣が玉汗の粒だよう……

田舍娘、覩るが如し

森の雨　尾張　長司春子



○石狩川の朝　北海道　篠原靜枝

美くしい秋の朝、妾は愛犬ペスを連れて石狩河畔を逍遙する。日は今！石狩岳の頂の、神社の鳥居に懸つて――その卵色がキラキラと河上に反映する折から！江別行の河蒸汽が、ボーと汽笛を鳴らしてやはらかに水を切つて――東へ！東へと――。

○小さきリボン　神田　葉末露子

今朝あまり暑いので前の小川の清い流れて洗濯して居りますとお隣の花子樣がいらしつてマア貴女のリボン實に小さいね、アラ私今日はリボンも何も揷しませんてしたのにとそと手を上て見ればマア何時の間に止つたのてしやう白い胡蝶がひらひらと飛び去りました。

活動の曙光

○わが名　ゆふがほ

待ちに待つた一枚の掲示が貼られる、我も人も一時に其前に集つた、不安の目を擧げて順々に見て行く、あはれ我名は無い、もしやとも一度見る、いよ／＼無い萬本の冷い針はさと一時に全身を刺したかの樣の心持嬉び轟動む人の中を掻き分けて我は靜に引き下つた。

あゝ落第

○庭の果物　小石川　北澤ふさ子

私は果物が好きて、庭に、柿、ざくろ、いちじく、ぶだう、桃の木があります、之を食べるのが何よりの樂みて、今年は、ぶだうと桃が澤山出來たので、あきる位たべました是からは柿を食べる樂みがあります。

梨も植ゑたい、枇杷も植ゑたい、栗も植ゑたい、橙も植ゑたい——

○新世帶　和歌山　小みどり

蚊帳を釣る紐がないので恥さを忍んで御隣から鐵鎚と釘とをお借り申し今朝共に滊車てゆられてきた行李の底を探つて紫の帶止二筋に赤手繦二筋を取出してまに合せの釣手をこさへました此日の日記が面白いのです。

其日記は見せないてせう

○靜かに暮れる　小石川　奈美木翠

さら／＼と音して流れる岸て大根を洗ツてゐると葱の折れたのが流れて來て大根に懸つたソットそれを川下へ投げて向ふを見ると泥の大根を多量繩もかけず重そうに土橋を渡ツて車が黍畑に隱ると延命寺の暮れの鐘が眠むそうに響いて岸の萩がホロ／＼と水に翻れた。

鐘は野に、水は都に

○あはれ鶯　仙臺市　岩田よし子

家に飼ふ事三年一度逃て籠に歸つてから病氣になりました其は今まできゆうくつな籠に居たのを急に廣々した處へ出思樣に物を食べたからです餌は少しも食べず體をふくらかしてばかり居りましたが遂死にました私は丁寧に紙に包みお線香を上げ川に流しました。

生活の變化

○夕の聲　四谷　小山那香子

美しく染まつた夕燒雲が、だん／＼に薄れて了ふと、遠くの森はまつくろになつて、其上に宵の明星がうつすりと輝きだした。人の世ては大路を走る電車の響、小路をうりあるく豆腐やのラッパの音、それを呼びとめる女の聲などが、騷々しくきこえて來る。

根ての闇を恐るゝ翠

○裏畑　丹波　難波あいの

四十六本の南瓜皆に、美しい光りを添へた、黃金の花が、夕日に萎て終うたは十日前。今て六十の大南瓜が

ぶらり〳〵、葱は尺にも餘らんず勢、朝毎には三十色の朝顔が露おきかえて、夕毎には、ひさごの花が夕顔に劣らず、とうもろこしは、通る人の目を引く斗り、此畑は、今、糸瓜の花盛てす。

八百屋が出來ます

○住めば都　下總　女　郎　花

私の家は水塲で毎年のやう今頃にはきつと水がはいりましてひさしまてもかくれてしまひますの今年なぞは尙二階の屋根が一寸水に浮いて居る樣でしたそれても住めば都てこりずに住んで居りますのよ。

何處か水の都火の都ならざらん

○葡萄の下　有馬　鈴蘭

海老蔓の葉蔭涼しい棚の下て詩集を繙いてゐますとぼとぼと頁の上に露が滴りました、何かと思つて上を向きますと今まて葉の繁みに隠れて居つた紫や薄黄な水晶の總から滴つた甘い雫てしたあまり美しかつたので葉と總とを寫生して友に送りました。

藤村詩集

○女子事務員　芝　白　羊　子

三百口座の元金五萬圓餘、男子の方と同時に初めて、自分の方先に、一厘の相違もなく寄せ終りし時。課長室にて昇級の辭令を受けし時。月末俸給全部を母の前に出して、母の顏を見る時。(何故か母の眼は此時曇つては居れど)。

未來の判任官

○別莊　三河　今井　初子

後は三河連山前は白妙の布引いた樣な砂の上を深綠の色も床しい松が配合よく其處をはい上る樣に波が寄せて來る蒲郡の海岸向ふの並木の燒き塲をこわして其處に別莊が建つと云ふ事來年の夏までには立派に出來上るであらう

燒塲の跡が別莊となる、抑も何代の榮華ぞ

○萩語り　大阪府　中道　萩子

私は萩の花てす目をさますとすぐ紅葉の老木のとこへいつて御話をきゝまする内に妹の朝顔姫や弟の雞頭も來て一緒にきゝます日は東から私共をてらしてます御惠深い孃樣はあまりあたゝかすぎて美しい花は咲かないと云ふて水をかけてくれました。

露姫のいとまごひ

○野菜畑　石狩　繪澤　源子

南瓜、西瓜、つけ瓜、大根、人參、午蒡、茄子、玉菜、つけ菜、玉葱、なた豆、馬鈴薯、なんばん等、一反足らずの背戸の畑に、母樣のお丹精てよく育つて居る、仲にも南瓜西瓜などは、四尺圍り位のが、其所此所に

ごろ〳〵して居る。

四尺は少しかけ値ありさう

○七つの扇　　下谷　赤堀　久

ハンモックの上に揺られ〳〵いつからうと〳〵となつたと、急に逸がガサ〳〵してヒラ〳〵〳〵蝶の様に舞ひ出た金地銀地の七つの扇。七草の花の一つ宛模様についてるのが幽かな歌の調子につれて開いたりすぼんだり。あゝ美しいと思ふ其とたん、惜しい夢は破れてしまつた。

夢の花

○隣りの家　　南葛飾　紫　葉

お隣家は建て方もよくお庭も廣くて眞に立派でありますが年中罵り叫び合ふ聲が絶えないので何時往ても不快てなりません或朝椽側の雨戸を明ると、いつの間に垣をくゞつたのか向ふの朝顔が我庭てにこ〳〵笑つて居たので私は思ひました花も平和の家庭を好むかと。

隣の家は今に滅びん

○女の名　　鳥取市　由谷　品子

私女の人の名て、石ころのやうに澤山ころ〳〵ある名は大嫌ひよ、何だか有難みがなくつて安つぽいのですからね。

お松、お竹、お梅

○やさしい星様　　越後　白菊　子

夕涼みの袖をつゝみし夕暗に驚いてまゆを上げし時、東の森の上にやさしい星様が一つあらはれました、その中に松の木間が紅うなつて美しい月がスツト出ました、まあ星様は何處へ月様を御案内申すのでせう。

四行お御斷

○越後一の宮　　越後　日下さよの子

神が甘露の玉を集めて流し給ふかと思はるゝ淨き小川に身を清め、緑の雫が滴ろ様な老杉の下を辿りつゝ行くと、白大の赤き鳥居、其右に「皇族下乘」の制札我國を慈くしみ給ふ　伊夜日子大神は此奥に在しますのであります。

○家内の聲　　呉市　流　水

兄上の御聲は軍人聲母上は金切聲弟のはかんしやく聲そして妹はあまへ聲糸やの聲は猫なで聲父上の御聲は……鶴の一聲。

○嬉しき知せ　　八王子　加藤百合子

湯あがりの心地よさに、しばし庭を歩いてゐますと、妹の玉子がにこやかに駈けて來ました。

「姉さん綾ちやんが歸省つてゐらつしつたよ」

綾ちやんは東京の女學校に行つてゐらつしやる無二の友だちなのです。

○電　氣　　芝　利　女

今我家の電氣が俄にきえました。おもて通りの店を見たら皆きえてゐます家に歸へつたらぱつとつきました。

○鳥と木　　大阪市　藤井しな子

私は三羽の小鳥と二十びき餘の金魚と植木とをもつて居ります。朝ははやくから小鳥の餌や植木に水をやつて學校ゑ參ります歸りますと

金魚ばちに水を入れ植木にも水をやります。そして小島の聲や植木の成長するのを見たり聞いたりするのはまことに樂しくあります。

○慧星　京都市　淺野つね子

東を見ると如意ヶ嶽の上へ慧星が出て居ました父は慧星の事を委敷お話下さいましたが不思議は日淸日露戰爭前に顯れたそうですそれから思識な人を澤山お聞かせ下さいましたから若しや戰爭がおこれば看護婦にして下さいとお願ひ致しますとお褒めに預かりました。

○雨の日　佐賀縣　春夏女史

私達の所は昔から、雨の日に髮を洗へば親の死にます場に合はないと申します。もとより眞實か如何か判りませんが子の心としてどうしてそむかれませう。殊に女の身です。

○西窓　水戸　海棠子

朝とく起きて二階の西窓を開くのが一番樂しみてある目の下は葡萄棚があり實は大きくして今や熟せんとする彼方は稻穗の十日程過れば刈り取られんとす。

○朝　鹿兒島　花の舍ゆかり女

多賀山の方が明るくなつて松に宿どまりをしてゐたからすも啼き渡り家のにはとりが吠をうたふころ起き出て井戸の水をくむのが毎朝のならはしてす。

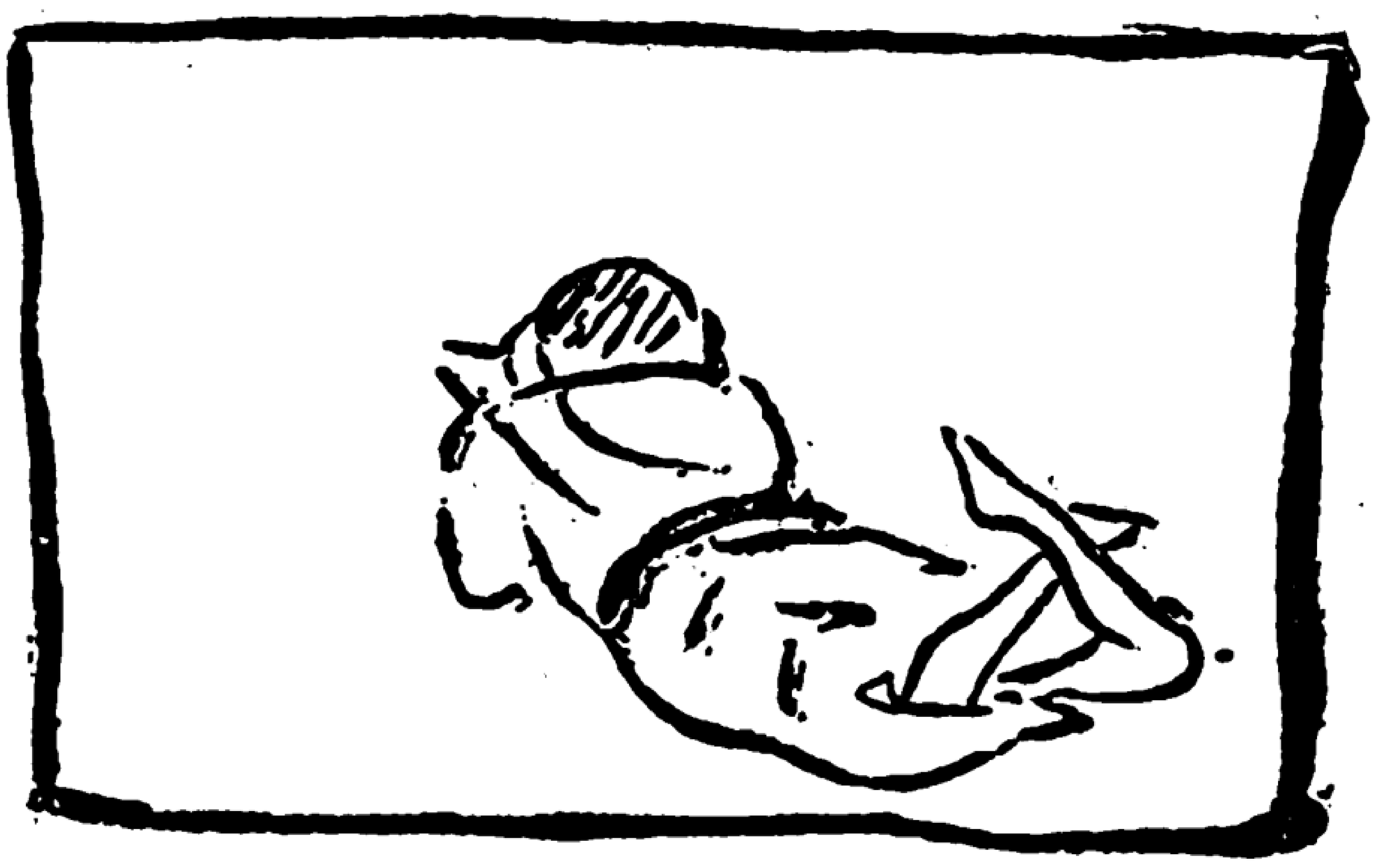
○初子持　日本橋　秋水子

あら旦那島波御覽なさいよこの子が笑つてよほゝゝゝどれ一寸已れに抱かして與れ、おゝ坊やはほんとに可愛いゝな、と櫻の蕾の樣なふつくりとした、あたゝかい頰に接吻したあら島波そんな事すると泣いてよと、未だ云ひも終らぬ内赤兒はわつと泣き出した。

○白百合　近江　露草

或時旅行をしましたら人跡絶えた物凄い岩の間に一人淋しそうに咲いて居る一輪の白百合がありましたあゝ此樣な所に咲いては人も蝶も其姿を知らないでせう此氣高い麗なる姿のたゞ朽つるを花は望んでゐるでせうかと私はとる手をためらひました。

弟の讀書　長門　白石壽子



○卒業生　伊豆　上原雪子

私しの村は戸數二百五十五そして高等小學校の卒業生は二十五人ありますが其の内女子が十人ほどです又中學校卒業生は六人私しの兄樣は今年四年級になりました女學校の卒業生は僅に三人私しは今年二年級に漸くなりました。

○姿の想ひ　大和　小川たま子

星の光を蓮に解いて、それを百合の香りに練り、美い何鳥かの音を吹きこめて、髮に瓔珞、頭に首輪、腕に輪かけて、あら白雲に乘つて碧瑠璃の空を飛んで見たい。

○七月十三日　秋田　湖星女史

舊曆の七月十三日の夜は、星も天の川も天下ると言ふ昔例であると言はれましたから、今年の其夜、募盆の戻りに、仰見たら、見えませんで只、星のまばらに散ふるに好い福てした。呼々この星等は世から捨てられた星てはないか？と疑ひましたのよ。

○村の慣習　栃木縣　千葉夏子

私の村には妙な習慣があるのよ入月十五日の夜子供等が三々五々とつれだちて藁てぺんけの樣な形をこしらいて家々の庭をぽん〳〵打つて色々の物もらひます其の歌は大麥あたれ小麥あたれ三角ばつたそばあたれぽんぽん。

○妾の家　上野　小暮たつ子

妾の家は、前は水晶のような淸水が、さら〳〵と流れて居る小川で、裏が青田で左が桐生街道、右は松て名高い金山て、時々淸き松風が、スウーと吹いて來て暑さをしのぐには、至極適當じて居ります。

○長短　紀伊　西よね

長うて待遠いのは兄さんのお卒業と信ちやんの消息、面白うて長いのはお父様の口髭、嫌に長いのはステーシヨンの半時間と女子文壇の發行日短いものは蜉蝣の命と朝顔の花、試驗場の二時間と日曜の一日、亦長くて短いものは人の一生。

○はたらき　　讃岐　東　雲　女

夏やすみ中は海老茶袴を細帶とかへて日々むすやうな暑さの日も雨のふる日も休む事なくお饗の手傳をいたしましたそれは苦しいこと一通や二通ではありませんでしたそれに御母さんは笑ひながらそれでこそお金の價がわかるんだつて。

○なき時　　京都府　有　野　貞　子

本屋へ行つて女子文壇を買ふてもなき時、投書をしよと思ふて考へても文句の出なき時……原稿を出そと思ふにも二錢切手のなき時……なんぼ投書しても本誌に出なき時……又夏の日夕立に合ふて傘のなき時……

○土用干　　上總　紅　葉　女　史

この村はづれの藁屋の窓の外は、南瓜の花、西瓜の花庭には朝顔の花、夏菊の花、椽から座敷は手織木綿、絹織、縮緬など、繻子の襟緋絹の襦袢に渡してある家内の皆は姉さんの麥炎と妹は着物のけんくわ。

○虹　　羽前　湯　村　靜　枝

今しがた雨が止んだ計りであるに、弟はもう外へ出て行つて了まつた。妾は讀みかけの「舞姫」を机の上へ直して坐はらうと思ひますと、突然表路の方で「虹ッ虹ッ」と云ふけたゝましい音が起りましたから、妾も出て見ると、今迄稀に見た鮮明然と大きく、鎭守樣の森からヅーット美代ちやんとこの大きな椎の木の蔭迄。

○いつきいても　　横濱　吉　川　香　都　子

いつきいても、うつとりするのは、村の市達の追分節。
いつきいても、淋しいのは妙心寺の鐘の響。
いつきいても、忙がしいのは、水車の廻る音。
いつきいても、なつかしいのは、父上母上のお聲である。

○仕　事　　仙臺　岩　田　よ　し　子

向ひの猗子樣は琴の稽古に熱心で今にゆるしをうけて師匠になり右隣の文樣は朝から夜まで一生けんめいに人の御針をしてお金を取り左隣の花樣は小說家になるとて毎日青い顔して机により考へては筆を取るに熱心で皆が仕事があります私も是からしやうと思ひます。

○冷　汗　　上澁谷　小　池　葉　留　子

田舍とは云ふものゝ眞晝は熱いので、明神の森へ釣床を持て行つた。恰好な樅と杉とに釣して乘つかッた心地たらない。水の音と蟬の聲とが妙によく合奏して詩集見つめた眼が重くなッた。不圖、顔に落ちたものがある夢が醒めた。見ると一寸計の靑虫！。

○菊の花　　上總　四　之　宮　り　や　う

昨日からはげしく降つてゐた雨が今日やんだので、小庭に出て見ると、それはそれは庭一面に、菊の黃色の花が浮んでゐる、あのよい香が、此の水がひたら地から香るであらうか。

○初百姓　　靜岡縣　志　ら　ぎ　く

此間母樣と蒔たお菜が五日目の今朝姉樣の着物の形に似た二葉の愛らしい芽をだしました、まあうれしいではありませんか、これから毎朝この愛らしいお菜の世話をして學校へ行くのです。

○お辨當　　美濃　白　露　女　史

十二時が打つと、いつも兹のお辨當を持つて、學校においてなさる兄樣の所へ、持つて行くのですが、忙がしい時には、つい遲くなつて一時にも二時にもなる事があります、すると兄樣はいつも硝子窓から外を覗いていらつしやいます。

○あゝ夢　　廣島縣　勝　丸　り　よ

枝折戶出ずれば稻穗の露、袖を濕ほして、何となう心爽やかに、虫の聲をふみ分けて見し事もなき靑海原に出ぬ大浪、小浪、朝日の麗き光を浴して金色にきらめく浪間より白き衣召す女神の、丈なす綠髮美しうたれて出ましぬ三日月の眉屋の胖我は恍として見とれぬ、

○うれしさ　　駿河　白　菊　子

うれしいうれしい明日は海水に行くの、其仕度て姉樣は一生懸命海水服のお仕立、苦勞性な母樣はそんなものを着て水に這入たらさぞ重からう

と大心配、弟が突飛にバンカラだなあとさけんだ、ワンがお庭でワン。

○柿の孤兒　　名古屋　徽子

御庭の草をぬいてたら、雑草に混つて小さな柿の木を見つけた、よくまあ親木を離れて之まで成長したと思ふと、いぢらしい以後は私は親木に代つて可愛がつて、早く一人前に成る様に世話をしてやりますよ。

○空席　　とみ子

私が歸省する時のこと汽車は滿員で掛かれませんでした丁度その時私の前に腰かけた人が立つたのですゆとそのあとに行てすまして居たら前の人は又私のところにかへつて來たので私は又元の立ちんぼう。

○稻田　　下野　小川美喜子

赤い襷に白地の手拭、笠も帶も新いはでな姿は殊に、年増も昔に若返つた様ないゝ聲で朝も早いうちから田植歌を歌ひながら植た田は、みな黄色に實つて其の上を秋風がさわ〳〵と吹てゐる、いま鎌を手にして來た人々は穗を掴いて見たかと思つたが一生懸命に刈始めた。

○悲しい時　　京都　辻愛子

わたしは大體ヒステリー性ですから一寸した事がすぐ氣になり自然涙が出るのですそれでいつも其様な時には其事情を紙に思ふ存分かくのですすると少しはうすらぎます近來は大そう少なくなりましたが而しやはり三日に一度は蛇度かく事があります。

○白百合　　美濃　紫子

水晶の宮、深く秘められた紫の帳が薫風に揺れ、漸々淡らぐ頃、月の女神は白衣の裳軽く、幾の御階を降りまして苔の香も溶けた様な谷間の眞清水を掬び給ふのです。そして其時、梳り召す濃緑の御髪から、ハラリ響が落ちて、白い百合花は咲いたのであります。

潮時　　牛込　岩谷緑子



○夏の野に立ちて　　信濃　秋の少女

森より森に、背丈を分けて流るゝ細流の響も若人の抱ける夢の調とならば草花に結べる眞玉の露は、青春燃る少女の美くしい涙であろう……そして、葉末の露の宿にこぼるゝを、詩である。歌である、と私はこう思つた、

○病院の夜勤　　横濱市　佐藤若葉子

東の空がしらんで來ると、交代に白衣のまゝ朝風に吹かれつゝ植物園に行き、百花爛漫と咲き亂れたる朝露の中にて半時間程深呼吸をして、歸りに彼方此方と露ふみ分けて二つ三つの花を手折り、患者の枕邊にさして樂ませるのが私何よりの愉快です。

○玉と花　　小石川　未成女史

私は男の兒が好きと云ひますと、兄は女の方が可愛いと申します。私がその理由と申しますと兄はお前は何故と反問します。男の兒は玉の様だからと答へますと、兄は花の様だからと調戯ひます、そこへ母樣が入らしつて、それはどちらも可愛いのだと申されました。

○日本海　　山形縣　志ら浪

妾は今裏日本の海岸に立つて居ります、十丈の浪は前に逆立つて、ゴーッとくずれて、飛沫眞白く砂を殘して退く間もなかつた妾の足許まで來て下駄の鼻緒を一寸ぬらして、ザーッと其まゝ砂をひいて小石をひい戻てります。

○妾の理想　　福岡縣　夕雲

妾は八歳の春母に逝かれ十一歳の冬には亦々父に死れ今では或る人の情にて奉公をして居る迄て不幸な卑き身てす、それでも、やつぱり理想は

あるのです愛國心に富だ御方に連れ添つて男兒が出産れば軍人に女子なれば赤十字社の看護婦にしたいのです。

○朝顏　栃木縣　鈴木まさ

春中弟が植た朝顏が今になつて垣根にからみ付毎朝花が澤山咲きます私は其を樂みて朝早く起られます今朝も樂んで起て見ると白紫赤桃色等の花が揃つて人待顏に咲て居て恰度おもちやの喇叭店の樣です其を買に來るのは蝶々や蜂なので商が大そう繁昌する樣に見えます。

○此の親子　廣島縣　今西初子

おとなりの牛が田に行つてる間に、其子を賣つてしまひなさつたの、そして夕方に牛が歸つて來て子が居ないものですから、其夜も其明けの日もほんとうに、あはれな〳〵聲てなきつゞけるのですよ、買はれた子も親の如くないて居るのでしよう、何ものでも親子の情にはかはりがないのれ。

○夏の御料理　佐賀縣　西千代子

鯛か鰹の鮮しいのを頭と脊骨だけ落し、ゾクゾク切りに切つて、氷か冷たい水に冷し、みようがを添へて出しますと、涼しくつて夏の御料理には一番だろうと思ひます。

○田園　愛知　内山文子

離室の西窓を押開けば三十町歩程の田畑が一目に見渡さ升黑い著物に白手拭の農夫が一生懸命稼いで居る其向ふには庄内川の堤がまるで緑の襷でも張つた樣に海東郡との境をして居升。

○私の家内　香川縣　あやめ子女史

私の家はお祖母様、父上、母上、兄上と妹と私との六人暮してす、その外に犬が一匹、猫が一匹、雞が七羽居ります、そして犬は兄さんのもの猫は妹のもの、雞は私のものですよ。

○故郷　和泉　高橋輝子

吾が村は去る八月の中頃より、赤痢患者が十四五人も出來ました、それで私がころばぬ先の杖とて貳拾五日の朝より濱寺へまゐりました、二日三日は宜しいがもう十日も過ぐると吾が郷の事を思ひだす、いかなる事ありとも、忘れ難きは故郷の事。

○萩　龜岡町　伊東紫雲英

愛らしい萩の花が庭の片隅に咲いて居る、何時も早起きをして、玉の露を除ひつゝ一枝二枝を折て來て、机の前に挿します、そうして今日習ふ學科練習を濟して潔よく學校に行きます。

○蝶　芝區　白菊

病床で女子文理を見て居ると、何處からか、一疋の蝶が來て窓のガラスを、ばさ〳〵とたゝきながら頻に、出口を求めて居る、その樣の餘り可愛想に思つて、自分は病の體も忘れ、つと立ち上つて、靜かに三寸許開けてやつた、蝶はさも嬉しそうに、ひら〳〵と舞ひ上つた。

○感情　横濱　月代子

感情ほど可笑しいものはない、一寸のことでその人が好きになり僅かのことからその人を嫉ふ樣になる人に對するばかりでなく凡てのものに對してそうです感情と言ふものは實に妙なものですわ。

○百合の戀　宇都宮　露子女史

斷崖絶壁、幾十丈ある崖の眞中に、唯二株の鬼百合と姫百合とが、異樣の薫をはなつて、互に戀ひ戀はれて、居る樣に、向き合つて莞爾と笑つて居ると、黄白の二蝶が、戀る〳〵る鬼百合の花粉を姫百合の花瓣の中へ姫百合のを鬼百合の花瓣の内へと、せつせと媒介して居る。

○茶と桑　京都府　有野坂枝

私の地は、昔より茶の産地にして、近年迄では何所の畑にも、茶園斗りでした、今度蠶絲全盛を極めしより、茶は悉皆掘り起され、桑はあとへ植られ、今は青々と茂て居ります、植へられし桑よりも、掘り出されし茶の心は、如何でありましよう。

○白百合　福岡縣　安部千代子

若いお月樣の影を踏んで、心地よい歌を、口づさみゆる〳〵と散歩した。路は小川の畔に添ふて、あゝ美い白百合の花よい香がする。されどあの花は、向岸て川の流れは早い、然しあの花はほしい、遂に私は一町ばかり下つて土橋を渡つて、遂に手折つた。私は此露深い野も、花の精に全く忘れ盡して居ました。

○火事のあと　　石狩　吉永豐子

いつも川村寫眞舘では美しく寫してくれますからみんな友達にもらはれてしまひます、今日のこそ女子文壇へ送らうと思ひ停車場から下りて見ますとまあ驚きました、寫眞舘から側の料理店までやけ跡となつて居りました、妾は失望しました。

○弟の望　　花原郡　木村芳子

私の弟は五人有ります一番のは工學博士二番目は海軍將校三番目は外交官四番目は貿易商五番目は醫學博士此が各々の望です。

○柿、紅葉　　羽後　伊藤山子

私の家の前には非常に大きい柿木が三本あるそして三本とも甘柿てすうち中のゝは改良柿てあるすぐ山には紅葉が澤山はへてありてこの柿の錦を飾る頃には秋の紅葉が盛りてす。

○小包　　豐後　夏子

郡の兄樣から今朝小包が着た。開て見ると暑中の見舞物て、お母樣には飛白の知々美妹には浪模樣の浴衣、弟には白の水兵服。妾にはたゞ一通の紙手！。

○畑の散歩　　岐阜　波山薫子

夕方畑を散歩しました、胡瓜が大變勢よくのびて居ましたが、よく見ますと傍にある鳳仙花の花をつるて卷いて居ました、まあ可愛そうにと私はすぐにそれを取つてやりました、世の中にもよく胡瓜の樣に弱い者をいぢめる人がありますれ……。

○作物　　日暮里　笹村玉枝

此の頃、あまり日照ばかり續くので、お父さんやお母さんは、非常に田畑を心配して居ります、それて妾毎日神佛樣へ命がけに祈つてゐましたすると、今朝から頻に雨が降りしきつて、作物が、めつきり精よくなりました。ほんとに、妾何より嬉いです。



電柱　淺草　田村靜子

○二人の令孃　　大阪　倭文子

「房樣つてば本當におひどひのれ、さんざ人をお待たせ遊ばして」と愛らしい桃色のりぼんに怨ぜられて、何とも云ひ得ず笑つてゐる水色のりぼん、一足後れて、プラットホームを出た女中に煽がれながら行く後姿を見送つて私は二人の性質を想像した。

○埋れ井　　小石川　近藤愛香

白萩と紅萩とが頼りなく咲き懸つて、しつとりと置く露の玉に有明月の影うすれ、過りに聲細く蟲が鳴出した、誰汲む人もなき埋れ井の底、潜める蛙性の呼きを聞くが如き微かなる水の響きがアヽレそは露の落る音。

○夏の樂み　　福井縣　野田ちの子

樂しみは夕顔棚の下涼み手袋して避暑に行かるゝ姫樣よりも田草ひく鄙少女の方が夏を知てる。ほほと鳴く山鳩は眞晝の雨後に最趣味深く紅塵の道に始めて、晝顔の眞の優しさを知る。

○午後一時　　麻布　松崎みどり

汗をふきながら宗齋屋が、「ガタ〳〵」と大きな音をさせて通つた後、三十分間は、寂として人通りがない、折々灰の樣な埃が舞つて來て店の暖簾を被ふ。と、今し方寄席の柳へ止つた蟬が、れむげに「ジージー」と鳴き始めました。

○家庭訓話　　埼玉　戸張登女史

とき物をした後に、其の着物に糸くづがついて居るのと、はり物の時おくみのかぎをのばしてはるのと、はれぎのしわのあるのとは、よく〳〵注意しなさいと、母樣が、毎日の樣に言はれます、妾は此の數へは、他へ

鮮に行つてもどうしても忘れぬつもりてす、

○燐寸

茨城縣　橋本啓江

妾が毎日用ゐ燐寸は、虎印と、妾が附近の龍榮社製の上り龍の内に變を書き中に旺と云ふ字がある。
次は開成社の明治通寶と、兵庫の兵庫清燐會社の、桃印の大德用品てす又時々名古屋の眞榮社の小さい箱と、榮眞社の鍾馗の像が來ますよ。

○夏休

青森縣　三浦愛子

今日からは學校で習つた家事の實習をするに極めて好期節、私は朝から晩の掛け通しでご飯たくやらお料理するやらふき掃除萬端一人てやるから中々骨が折れる。晝過ぎお友達の常子樣がお見えになつた、晩をはづして登に手をつき「よく被居ました何卒こちらへ」…「お孃樣はお宅てすの」…二人は最う堪へ兼ねて一時に笑ひ出した。

○江戸角力

越後　松山けん子

春夏の實が上出來の上に此土用日和農民は實によろこびあふれて居る江戶角方が有る爲め非常の人出てある又もうちだす櫓太鼓、天下泰平五穀成就。

○御襃美

岐阜縣　髙原久子

女子文壇に、私の作物がひとつても當撰すると、お母樣は御襃美に、私の好きな〳〵手風琴を、買つてやると仰つしやるので、私は毎晩々々お錢鏈をすましては、一生懸命原稿を考へます。

○お鈴

靜岡縣　藤本靜江

千本松原、小松原、落葉かく子の謠ふ郞歌、「お鈴可愛や未だ幼ないに日毎落葉をかきくらす。」淋も涼しや松間をもれて、母を失ひ十二のお鈴、日毎夜毎を涙に暮らす、かれが日毎にかく落葉は亡き母の墓前の花とちる。

○野の神

信濃　太田喜志子

妾は一日中を樂しい想に耽りながら草苅を致しますので誰が居ないでも少しも寂しくはありません身には汚れた衣を著けて土にはらばつて居りますが心は高くなるばつかり夕方など遲くなりますと種々の虫が歌を想へ〳〵と促しますほんとに自然界は心に暇をゆるしません。

○造花術

群馬　森下うばら

無情なと心が叱る、菊畫の花は心なく搖ぐ、とまた、折らうか知ら、と近づいて見る、朝露がすうとうごいて、雛樣の涙みたいな、紅い細かい露が、私の足元へぼろ〳〵散る、どうしても私にや折れなかつた。其日から思立つた、この造花術てある。

○手術臺

牛込　大久保星子

今し手術臺の上に一個の色蒼ざめたる青年は橫はつた軍服姿の父は附添ふて居る、有繁に看護婦、甲斐々々敷從事いて居る、エーテルの波は漂ひコロ、ホルムの香は高う薰じて小刀は閃つた、父は仰いだ、突然看護婦は持つたる小刀をばつたり落して恍惚。

○私の庭

福岡縣　谷たへ子

家の大榎の下を通つて西北の枝折戶をおくればすぐ私の最愛の庭がありまず廣さはまあ四坪計りでございませうそれに春は花秋は紅葉と四季の富は皆此狹い庭に集つて居るのてありますそして其等が悲しい時の慰めとなるので私は何よりの友として愛して居ます。

○反對

日本橋　三森ゆき

妾は今年十九、都にもの學ぶ身てあります、都と云へば妾の村辯ではたいした所として、老幼男女を問はず、われも〳〵と見物に來たがるのですが、妾は何ぜ休課の時里へ來るが樂しく、上京するがいやな感じがするてしよう。

○私の理想

伊賀　萩の花

愛情の深い實業家のもとへ嫁いて、眞面目に家業をいそしむ傍ら、夫と供に文藝を唯一の樂みとして、一生を暮したいのです。

○お月見

下野　栗原くに子

二階の椽に三尺の机を据えて、上には栗、柿、梨など皿にのせて並べて有る、風が來て薄の穗を戰がせて過ぎる、欄干にもたれて居た弟と妹はお月樣は何時出ると頻に問ふ今出ますよと云ふてる内に弟は高く萬歲を呼び妹はあらまア大きなお月樣れ。

新笑話

編輯局選

四等

○電氣燈　熊本縣鹿本郡中富村下分田　富丸若子

甲「君電氣燈には青く光るのと赤く光るのとあるが何處で色を付けるだろ——かね」。

乙「あれは君電燈會社の方に青い電氣と赤い電氣と二ッ有るからさ」。

五等

○正札　南總　はる子

客「之が一圓とは高過るぢやないか」。

店員「へイ之は手前方の正札ですから何程かお負け申しますので……。

○己れてない　下野　きん子

コラ／＼柿木の上で柿取つて居るの、梅三てないかいつも惡いやつだ。

梅三「何に己れてないよ。

○聲の色　北海道　滑稽女史

子「お母さん聲に色や形がありますか」母「そんな事をきくと人に笑はれますよ」子「でも黄い聲や太い聲など言ひますから」

○踏切　吉備之里　林ふみ子

踏切の番人「お前さん何時迄そこに居るのです早くお通りなさい」

娘「でもお母さんが汽車が通つたらそれからお通りといはれたから汽車が通つたら通るのよ」

○初奉公　安房　ゆふがほ

主人初奉公に向ひ「家では朝飯を六時にすます故其つもりで居れ」奉公人曰く「妾は寐坊ですから妾にお構ひなく御すましなすつて下さい」

○靈魂不滅　愛知縣　林ゆき

甲「君靈魂不滅なんて一體靈魂といふ物は何處に居るんだい解剖しても靈魂の居場といふのは無いぢやないか」

乙「そりや君解剖爲る時は靈魂が出て行つた後だもの」

○増燒　京都　山口愛華

甲「花子さんこのお寫眞幾歳頃お撮しになつたの、大分古いのネ」。

花「イヽエ未だ新しいのよ昨日増燒出來た許りです」。

○聞き違ひ　廣島　しらはぎ

甲「マア暑い事何度でしようか。

乙「まだ當年初めての暑さですれ。

○不經濟　駿河　深尾けん子

吝ん坊の母、娘が豆ランプへ火をつけ目醒時計と共に枕頭に置いて寐につかんとするを見「寐てまでランプを灯けておくのは不經濟です、時計も止めてお寐みよ」

○螢　丹後　賤の子

螢とりにいつた子供茫然歸つて來た。

姉「螢は居たかへ」

子「あヽ澤山居たよ」

姉「オヤでも一匹もとれなかつたの」

子「フム僕が行くと恐いものだから皆逃げてしまつた」

○鎌倉　安房　花風子

先生、生徒に名詞動詞代名詞助詞其他いろ／＼の文典を善く敎へました　先生曰く「皆さん解りましたか。生徒「善く解りました。先生曰く「鎌倉は何てす。生徒「動詞です。鎌倉らん、鎌倉り、鎌倉る、鎌倉れ。

○ハンモック　信濃　野の花

令孃下女に向ひ「妾れ今ハンモックに寐て居て博覽會を見たよ」

下女「へー、ハンモックと云うものはそんな面白いもので御座いますか、では私も一度乘せて下さいまし見たくて／＼たまりませんから」

○膨脹　佐賀縣　しの子

先生理科の時間に、「物は何でも熱すれば膨脹します」

生徒眞面目な顔で、「でも私の家の鐵瓶は大昔からあるそうで御座いますが少しも大きく成りません」

讀友倶樂部

諸嬢と記者

○記者樣私の如き淺學のものでもよく勉強すればしまひには入選するとがありませうか私女子文壇とは一生はなれんと心にちかつてゐますの 時下御身御大切に願ひ上ます。(長門中津江照子)(記者曰勉强さへすれば最後の功果は必ずあるべき答てす)○記者へお詫を申上げます私ほんとに嬉しくてたまりませんおなさけ深い記者樣のおほれなりてそれはそれはやさしいお友だちが澤山出來ましたそしてたへまなくお御文通をして居ります御存じの無學者てすから本字はあまり存じませんからかなを澤山かきますが何卒堪忍して下さい是から一心になつてどしどし投書致しますから何卒おなほし下さいませ (靜岡縣てる子)(記者曰、お友達の澤山出來たのは共に欣びます、澤山の中から更に善いお友達の出來るやうに祈つて居ります) ○近頃は惡い病がしきりに流行いたしますが記者樣方には御變りも御座いませんか御伺申上ます 次に私は今年十六の淺學な者てすが下手の横好て作文などが大好學校を退きましてからは御誌を唯一の慰藉として居ります 何時もおかしなのを作つては父に笑はれますが是も其一つて實は如何しやうかと思ひましたが思ひ切つて投書いたしますから沒書には極つて居りますが 何卒御目を御通し下さいまし(向島ほたる草)(記者曰 作文が大好きの方は當本誌のお友達です、限りある紙面、出る出ないは或る場合にもよりますが、本誌を友達として作文をお励みなされば、それだけでも何かの御利益にならうと思ひます)○雛春子。京都市、文子。神戸、非佐野。土佐、弘光よし子。群馬、素竹女史。周防、中村みつ子。寺部君子。京都府下、野菊。鹿兒島、柳子。丹後、中澤いし子。京都、小笠原あき子。富久子。伊豫、村上晴子。美作、紅葉女。べにばら。かず枝。總州、一淋生。石見、靜子。京都、白鷺。相摸、成井金子。以上の諸嬢のお申越は皆拜見しました、投書規定以外の破格は皆いけません、其他のおたづれはよろしい、書き方も皆宜しい(記者)○注意娘子さんに、麻布福谷以智子さんの作詩に讃美歌の句が餘りに多くあつたとて一々御注意ありがたう、福谷さんも以後は氣を附けられるでせう(記者)

諸嬢の交際

(其一) ○片山里にすむ樵り女てすが何卒御寫眞と御玉章とを御惠み送り下さい必らず恥かしき小照と拙き返り事を差上ます(山梨縣中巨摩郡國母村字後屋遠藤たつ子)○諸姉樣何卒スタンプの交換をして下さいナ、繪葉書、寫眞、玉章の交換どしどし願ひます(備前國和氣郡坂保村南方武元一二様方内海文子) ○妾しは郡立高等女學校參年生迄通學致し今年五月退校致し今は片田舍に暮し居る不束者てすが永久に御交際下さいな願ますよ今妾し手本に丹後縮緬模様入(フクサ)四五枚有ります故繪葉書五枚に御寫眞を添へ御送り下された御方には漸次御送りしますよ何卒玉章繪葉書寫眞の交換をも賴みますよ(丹後國加佐郡由良港六拾貳番地浦島美代子)○私は皆樣の御肉筆の御玉章の交換を御願いたします御返事は直ちにいたしますから (群馬縣山田郡梅田村大字山地井田鯛子) ○青葉茂る南海の里に、わびしく暮らす妾を不便と思し給ふの方あらば、何卒これより、玉章や繪葉書の交換をして下さいな。妾はよろこんで御返事いたします。また有田蜜柑をも贈ります。(紀州有田郡五西月村前田文尾) ○諸友の御内で岡山のシンガー裁縫教授所に通つて居る御方がゐれば何卒御交際の程願ひます (備中淺口郡玉島町字東町武総美津子)○諸友の諸姉樣、妾は本誌を無二の友として賤が伏屋にさびしく暮して居る一貧女であります、皆樣何卒スタンプの交換をして下さいな繪葉書玉章寫眞などもお送り下さい (兵庫縣揖保郡新宮局區内國貞梨花子)○妾も多年東都に遊學今春漸く成り親しき東都を辭し今はいとも平和なるホームに音樂や雜誌を友として親しんで居るの玉章や寫眞の交換をれえ先着十名に限り不束な妾の寫眞をお送りいたします (下野國下都賀郡寺尾村尻内小林さい) ○情深き諸嬢樣方よ御手紙下さいまして誠に有がたく御禮申上げます尙永久に御交際遊ばして下さい (北海道後志國歌棄郡三宅みめ子) ○諸姉樣私は片田舍の淺學者てすからどうかお見捨なく、エハガキ、玉章、編物、寫眞、少説などの御交換御願み申ます(大坂府下北河内郡守口町倉利子)○皆さま御自作の美文、新體詩、和歌、俳句などお

送り下さいますれば秀逸の分は印刷に附して無代にて頒ちます（山口縣呼坂局区内、粟明堂内つゆ子）○諸嬢様妾は昨年本誌の愛讀者となりましたのですけれ共諸嬢様にお目にかゝるのは初めてなんです誠に薄志淺學のものですけれ共何卒寫眞玉章絵葉書等の御交換をなんてもいゝてすから（芝區櫻川町福泉とよ様方瀬川きみ子）○寫眞絵葉書玉章等の御交換を願ます妾は寫眞器を以て居りますから市内及附近の名所を撮たのも有ます故皆さんの最近の御寫眞を添へ御交換被下方へは妾の見苦るしき影と名所寫眞絵葉書等にて必ず御答禮いたします（京橋區東材木町三の二一、横田方中野靜子）○記者様誌友の姉様方の御仲間入が致したく御座いますから御手數ながら一寸御引合せを願ます（佐世保市島の瀬町市原露子）○諸姉様方の麗はしき御筆跡を眺めて楽しく日を送らうとおもひますから今後は何分よろしく絵はがきの御交換を願上ます（芝區白金志田町三十番地飯倉たけ子様方池田芳子）○妾は永く東都のスクールに物學び昨春懷しき學窓を辭して今は平和なる家庭に妹子を相手に雑誌や皆さんの玉章抔を楽んで居るの末永く絵葉書や玉章の交際を願ひます恥かしき妾の寫眞に絵葉書を送ります（栃木縣下都賀郡寺尾村大字尻内萱沼小林さい子）○妾は片田舎に住むものですが何うぞ御交際下さい御寫眞の交換も何うぞ（千葉縣東葛飾郡福田村下三ヶ尾内藤秀子）○懷かしき皆様よ永久的の御交際を御願ひ申ます可成御玉章にて先着三名へは妾の寫眞呈上げます（神田區鍛冶町五松本貞春方松木靈）○皆様永久的の御交際を御願申ます（新舞鶴吉田貞子）妾は美しい諸姉様方から御文通下さるのを今から楽んで居ります何うぞ御交際を（富山縣上新川郡豐田村字米田村一一四赤祖父操子）○奈良の冬蔭様京都府下の高橋路水様先日は美しき御端書有難う御座いましたが御住所が不明でしたから至急御知らせ下さい猶皆様も肉筆端書を何うぞ住所姓名は必ず端面に御認め下さい（美作國誕生寺驛前杉本天臥女）○盛岡の佐々木幸子様元仁王小路にゐらしつて高等女學校へお通ひになつた福井うら子様の御住所がお分りでしたら何うか御知らせ下さい御禮は屹度致します（群馬縣有賀菊子）○妾は病氣の爲め當所へ轉地して淋しい月日を送つて居ります御同情深き諸姉様御寸暇もありましたらば御手紙や御寫眞をお送り下さい只今は筆採ることを禁じられて居りますが必ずお返しは致します（相模國小田原早川口みよし屋方しまの）○妾も本誌愛讀者の一人ですから何卒御交際をお願ひ申ます（臺灣臺北城内南門街二丁目高等官舎内猷よし子）○三重縣佐野薑花様文藝通報をお送りしましたがお着きになりましたか（京橋ゑつ子）○以後一切交際を中止す（靜岡縣紅薔薇）○横濱は扇町邊のお方と私はおつきあひがしたう御座んす不束者て御ざいますがお氣にめしたら何卒御文通遊して下さいませ（四谷區永住町一岡部なか方岡部つま子）○皆様御手紙下さいまして誠に嬉しく存じました今後も宜敷御交際下さい（栃木縣那須郡伏島町榊原増子）○賢明なる愛讀者諸嬢お暇りもありませんか私は田舎の淺才な且失望にもだへて居るものです皆様どうぞあはれと思召して御交際の栞をたまらはん事を願ひます（福岡縣大容子）○あの誌友の皆様御交際を願ひます絵葉書や玉章の御交換をこふ御返事速かに差上ます（岡山縣上道郡金岡村山縣小子）○諸嬢の姉様方よ、永久に英文の御交際願ひ度いのですもし下さる方があつたなら（東京々橋區築地明石町女子語學校寄宿舎内田村波津子）○誌友の諸姉上様妾も愛讀者の一人です何卒絵葉がきやら玉章の御交換を願ます（京都四條通寺町角赤井方上田靜江子）○私にも御手紙及び絵はがきにて御交際を願ひます又しなり、編物の交換も願ひます（神戸市旭通五丁目百拾番屋敷細川登子）○御玉章絵葉書編物等御交換してくださいませ（靜岡縣周智郡山梨町石田輝子）○何卒妹と御思めして絵はがきや玉章の交換なして末長く御交際を願ひとう御座います（富山市愛宕町盛池秋子）○之れから諸嬢の御交際を願ひます何卒御見捨なく永久的御交誼を願ひます玉章や寫眞絵葉書もれえ交換して頂戴ね、さすれば妾も非常な愉快な満足が出來ますの先着二十名には當地の風景を送ります（栃木縣下都賀郡寺尾村尻内小林燕美子）○誌友の諸姉様よ妾は田舎の不束者で一人淋しく暮して居ります何卒あはれと思召して絵はがき玉章の御交際願ひます（佐賀縣小城郡小城町田尻ひで子）○諸姉嬢に急報!!!我郷里水害にて大なる困難と多忙を極めつゝあり我家も三階まで浸されて衣書籍の類少なからず損害に歸す故に御親切におはがき下されし愛姉にも返書差し上かれ心ならぬ失禮のつみを多謝（丹後加佐郡河守町字新盥見落葉）○諸嬢よ妾は花を栽培するのが大好ですの、けれど東京では奇妙な種子も見つかりませんから、何うかみな

まん秋蒔く草花の種子を送り遊ばして妾の園を飾てください、御禮には美くしい繪端書さしあげます 成べくお早く送てちようだいな（東京牛込原町二丁目二二、矢島樣方径子）○妾はさびしい田舍に只本誌を友として居る一女であります繪葉書、玉章、寫眞、雜誌などの交換をして樂しく暮さうと思つて居るのです（播磨國揖保郡千本村本佐野方にて泉つゆ子）○妾は當地の郡立高等女學校補習科に在學中のもので御座います何を申しても片田舍の一隅に淋しく日を送るの身上ですから繪葉書や玉章の交換をして下さいな神に誓つて御返事致します又御寫し給や未使用給はがきの交換も願ひます（丹後國加佐郡由良港一二番地藤村みさを）○私は東京に住み給ふ音樂好きの姉樣方と御交際並びに繪葉書玉章の御交換を願ひます又音樂の教授もいたします（牛込區市ケ谷加賀町二丁目廿四番地奥野好英）○秋の田舍ずまひ心淋しき私は情け深きお方に限り永き御交りを願ひます歌を添えて下されば必ず返歌を差上ます（三重縣津市新町南河路三十一杉田れう、稻垣靜子）○皆樣と同じ樣に御交際致し度く何分記者樣よりよろしく御照會下されば度候（靜岡市土大夫町矢澤內後藤房子）○私も御仲間入りしますから以後御玉章や繪葉書を以て御交際致ます（東京小石川區小日向水道町一○入高崎方若林芳枝）○妾の手許に上等手札形寫眞器械があります皆さんの內で上等樂器お持ちの方と交換致し度し但し相當の樂器に限る（栃木縣下都賀郡寺尾村大字尻內萱沼小林さえ子）○諸姉樣妾はまことに不束者ですが此の世に生れて來たしるしに何か樂しみのよい方法もがなと考へてゐる處へ此の文壇の御蔭で澤山のなつかしき姉樣逹と交際が出來るようになりましたがこれからも猶繁く御交際を願ます（播磨國揖保郡龍野町川原町二百六十七田中庄太郎方遠藤清子）○皆々樣と親しく御話するのは始めてヾございますどうぞ今後は末長く御交際下さい（福井市江戸下町秋野しづ子）○誌友の皆樣私は三十九年に山形の高等女學校を三年修業致しまして其の後は母と兄と私と三人で此の町に淋しく暮して居りますから何卒永久に玉章や繪葉書の御交換をして下さいまし文學に關する書籍も交換して下さいまし（山形縣北村山郡尾花澤町保監官舍內內海澄とし子）○誌友の姉上樣方小說及雜誌等を送て下さい必づ妾も相當なものにて御禮致します又繪葉書の御交換も大に致します（靜岡縣引佐郡金指町秋月はつ子）○何が馬鹿馬鹿しいつて寫眞や繪葉書を取放された程氣の利かない事が亦と他にあるでせうか骨折て出して今日は明日はと返事を待てるなんて間の拔けた事妾もうこんなつまらない真似は止にしませうだけれどもかへると腹が立つてくやしくてね皆さん御察し下さいましよ？（露子）○誌上に御交際を求めますのは始めてヾ御座います、どうぞ御玉章御はがきなど御惠み下さいませ乾度々々御返事はさし上ますから（橫濱市山手二四四英和女學校內森田香子）○萬天下の諸孃よ妾は今年十八才よして高田の落士よだが本當に薄命者よ何卒御寫眞や御玉章の交際を永久にして下さい本當に御願なの（新潟縣中頸城郡高城南大橋藤村三枝子）○誌友の姉樣方私は筑後川のほとりに住む田舍者ですけれども誠にたのしみの多いところですわ或は川遊びや花つみ又南の方には耳納山そびえ程近き山の中の別莊などへ遊びに行く近き所の姉樣方日曜には御遊びに御出下さい何卒御玉章や繪葉書の交換を御願申上ます（福岡縣浮羽郡吉井東町松田節子）

圖書換讓

○皆樣の中で伯爵夫人演子年子夏子天うつ波火柱聖者の內何れにてもお明きの方は暫くお貸し下さいませ拜見の後は切手代に相當の御禮品を添へて御返送致します事御願に存ひます。（靜岡縣榛原郡初倉村牧之原石井節子）○十一號の誌上で斷論の交換をお賴みして置きました處思ひ掛けなくも皆樣から續々御送附下さつて、都合八十二名で御座ました御約束の書物は、番順に差上げ、雜誌も外に新潮ほとゝぎすへがき文學等を增し 繪書も增しましたが三十六名丈けが差上げるとが出來ませんでした後のお方は、御住處を存き止めて置ましたから不用の書の出來次第差上げます（牛込築土八幡町士岸啓子）○佛敎に信心の御方に限り佛敎書類なれば御申込次第順次無代にて進呈致ますて續々御申込あれよ（廣島縣賀茂郡仁方町長谷逖良子）○私の處に佐々木信綱先生著詠歌自在、育海、若松賤子の忘れがたみ、藤村の破戒等がありますどなたか風葉の青春及の卷又は秋の卷天外のコブシ等と御交換を願ひます（攝津西宮字池田七十一中西つれ子）○諸嬢の中に小說新空氣良人の自白少判任官少女の懸賞子夫人御もちの方は私の所に小猫、戰時畫報、少女世界女子文壇婦人世界中學文壇などありますから何冊とでも交換して下さいませんか（富山縣上市町安田崎子）○諸嬢樣妾前號で古雜誌の

交換をお願ひ致しましたら隨分集りました寫眞は眞の女性と思ふお方に十名差し上げました倘以後も古本古雜誌のお換へ事をお不用のをお送り下さいな(長門瀨部局區內髙森定方綾江子)

○皆樣の中で三十九年十一月十二月發行の婦人世界御持ちの御方は右兩册と私のいさゝ川柳川春葉著と御交換下さいませんか御交換下さる方は下名まで至急御一報を願ひます(熊本縣下益城郡豐田村阿髙尋常小學校內秋月澄子)

○誌友の皆樣妾の手許に新小說破戒新不如歸怪蜚奇屋慘風悲雨潮待ち艸金帆春鳥集夢見草紅葉舟ユーゴーの詩等の不用有ります紅葉全集寵風戀風金色夜叉玉むし朝ばれみだれ髮御持合せの御方は交換して下さい高尙なるスタンプ付繪葉書一組添へます其他あらゆる雜誌の交換も願ます(和歌山縣海草郡安原村字松原木下奨笑子)

○誌友の皆樣へ御願ひ致します私は渡邊辰五郎氏著の裁縫教科書入用ですが近所の書店に賣切れてありませんで皆さまの內で古くてもかまいませんから御不用なのがありましたらおゆづり下さいませんか(靜岡縣小笠郡河城村岩堀卓子)

○妾に子規隨筆(六十錢)基督教天啓論(二十五錢)四十年七月出版、白露集(十月合歌集四十二錢)鐵鈴、野の花、ふる郷等ありますから、有明の春鳥集、夜雨の花守、二十八宿、トルストイの我懺悔、我宗教の內御交換御望の方は下記の處に知らして下さい直ぐ送ります又女子文壇昨年の分二十册ばかりありますから名所繪葉書て御申込の方へ一册づゝ上げませう(羽後飽海郡鵜渡川原村長泥町阿部花子)

○私は今回いよ〳〵北米へ渡航することになりましたが、多年本誌の愛讀者として皆さんの御交誼にむくゆる爲左記の書籍四十名に限り發順に差上る事にしました)就ては紀念の爲め永久保存致し度い考へてすから、美麗な繪葉書に和歌俳句又は新體詩の一章ても宜しい、お書きなすつて封書にして至急御惠送下さいませ、草籠、懺悔、式部小路、さゝ濁り、松風村雨、人の兄、玉蟲、花守、朝晴、運命、放志保草、呪はれたる女、千草の錦、新新約物語、黑髮、桂の卷、さくんたら姬、夢の華、戀衣、白羊宮、白玉姬、蕃草、子守唄、青海波、ハイネの詩、暮笛集、不二山、行く雲、みだれ髮、漫畫一年、乙女の生涯、西詩の叢、天風寬帆、結婚の秘決、日本小說年表、リア王、商道一斑、水彩畫手引、美文作法、言文一致文範、和歌作法、以上。(大阪市西區西長堀南四丁目森ぎん方(木村牛女)

○只今私の手許に緣不緣、人之妻、破戒、兄と弟、新婚旅行、日本新辭林等澤山不用になつて居ります皆樣の內て紅葉全集第六編、金澤博士の辭林、思出の記、樗牛全集第二三四五卷、書翰文辭書等御座いますなら御ゆづり下さい(青森縣南郡大鰐村字島田下山彥右衞門方中川寒風子)

○本誌愛讀の諸孃樣方私は琵琶の湖畔にはかなく暮す貧しい賤の女てございますが皆樣のお讀み古しの書籍雜誌小說など何んなのても宜敷うございますから何卒御めぐみ下さいませんか又た御自筆の繪端書等ても餘り慾張るやうてございますがどうぞお惠み下さいませ(滋賀縣大津市上堅田町六番屋敷疋田まつ女)

○山國の秋哀れな友と思召し妾の中等作文寶鑑、筆の雫、思草、青山白雲、緣不緣、青年文壇增刊標集、殺新クレオパトラ、男女學生氣質英傑愛らしき妻、危機一髮、北歐神話霹靂、歸省、綴學生訓、悲劇オルレアンの少女不用に付き御讀古しの不如歸、思出の記、順禮紀行、玉蟲、朝晴、吾輩は猫である、藤村詩集、天地有情、眞人の自白等と御交換を願ひます。猶絹菜にて御申込の方には雜誌を進呈致します。(飛驒髙山日枝社內先島雪子)

○姉樣方妾に小說新小說女學世界少女界同世界婦人世界其他の雜誌澤山ございますからエハガキ封入か御うつしえかて申込みなさい早速送ります又言海己が罪送って下さる方には他の小說にて御禮いたします(讃岐多度津東濱町香川政子)

○懷かしい諸友の皆樣よ妾の手許には(實用裁縫全書、裁縫と編物、女子手藝要訣、日本女禮式大全、和洋禮式、新撰日用女禮式、實用造花術指南、明治女子書翰文、女子用文習字帖、美文錦名家文集、美文韻文花紅葉、美文韻文磯馴松、三音四聲字貫、戀の畫葉書、戀の說等不用の書がありますのよ、皆樣の內(ハーモニカ、吹風琴、女學世界、婦人世界、女子文壇、女子の友、繪はがき四季の花、花と蟲、少女エハガキ有心無心、花と蟲、東京女學校、繪はがき秋草と美音、名所十二ケ月、海老茶式部、滑稽畫葉書、三體千字文等不用の方が有ましたらお送り遊ばして頂だい妾も必ずお送り致しますかられ(常陸國眞壁郡關本町宮川磐子)

○諸孃樣何卒寫眞や編物の交換をして頂戴な、而して末長く妹と思召し親密に交際して下さいな妾の許に家庭新體詩不如歸の歌乳姉妹の歌を持て居ますが不用てすから寫眞に其旨申越になれば同年の御方に進上致します、妾の年は二十歲以下てす(大阪府豐能郡松根莊村字神山福西はるえ子)

○滿天下の諸友諸姉樣よ、何卒書籍の交換を願ひます、

妾は女子文壇を初め中學文壇、秀才文壇、中學世界、和歌入門、若葉上下、女子の鑑等五十餘册其の他婦人世界、女學世界、及び大日本淑女學會の講義等數十册机上に山成し何れも讀み終りまして不用てすから諸姉様の中て青海御送り下さつた方には御望次第差上げます又寫眞を送つて下さつた方には右書に私の寫眞を添へて差上げます又栞、編物給葉書を送つて下さつた方には右書に當地名所繪端書を添へて返禮します（下野那須郡箒川村小塙佐藤恐蕉）○先月の本欄て御れがい申ましたら東京其他地方から澤山送つていたゞきまして誠に難有う存じます皆様の内に手紙文の御手本御持ちの御方様どんなのても結こうてすから御かし下されたくうつさしていたゞきましたらすぐ御返却申します女子懸賞文集もかして下さい相當の御禮致します又東京の御方様と御交際ねがひます（大阪南區南炭屋町一四濱村清子）○私は小說嫁ヶ淵少將族琵琶歌初日之出其他雜誌數十部公私戰役紀念繪葉書給來繪葉書澤山不用てす、皆様の内に紅葉全集吾輩は猫てある御持ちの方は以上の中の物と交換して下さいませんか。（東京市本所區吾妻町磯野盈子）○皆様の中て手風琴の本御持ちの御方は御送り下さい、先着二名の方に明治の家庭を返禮致します、後の三名の方に英國々歌、米國々歌、獨國々歌、萊因河畔の守（獨國々歌）、佛國々歌、露國々歌、の印刷したのを返禮します、（東京市小石川表町百〇九北澤房子）○諸友の皆様方よ妾の手許に孝女白菊にハニユーの宿に山內一豐の妻及び天地有情其他面白い唱歌がありますから郵券を封入して申込めば直ぐ寫して上げます猶返信料の代りにリボンを送つて下さればば地方の名勝の繪はがきを添えて喜んで御送りいたします、但天地有情は皆は寫せませんから中にて御望みのものを上げます（靜岡縣濱名郡芳川村大柳太田みつ子）○皆様の內歌集、あけぼの、わが思ひ、舞姬、思ひ草、など其外なんても歌集てさえあればよろしう御座いますから私の舶來油繪葉書、風景、裸體美人、一枚拾錢以上二拾五錢迄各五枚一組と御交換下さいませんか。太田三郎先生著、スケツチ畫法、及び、スケツチ畫集の內いづれかお惠み下さる方には右の內二組さし上げます、お貸し下さる方には相當の品を但し私の方にもかぎりある事てすからなるべく早く、（大阪市東區松屋町筋石町西東角今西竹田堂內。今西みゆき）○蓮の露、女子手藝編物模様圖案五册、露月花、草枕、水車、小猫、秋のねざめ、四季物語四册以上の不用書ありますから、諸友の姉様の中て魔風戀風二册、死、おのが罪、後の世前編、若き日、お送りのお方にはお好みに任せすぐさまお送り申します、（山城國相樂郡笠置局內松田あや子）○私に左の書不用に成て居りますから御交換を願ます、己が罪、はいから娘、戀か夢か、黃菊白菊、と澤山の夫婦、がありうろこの鎧と交換願ます尙繪はがきの御交換も願ます（秋田縣河邊郡新屋町二七矢野花子）○妾の手許に初潮、良人の自白、中學世界、秀才文壇、中學文壇、たまむし、征露戰報、習文教科書、世界的大競走、女子文壇、算術書、及び新古文林澤山藏書して居りますから、諸姉様の相當書籍と御交換を願ひます、外に完全な寫眞器がありますから、金色夜叉、ひぢつき、及び三百枚挿入れの、アルバム、下さらば差上申します（靜岡縣志太郡高洲村大新潟增田市松方白百合子）○私は高等小學校卒業した許りの淺學者て皆様のように雜誌も小說もなく就ては皆様に圖書の交換して戴く事も出來ませず何卒皆様の內て如何程古くても宜も厭ひませんから不用の雜誌小說御持の方は私に御惠與下されませ伏して御願ひ申します必ず繪葉書て御禮致す筈てす（奈良縣高市郡新澤村大字川西前川榮吉方にて前川たつえ）○妾事は生れ付て圖書が大好きなのてす依て慈悲深き諸姉様達の內に小說なり或は其の他の書物等御不用の品も有りましたら何とぞ御惠み下されませんか妾も所持する限り御返し致します又玉草繪葉書等も自躰よし寫眞よし何なと永久に御交換を御願ひします、加賀國江沼郡大聖寺町耳聞山八四寺澤文枝）○皆様の中に金色夜叉六册、黃菊白菊御持ちの方は御交換下さい送つてくれし方には先着五名限り妾手製の肘突と寫眞を添御望みの參考書とを直に送呈いたします（奈良縣高市郡船倉村字藤井米田一子）○本誌愛讀の諸姉様方妾しはれ山陰の片田舍にすんて居る貧女てす其れに妾しは小說が非常に好きなの皆様の內に鮮子流子不知火己が罪の書不用のが有りますれば御惠送して下さいな御恩は忘れません（但馬國城崎郡新田村字中谷小島こま子）○諸友の姉上様方よ妾は片田舍に住んて居る不束者に玉章や、エハガキ、寫眞の御交換を願ます。尙妾の手許に小說不如歸、新體詩學、己が罪、黑髮縁がありますから諸姉様御不用の愛情、美文資料何れの方と御交換を頂戴御禮には自作編物秋田名所繪葉書て御禮申ます

（秋田縣河邊郡新屋町高島佐四郎内 海風つや子）○諸孃様の内で己が罪、琵琶歌、寛晟戀風、緣意紅情、お持ちの方は妾の手許にある千山萬水、續千山萬水、町醫者、飛乘太郎、風月萬象、と交換して下さいまし尚は編物や地方新聞の交讀を私は神に誓つて只取はしません（越後古志郡福道遠山様方日下きよの子）○妾は本年四月からの愛讀者ですから四月以前の本誌は一冊もありません随て四月以前の本誌は悲しいかな存じません滿天下の誌友の御姉様よ友愛の情に富ませ玉ふ皆様よ四月以前の本誌御不用の御方が御座りますれば如何に古くとも如何に紙が破れてゐても其れに厭いはありませんから私の三十七年以來四十年六月迄に發行になつた中學秀才兩文壇少女界女學世界等と御交換を願ます（下野那須郡荒川村森田須藤翠瀟ろ子）○私女學世界を二年分ほど持つて居ります、皆様のうちで小波洋行奇談、乳姉妹、眞人の自白、御不用の方は御とりかへ下さいませんか、御承知の御方は急に御知らせ下さいませ、外にも古い文藝倶樂部新小說、澤山有ます相當の古小說と御取かへ致したいものです（埼玉縣北足立郡大宮在東門前村長島内岩崎のぶ子）○秀才文壇七卷十七號（八月十五日發行）及び同拾九號（九月拾五日發行）中學世界六月號御不用の方は私不用の文學雜誌有聲、睡蓮等と御交換下され度候（大阪府泉南郡貝塚町本町笠原春之助様宅辰井はな子）○諸姉上様のおうちで夏子多情多恨乳姉妹このうち一冊でも御不用の方はお送り下さいませんかお禮には敬官のしをり小說ときは小說國の寳文藝倶樂部女學世界新撰女子書翰の栞女子はがき用文繪葉書いづれなりお望みのもので致します（岩手縣膽澤郡相吉村稗貫みつ子）○諸姉様よ私に次の不用書があります、眞人の自白（上中下續）懺悔、靈か肉か、磯馴松、百字文集、萩の家歌集、歌集あけぼの等がありますから皆様の中歌集夢の華小扇むらさき黒髪、新約物語御不用なれば交換ください御心のある方は一度先もつて御通知ください（神戸市橋通二ノ五十六高橋方櫻町子）○妾の手許にいろ／＼の本が御座りますから交換御望の方は貴孃が御所持の本の目錄御送り下さらば當方よりも御送附いたします（京都市下長者町新町西入山口京子）○荒城の月の唱歌、往復葉書で申込まるれば直に歌も譜も御數へ致します（神戸市布引通三丁目八九若松芳子）○私の手許に不如歸多情多恨乳姉妹みだれ幾絲不緣當世婦人京人形富と愛惠の露等の小說の外女鑑文章世界女學世界ハガキ文等數十冊持つてゐますから夏子己が罪想夫憐金色夜叉錐子寛風戀風天うつ波等全部其の他面白き優美高尚な名家の作物と御交換を願ひます（石川縣江沼郡大聖寺町時枝方寺尾ふみ子）○親愛なる女子文壇の諸孃よ妾の手許に白無垢鐵火、花がすみ、後の戀、八十氏川、文金島田（前後）戀慕流があります己が罪（前後）と夏子（前後）と交換がして貰ひたい希望の御方は至急御申し込み下さい西洋歴史問答美文自在 弘法大師行狀圖會があります幽芳著若き妻前後と交換がしたいのです（岡山縣兒島郡與除村大字曾根孝忠恒男内幾美子）○皆様の御内で御不用になつた樗牛全集の三四何れか御讓り下さる御方ありませぬか、私の手許にある一葉全集、薄氷全集、夢想兵衛胡蝶物語全九册、つれ／＼草文段抄、萩の家遺稿、テニソン詩、藤村詩集の中御望みのものと御交換下さるもよろしうございます（宮城縣登米郡北方村佐佐木ちとせ）○私許に增補千山萬水、詩人の春、戀芙蓉、朽木の舟、我おもひ、琵琶歌集、立志の栞、日本女子禮式大全、文章世界、秀才文壇、女鑑、中學文壇、荊城、中學生、少女界、子規小品文集、二葉などありますから藤村詩集、二十八宿、ほとゝぎす等と交換を願ひます又文通、葉書交換等も合せて御願致します（茨城縣眞壁郡五所村山崎木村新一郎方惠與子）○皆様のうちに里見八犬傳乳姉妹眞人の自白懺悔御座いましたらすこしの間お貸し下さいませんか相當の御禮は必ずいたします（上野國本町郵便局區藪塚伏島直子）○何卒小說や雜誌などを送つて下さい御禮には相當代價の小說雜誌を送ります（越後國岩舟郡村上町字細工町河島しか子）○伊藤銀月氏著の極樂村御不用にて御ゆづり下さる御方おはしまさば御一報下され度候（石狩國由仁村小川はつ子）○皆さんの中で乳姉妹、金色夜叉、不如歸、伯爵夫人、己が罪、青春御所持のお方は奈良名所の繪葉書一組（十五枚）極く上等か或はお讓り下さいませ（京都府相樂郡上狛町照寺内廣瀬あさ江）○誰方様でも、のろはれたる女、四國立志編、わが生涯、等御惠送下さいまし、以前の通り書籍雜誌編物で御禮いたします（伊豆三島町長谷加藤爲子）○皆様の内で、悲戀悲歌、行く春、管絃、坊ちやん、まひろ野、綠葉集、うづら籠、おもちの方は妾の我散文詩、春雨物語、塔影、テニソンの詩、煙霞療養、アービングのスケツチブツク、サイカー物語、アナメ草

等いづれにても御交換をれがひます、また御手紙の御交換もれがひます（信濃國下水内郡外様村ことぶきの里小湊ふじ子）○皆樣の中で背脊、雛子の卷、魔風戀風、不如歸、濱子、伯爵夫人の後編、露子夫人、等ありましたら、何れにてもお送りを願ひます、御かへしには、金色夜叉、相思恐、いさゝ川、亂れ髪、花ぞの、心の泉、等に繪葉書一組づゝ添へて御禮申します（越前三國町平木新保萩子）○皆樣私の所に青海翠書文章世界などがありますお望みの方は相當の本を御送り下さい御交換致します（津市北堀端波多野みつ）○諸孃の中で少女文庫御不用の方は御送り下さいませんか御返しには少女界三冊と編物及び日露戰役紀念繪葉書とをまちがひなく差上げます（遠江國磐田郡龍川村橫山三室常子）○私の手許に大阪パック東京パック各二十餘冊持つて居りますから ホトヽギス夏子雛子血の涙外なんとても御交換下さい（河内北河内郡守口町倉とし子）○誌友の姉樣方私は小說、宿り木、すみ子、楓の御所、肱まくら、夏人の自白(三)。詩集、夏姫、七ッ星、ゲーテ雜誌では少年、女子文壇、中學世界御不用ですが若皆樣の中に左に揭げた書があるなら私のと交かんして下さい、花守日記、塔影、テニソン、行春、玉蟲、朝晴、二十五弦、おもひ草、其外新派詩集等（長野縣北佐久郡小諸町馬々浦甲藤利子）○文章世界一卷全號及び讀賣新聞七月一日より九月十五日迄御持ち合せの方が御座いましたら御交換下さい兎に角御照會を御願申ます（陸奥大鰐村字島田下山彦右衛門方個子）○諸大下の諸姉樣ゝ私の手許に小說戀無緣幽靈旅館秘密島無人島等新體詩にて不如歸神來等不用ですから何か他の新刊小說と御交換下さる方は（伊勢津市岩田町越村ふみえ）○先月は誠にありがとう存じますこの度は新派の方々の名作をお願申します（東京市牛込區中町卅八番地船越靜江）○今現に金色夜叉、多情多恨、戀か戀か、思出の記、雛子、夏子、不如歸等の諸小說が不用になつて居りますから繪葉書にて申込みなさい直に送りいたしますよ食道樂を御持ちの方は私のと是非共交換して下さい（栃木縣那須郡境村大字橫枕五四一根本まつ子）○私並に献語美辭法、女子教育談、西洋料理法、女子文壇などが有りますが皆樣の內で朝潮、女學生訓、白菊の歌御持ちの方は交換して下さい（能登國輪島河井町坂本喜代子）○少女の戀（花袋）新綠（八千代）浮世床（寶水）式部小路（鏡花）文藝倶樂部（十月）あります文藝に關する小說類と交換して下さい何んでも差上げます夫れから交際だの何んだのと面倒な事を云はずに繪はがき交換どし〳〵願ひます（牛込區市ケ谷柳町三三相澤方佐々木）

寫眞編物交換

○誌上て名ばかり見て居て未だ其の人の面影を見た事のないのは誠に遺憾であります、皆樣の中に寫眞一葉御惠み下さる方は無い事もありますまい、妾も耻かしながら妾のも返禮は致します、どうぞ一葉だけお送り下さいませ（高岡市通町三十一番地北本欣子）○誌友の皆樣私の手許にカビネ形風景寫眞三十三枚ありますがお望みの方は繪葉書にて申越し下さい差上ます（越中國福岡町地崎春雨）○諸姉樣、お手製の御編物お送り下さいな、拙ないのですが妾の手製の絹手巾を差上げます、但し先着五名の方迄後の方には必ず相當だけの繪葉書（美麗な）で御禮申します（東京下谷區徒士町一ノ七橋本波子）○誌友の諸姉上樣よ永久に妹と御思召し交際して下さい紀念の爲めうつしゑ交換をして下さい自分で撮増をしましたのが三十枚程あります（東京市日本橋區小傳馬町三丁目三番地磯崎方にて石川たけ子）○四方の姉さん方どうか近影の交換を願ひます又寫眞や繪はがきもどうかよろしく返事直ちに出します先着の方へは高須先生の書が散文詩を差上ます又私しの姿繪も上げますからどうか可愛がつて頂戴（高岡市二番新町針原みさ子）○妾此の頃造花を習ひましたから出來はよくないが繪はがきで申し込みの方にはさし上げます（岐阜縣山縣郡谷合大野清枝）○誌友の姉上樣何卒御寫眞を送て下さい先着二十名迄は美しき繪はがきに妾の寫眞をそへて御返し申ます（靜岡縣引佐郡金指町秋月初子）○寫眞やお手紙の取り交はしをれがひます、暮れゆく秋を奈良の町に淋しく送る女より（奈良市四城戸町武林朝子）○皆樣のうちに栞か寫眞掛を送つて下さる方には繪葉書か雜誌の相當するものをお禮に送ります（筑前若松港辨天通り福山美花）○私寫眞を澤山持つて居りますから美しき寫眞か繪葉書を御送り下さい、直に御禮は申します（周防國玖珂郡新庄村時政方枝木子）

繪葉書交換

○私は高輪臺の麓に住ひして居るふつゝかな者ですが此度賢明なる諸姉樣と繪葉書の交換を願ひたいのです（熊本縣鹿本郡中富村窩野かずゑ子）○皆樣のお蔭で繪葉書が百枚以上になりましたが都

合によつて一先づ交換を見合せますから何うか悪しからず御願ひ申します(長崎市浪山靜子)

○妾は片田舍に淋しく暮して居るものですから何うぞ繪葉書や編物玉章の御交換を願ひます(秋田縣仙北郡大曲町北向中村ふろ子)

○皆樣繪葉書有がたう大塚蒔溪樣御住所が分りませんから至急其他にも御返事遲れの方は御申越下さい但男子の方はお斷り(麻布區南日下窪町八伊東房枝)

○婦人の繪葉書及び玉章の御交換を何うぞ(靜岡縣周智郡山梨町石田輝子)

○妾事此度急に他所にまゐることになりましたから繪葉書の御交換は何うぞ御取消し下さい重々御詫申ます(韓國京城奥田千草)

○繪葉書玉章の御交換を御願ひ申ます(下總國匝瑳郡八日市場池端田村敏子)

○皆樣誠にすみませんが先日の大火て折角頂いた繪葉書を皆燒いて了ひました本屋が出來ますれば必ず御返し致しますから何うぞ御變りなく御交換下さい本屋の燒跡へ行つて見ましたら二百冊程もあらうと思ふ雜誌が皆燒けて灰となつて居りましたのでほんとに惜くつて知らず知らず涙がこぼれました(函館角本勝子)

○なつかしき友よ繪葉書(但し名所人物)の交換を望む、又レターカードの御交際を末永く願ひます(若松市中六日町宮原ばら子)

○スタンプ付を送り下さい先着者五名の方へは皇太子殿下行啓スタンプ付のハンカチーフか扇子を差上げます(丹後國加佐郡中筋村字引土古田岩吉樣方古田ふさ子)

○ゑはがき又は寫眞御送の方に先着六名に限り妾の寫眞に妾自筆のゑはがき御送り申ます(麻布宮村町松崎みどり)

○嶄新なる上等美人繪葉書未使用のもの御送りのお方樣には自製の栞と妾の寫眞とを差しあげて永久に御交際をお願ひ致します(美濃國山縣郡北山村字加賀大野とも子)

○アルバムを飾るに足る優美なる繪はがきの交換を希望す先着者十名に嶄新なる糸織小切を呈す(東京府下南多摩郡恩方村中島縫子)

○滿天下の諸嬢さん私にも繪葉書の交換をして頂戴な善し惡しに拘らず屹度お禮は致します(丹後舞鶴中筋十倉小谷保太郎方あやめ)

○私も諸姉上樣と繪はがき交換を望みます何卒澤山願ひます先着二十名のお方には博覽會紀念スタンプ付繪はがき五枚宛添へて御返しますから屹度ネ(山形縣西置賜郡手ノ子菅坂信子)

○繪ハガキに和歌や俳句を書きて御交換を願ます妾は下手てすが和歌なんぞが大好きてす(大阪市南區六萬體町入五一服部濱子)

○只今妾しの手元に東宮殿下行啓紀念スタンプ付繪はがきをもつて居りますから先着者二十名に呈します他の御方には外の紀念スタンプ付繪はがきて御返事をいたします但し男子の御方は御斷り(京都府舞鶴港宮津口島村作馬樣方小西綾子)

○皆樣寫眞編物繪葉書の交換願ます美しき上等繪葉書御送り下さいまし私しも美しいので屹度お返しいたします(長野縣下高井郡岳燒山里百合子)

○繪葉書の交換を願ふ三枚封入申込の方には成田不動尊の御クジを呈す但し何才なろや御報あれ(下總成田町田町新橋堂内きよ子)

○御なつかしき諸姉樣妾にも繪葉書の交換をして頂戴な先着十名のお方には韓國皇帝陛下即位紀念のスタンプ付の繪はがきを差上げます其の外のお方へは奇異なる朝鮮人風俗を繪葉書にて御紹介致します(釜山西町貳丁目上田方森戸市子)

○北海の空より繪はがきの交換をねがふ(石狩國西龍郡北龍村吉植しか子)

○未だ市を見た事のない此片山里に專す憐れな者とも御交際下さいませ吾が里にも繪葉書が出來ましたからそれて御返事致します妾は高價な物てなくつても宜しいてすから御好みの御方は俳句を記してよ(備後比婆郡帝釋村影山妙子)

○同情あつき諸嬢樣より美しい繪はがき澤山に御惠み下され離有一々御返し致しました、此後とも諸孃樣何卒お交換して下さいな今度は東京の兄さんと、水戸の伯母樣から戴いた嶄新な繪はがきが、澤山にありますので、それて屹度お返し致しますよ、それからお特志の方は、お使用あがりの栞を、お送り下さい、上等な繪はがきて御禮申ます(茨城縣那珂郡石神村外宿一六一舘樹森江)

○皆樣美しい繪葉書澤山と御送り下さいまして誠にお有りがたう御座います又どうぞ可愛らしい小供のか美人かを送つて下さる方は有ませんか必ず返事は致しますよ、それからなつかしい皆樣のみ妾御めぐみ下さる方はなくつて、私しも見にくいのですが、あげますからね(栃木縣河内郡羽黒村中里金田銘子)

○私は繪端書の交換が大好よ必ず〳〵返事致しますわ(東京市京橋區新肴町一七福田錦三郎方尼子蕗子)

○同情厚き誌友の姉上樣よ先月は續々珍らしき繪はがき頻惠み被下難有御禮申上ます其數實に五十餘枚に達しました、御約束通り先着者五名樣へはハンカチを添へて早々繪はがきを送りました尚ほ本月よりは未使用の繪はがきの交換を願ますなるべく紀念スタンプ付望みます御禮には紀念スタンプ付を御返し致します御見捨てなく御交換を願ます(丹後國舞鶴町字引土

七九竹原様方竹原みさ子）○諸嬢よ紀念スタンプ繪葉書及び風俗風景畫に俳句一つを認め發信月日と姓名とを書いて繪葉書の交換を願ます（伊勢國桑名郡香取村上蘭花）○妾は之れより繪葉書の交換の中間いりになりましたから妾の如き不束者ですがどうぞお送り下さいな御返事は信州名所てきッといたしますよ（長野縣上水内郡三輪村上松小林久子）○妾の手もとに水彩繪葉書が有りますから御望みの御方は手紙に寫眞を添へて申込みなさい先着五名様には差上ます御交換ても致します（京都府船井郡桐野庄村字熊崎大下増太郎様方大下繁子）○誌友の諸姉様達よ妾もどふぞ繪葉書のお仲間に加へ給ひてよ生意氣の様なれど字は其の人の品性を顯すとかやならばお優しき水莖の跡も添えて（熊本縣天草郡本渡町南池湯靜子）○諸姉様繪葉書を送つて下さい一番早く送つて下さいました人に女學世界か雪月花、文藝倶樂部をあげます然し十三名よりあげられません（但馬竹田町石原勝女）○六錢以上拾錢以下の繪葉書にて御申込みあれ絹製ハート形絹フサッキ一部づゝ呈す（龜田郡鍛冶村通り一本柳二十六番地中野よね子）○長生郡の北田よし子さん國名を書いてもう一度御手數ながら下さい諸嬢様も繪はがきの御とり交せを願ます（長野縣諏訪郡永明村加藤芳枝）○諸姉様よ御交際を願みます又繪葉書の交際もねがひます（京都市油小路魚棚下口塚原龜太郎様方田中富美子）○皆さん妾、記者さんのお蔭で百七十二姉様と、繪葉書交換する樣になり、妾の嬉び譬へんに物なく、二百と思ひますが何分疾れし身の殘念ながら思ひ切つて末長く交換のお方五十名と定めました何卒お望の姉様、栞寫眞を添へてお送り下さい（山城國相樂郡高山村松田あや子）○妾は世に云ふ荒波に漂ふ捨小舟父なく友なき孤獨の身何の樂しみとてもなしせめては繪葉書なりてとも身を慰めんと思ひつきぬあはれ誌友の諸姉様方遠慮にかゝはらず御交換下さい（近江國滋賀郡眞野村字普門太田靜江）○誌友の姉上様よ妾は京都の極く東の端に住て居ります無學無才の不束者ですが御情け有る御方様繪はがき交換願ます（京都府山城國相樂郡高山村字田山有野坂枝）○妾にも何うか繪葉書玉章の御交換をお願ひ申ます必ずお返しは致します（清國北京東單牌樓八寶胡同野島様方奧村とし子）○雜誌の附録に付いて居る繪葉書の交換を願ひます什麼でも宜いです而して畫面に字を麗かないやう返信は確と致す（周防大島郡源野谷瑞子）○皆々様繪葉書又は寫眞の交換を願ひます（石狩國雨龍郡北龍村字利川瀨いわ子）○皆々様繪ハガキの交換を願ひます又寫眞交換も願ひます（石狩國雨龍郡北龍村字和川村春子）○諸嬢様よ美しき御はがき誠に有りがたく猶他の御姉さまも永久に願ひ升返事は必ずいたしますからどうか三錢以上の御交かんを願ひますよ願はくは十八才以上の方で御筆のあと御きれいな方と願ひます（仙臺北六番ノ六一橋本祝子）○兄さんや姉さん美しい繪はがき澤山雖有う妾の許には烏山名所繪葉書や其他色々のが澤山ありますから猶ほ盛んに交換の度を選れて頂戴御好みのものをいろいろ御目に掛けますから上等繪はがきを一組封筒に入れて御送り下さい妾も封筒に入れて御送りします（烏山郵便局集配區内下野那須郡荒川村須藤みどり子）○優しきお姉様方どうぞ私しも繪葉書、栞交換の仲間に入れて下さいませ私しの手元に大江山探險紀念スタンプ付繪葉書をもつて居ります男子の方に御ことはり（丹後舞鶴港字妙法寺前和久新兵衛様方水谷靜枝）○先着五名のお方へは皇太子殿下行啓紀念繪葉書スタンプ付をきつと差上ます私人を欺いたりするのは大厭ですから返禮します其外のお方へは天の橋立のエハガキか大江山探險紀念ハガキかを返禮しますわ（京都府加佐郡中筋村字引土古田岩吉方ふさ子）○懐かしき誌友のお姉さんどうか永久エハガキ交換して頂戴な私未使用を好むのですが封筒で送て下さいませんかお願申ます（丹後國舞鶴町字引土松本惣四郎様方きよ子）○何うか繪葉書や玉章の御交換を行末ながくお頼みいたします妾も舶來の繪葉書を五六十枚持て居ますから乾度すぐ差上ます（岡山縣苫田郡寺元町片岡正一様内小林てふ子）○各種紀念スタンプ付繪葉書お持ちの方は封筒に入れてお惠み下さい妾の寫眞に相當の繪葉書をそへてキットお禮します（北海道宗谷郡稚内町字恐岡小野寺方石原きよ子）○繪葉書や手紙にて永久の御交りを乞ふ（下野芳賀郡茂手木町今井清）○誌友の御情厚い諸嬢様不束な身に繪葉書玉章給はりまして有がたう御此後もドシ〳〵御交換御願ひ申ますそして乳姉妹の小説御持ちの方は暫く貸して頂けませんでしょうか御願申ます（岐阜縣加茂郡久留見村山田よね子）○誌友の皆様私は紀念の爲友だちの寫眞帖並に繪葉書帖を製らへて居りますから皆さんのお中てお寫眞並に上等の繪葉書お持ちの方はお惠み下さいお禮は必

ず差上げます（常陸國高濱町東大橋酒葉常子）○諸友の皆様 私は昨年以來重き神經衰弱にかゝりまして唯書籍を友として此の一孤島に暮して居る不幸兒よ何卒玉章や繪葉書の交換を願ひ升（臺北城内南門街二丁目二種高等官舎峽よし子）○御交際をして下さる方は誠に御願でありますがなんでも宜ろしいから御自筆の繪葉書を一枚づつ御惠み下さい私も極 下手ですがきつと御返事致しますそして皆様から下さつたのを其紀念として永く保存しておきたいのであります（長野縣下伊那郡座光寺村市場今秋伊智子）○高尚なる繪葉書の交換を望む、然しながら沒趣味なのは御斷り致します（伊勢龜山東町山川つい子）○繪葉書交換を御願申します（富山縣高岡市御馬出町五十九番地梶川つゆ子様方菜山靜枝）○諸友の諸姉上様よ何卒永遠に繪葉書の交換を願ひます又栞や小說、雜誌の交換願ひます（岩代大沼高田町波野桂子）○エハガキ寫眞の御交換を願ひます御返しいたします（北海道雨龍郡北龍村字和吉橫しか子）○誌友の姉上よ繪葉書に御自作の俳句玉章を書いて送て下さいまし先着十名の御方に繪葉書二枚添えて返事致します（越後小千谷町山口かつ方山口千代）○誌友の皆様私にも繪葉書（舶來）を交換御願申ますそれから皆様の御手製の栞を御惠みくださいまし御好の繪葉書御返し致します（兵庫西出町三九一江見宇之助方かほる子）○皆様私は左の繪葉書多數所持して居りますが他種類の繪端書と交換して下さい又は小說雜誌等にても宜し博覽會紀念婦人博覽會博覽會紀念眼鏡以上三枚組 外三越吳服店發行美人（七種）名所（六種）等です（東京市日本橋區濱町二ノ十七還祭堂方片山）○妾の手元に昨年於札幌愛國婦人會北海道支部總會日本赤十字社第二回總會紀念スタンプ付有り上等繪はがき摺物にて御申込の方に二組づゝ差上ます（北海道膽振國有珠郡伊達村役場前波部茂子）○諸姉様よ末永く繪葉書や玉章の御交際を願ます乾度地方の風景繪葉書で御返致します（栃木縣下都賀郡皆川村大字柏倉厚木千代子）○皆様私は眞の繪葉書狂なのよ憐れと思召さば何とぞ一葉を御惠み下され御返事はきつと致します（津市岩田町加藤様方越村ふみ枝）○諸姉様の御内で水彩畫御研究の御方は肉筆の水彩繪はがき御送り下さいませんかまづいのですが自筆の水彩畫御返し致します（京都市高辻通新町東中島ゑん子）

誌嬢の交際（其二）

○何卒皆様と同じやうに繪葉書摺物押花寫眞等の交換をお願申します（大阪市南區内安堂寺町三丁目九十六番數岡本豐子）○懷しき故國に居ます諸孃よ妾は太平洋の孤島に親も無く妹もなく唯一人の兄様と一人の義理の姉様とを父上とも母上とも賴にして淋しき生活をして居る者て有りますが今度新しく誌友となりましたから繪葉書なり玉章なり寫眞なりの御交かんを御願いたします妾は日本の文字がよく分りませんから以後は女子文壇や其他の雜誌を讀みたいと思ひますから皆様の内に御不用の書物を御持の方は送りて下され御返事は必ず相當物にて致します（米領布哇縣馬哇島ワハイナ町片山信子）○お懷かしき諸孃様よ私しこそは遠く離れし滿洲の地に今暫くは過ごさなければならない身只々本誌を友と賴み居る哀れの身上、願くば情深き誌友の君よ永遠にお見捨てなく御交際あらむ事を美しき繪葉書や、淸らかな水莖の跡寄せさせ給へ、乾度々々神に誓つて御返事して、よ（淸國大連霞町樹屯歩五四ノ一友藤月峰）○私は七月の中旬より當地の田舍を旅行して四五日前に歸宅いたしましたがなつかしき姉様方より御手紙や繪葉書が澤山來て居りましたゆゑ延引ながら早速御返事は洩れなく差上たつもりです尙又永久に御交りを御願ひ申ます長崎地方の御方と永久に御交りいたしたうござい升（淸國上海新密勒路二百三十三號岩永くに子）○私事一度伯父の姓を名乘り中山の籍に入り居りしかど都合上本籍に返り梶原の姓を名乘り申候間誌友の諸姉様迄左様思召して爾後も必ず相替らず願上候（高知縣安藝郡井ノ口村梶原内中山しげい）○此頃の秋の淋しさ如何斗り同情の有る御方様よ繪はがき寫眞の交換をして御なぐさめ下さいませんか返事は直に致しますよそして永久に御交際を願ます（京都府相樂郡高山村大字田山有野坂枝）○懷しき諸姉上様御交際下され感謝致升父病氣て歸宅せし爲め御無音致し未だ尙御返事濟れの方が有升父平癒次第貴誌上拜借致し今迄に變らぬ御交際を願ひます（南葛飾郡船堀村字東船堀三十一牧野くに子）○四方の諸孃詩姉さま新詩和歌俳句繪はがき玉章の御交換を願ひます白はがきでよいのですよ きつと御返歌は致します（高知縣安藝郡北川村島學校内岡村春榮）○和歌の好きなお方と御交際を願ひます（奈良縣吉野郡賀名生村中西よしみ）

文壇餘興 **新年旅行**（新課題）

新年から文藝遊戲は文壇餘興と代ります。代りましても矢張皆さんに課題して面白い文藝上の遊戲を試みたいものです、借て此新年旅行は假に記者二人が全國を旅行することゝして盛んに諸孃に歡迎して頂きたいのです、其方法は左の通りですから能く讀んで下さい。

▲諸孃は如何にして記者の旅行を優待するか、此れに答へるのが此餘興の主意てす▲歡迎すると云つても其事を詳しく書けば大變てすから一寸した思ひつきだけてよろしい▲記者に御馳走する時はどう云ふ料理を出すか、新年だから新年らしい儀式に據るか、或は變つた新式に據るか▲其他の名物を御馳走するなども面白い▲如何なる人に紹介するか▲又、記者に向つて雜題を出すのてす、しやちほこ立をしなければ此橋は渡さないとか、歌を詠まなければ次の宿へ通さないとか、まさか紙上てしやちほこ立は出來ないか、詩歌俳句を作ること、雜問に答ふること、何かの相談に乘ること、五分演說をやる位の事は好んてしますから遠慮なく望んて下さい▲其代り諸孃も亦出來得る限り話をすること、誌友會や園遊會を開くこと面白く應接すること、名所舊跡を案内すること▲氣の利いたお土產を出すこと▲凡て贊澤な設けは記者の方から辭退しますが。誠意ある無邪氣な而して奇拔な歡迎方法は欣んて受けます▲新年の事てすから新年に因んだ遊戲も面白いが又必ずしも新年らしくする必要もない▲記者を大いに欣はしめるか、大いに苦しめるか▲成るべく記者の答へ得られるやうなこと、挨拶の出來得られるやうな風に書いてもらひたい▲臺灣と韓國を除いて日本全國の中なら何處へても參ります、道順に東海道から廻つて行かうと思ひます、東京も其中てす、少しも歡迎して下さらない土地は汽車か車て素通りして了ひます、だから諸孃は競ふて歡迎して下さい、記者は寄りたくとも寄れなくては殘念てす▲最も記者を惑ぜしめたる方に賞品を差上ます▲右の事を書く、文章は凡て十六字詰十行内外、「新年旅行」と題を書き國名市町村名は忘れないやうに、お名前も勿論てす▲諸孃から集つた原稿を整理し選拔して記者の新年旅行記を新年紙上に發表するのてす、實際行くのてはありませんから遠慮なく盛んに歡迎して下さい▲賞品は一等一圓、二等七十錢、三等五十錢、四等三十錢、五等二十錢の價格に相當する旅行用具を進呈します▲〆切十一月二十日

新出版

▲『御飯の種々』　春の筍飯、秋の松茸飯は言ふに及ばず、風流な奈良茶飯又は荷葉飯、かき飯のうまき、紫蘇飯の香ある、其外凡そ五六十種の飯の炊き方を分り易く書いた書物て跡見女學校校友會編輯部の編纂てす（定價十五錢郵税二錢神田表神保町東京堂發賣）

▲『愛の力』　波多野烏峯氏の譯、西洋の家庭小說を通俗に飜譯したものてす、一篇の梗概は薄運の未亡人が十一歲の男の子を頭に五人を養つて世の戰に打勝つてゆくと云ふ筋てす（定價金二十錢本鄕西片町十番地内外出版協會發兌）

▲『小さなハート』　佛人ペロンチー夫人の『おさな心』と云ふ家庭小說を樋口闌林氏が飜案したもので、原作とは異つて邦人に分るやうに書き改めたと云ふから氏の著作と云つてもよからう、全篇無邪氣な趣向で殊に子供が主人公だから家庭のよみものとして何より毒氣が無くて宜しからう（定價金六十五錢日本橋區通油町十八水野書店）

▲『裁縫指南』　家庭百科全書の第三篇てす、著者は裁縫家として知られたる喜多見女史、裁縫用具の說明から初めて縫針、單衣、袷、羽織袴と段々にむつかしいものに及び附錄として裁縫の心得「材料の買入方」などやいろ〳〵爲になる記事あり凡て言文一致の分り易い文章を用ゐ澤山の圖解もあつて近頃の好著てす和裝の美しい製本（定價四十五錢博文館發兌）

記者通信

▲新年號投書締切　本誌新年號の投書締切日限は本月十八日の夕刻まで本社に到着したものてす、選評項目の變更投書規則など前號にも發表いたして置きましたが猶ほ本號にも別項に發表してありますから御覽下さい。

▲新年號の大附錄　第四年の本誌が體裁なり内容なりに於て如何に雜誌界に雄飛するかは新年大附錄と共に次號に詳しく豫告いたします。

▲寫眞の募集　誌友面影又は各地風景の珍しい寫眞はなほ〳〵大いに歡迎します競つて御送り下さい、使用濟の上は少しも汚損せず早速御返してもよろしいのてす。

雜報

▲茨城縣立高等女學校　十月四日水戶市の縣立高等女學校を參觀しましたが、校長の熱心なる草履主義（總て何事も足元より注意すべしと云ふ趣意）は微細なる點までも行屆きて、校舍の内外もよく整頓し、生徒の氣風も質朴のやうに見受けられました。

▲國香會女子部繪畫展覽會　豫て本誌十二號に報道し置きたる同會展覽會は、十月十日より今月五日まで上野て開かれましたが、何れも新進閨秀畫家の筆に成るもののみにて、それ〳〵生氣に滿ちてゐました。

▲女子教育講演會　十月十九日女鑑編輯部主催の第二回講演會が神田青年會館にありました、重野、寺尾、澤村、岡田の各博士、鳩山女史等の有益なる講話あり、餘興の琴長唄等も喝采てした

投書家並に愛讀諸嬢は此社告を御覧



改正 募集課目

選評（文學士中村枯林先生、小栗風葉先生、内藤鳴雪先生、與謝
橫瀨夜雨先生、嚴谷小波先生、佐々木信綱先生、
野晶子先生、谷江風先生、山中古洞先生、）

甲種

○美文（廿四字三十行以內）　○日記文（廿四字三十行以內）
○新論文（廿四字三十行以內）　○實用文（廿四字十五行以內）
○お伽噺（振假名付廿四字八十行以內）　○新體詩（振假名付十句以內）
○短篇小說（振假名付廿四字八十行以內）

乙種

○和歌（一宛一首）　○新派和歌（一宛一首）　○俳句（一宛一句）
○新歌謠（一宛一首）　○滑稽談（廿一字五行內）　○繪畫（一寸の二寸）
○短文（振假名付廿四字五行）　○文檎餘興（其時によると）

賞外 ○顧問 ○學校通信 ○誌友倶樂部（凡て廿一字詰）

△注意 ○凡て用紙は半紙に限る○課題は隨意なり○一人一章一句宛の事○取交ぜ全封差支なし○開封にて三十匁迄郵税二錢にて足る

以上は毎月十五日に〆切翌々月に發表のものになります

新年號（四十一年一月發行）に發表になります投稿に限り十一月十八日夕刻までに本社へ到着を以て〆切といたします（但右の項目に依ると）

懸賞呈品

	甲種		乙種	
第一等	賞金牌品類	價格金拾圓	絹洋傘	價格金五圓
第二等	呉服物類	價格金參圓	帶止、半襟類	價格金壹圓
第三等	小間物類	價格金八拾錢	文房具類	價格金六拾錢
第四等	便利圖書切符	金五拾錢	便利圖書切符	金三拾錢
第五等	同	金四拾錢	同	金貳拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ贈呈す、當選者は速に住所氏名を明細に通知あれ、

△嚴守すべき投書規定 必ず一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各欄の投書は別に認むべし○封筒は『原稿在中』の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圏點は一切節すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期增刊年四回 二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

		郵税共
一冊（大增刊同）	前金拾錢	前金拾壹錢
六冊（半年分增刊共）	前金七拾六錢	同 前金八拾四錢
十二冊（一年分增刊共）	前金壹圓八錢	同 前金壹圓廿錢
十六冊（一年分增刊共）	前金壹圓四拾四錢	同 前金壹圓六十錢

振替貯金又は爲替に限ると

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は第壹七貳九番です
○爲換料、通信料、書留料入らぬ安全の送金法
此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます

明治四十年十一月十二日印刷
明治四十年十一月十五日發行

不許複製

定價 金拾錢

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社 秀英舍
發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話［本局六〇七番］ 女子文壇社
特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇 増刊定價 金拾錢
郵稅壹錢

（東京秀英舍印刷）